

中央自動車道長野線 埋蔵文化財発掘調査報告書 2

—塩尻市内その1—

青木沢東・青木沢・八窪・大原・北山・御堂垣外・栗木沢・
ヨケ・樋口・高山城跡・竜神・竜神平・山の神・中原・犬原・
上木戸・千本原・高田・吉田向井遺跡

本 文 編

1988

日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会
(財)長野県埋蔵文化財センター

正誤表

頁	行	誤	正
xv	右24	1・3号土壌	1～3号土壌
xvi	左10	5・9・14・29・40・43・49号土壌	4・5・9・14・29・40・43号土壌
	右15	32・43・125・150・172～175号土壌	35・43・125・150・172～175号土壌
7	15	片丘 塚	片岡 塚
	32	(長軸×単軸)	(長軸×短軸)
8	21～	片面加工 刃部が直線状	片面加工 刃部が直線状
	23	両面加工 刃部が内湾状	両面加工 刃部が内湾状
9	29	扇頂および扇端付近	遺急点付近から扇端にかけて
28	28	05トレンチ	01トレンチ
38	21・37	IV層上面	VI層上面
40	7	2号住居址の・・・と接合した。	3号住居址の・・・である。
48	表1N07	備考欄に追加	石器30(特殊磨石)
	N010	備考欄に追加	土器76(田戸上層式) 77
49	24	151を・・・。151は	155を・・・。155は
54	21	長さ10cm	長さ10mm
	25	(84・102・104・106・107、217～272)	(84・102・104・106・107、216～272)
55	31	山形類	山形文
	(註1) 1	園田	鹽田
56	36	浦 造	浦 宏
61	1	先刃	先刃
	12	357	358
	(註1) 2	先刃	先刃
64	11	第3群	第1群
	35	第1類のB	第1類の土器
68	26	(465)	(483)
75	6	(図33・36～42)	(図36～42)
80	5	主体的なタイプで、	主体的なタイプ、
81	1	838・839	839・840
99	17	図左面	図左面
102	4.6	八木杵則	八木光則
113	9	新しい	新しい
	29	格子目文は同様に	格子目文と同様に
	38	3号住居址	3号住居址
117	35	[岡本 1982]	[岡本 1980]
119	40	図69	図66
	(註1) 7	[岡本 1982]	[岡本 1980]
127	11	白色砂粒	白色砂粒
128	25	逆刺し部	逆刺し部
	38	A・Bは	E・Fは
	39	Dは	Hは
130	40	図73のA	図73のI
135	5	「押型文文化の研究」・・・53-13	「押型文文化の諸問題」・・・53-3
	12	1982 「・」	1980 「・」 『藤井祐介君追悼記念論叢』
	14		削除
	32	押型遺跡	押型文遺跡
	39	園田芳雄・・・『両毛文化』	鹽田芳雄・・・『両毛文化』 1
	43	『大鏡』	『大鏡』
	57	先刃	先刃
159	17	堀之内Ⅰ式	堀之内Ⅱ式
	18	同Ⅰ式	同Ⅱ式
203	図3	旗土址	火床
204	図4	1号土壌	3号土壌
209	39	小型	小形
	40	中型	中形
	40	大型 は49を	大型は48・49を
210	図8	旗土壌、旗土址	火床
232	24	2は	1は
239	29	分布状況以下	分布状況は以下
267	2	疑問も	疑問にも
288	14	遺構	遺跡
330	3	かけの住居址	かけての住居址
334	29	(15・16)、・・・70 (17・21)	(14・15)、・・・7 (16～21)
342	14	石錐2 (53・54)	石錐3 (53～55)

355	2	並行	併行
358	12	土器片数点 ^が 出土	土器片数点 ^{など} が出土
361	12	PL73・8081・86・90)	PL73・80・81・86・90)
367	19	釣手土器	吊り手土器
372	6	本址 ^併 う	本址 ^に 併う
374	4	(211・222)	(211・212)
383	21	土器片 ^が	土器片 ^{など} が
396	9	之、遺構外出土遺物(図79)	之、遺構外出土遺物(図73)
404	36	(31・100)	(30・100)
405	14	(61・63・64・99・110)	(63・64・99・110)
	19	(103・105)	(103~105)
407	29	把手 ^が 付 ^か	把手 ^が 付 ^く か
412	7	地文 ^状 線文	地文 ^条 線文
414	16	6・7・15・16・20・・・・	6・7・16・20・・・・
	(註) 1		P418の(註) 1
	(註) 2	撥形	撥形
416	8	横長 ^剥 片	横長 ^剥 片
417	図85	C1C2類	C類
	図86	I類	A
		II類	B
		III類	C
418	36	(205・208・573)	(391など)
	37	(63・433)	(107など)
	(註) 1		P414の(註) 1
419	1	(22・150・579)	(32・212・388)
	3~4	例外たる149は	例外たる211は
	4	(36・69・70・72・83)	(105・390など)
	5	(449)・・・・449	(394)・・・・394
	6	(71)	(106)
	9	449	394
	14	(20・15・200)	(26・213)
	22	(73)	(109)
	24	刃部をもつ ^原 石	刃部をもつ ^石 器
	25	41・・・・538	71・・・・397
	27	538	397
	33	762・・・・724	399・・・・400
	35	209・・・・195・27・175	234・・・・51・398・401
	36	(98・203)・・・・98	(169・396)・・・・169
450	2	203	396
453	(註) 1	「在来形土器」	「在来系土器」
454	(註) 2	絶対 ^に 加味	絶対 ^値 に加味
455	31	215・245号住の	215・245の
	(註) 1	前掲註4で記した	前掲註1で記した
	12	酒屋前7号住	酒屋前遺跡7号住
460	5	209号住 ^が	209が
466	13	外縁 ^な	多様 ^な
472		器種 ^率 は	器種 ^比 率は
513	16	汎 ^汎 性	汎 ^汎 性
526	6	図5 1号住居出土遺物実測図1	図5 1号住居址出土遺物実測図1
		147号	174号
		青木沢遺跡 ^が 出土	青木沢遺跡 ^{から} 遺物 ^が 出土

執筆担当者

誤

正

大竹憲昭	第12節4-(1) -カ-③~⑦	第12節4-(3) -カ-③~⑦
	第16節4-(1) -カ-③~⑦	第16節4-(3) -カ-③~⑦
唐木孝雄	追加	第9節4-(4)、第4章
三上徹也	第12節4-(1) -カ-①~⑦	第12節4-(3) -カ-①~⑦
百瀬長秀	第16節4-(1) -カ-③~⑤	第16節4-(3) -カ-③~⑤
百瀬久雄	4-(1) -ア~エ	4-(3) -ア~エ
	岡沢秀樹	岡沢秀紀
	西山克巳	西山克巳

追加
頁

23・24

図5 塩尻地区遺跡分布図

135

中島 宏 1986 「普門寺前遺跡の押型文土器について」 『利根川』 7

464

飯塚政美 1987 『中村B遺跡』 伊那市教育委員会

小林康男 1978 「縄文時代の磨石」 『中部高地の考古学』 長野県考古学会

中央自動車道長野線 埋蔵文化財発掘調査報告書 2

—塩尻市内その1—

青木沢東・青木沢・八窪・大原・北山・御堂垣外・栗木沢・
ヨケ・樋口・高山城跡・竜神・竜神平・山の神・中原・犬原・
上木戸・千本原・高田・吉田向井遺跡

本 文 編

1 9 8 8

日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会
(助)長野県埋蔵文化財センター



上木戸遺跡31号住居址出土台付鉢



上木戸遺跡29号土壙出土ヒスイ製垂飾

序

昨年3月の第1冊目『岡谷市内』分に引続き、2冊目の『塩尻市内その1』を刊行することになりました。

中央自動車道長野線建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査事業も、昭和57年度開始から6年を経過し、主体となる発掘調査と並行して、こうした調査成果の公刊という事業面もようやく軌道にのり始めました。一般的には、野外の発掘調査が注目されがちですが、実はこの発掘は一面では遺跡の永久破壊でもあるわけです。そのため、調査に万全を期すことは勿論、後世に伝うべきその遺跡の内容はより正確に、より詳細に記録すべきことが義務づけられています。注目を集めた重要な遺跡も、忘れがちな小規模な遺跡も、文化財保護という立場からする「記録保存」には軽重があってはならないでしょう。発掘調査終了後の整理作業は、その点では最も大切な作業であると言って過言ではないと考えています。

さて、本報告書は、昭和58年度から一部開始され、昭和61年度の一部残件分まで4年間に実施した塩尻市内の20遺跡のうち、遺構、遺物が多量に発見された吉田川西遺跡を除く19遺跡分を収録してあります。岡谷市境に近い塩尻峠の山間部にある遺跡、広大な鉢伏山麓に展開する遺跡、また、田川沿岸の低い水田地帯の遺跡等々、非常にバラエティに富み、かつ、その内容も先土器時代から中・近世に及ぶという興味ある成果を盛ることができました。記録すべきすべてを網羅し得たか否かは今後の課題とし、今は高速道下に眠る先人の生活の証しを報告書としてまとめ、大方の参考に提示する次第です。

最後にあたり、発掘作業から報告書刊行に至るまでの間、深い御理解と御援助、御協力をいただいた日本道路公団名古屋建設局、同松本工事事務所、県高速道局、県松本高速道事務所、地元塩尻市当局、地区被買収(地権)者組合等の関係各機関及び各位、現場作業、整理作業に従事された多くの方々、長期間にわたりその任務遂行に精励された県教育委員会文化課及び埋蔵文化財センター職員に対し、深甚なる謝意を申し上げます。

昭和63年3月20日

(財)長野県埋蔵文化財センター理事長

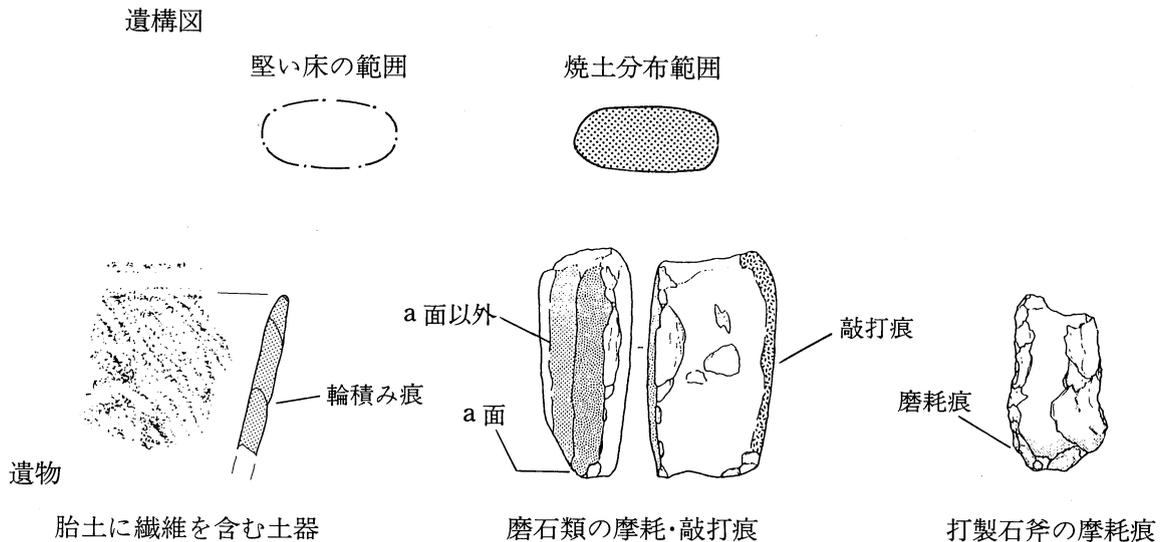
村山 正

例 言

- 1 本章は中央自動車道長野線建設工事に係わる塩尻市内20遺跡のうち、吉田川西遺跡を除いた19遺跡—青木沢東、青木沢、八窪、大原、北山、御堂垣外、栗木沢、ヨケ、樋口、高山城跡、竜神、竜神平、山の神、中原、犬原、上木戸、千本原、高田、吉田向井—の発掘調査報告書である。
- 2 調査の契約及び経費については第1章第1節に記した。
- 3 本書作成の方針、方法及び指導、助言者については第1章第3節に記した。
- 4 本書で使用した地図は、日本道路公団作成の中央自動車道長野線平面図(1:1000)、塩尻市発行の塩尻市都市計画図(1:2500)をもとに作成したほか、建設省国土地理院長の承認を得て同院発行の2万5千分の1地形図を複製した(承認番号昭63関複、第111号)。
- 5 本書写真図版編P L 1・2で使用した空中写真は、塩尻市誌編纂委員会所有の写真を許可を得て複製し掲載した。
- 6 本書で報告した各遺跡の記録及び出土遺物は、(財)長野県埋蔵文化財センターが保管している。
- 7 本書に掲載した実測図の縮尺は、特に断りのある場合を除いて下記のように統一した。

<p>遺構図</p> <p>住居址…………… 1 / 60</p> <p>住居内施設… 1 / 40</p> <p>土壌…………… 1 / 40</p>	<p>遺物</p> <p>土器・焼物 …… 1 / 4</p> <p>土器拓本…………… 1 / 3</p> <p>石器(小形品) …… 2 / 3</p> <p>石器(大形品) …… 1 / 3</p> <p>金属製品…………… 1 / 2</p> <p>銭貨…………… 1 / 1</p>
--	--

- 8 実測図中のスクリーントーンは以下の事項を表している。



- 9 発掘調査及び文責等本書刊行に関する分担は、巻末に一括掲載した。
- 10 本書掲載の19遺跡については、すでに、当埋文センター発行の『長野県埋蔵文化財ニュース』、『長野県埋蔵文化財センター年報』1～3に調査概要を報告している。それらと本書で記述に若干の相違があるが、本報告をもって最終的な報告とする。
- 11 参考文献は節末に一括した。

本文目次

巻首図版 上木戸遺跡31号住居址出土台付鉢、同29号土壙出土ヒスイ製垂飾

序

例言

第1章 序説	1
第1節 調査の契約	1
1 発掘調査委託契約	1
2 契約対象遺跡と契約業務の経過	3
第2節 調査の経過	4
第3節 調査の方法	5
1 発掘調査の方法	5
(1) 調査方針	
(2) 遺跡名称と記号	
(3) トレンチ調査の方法と視点	
(4) 面的調査	
(5) 遺構の調査	
(6) 遺物の取り上げ	
(7) その他	
2 記録の方法	6
(1) 測量	
ア 測量の原則 イ 大地区及びグリッドの設定 ウ 測量の方法	
(2) 写真	
(3) その他	
3 整理の方法	6
(1) 発掘記録の整理	
(2) 遺物の整理と記録	
(3) 記録類と遺物の保管	
4 指導・助言	7
5 報告書編集の方法	7
(1) 編集方針	
(2) 遺構の記述	
(3) 土器・焼物の記述	
(4) 石器の記述	
第2章 環境	9

第1節 地理的環境	9
1 松本盆地の概観	9
(1) 位置	
(2) 地形	
ア 筑摩野 イ 安曇野	
(3) 地質	
(4) 盆地の形成	
2 調査遺跡付近の自然環境	13
(1) 位置	
(2) 地形地質	
ア 丘陵部 イ 台地 ウ 田川沿いの低地部	
第2節 歴史的環境	18
第3章 調査	25
第1節 青木沢東遺跡（EAH）	25
1 遺跡の概観	25
2 調査の概要と経過	25
3 調査の結果	26
(1) 層序と地形形成	
(2) 遺構と遺物の概観	
(3) 縄文・弥生時代の遺物	
(4) 時期不明の遺構	
ア 方形竪穴状遺構 イ 土 壙	
5 小 結	27
第2節 青木沢遺跡（EAK）	28
1 遺跡の概観	28
2 調査の概要	28
3 調査の経過	28
4 調査の結果	29
(1) 層序と地形形成	
(2) 遺構と遺物の概観	
(3) 先土器時代～縄文時代草創期の遺物	
(4) 縄文時代の遺物	
(5) 平安時代の遺構	
5 小 結	33
第3節 八窪遺跡（EHK）	34

1	遺跡の概観	34
2	調査の概要	34
3	調査の経過	34
4	調査の結果	35
	(1) 層序と地形形成	
	(2) 遺構と遺物の概観	
	(3) 縄文時代の遺構と遺物	
	ア 住居址 イ 土 壙 ウ 集 石 エ 石 罌 炉 オ 出土土器の分類 カ 出土石器の分類	
	(4) 古墳時代の遺構と遺物	
	ア 焼土址 イ 遺構外出土遺物	
	(5) 平安時代の遺構と遺物	
	ア 住居址 イ 遺構外出土遺物	
	(6) 時期不明の遺構	
	ア 焼土壙 イ 4号溝址 ウ 土 壙	
5	成果と課題	113
	(1) 縄文時代早期前半の土器—八窪遺跡出土第1群土器の検討—	
	(2) 縄文時代早期後半～末葉の土器群について	
	(3) 石鏃について	
6	小 結	132
第4節	大原遺跡 (E O H)	136
1	遺跡の概観	136
2	調査の概要	136
3	調査の経過	137
4	調査の結果	137
	(1) 層序と地形形成	
	(2) 遺構と遺物の概観	
	(3) 縄文時代の遺構と遺物	
	ア 土 壙 イ 遺構外出土遺物	
	(4) 中世以降の遺構と遺物	
	ア 塚 イ 遺構外出土遺物	
5	小 結	147
第5節	北山遺跡 (E K Y)	148
1	遺跡の概観	148
2	調査の概要と経過	148
3	調査の結果	148
	(1) 層序と地形形成	
	(2) 出土遺物	
4	小 結	149

第6節 御堂垣外遺跡 (EMG)	150
1 遺跡の概観	150
2 調査の概要	150
3 調査の経過	151
4 調査の結果	152
(1) 層序	
(2) 遺構と遺物の概観	
(3) 縄文時代の遺構と遺物	
ア 住居址 イ 土 壙 ウ 遺構外出土遺物	
(4) 弥生時代以降の遺構と遺物	
ア 土 壙 イ 遺構外出土遺物	
5 成果と課題	168
(1) 敷石住居址の検討	
(2) 長野県内発見の縄文後期前葉の住居址	
6 小 結	174
第7節 栗木沢遺跡 (EKZ)	176
1 遺跡の概観	176
2 調査の概要	176
3 調査の経過	176
4 調査の結果	177
(1) 層序と地形形成	
(2) 遺構と遺物の概観	
(3) 縄文時代の遺物	
ア 土 器 イ 石 器	
(4) 平安時代の遺構と遺物	
ア 住居址 イ 集 石 ウ 遺構外出土遺物	
(5) 中世以降の遺構と遺物	
ア 溝状遺構 イ 竪穴状遺構 ウ 中世以降の遺物	
5 小 結	192
第8節 ヨケ遺跡 (EYK)	194
1 遺跡の概観	194
2 調査の概要	194
3 調査の経過	194
4 調査の結果	195
(1) 層序と地形形成	
(2) 遺構と遺物の概観	
(3) 縄文時代の遺構と遺物	

ア 土 壙 イ 遺構外出土遺物	
(4) 平安時代の遺物	
(5) 中世以降の遺物	
5 小 結	200
第9節 樋口遺跡 (E T G)	201
1 遺跡の概観	201
2 調査の概要	201
3 調査の経過	202
4 調査の結果	202
(1) 層序と地形形成	
(2) 遺構と遺物の概観	
(3) 縄文時代の遺構と遺物	
ア 土 壙 イ 遺構外出土遺物	
(4) 弥生時代の遺物	
(5) 平安時代の遺構と遺物	
ア 住居址 イ 火 床 ウ 遺構外出土遺物	
(6) 中世以降の遺物	
5 小 結	212
第10節 高山城跡 (E T J)	213
1 遺跡の概観	213
2 調査の概要	213
(1) 発掘調査に至るまでの経過	
(2) 発掘調査の概要	
3 調査の経過	215
4 調査の結果	215
(1) 層序と地形形成	
(2) 遺構と遺物の概観	
(3) 縄文時代の遺構と遺物	
ア 土 壙 イ 遺構外出土遺物 ウ 平安時代以降の遺物	
5 小 結	218
第11節 竜神遺跡 (E R J)	219
1 遺跡の概観	219
2 調査の概要	219
3 調査の経過	219
4 調査の結果	219
(1) 層序と地形形成	
(2) 遺構と遺物の概観	

(3) 縄文時代の遺構と遺物	
ア 土 壙 イ 集石炉 ウ 遺構外出土遺物	
5 小 結	225
第12節 竜神平遺跡 (ERD)	226
1 遺跡の概観	226
2 調査の概要	226
3 調査の経過	227
4 調査の結果	227
a 地区	
(1) 層序と地形形成	
(2) 遺構と遺物の概観	
(3) 縄文時代の遺構と遺物	
ア 住居址 イ 土 壙	
b 地区	
(1) 層序と地形形成	
(2) 遺構と遺物の概観	
(3) 縄文時代の遺構と遺物	
ア 住居址 イ 集石炉 ウ 火 床 エ 竪穴状遺構 オ 遺構外出土土器 カ 遺構 外出土石器	
(4) 平安時代の遺構と遺物	
ア 住居址 イ 焼土壙	
c 地区	
(1) 層序と地形形成	
(2) 遺構と遺物の概観	
(3) 縄文時代の遺物	
(4) 古墳時代の遺構と遺物	
ア 住居址 イ 土 壙 ウ 集石土壙 エ 遺構外出土遺物とその出土状況	
5 成果と課題	283
(1) 集石炉をめぐって	
(2) c地区検出の祭祀的遺構・遺物について－農耕祭祀の一例－	
(3) 焼土壙について	
6 小 結	293
第13節 山の神遺跡 (EYN)	296
1 遺跡の概観	296
2 調査の概要	296
3 調査の経過	297
4 調査の結果	300
(1) 層序と地形形成	

(2) 遺構と遺物の概観	
ア 北区	イ 南区
(3) 北区の遺構と遺物	
ア 先土器時代の遺構と遺物	イ 縄文時代の遺構と遺物
ウ その他の遺構	
(4) 南区の遺構と遺物	
ア 住居址	イ 土 壙
ウ 火 床	エ 遺構外出土遺物
5 小 結	313
第14節 中原遺跡 (ENP)	314
1 遺跡の概観	314
2 調査の概要と経過	314
3 小 結	315
第15節 犬原遺跡 (EIP)	316
1 遺跡の概観	316
2 調査の概要	316
3 調査の経過	316
4 調査の結果	317
(1) 層序と地形形成	
(2) 遺構と遺物の概観	
(3) 縄文時代の遺構と遺物	
ア 土 壙	イ 遺構外出土遺物
(4) 弥生時代の遺構	
ア 方形周溝墓	
(5) 近世の遺構	
ア 溝 址	イ 溝状遺構
ウ 土 壙墓	
5 小 結	324
第16節 上木戸遺跡 (EUK)	326
1 遺跡の概観	326
2 調査の概要	326
3 調査の経過	328
4 調査の結果	328
(1) 層序と地形形成	
(2) 遺構と遺物の概観	
(3) 縄文時代の遺構と遺物	
ア 住居址	イ 屋外埋甕
ウ 土 壙	エ 遺構外出土遺物
オ 出土土器の分類	——中
期中葉～後半の土器	——
カ 出土石器の分類	
(4) 弥生時代の遺構と遺物	
ア 住居址	イ 溝 址

(5) 平安時代の遺構と遺物	
ア 住居址	
5 成果と課題	448
(1) 縄文時代中期の集落	
(2) 弥生時代後期後半の土器について	
(3) 弥生時代後期後半の集落について	
6 小 結	463
第17節 千本原遺跡 (E S B)	465
1 遺跡の概観	465
2 調査の概要と経過	465
3 小 結	465
第18節 高田遺跡 (E T D)	466
1 遺跡の概観	466
2 調査の概要と経過	466
3 小 結	466
第19節 吉田向井遺跡 (E M I)	467
1 遺跡の概観	467
2 調査の概要	467
3 調査の経過	467
4 調査の結果	470
(1) 層序と地形形成	
(2) 遺構と遺物の概観	
(3) 縄文時代の遺構と遺物	
ア 住居址 イ 遺物集中区 ウ 遺構外出土遺物	
(4) 古墳時代の遺構と遺物	
(5) 平安時代の遺構と遺物	
ア 住居址 イ 溝 址 ウ 遺構外出土遺物	
(6) 中・近世の遺構と遺物	
ア 建物址 イ 方形竪穴状遺構 ウ 土 壇 エ 遺構外出土遺物	
5 成果と課題	519
(1) 古代末期の焼物	
6 小 結	525
第 4 章 結 語	526
発掘調査及び執筆担当等の分担一覧	528
写真図版 (別冊)	

図 表 目 次

第1章 序 説

- 表1 中央自動車道長野線埋蔵文化財調査契約年度別
一覧表1
- 表2 中央自動車道長野線埋蔵文化財調査契約年度別
一覧表2
- 表3 発掘調査の経過一覧表

第2章 環 境

- 図1 松本盆地の地形区分と水系
- 図2 塩尻市東部の地質図
- 図3 塩尻市東部の地質断面図
- 図4 塩尻地区の路線に沿う地質断面図
- 図5 塩尻地区遺跡分布図
- 表1 松本盆地南部層序表
- 表2 松本盆地南部地域の段丘
- 表3 塩尻地区遺跡地名表1
- 表4 塩尻地区遺跡地名表2
- 表5 既調査遺跡調査結果の概要

第3章 調 査

第1節 青木沢東遺跡

- 図1 地形及び発掘範囲図
- 図2 遺構分布図
- 図3 遺構外出土遺物実測図
- 図4 1号方形竪穴状遺構及び1号土壙実測図

第2節 青木沢遺跡

- 図1 地形及び発掘範囲図
- 図2 土層図
- 図3 先土器時代～縄文時代草創期の石器実測図
- 図4 縄文時代遺物実測図及び拓影
- 図5 1号焼土壙実測図

第3節 八窪遺跡

- 図1 地形及び発掘範囲図
- 図2 トレンチ土層図
- 図3 遺構分布図
- 図4 2号住居址実測図及び遺物分布図
- 図5 2号住居址出土遺物実測図・拓影
- 図6 3号住居址実測図
- 図7 3号住居址遺物分布図及び出土遺物実測図
- 図8 3号住居址出土遺物拓影
- 図9 土壙実測図1
- 図10 土壙実測図2及び出土遺物実測図
- 図11 土壙出土遺物実測図・拓影
- 図12 土壙出土遺物実測図3

- 図13 6号集石及び石囲炉実測図
- 図14 縄文時代早期前半土器実測図・拓影1
- 図15 縄文時代早期前半土器拓影2
- 図16 縄文時代早期前半土器拓影3
- 図17 縄文時代早期前半土器拓影4
- 図18 縄文時代早期前半土器拓影5
- 図19 縄文時代早期前半土器拓影6
- 図20 縄文時代早期前半土器拓影7
- 図21 縄文時代早期前半土器拓影8
- 図22 縄文時代早期前半土器拓影9
- 図23 縄文時代早期前半土器拓影10
- 図24 縄文時代早期末葉土器拓影1
- 図25 縄文時代早期末葉土器拓影2
- 図26 縄文時代早期末葉土器拓影3
- 図27 縄文時代早期末葉土器拓影4
- 図28 縄文時代早期末葉土器拓影5
- 図29 縄文時代早期末葉土器分布図
- 図30 縄文時代前・中期土器分布図
- 図31 縄文時代前・中期土器実測図・拓影
- 図32 縄文時代中期土器実測図・拓影
- 図33 縄文時代中～晩期土器実測図・拓影
- 図34 縄文時代後期中葉土器分布図1
- 図35 縄文時代後期中葉土器分布図2
- 図36 1号ブロック出土縄文時代後期中葉土器実測図
1
- 図37 1号ブロック出土縄文時代後期中葉土器実測図
・拓影2
- 図38 1号ブロック出土縄文時代後期中葉土器拓影3
- 図39 1号ブロック及び2号ブロック出土縄文時代後
期中葉土器実測図・拓影1
- 図40 2号ブロック出土縄文時代後期中葉土器実測図
・拓影2
- 図41 2号ブロック出土縄文時代後期中葉土器実測図
・拓影
- 図42 縄文時代後期中葉土器拓影
- 図43 遺構外出土石器実測図1
- 図44 遺構外出土石器実測図2
- 図45 遺構外出土石器実測図3
- 図46 遺構外出土石器実測図4
- 図47 遺構外出土石器実測図5
- 図48 遺構外出土石器実測図6
- 図49 遺構外出土石器実測図7

- 図50 遺構外出土石器実測図 8
- 図51 遺構外出土石器実測図 9
- 図52 遺構外出土石器実測図10
- 図53 遺構外出土石器実測図11
- 図54 遺構外出土石器実測図12
- 図55 遺構外出土石器実測図13
- 図56 石器の分析
- 図57 古墳時代土器分布図
- 図58 遺構外出土古墳時代遺物実測図
- 図59 1号住居址実測図・遺物分布図、1号住居址出土遺物及び遺構外出土遺物実測図
- 図60 1号住居址カマド実測図
- 図61 1・3号焼土壙及び2・3・19号土壙実測図
- 図62 縄文時代早期前半土器分布図 1
- 図63 縄文時代早期前半土器分布図 2
- 図64 縄文時代早期前半土器分布図 3
- 図65 縄文時代早期前半土器分布図 4
- 図66 文様別垂直接合状況
- 図67 層別施文方向の割合
- 図68 押型文施文原体模式図
- 図69 縄文時代早期前半の土器分類図
- 図70 縄文時代早期後半の土器 1
- 図71 縄文時代早期後半の土器 2
- 図72 縄文時代早期末葉の土器
- 図73 石鏃の形態別消長
- 図74 八窪遺跡出土石鏃の時期別割合
- 図75 小形石鏃の消長
- 図76 石鏃の時期別分布状況図
- 図77 縄文時代後期中葉土器分類別分布図
- 表 1 土壙一覧表
- 表 2 県内発見押型文土器出土住居址

第4節 大原遺跡

- 図 1 地形及び発掘範囲図
- 図 2 土層図
- 図 3 北調査区トレンチ配置及び遺構分布図
- 図 4 南調査区トレンチ配置及び遺構分布図
- 図 5 土壙実測図
- 図 6 北調査区遺構外出土遺物実測図及び拓影
- 図 7 南調査区遺構外出土遺物実測図及び拓影 1
- 図 8 南調査区遺構外出土遺物実測図 2
- 図 9 南調査区遺構外出土遺物実測図 3
- 図10 塚実測図
- 図11 遺構外出土中世陶器実測図

第5節 北山遺跡

- 図 1 地形及び発掘範囲図

- 図 2 土層模式柱状図
- 図 3 出土遺物実測図及び拓影

第6節 御堂垣外遺跡

- 図 1 地形及び発掘範囲図
- 図 2 土層図
- 図 3 遺構分布図
- 図 4 1号住居址実測図及び出土遺物実測図・拓影
- 図 5 2号住居址実測図及び出土遺物実測図・拓影
- 図 6 3・5号住居址実測図
- 図 7 3・5号住居址炉実測図
- 図 8 3号住居址出土遺物実測図
- 図 9 3号住居址出土遺物実測図・拓影
- 図10 4号住居址実測図及び出土遺物実測図・拓影
- 図11 5号住居址実測図及び出土遺物実測図
- 図12 5号住居址出土遺物実測図・拓影
- 図13 6号住居址実測図及び出土遺物実測図
- 図14 1～5号土壙実測図及び出土遺物実測図
- 図15 遺構外出土縄文時代遺物実測図・拓影 1
- 図16 遺構外出土縄文時代遺物実測図・拓影 2
- 図17 6号土壙実測図及び出土遺物実測図
- 図18 1～3・5号住居址周縁石・立石・敷石等配石状況図
- 図19 1・3・5・6号住居址柱穴配置図
- 図20 3・5号住居址重複状況図
- 図21 住居址空間の分割模式図
- 表 1 土壙一覧表
- 表 2 長野県内発見敷石住居址一覧表

第7節 栗木沢遺跡

- 図 1 地形及び発掘範囲図
- 図 2 土層図
- 図 3 南区遺構分布図
- 図 4 北区遺構分布図
- 図 5 遺構外出土縄文時代早期土器実測図・拓影
- 図 6 遺構外出土縄文時代中期土器拓影
- 図 7 遺構外出土縄文時代石器実測図 1
- 図 8 遺構外出土縄文時代石器実測図 2
- 図 9 1号住居址実測図及び出土遺物実測図
- 図10 2号住居址出土遺物実測図
- 図11 3号住居址実測図及び出土遺物実測図
- 図12 4号住居址実測図及び出土遺物実測図
- 図13 1号集石址実測図及び出土遺物実測図
- 図14 2号集石址実測図
- 図15 遺構外出土平安時代遺物実測図
- 図16 遺構外出土近世遺物実測図

第8節 ヨケ遺跡

- 図1 地形及び発掘範囲図
- 図2 土層図
- 図3 トレンチ配置図及び遺構分布図
- 図4 1号土壙実測図
- 図5 遺構外出土縄文・弥生時代土器拓影
- 図6 遺構外出土縄文時代石器実測図1
- 図7 遺構外出土縄文時代石器実測図2
- 図8 遺構外出土平安時代遺物実測図
- 第9節 樋口遺跡**
- 図1 地形及び発掘範囲図
- 図2 土層図
- 図3 遺構分布図
- 図4 3号土壙実測図
- 図5 遺構外出土縄文時代遺物実測図・拓影
- 図6 遺構外出土縄文時代遺物実測図
- 図7 1号住居址実測図及び出土遺物実測図
- 図8 平安時代遺物グリッド別出土状況図
- 図9 遺構外出土平安時代遺物実測図
- 第10節 高山城**
- 図1 地形及び発掘範囲図
- 図2 トレンチ配置及び遺構分布図
- 図3 1・2号土壙実測図
- 図4 遺構外出土縄文時代遺物実測図・拓影
- 第11節 竜神遺跡**
- 図1 竜神・竜神平遺跡地形及び発掘範囲図
- 図2 土層図
- 図3 トレンチ配置及び遺構分布図
- 図4 1・2号集石炉・1号土壙実測図
- 図5 遺構外出土縄文時代土器拓影
- 図6 遺構外出土縄文時代石器実測図
- 第12節 竜神平遺跡**
- 図1 a地区遺構分布図・土層図
- 図2 a地区1号住居址・1～3号土壙実測図
- 図3 b地区遺構分布図・土層図
- 図4 b地区1号住居址実測図・出土遺物実測図・拓影
- 図5 b地区1・2号集石炉実測図
- 図6 b地区3・4号集石炉実測図
- 図7 b地区5・6号集石炉実測図
- 図8 b地区火床実測図
- 図9 b地区9号火床付近出土遺物実測図
- 図10 b地区1号竪穴状遺構実測図
- 図11 b地区縄文時代早期土器分布図
- 図12 b地区縄文時代前期土器分布図
- 図13 b地区縄文時代中期初頭土器分布図
- 図14 b地区縄文時代中期中葉土器分布図
- 図15 b地区縄文時代後期土器・縄文時代石器分布図
- 図16 b地区遺構外出土縄文時代早期前半土器拓影
- 図17 b地区遺構外出土縄文時代早期土器実測図1
- 図18 b地区遺構外出土縄文時代早期土器拓影2
- 図19 b地区遺構外出土縄文時代早期土器実測図・拓影3
- 図20 b地区遺構外出土縄文時代前期土器実測図1
- 図21 b地区遺構外出土縄文時代前期土器拓影2
- 図22 b地区遺構外出土縄文時代中期初頭土器拓影1
- 図23 b地区遺構外出土縄文時代中期初頭土器実測図・拓影2
- 図24 b地区遺構外出土縄文時代中期初頭土器拓影3
- 図25 b地区遺構外出土縄文時代中期中葉土器実測図・拓影
- 図26 b地区遺構外出土縄文時代中期中葉土器拓影
- 図27 b地区遺構外出土縄文時代中期中葉土器拓影
- 図28 b地区遺構外出土縄文時代後期土器実測図
- 図29 b地区遺構外出土石器実測図1
- 図30 b地区遺構外出土石器実測図2
- 図31 b地区遺構外出土石器実測図3
- 図32 b地区遺構外出土石器実測図4
- 図33 b地区遺構外出土石器実測図5
- 図34 b地区遺構外出土石器実測図6
- 図35 b地区遺構外出土石器実測図7
- 図36 b地区遺構外出土石器実測図8
- 図37 b地区2号住居址実測図・出土遺物実測図
- 図38 b地区1～5・7号焼土壙実測図
- 図39 c地区遺構分布図・土層図
- 図40 c地区縄文時代遺物分布図
- 図41 c地区遺構外出土縄文時代遺物実測図・拓影
- 図42 c地区1号住居址実測図
- 図43 c地区1号住居址遺物分布図
- 図44 c地区1号住居址遺物出土状況・接合関係図
- 図45 c地区1号住居址出土遺物実測図
- 図46 c地区2号住居址実測図・遺物分布・接合関係図
- 図47 c地区遺構外出土2号住居址出土遺物実測図
- 図48 c地区1～3号土壙実測図・出土遺物実測図
- 図49 c地区1号集石土壙実測図
- 図50 c地区古墳時代遺物分布図
- 図51 c地区遺構外出土遺物実測図
- 図52 集石炉の構成礫重量物割合
- 図53 重量別の礫の在り方
- 図54 焼礫と自然礫の割合
- 図55 4～6号集石全炉構成礫重量別割合
- 図56 4～6号集石炉構成礫・石質別・重量別割合

図57 礫の移動復元モデル

表1 a地区土壌一覧表

第13節 山の神遺跡

- 図1 地形及び発掘範囲図
- 図2 南区土層図
- 図3 北区土層図
- 図4 北区トレンチ配置及び遺構分布図
- 図5 南区遺構分布図
- 図6 1号ブロック器種別分布図
- 図7 先土器時代石器実測図
- 図8 北区土壌実測図
- 図9 昭和6年当時の遺跡周辺
- 図10 1号住居址実測図・出土遺物実測図・拓影1
- 図11 1号住居址出土遺物実測図
- 図12 2号住居址実測図・出土遺物実測図・拓影
- 図13 土壌実測図
- 図14 土壌・火床出土遺物実測図・拓影
- 図15 遺構外出土縄文時代石器拓影
- 図16 遺構外出土縄文時代石器実測図1
- 図17 遺構外出土縄文時代石器実測図2

第14節 中原遺跡

- 図1 地形及び発掘範囲図
- 図2 出土遺物実測図及び拓影

第15節 犬原遺跡

- 図1 地形及び発掘範囲図
- 図2 土層図
- 図3 トレンチ配置及び遺構分布図
- 図4 土壌実測図
- 図5 土壌出土遺物
- 図6 遺構外出土縄文時代遺物実測図
- 図7 方形周溝墓実測図
- 図8 溝状遺構及び溝址断面図
- 図9 1号土壌墓実測図

表1 土壌一覧表

第16節 上木戸遺跡

- 図1 地形及び発掘範囲図
- 図2 02トレンチ土層図
- 図3 遺構分布図
- 図4 5号住居址実測図・出土遺物実測図1
- 図5 5号住居址出土遺物実測図2
- 図6 8号住居址実測図
- 図7 8号住居址出土遺物実測図
- 図8 17号住居址実測図
- 図9 17号住居址出土遺物実測図1
- 図10 17号住居址出土遺物実測図2

- 図11 17号住居址出土遺物実測図3
- 図12 18号住居址実測図
- 図13 18号住居址出土遺物実測図
- 図14 20号住居址実測図
- 図15 20号住居址出土遺物実測図1
- 図16 20号住居址出土遺物実測図2
- 図17 31号住居址実測図・出土遺物実測図1
- 図18 31号住居址出土遺物実測図2・石器出土状況図
- 図19 31号住居址出土遺物実測図3
- 図20 31号住居址出土遺物実測図4
- 図21 32・33号住居址実測図
- 図22 32号住居址遺物出土状況図・出土遺物実測図1
- 図23 32号住居址出土遺物実測図2
- 図24 32号住居址出土遺物実測図3
- 図25 34号住居址実測図
- 図26 34号住居址出土遺物実測図1
- 図27 34号住居址出土遺物実測図2
- 図28 34号住居址出土遺物実測図3
- 図29 35号住居址実測図・出土遺物実測図
- 図30 36号住居址実測図
- 図31 36号住居址出土遺物実測図
- 図32 37号住居址出土遺物実測図
- 図33 37号住居址実測図
- 図34 38号住居址実測図
- 図35 39号住居址実測図
- 図36 39号住居址出土遺物実測図
- 図37 101号住居址実測図・出土遺物実測図
- 図38 102号住居址実測図
- 図39 102号住居址遺物出土状況図
- 図40 102号住居址出土遺物実測図1
- 図41 102号住居址出土遺物実測図2
- 図42 102号住居址出土遺物実測図3
- 図43 104号住居址出土遺物実測図1
- 図44 104号住居址実測図
- 図45 104号住居址出土遺物実測図2
- 図46 105号住居址実測図
- 図47 105・112号住居址遺物出土状況図・105号住居址出土遺物実測図1
- 図48 105号住居址出土遺物実測図2
- 図49 105号住居址出土遺物実測図3
- 図50 105号住居址出土遺物実測図4
- 図51 105号住居址出土遺物実測図5
- 図52 106号住居址実測図・出土遺物実測図
- 図53 107号住居址実測図・出土遺物実測図
- 図54 108号住居址実測図

- 図55 108号住居址出土遺物実測図
 図56 109号住居址実測図・出土遺物実測図
 図57 110号住居址実測図・遺物出土状況図・出土遺物実測図1
 図58 110号住居址出土遺物実測図2
 図59 110号住居址出土遺物実測図3
 図60 112号住居址実測図・出土遺物実測図1
 図61 112号住居址出土遺物実測図2
 図62 113号住居址実測図
 図63 113号住居址出土遺物実測図
 図64 114・116号住居址実測図・出土遺物実測図
 図65 115号住居址実測図・出土遺物実測図
 図66 屋外埋設遺物実測図・拓影
 図67 土壙実測図1
 図68 土壙実測図2
 図69 土壙実測図3
 図70 29号土壙出土遺物実測図
 図71 土壙出土遺物実測図
 図72 土壙出土遺物拓影
 図73 遺構外出土遺物実測図・拓影
 図74 遺構外出土石器実測図1
 図75 遺構外出土石器実測図2
 図76 遺構外出土石器実測図3
 図77 遺構外出土石器実測図4
 図78 弥生時代遺構出土石器実測図1
 図79 弥生時代遺構出土石器実測図2
 図80 縄文時代中期後半の土器の器種別変化1
 図81 縄文時代中期後半の土器の器種別変化2
 図82 縄文時代中期後半の土器の器種別変化3
 図83 縄文時代中期後半の土器の器種別変化4
 図84 打製石斧の法量
 図85 横刃形石器の法量
 図86 粗製大形石匙の法量
 図87 1号住居址実測図・出土遺物実測図
 図88 3・4号住居址実測図
 図89 3・4号住居址出土遺物実測図
 図90 6号住居址実測図
 図91 6号住居址出土遺物実測図
 図92 7号住居址実測図・出土遺物実測図
 図93 9号住居址実測図
 図94 9号住居址出土遺物実測図1
 図95 9号住居址出土遺物実測図2
 図96 10号住居址実測図・出土遺物実測図
 図97 11号住居址実測図・出土遺物実測図1
 図98 11号住居址出土遺物実測図2
 図99 12・13号住居址実測図・出土遺物実測図
 図100 13号住居址出土遺物実測図
 図101 14号住居址実測図・出土遺物実測図
 図102 15号住居址実測図・出土遺物実測図
 図103 16号住居址実測図・出土遺物実測図1
 図104 16号住居址出土遺物実測図
 図105 19号住居址実測図・出土遺物実測図
 図106 21号住居址実測図・出土遺物実測図
 図107 103号住居址実測図・出土遺物実測図
 図108 1～3・101号溝址実測図
 図109 1号溝址出土遺物実測図
 図110 2号溝址出土遺物実測図1
 図111 2号溝址出土遺物実測図2
 図112 101号溝址出土遺物実測図1
 図113 101号溝址出土遺物実測図2
 図114 遺構外出土弥生土器実測図・拓影
 図115 2号住居址実測図・出土遺物実測図
 図116 遺構外出土中世陶器実測図
 図117 縄文中期集落の変遷
 図118 在来系土器群の系統1
 図119 在来系土器群の系統2
 図120 住居面積構成
 表1 県内発見ヒスイ製大珠出土土壙一覧表
 表2 土壙一覧表
 表3 打製石斧・磨製石斧等の石材
 表4 打製石斧の素材
 表5 打製石斧の加工
 表6 打製石斧側縁部の加工
 表7 打製石斧の摩耗痕
 表8 打製石斧の欠損
 表9 埋甕一覧表
 表10 各地域の編年対照表
 表11 外来系土器群の出土個数
 表12 外来系土器群の器種別割合
- 第17節 千本原遺跡**
 図1 地形及び発掘範囲図
- 第18節 高田遺跡**
 図1 地形及び発掘範囲図
- 第19節 吉田向井遺跡**
 図1 地形及び発掘範囲図
 図2 土層図
 図3 遺構分布図
 図4 1号住居址実測図・遺物出土状況図
 図5 1号住居址出土遺物実測図1
 図6 1号住居址出土遺物実測図2

- 図7 1号住居址出土遺物実測図3
- 図8 3号住居址実測図
- 図9 3号住居址出土遺物実測図1
- 図10 3号住居址出土遺物実測図2
- 図11 1号遺物集中区実測図・出土遺物実測図1
- 図12 1号遺物集中区出土遺物実測図2
- 図13 遺構外出土遺物実測図・拓影1
- 図14 遺構外出土遺物実測図2
- 図15 遺構外出土遺物実測図3
- 図16 2号遺物集中区実測図・出土遺物実測図
- 図17 器種分類図
- 図18 2号住居址実測図・出土遺物実測図・拓影
- 図19 4号住居址実測図・出土遺物実測図
- 図20 5号住居址実測図・出土遺物実測図
- 図21 7・10号住居址実測図
- 図22 7号住居址出土遺物実測図
- 図23 10号住居址出土遺物実測図
- 図24 8号住居址実測図・出土遺物実測図
- 図25 31号住居址実測図・出土遺物実測図
- 図26 32号住居址実測図・出土遺物実測図
- 図27 33号住居址実測図・出土遺物実測図
- 図28 41号住居址実測図・出土遺物実測図
- 図29 42号住居址実測図
- 図30 43号住居址実測図・出土遺物実測図
- 図31 44号住居址実測図・出土遺物実測図
- 図32 45号住居址実測図・出土遺物実測図
- 図33 46号住居址実測図・出土遺物実測図
- 図34 溝址断面図
- 図35 遺構外出土平安時代遺物実測図
- 図36 堀立柱建物址実測図
- 図37 竪穴状遺構実測図・出土遺物実測図
- 図38 土壙実測図1
- 図39 土壙実測図2
- 図40 土壙実測図3
- 図41 土壙実測図4
- 図42 土壙実測図5
- 図43 土壙実測図6
- 図44 土壙出土遺物実測図
- 図45 土壙出土金属製品実測図
- 図46 遺構外出土中・近世遺物実測図・金属製品実測図
- 図47 遺構外出土銭貨拓影
- 図48 平安時代の食膳具の変化段階図
- 図49 吉田向井遺跡における第3段階の器種組成
- 図50 杯AⅢ法量分布図
- 図51 皿AⅡ法量分布図
- 図52 土師皿Cタイプ
- 図53 栗木沢・樋口遺跡出土杯A法量分布図
- 図54 樋口・栗木沢遺跡における器種組成
- 図55 灰釉年代比較図
- 表1 土壙一覧表(1)
- 表2 土壙一覧表(2)
- 表3 土壙一覧表(3)
- 表4 土壙一覧表(4)

写真図版(別冊) 目次

- P L 1 調査遺跡周辺の地形
- P L 2 調査遺跡周辺の地形
- P L 3 青木沢東遺跡 遠景、青木沢遺跡 遠景、先
土器時代遺物
- P L 4 八窪遺跡 遠景、2・3号住居址
- P L 5 八窪遺跡 11・13号土壙、1・3号焼土壙
- P L 6 八窪遺跡 縄文時代早期前半の土器
- P L 7 八窪遺跡 縄文時代早期前半の土器
- P L 8 八窪遺跡 縄文時代早期前半の土器
- P L 9 八窪遺跡 縄文時代早期前半の土器
- P L 10 八窪遺跡 縄文時代早期前半の土器
- P L 11 八窪遺跡 縄文時代早期後半～末葉の土器
- P L 12 八窪遺跡 縄文時代早期後半～末葉の土器
- P L 13 八窪遺跡 縄文時代早期後半～末葉の土器
- P L 14 八窪遺跡 縄文時代後期土器
- P L 15 八窪遺跡 縄文時代後期土器
- P L 16 八窪遺跡 縄文時代後期土器
- P L 17 八窪遺跡 縄文時代後期土器、2・3号住居址
出土石器、9号土壙出土遺物
- P L 18 八窪遺跡 9号土壙出土遺物、遺構外出土石
器
- P L 19 八窪遺跡 遺構外出土石器
- P L 20 八窪遺跡 遺構外出土石器
- P L 21 八窪遺跡 遺構外出土石器
- P L 22 大原遺跡 遠景、北・南調査区近景
- P L 23 大原遺跡 1・2・4・6～8号土壙
- P L 24 大原遺跡 北・南調査区出土土器
- P L 25 北山遺跡 遠景、御堂垣外遺跡 遠景、4号
住居址
- P L 26 御堂垣外遺跡 1・2号住居址
- P L 27 御堂垣外遺跡 3・5号住居址
- P L 28 御堂垣外遺跡 5号住居址炉、1号土壙出土
土器、3号住居址出土土器
- P L 29 御堂垣外遺跡 1・3・5号住居址・遺構外
出土土器
- P L 30 御堂垣外遺跡 1・2・3・5号住居址・遺構外
出土石器、6号土壙出土土器
- P L 31 栗木沢遺跡 遠景、南・北区近景
- P L 32 栗木沢遺跡 縄文時代早期土器
- P L 33 栗木沢遺跡 縄文時代前・中期土器、遺構外
出土石器
- P L 34 栗木沢遺跡 1・4号住居址、1号集石址
- P L 35 栗木沢遺跡 2号集石址、1・4号住居址、1
号集石、遺構外出土焼物
- P L 36 ヨケ遺跡 遠景、1号土壙、凸帯付四耳壺、
遺構外出土石器
- P L 37 樋口遺跡 遠景、調査区近景
- P L 38 樋口遺跡 1号住居址、出土遺物、高山城跡
近景
- P L 39 竜神遺跡 遠景、1・2号集石炉、竜神平遺跡
遠景
- P L 40 竜神平遺跡 a・b地区全景、b地区層序
- P L 41 竜神平遺跡 1～4・6号集石炉
- P L 42 竜神平遺跡 b地区出土縄文土器
- P L 43 竜神平遺跡 b地区出土縄文土器
- P L 44 竜神平遺跡 b地区出土縄文土器
- P L 45 竜神平遺跡 b地区出土縄文土器
- P L 46 竜神平遺跡 b地区出土縄文土器
- P L 47 竜神平遺跡 b地区出土縄文土器
- P L 48 竜神平遺跡 b地区出土縄文土器
- P L 49 竜神平遺跡 b地区出土縄文土器
- P L 50 竜神平遺跡 b地区出土縄文時代石器
- P L 51 竜神平遺跡 b地区出土縄文時代石器
- P L 52 竜神平遺跡 c地区遠景、全景、1号住居址
- P L 53 竜神平遺跡 c地区2号住居址、1・3号土壙
- P L 54 竜神平遺跡 c地区1号集石土壙、住居址検
出
- P L 55 竜神平遺跡 c地区1号住居址出土遺物
- P L 56 竜神平遺跡 c地区2号住居址、1・2号土壙
出土遺物
- P L 57 山の神遺跡 遠景、北地区1号土壙
- P L 58 山の神遺跡 南地区全景、1号住居址
- P L 59 山の神遺跡 1・2号住居址、1・2・5・8号
土壙
- P L 60 山の神遺跡 北地区先土器時代遺物、1・2号
住居址炉体土器、1号住居址出土石器
- P L 61 山の神遺跡 南地区出土土器
- P L 62 山の神遺跡 南地区出土石器
- P L 63 犬原遺跡 遠景、1～4号土壙
- P L 64 犬原遺跡 5・6号土壙、1・2号方形周溝墓
- P L 65 犬原遺跡 3・5号土壙出土土器、遺構外出土
土器、1号溝状遺構
- P L 66 上木戸遺跡 遠景、南・中・北調査区近景
- P L 67 上木戸遺跡 南・北調査区遺構分布

- P L 68 上木戸遺跡 8・17号住居址 吉田向井遺跡 近景
- P L 69 上木戸遺跡 20・31号住居址 P L 103 吉田向井遺跡 第一次調査区全景
- P L 70 上木戸遺跡 32・34号住居址 P L 104 吉田向井遺跡 1号住居址
- P L 71 上木戸遺跡 34～37号住居址 P L 105 吉田向井遺跡 3号住居址
- P L 72 上木戸遺跡 101・102号住居址 P L 106 吉田向井遺跡 1号住居址出土土器
- P L 73 上木戸遺跡 104・105・110・112～114・116号住居址 P L 107 吉田向井遺跡 1・3号住居址出土土器
- P L 74 上木戸遺跡 105・110・113号住居址 P L 108 吉田向井遺跡 1・3号住居址・遺構外出土石器
- P L 75 上木戸遺跡 106・108・109・115号住居址 P L 109 吉田向井遺跡 4・8・31号住居址
- P L 76 上木戸遺跡 5・9・14・29・40・43・49号土壙 P L 110 吉田向井遺跡 32・33号住居址、58号土壙
- P L 77 上木戸遺跡 5・8・17号住居址出土土器 P L 111 吉田向井遺跡 44・45号住居址、1号建物址、1号溝址
- P L 78 上木戸遺跡 20・31号住居址出土土器 P L 112 吉田向井遺跡 2号建物址、1号竪穴状遺構、6・77・78・112号土壙
- P L 79 上木戸遺跡 32・34・37号住居址出土土器 P L 113 吉田向井遺跡 32・43・125・150・172～175号土壙
- P L 80 上木戸遺跡 101・102・104号住居址出土土器 P L 114 吉田向井遺跡 33・37・46・47・55・203・317号土壙
- P L 81 上木戸遺跡 104・105号住居址出土土器 P L 115 吉田向井遺跡 36・42号土壙
- P L 82 上木戸遺跡 105～108号住居址出土土器 P L 116 吉田向井遺跡 2・4・5・7・8・10・31～33号住居址出土焼物
- P L 83 上木戸遺跡 110・113号住居址出土土器 P L 117 吉田向井遺跡 33・41・43～46号住居址・33・36・37・95・317号土壙・遺構外出土焼物
- P L 84 上木戸遺跡 114号住居址・16号土壙出土土器、1号屋外埋甕、17・34号住居址・遺構外出土土偶 P L 118 吉田向井遺跡 遺構外出土中・近世焼物
- P L 85 上木戸遺跡 遺構外出土土製品、5・8・17・18・20・31・32・34号住居址出土石器 P L 119 吉田向井遺跡 45住居址出土墨書土器、174号土壙出土和鏡、10号住居址出土刀装具、住居址・土壙出土銭貨
- P L 86 上木戸遺跡 35・36・38・39・101・102・104・105号住居址出土石器 P L 120 吉田向井遺跡 鉄製品
- P L 87 上木戸遺跡 106～109・112・114・115号住居址、遺構外出土石器
- P L 88 上木戸遺跡 遺構外出土石器
- P L 89 上木戸遺跡 5・8・17・18・20・31・32号住居址出土石器
- P L 90 上木戸遺跡 34・38・102・104・106号住居址出土石器
- P L 91 上木戸遺跡 105・107・109・110・112・114・116号住居址出土石器
- P L 92 上木戸遺跡 1・3・4・6号住居址
- P L 93 上木戸遺跡 6・7・9号住居址
- P L 94 上木戸遺跡 9・11号住居址遺物出土状況
- P L 95 上木戸遺跡 11～15・19号住居址
- P L 96 上木戸遺跡 15・16号住居址、1号溝址
- P L 97 上木戸遺跡 2号住居址、2・101号溝址
- P L 98 上木戸遺跡 4・6・7・9号住居址出土土器
- P L 99 上木戸遺跡 9・11・15・16号住居址出土土器
- P L 100 上木戸遺跡 2・101号溝址出土土器
- P L 101 上木戸遺跡 弥生時代土器、土製品、鉄鏃、石庖丁、砥石
- P L 102 千本原遺跡 トレンチ調査、高田遺跡 遠景、

第1章 序 説

第1節 調査の契約

1 発掘調査委託契約

高速自動車道用地内にある埋蔵文化財の発掘調査については、「日本道路公団の建設事業等工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」に準じて実施されている。それによれば、日本道路公団(以下「公団」という)は事業施行前に県教育委員会(以下「県教委」という)の意見を聴取の上、文化庁との間で保護協議し、その結果、記録保存と決定し発掘調査が必要となった場合、公団は県教委に委託して調査を実施することが決定されている。長野県の場合、県独自の発掘調査体制や機関がまだ設置されていないので、公団と県教委の委託契約後、あらためて(財)長野県埋蔵文化財センター(以下「埋文センター」という)に県教委が再委託する方式がとられている。

中央自動車道長野線(以下「長野線」という)は昭和57年3月の起工式から岡谷市内で本格的工事が施行された。そこで県教委も同年4月から長野線の事業に対応すべく、埋文センターを発足させた。この結果、公団→県教委→埋文センターという委託契約図式ができあがり、以降の調査が実施されることになった。この際取り交わされる契約書及び計画書の書式は、前書「岡谷市内」分に掲載してあるので省略し、以下塩尻市関係分が開始された昭和58年度以降の年度別契約一覧表を掲げておく。

(次ページに続く)

年度	No.	遺 跡 名	現況	発掘調査面積	合 計	契約金額	備 考
昭和58年度	1～4	岡谷市中島A他3遺跡		27,800㎡	27,800㎡	142,516千円	岡谷市未買収分と差しかえ
	5	塩尻市北山遺跡		520㎡	1,380㎡		
	6	〃 御堂垣外遺跡		860㎡			
昭和59年度	1～4	岡谷市中島A他3遺跡		8,460㎡	8,460㎡	316,426千円	調査方法を城址対応から集落遺跡対応へ変更 買収問題で調査期間短縮
	5	塩尻市 青木沢遺跡		380㎡	59,004㎡		
	6	〃 青木沢東遺跡		84㎡			
	7	〃 八窪遺跡		5,060㎡			
	8	〃 大原遺跡		25,800㎡			
	9	〃 栗木沢遺跡		3,710㎡			
	10	〃 ヨケ遺跡		1,490㎡			
	11	〃 樋口遺跡		2,900㎡			
	12	〃 高山城跡		4,180㎡			
	13	〃 吉田川西遺跡		15,400㎡			
	14～15	松本市神戸他1遺跡		630㎡			

表1 中央自動車道長野線埋蔵文化財調査契約年度別一覧表1

(前ページより続く)

年度	No.	遺 跡 名	現況	発掘調査面積	合 計	契約金額	備 考
昭和 60 年 度	1	塩尻市竜神遺跡		12,200m ²	}	}	当初面積より増加
	2	〃 竜神平遺跡		8,000m ²			
	3	〃 山の神遺跡		14,800m ²	}	}	〃
	4	〃 中原遺跡		21,500m ²			
	5	〃 犬原遺跡		7,500m ²	}	}	当初面積より増加
	6	〃 上木戸遺跡		3,250m ²			
	7	〃 千本原遺跡		4,660m ²	}	985,586 千円	} 当初予定なく年度追加 } 残件部分次年度へ
	8	〃 高田遺跡		4,700m ²			
	9	〃 吉田向井遺跡		5,160m ²	}	}	
	10	〃 吉田川西遺跡		9,700m ²			
	11~19	松本市神戸他8遺跡		149,665m ²	149,665m ²	}	
	20	豊科町上手木戸遺跡		1,200m ²	1,200m ²		
昭和 61 年 度	1	塩尻市吉田向井遺跡		500m	500m ²	}	
	2~8	松本市下神他6遺跡		124,340m ²	124,340m ²		
	9	豊科町上手木戸遺跡		2,000m ²	2,000m ²	}	752,900 千円
	報告書 整理 作業 作成	岡谷市大久保B他8遺跡		48,930m ²	48,930m ²		
		松本市神戸他2遺跡		59,200m ²	59,200m ²		
		塩尻市吉田川西遺跡		25,100m ²	} 152,354m ²		
塩尻市北山他19遺跡		127,254m ²					
昭和 62 年 度	1	松本市北中遺跡		895m ²	895m ²	}	
	2	明科町北村遺跡		21,000m ²	21,000m ²		
	3~5	麻績村野口他2遺跡		11,380m ²	11,380m ²	}	477,745 千円
	報告書 整理 作業 作成	松本市神戸他10遺跡		279,630m ²	279,630m ²		
		豊科町上手木戸遺跡		3,200m ²	3,200m ²		
		塩尻市北山他19遺跡		127,254m ²	} 152,354m ²		
	〃 吉田川西遺跡		25,100m ²				

表2 中央自動車道長野線埋蔵文化財調査契約年度別一覧表2

なお、県教委と埋文センター間の契約については、事業開始後諸事情によりその契約内容に変更の生ずる場合が多く、年度途中における「契約変更」を通してその適正化を図ってきており、61年度まではその確定数字、62年度についてはまだ確定数字でなく多少の変更もありうる。

また、年次によっては発掘・整理両作業の区分が厳密にできない場合もあり、更に調査が2市町村上にあたり、2年次以上継続するときもあって、市町村別に予算配分を明示できないので、上表では年度別に一括し塩尻市分についてのみゴシックで表示した。

以上のように塩尻市内での調査は20遺跡、発掘面積合計150,974m²、発掘調査期間は足かけ4年間に及び、そのうち、次回刊行の吉田川西遺跡25,100m²を除く19遺跡は、整理作業を含む報告書刊行までに5年間を要した。

2 契約対象遺跡と契約業務の経過

塩尻市内の中央道長野線建設に係わる埋蔵文化財の発掘調査事業は、当初19遺跡、約140,000㎡を予定していたが、用地買収の遅れに加えて調査面積の拡大する遺跡もあり、各年度ともしばしば契約が変更された。その間の経緯については、記録すべき点もあるので、年度別にその概要を記しておきたい。

昭和58年度は、年度早々より塩尻市内の調査が可能であるとの情報もあったが、直前になっても見通しが立たないことから当初計画より除外し、岡谷市内6遺跡についてのみ契約を結んだ。しかし、岡谷市内においても用地の買収交渉が進展しなかったり、調査期間延長が必至の遺跡もあって、契約面積の消化や調査体制の編成に支障が生ずることとなった。一方、塩尻市内の用地買収が地域によっては急速に進み、とくに国有地にかかる大原遺跡と柿沢地区の北山、御堂垣外2遺跡が調査可能になり、公団、県教委が協議の上契約を結び、結果的には登記に問題があった大原遺跡を除き、残る2遺跡の調査を10月より開始した。

翌昭和59年度になると、鉢伏山麓南部から片丘・広丘地区にかけて分布する9遺跡、79,000㎡を調査対象として計画を立てた。しかし、用地買収が各地で遅れ、たびたび計画変更せざるを得ない事態に至った。例えば、最も重要視されていた吉田川西遺跡は予定していた4月からの調査ができず、8月になってようやく可能となったものの大幅に次年度へずれこむこととなった。一方では、新発見の青木沢東遺跡が追加された。これは、工事が始まり、表土の削平された現地で土器片が表採されたことから、公団、県教委、塩尻市教育委員会の三者が協議を行った結果、調査を行うことが決定したものである。なお、高山城跡は中世城址と認定して調査計画を立てたが、学識経験者の指導によって城跡ではないことが判明したので、城跡を対象とした調査法から一般集落を対象とした調査法に変更した。

昭和60年度は塩尻市内の調査の最終年度にあたり、新たに松本市内への進展も加わって調査面積は一挙に3倍の約250,000㎡に増すという非常事態となった。こうした状況下にあっても、遺跡調査に係わる用地の一部は買収交渉が依然として好転せず、例年以上に関係各機関との協議が必要となるなど、調査側の負担は一向に軽減されなかった。

塩尻市内においては、当初計画にあった広丘地区の千本原、高田、吉田向井の3遺跡を除外せざるを得なくなり、全体計画の一部手直しを行うなどその対応策に苦慮したが、関係機関の尽力により8月以降一部を除いて調査可能となり、急拠契約変更の手続きがとられた。一方、既定の調査対象面積も、上木戸遺跡のように家屋移転時期の関係から減少せざるを得ない場合や、逆に竜神平・山の神・上木戸遺跡のように、4月早々用地内立入りが許可されて事前の踏査を実施したところ遺跡範囲の拡大が判明し、契約の一部変更を行った場合があり、その都度公団、県教委による協議を経て懸案解決に当たった。そうした中で、前年度大幅に調査面積を残した吉田川西遺跡は、予想をはるかにこえる豊富な内容をもつ遺跡であったことから12月中旬まで悪条件をおしての継続調査となってしまった。なお、60年度で塩尻市内全遺跡の調査終了をめざしていたが、吉田向井遺跡のみ家屋移転の遅れから一部が61年度へ繰り延べになり、翌年4月と11月の2度に分けて調査を実施し、これをもって完了となった。

昭和58年度から61年度まで4年間にわたる調査期間を省みると、用地買収の遅れが少なからず調査に支障をきたしたこと、また、埋蔵文化財に係わる事前の分布・確認調査段階の正確さ、迅速さについても大いに意を用いなければならず、今後、これらの問題解決への努力がより一層望まれる。

第3節 調査の方法

1 発掘調査の方法

(1) 調査方針

当埋蔵文化財センターの受託事業が広範囲を対象とし、しかも継続的な調査となることが予想されたので、発足当初より、調査にあたっては一定の方針に従い共通した方法を取る必要があるとの認識に立って「埋文センター発掘調査の方針と手順」の明文化を検討してきた。塩尻地区の調査が実施された昭和59・60年度には、岡谷地区調査の経験を基にその成文化を進め、素案を完成したが、まだ十分なものとはいえず、実際の調査を通してさらに検討を重ねることとし、実際には状況に即して工夫し変更した。ここではその詳細について述べる余裕もないので、調査報告をまとめるに当たって必要な事項についてのみ記述しておきたい。

(2) 遺跡名称と記号

遺跡名は長野県教育委員会作成の遺跡台帳に記載されている名称とした。また、記録の便宜を図るために、大文字アルファベット3文字で表記される遺跡記号を与えた。3文字の1番目は県内を9地区に分けた地区記号、2・3番目は遺跡名の頭文字等から取った。例えば、青木沢東遺跡は、松本地区の地区記号のE、AOKIZAWAHIGASIのAとHを組み合わせてEAHとした。各種の記録や遺物の注記等は、この記号を用いている。各遺跡の記号は第3章各節で示す。

(3) トレンチ調査の方法と視点

調査対象となる遺跡は、契約以前に試掘調査が行われていない。したがって、トレンチ調査によって遺跡の性格を把握し、合わせて面的調査の範囲を決定した。

トレンチは地形を考慮して設定し、地層、遺構の有無や遺物包含層の状況を観察した。地層の分層には地質学専攻の調査研究員が加わり、層位学的区分を優先し土壌学的区分を援用した。層序はトレンチ相互を比較し、同一堆積環境ごとに層名称を与え、層の面的広がりを押さえ、地形形成過程の復元も試みた。

(4) 面的調査

面的調査は層別を実施した。表土、耕作土の排除に限っていくつかの遺跡で重機(バックホー、ブルドーザー)を用いたが、その後の作業は人手によった。なお、面的調査の開始と共にグリッドを設定し、遺物の取り上げ等に利用した。

(5) 遺構の調査

遺構や遺物ブロックの調査は、一人ないしは数名の調査研究員が掘り下げから記録まで一貫して担当し、全体との調整は責任者である班長が行った。遺構の掘り下げに当たっては、埋土を観察して切り合い関係や埋没状況を把握するため、先行トレンチの設定を原則とした。遺構名称は主として記録等の便を図るため記号を用い、遺構番号は時代に関係なく種類ごと検出順に付けた。しかし、検出時に決定することから結果的に適合しない場合があつて、やむなく変更した例もある。その場合、旧番号は欠番にした。使用した記号は、SB(竪穴住居址)、SC(道跡)、SD(溝址)、SF(火床、炉址)、SH(配石址、集石址)、SK(土壇)、ST(掘立柱建物址)、SX(その他、不明)であり、遺構以外ではNR(自然流路)がある。

(6) 遺物の取り上げ

包含層出土遺物は一般的には層位別、グリッド別に取り上げたが、状況に応じて遺物1点ごとに出土地点の座標、標高、層位を記録した。遺構や遺物集中ブロック出土遺物については、1点ごと座標と標高を記録して取り上げることを基本としたが、場合によって省略し、埋土出土と床面出土のみ区別した。

(7) その他

必要に応じて当埋文センター所属の全調査研究員による検討会を開いたり、専門家や学識経験者を招聘して指導を受け、調査に遺漏なきを期した。また、発掘調査中は週一回調査速報を作成して配付し、作業員や地元の方々の理解と協力が得られるよう努めた。

2 記録の方法

(1) 測 量

ア 測量の原則

測量は国土座標のメッシュに従うことを原則とした。具体的には、座標値の明らかな日本道路公団の工事用杭を基準点とし、複数の工事用杭の座標値から座標北を算出して座標メッシュのX軸に平行する基準線を設定した。なお、塩尻地区は、国土座標第Ⅷ測量系に属している。

標高については、標高の明らかな日本道路公団工事用杭を基準とした。

イ 大地区及びグリッドの設定

基準点を基点に50mメッシュを設定して大地区と呼び、北西から南東に向かってA、B、C・・・と命名した。大地区内はさらに2mメッシュに区切ってグリッドとし、北西隅を基点に東へA～Y、南へ1～25を目盛り、両者を組み合わせて番号とした。なお、遺跡が連続している山の神・中原・犬原・上木戸遺跡は同一の基準点を用いて大地区設定し、A～Yの25大地区をまとめてI、II、III・・・大大地区とした。

ところで、昭和59年度までは調査研究員が光波測距儀を使って行っていた大地区設定であったが、昭和60年度は調査迅速化のため測量業者に委託した。

ウ 測量の方法

遺構の測量は遣り方によることを原則としたが、簡易遣り方(割り付け)を採用することが多かった。また、一部では平板測量を用いた。地形については、昭和59年度は調査研究員がトラバース測量を行ったが、昭和60年度は業者に写真測量を委託した。発掘範囲のトレンチの位置、土層図のポイントは光波測距儀を用いて計測、作図した。

縮尺は、土層及び住居址等の大形遺構は20分の1、土壌や住居址付属施設は10分の1を原則とした。地形図は状況に応じて決めた。

(2) 写 真

撮影にはマミヤRB6×7を主に使用し、ニコンFM2を併用した。ともにモノクロネガとカラーライドを撮影した。遺跡の景観や遺構の撮影は、すべて調査研究員が行った。撮影後の現像とベタ焼きは業者に委託した。

(3) その他

発掘調査の経過は調査日誌に記録し、遺構調査時の所見は実測図ないしは遺構カードに記入した。

3 整理の方法

(1) 発掘記録の整理

発掘調査終了後の整理作業は記録類の整理を最優先させ、実測図、遺構カード、野帳等から遺構単位に記録を集め、誤りを訂正し、最終所見を加える作業は同一年度内に終了させた。実測図、遺構カードは台帳を作成して散逸防止を図った。写真は、発掘調査中よりモノクロネガはネガポジアルバムに、カラーライドはスライドファイルに整理し、遺構名等を記録した。

(2) 遺物の整理と記録

出土遺物の整理は、調査研究員の指導下に作業員が行った。注記は、遺跡名、遺構名またはグリッド番号、出土層位、取り上げナンバーを記号または略号で記入した。遺物の記録は、図化の一部を業者委託による写真測図によったほか拓本を作業員に任せた以外は調査研究員が行った。遺物は観察、分類の上選択して図化し、縄文土器など業者に写真実測を委託した場合でも、調査研究員または作業員が必ず点検、補訂した。遺物写真はマミヤRB6×7を使用して調査研究員が撮影した。

(3) 記録類と遺物の保管

発掘記録は実測図と写真に集約し、規則的に配列して検索に備えた。遺物の記録も同様である。遺物は、長期的に収蔵可能な施設をもたないため、テンバコに仮収納した。金属製品は当埋文センターで永久または応急の保存処理を施した。

4 指導・助言

調査に当たって多くの方々から指導、助言を賜った。具体的には、各遺跡の地質に関する所見、発掘調査や遺物整理の方法等に係わる指導や助言、遺物や人骨の鑑定等である。それらの内容の一部は本文中で報告したが、すべてを詳細に報告することもできないので、失礼ではあるがここに御芳名だけを記し、感謝の意を表したい。

会田 進、石黒立人、伊東直登、岩野見司、鶴飼満男、宇野隆夫、梅村 弘、大参義一、片丘 肇、兼康保明、上代純一、神村 透、木下平八郎、桐原 健、小池 孝、小林公明、小林康男、斉藤孝正、笹沢浩、佐藤由紀夫、島田哲男、白石太一郎、高桑俊雄、高橋信明、高林重水、高見俊樹、田口昭二、田中邦雄、田中 琢、鳥羽嘉彦、直井雅尚、長崎元広、仲野泰裕、奈良国立文化財研究所、檜崎彰一、西沢寿晃、丹羽 博、橋本裕行、花岡 弘、前川 要、前角和夫、松下テレデザインジャパン社、松田真一、水野正好、宮下健司、武藤雄六、森田 勉、守矢昌文、山本暉久、米山一政。

(50音順、敬称略)

5 報告書編集の方法

(1) 編集方針

本書は、当埋文センター刊行の『中央道長野線報告書1－岡谷市内－』で掲げた編集方針をそのまま受け継いでいる。

- i 各遺跡の評価を下すまでを報告者の責任と考える。
- ii 遺跡、遺構、遺物の検出状況を重視した組み立て方とする。
- iii 塩尻地区(一部は岡谷地区も含む)全体が時期別に通観できるような分担体制とする。
- iv 遺物はできる限り分析して掲載し、煩雑な個別データの羅列を避ける。

(2) 遺構の記述

住居址については下記のように観点を決めて記述した。

検出状況：検出した位置、他の遺構との重複関係、発掘の経過。

規模・形状：平面形及び規模(長軸×単軸)、炉やカマドの位置から推定した主軸の方向(G、Nを0°とする)。

埋土：竖穴の埋没状況について土層観察図を補足。

床面・壁：床のつくり、堅さ。周溝の有無。壁の傾きや高さ。

炉・カマド：位置と形状の特徴。

柱穴：本数及び位置。

その他の施設：貯蔵穴、埋甕などについて位置と形状。

遺物の出土状況：住居跡に関係する遺物の出土位置と垂直分布。

遺物：出土遺物の器種と特徴。

時期：住居址の特徴や出土遺物から推定した遺構の時期。

(3) 土器・焼物の記述

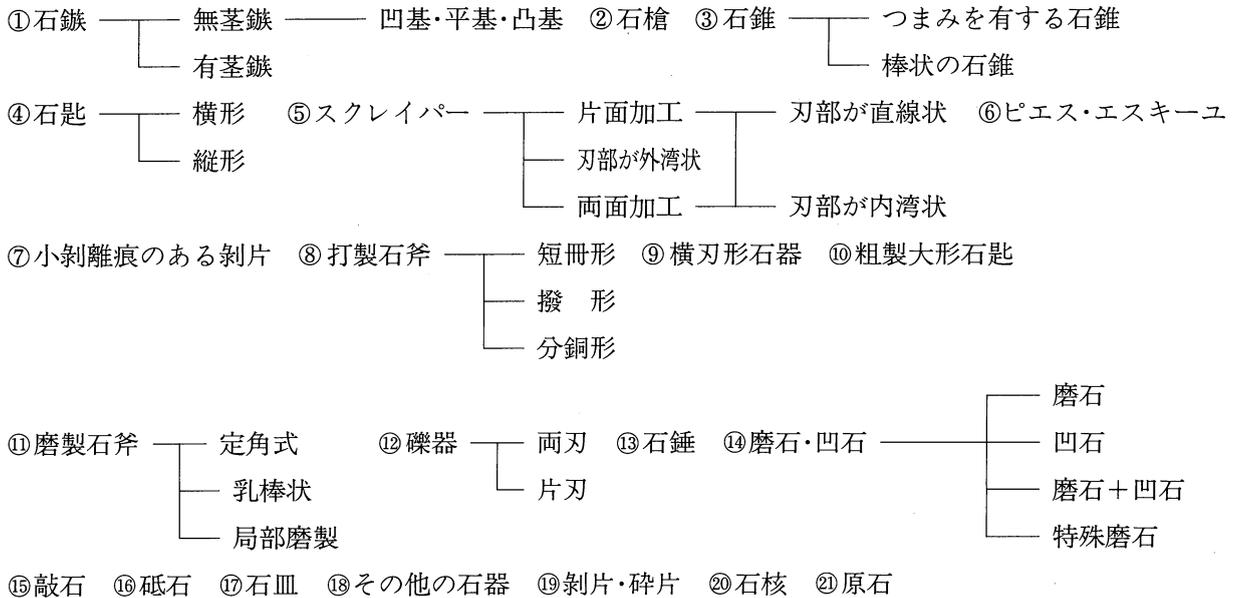
土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器等が併用される平安時代以降については、土器、陶器を総称して「焼物」とした。

出土した土器や焼物のうち、比較的まとまった資料については独自に分類し、分析を試みた。具体的には、①縄文時代早期前半押型文土器、②同早期後半～末葉貝殻条痕文系土器、③同中期後半の土器、④同後期中葉の土器、⑤弥生時代後期後半の土器、⑥平安時代の焼物を対象とし、①②④は第3章第3節、③⑤は同第16節、⑥は同第19節に分類基準を掲載し、他の節においてもこの分類に従って記述した。独自の分類を行わなかったその他の土器は、一般的な型式名称を用いて記述した。

土器、焼物の分類に当たっては、岡谷市梨久保遺跡の分析方法を参考にしている〔三上徹也1986〕。すなわち、各時期とも「群」、「類」、「種」という概念を採用し、「群」は各時期にみられる系統的なまとまり、「類」は「群」の中の時間的なまとまり、「種」は「類」の中にみられるさらに小さなまとまりで、微妙な時間差あるいは器種のバリエーションを表している。しかし、①～⑥はそれぞれ独自の研究史を背景にもち、時期的な特性から分析の方法もわずかず異なっており、必ずしも統一できていない。この概念から大きく外れるような場合は、あらためて概念規定から記述することを義務づけているので、それを参照されたい。

(4) 石器の記述

縄文時代の石器及び石片は、原則として以下のような分類に従って配列し、記述した。



参考文献

- 三上徹也 1986 「土器の分類と編年対比」『梨久保遺跡』 岡谷市教育委員会
 百瀬長秀 1987 「調査の方法」『中央道長野線報告書1-岡谷市内-』 長野県埋文センター

第2章 環 境

第1節 地理的環境

1 松本盆地の概観

(1) 位 置

松本盆地は、長野県の西部を占め、面積480km²。松本市を中心に3市11町村、約40万の人々が生活舞台とする。東方は筑摩山地の保福寺峠を越えて上田盆地に、北東方は聖山山塊を越えて長野盆地に通ずる。北方は姫川の谷を下って日本海に、南方は太平洋と日本海の分水嶺をなす塩嶺山塊を経て諏訪盆地、伊那盆地に通じ、奈良井川谷を溯行すれば木曾谷に至る。盆地からいずれに向かうにしても、標高1000mをこえる峠を通過しなければならず、古くから往来には難渋した内陸盆地である。

(2) 地 形 (図1)

南の塩尻市から北の大町市まで南北約50km、東西は最も広い所で約13kmの紡錘形をなし、明科町を底辺に南と北へ次第に高さを増す播鉢状の盆地で、標高520m～750mを測る。奈良井川など南部の河川は松本市街地の西方に集まり、梓川と合流して犀川となる。高瀬川など北部の河川は明科町付近で合流する。この付近に湧水地帯を形成し、山間地を抜けて長野盆地に流下する。

この盆地は、わが国で最も高峻な北アルプスを後背地にもち、また、糸魚川―静岡地質構造線(以下糸静線)など構造的な不連続もあるため、周辺山地から搬出される砂礫の量は膨大で、扇状地の発達が顕著である。一般的には、信州ロームの被覆する洪積扇状地が大部分を占める盆地南半の筑摩野と、沖積地の広がる盆地北半の安曇野に大別される。

ア 筑摩野

奈良井川、鎖川などのつくる扇状地は、塩尻市、朝日村、山形村、波田町にかけて分布し、主として乗鞍火山の活動に由来する波田ロームに厚く被覆され、河川による浸食を受けて数段の段丘を形成する。その上位面は波田面、森口面に対比される桔梗ヶ原や岩垂原などの更新統の段丘である。広大なこれらの段丘は、一般に水利が悪く、土質も粗い火山灰のため畑作地帯となっており、集落は比較的水に恵まれる段丘崖下や山麓沿いに立地する。

盆地東縁の鉢伏山地西麓には、東西2km、南北10kmにおよぶ丘陵が盆地に向かって6°ほどの傾きをもって広がり、標高700m～900mを測る。これは幾筋かの小河川がつくる合流扇状地で、河床からの比高2m～5mほどの舌状台地や、浅い空谷が発達する。小河川は、受水域がせまいうえ山裾線付近で伏流するため、流量は乏しい。全般的に地表は火山灰または扇状地礫層におおわれ、乏水性の地域と相まって土地利用度は低く、森林地帯が目立つ。集落は扇頂および扇端付近に立地する。

一方、段丘より下位には標高600m～700mを測る沖積低地が広がる。奈良井川などの河川はいずれも天井川の性質を有し、流域に歴史時代を通して洪水氾濫の跡を残す。それだけに土質に恵まれ水利も豊かで、松本市島立地区をはじめ古くから水田が開かれ、現在でも主要な米作地となっている。また、山麓と扇状地、扇状地と扇状地に挟まれた塩尻市平出などの低窪地は、水利に恵まれ、耕土も深く古くから開田が進み、周辺には集落の立地が目立っている。

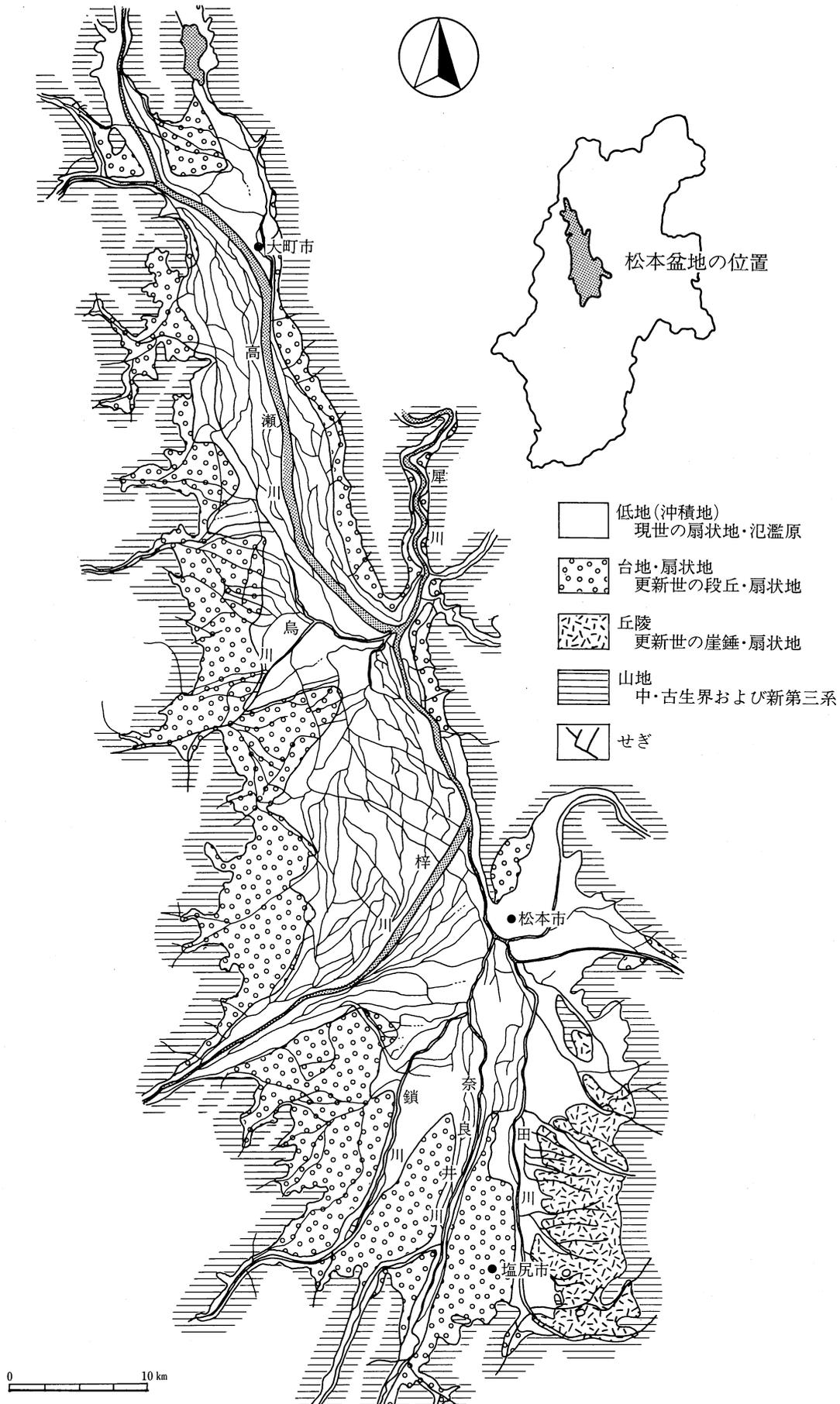


図1 松本盆地の地形区分と水系 (約1:2400)

イ 安曇野

安曇野を形成した主な河川は、梓川と高瀬川であり、その西縁には神戸原をはじめ扇状地の発達が著しい。高瀬川は1934年から20年間に年平均40cm河床を高めたといわれ、堆積作用の極めて旺盛な天井川の性質をもち、右岸は広い氾濫原となっている。一方、梓川は右岸に4段、左岸に3段の段丘面を形成しており、流路はしばしば変遷した跡を残す。とくに安曇野南部は平坦部に自然流を欠き、堰の掘削によって開田が可能となった地域である。

集落は一般的に扇端部や山麓沿いに立地し、殊に冬のアルプス風や季節風を避けて屋敷林に囲まれた農家が、散居性の集落を形成しているのが目立つ。

(3) 地質 (表1・2)

松本盆地の西側は北アルプスで、古期岩類からなる標高2500m~3000mの山々が屹立し、東側は中新統や石英閃緑岩からなる標高1500m~2000mの鈍頂山地である。この非対称的な山地に囲まれた盆地の中央を糸静線がほぼ南北に走り、この両側に平行して走る数本の断層と、斜行する北東方向または北西方向の断層が盆地の小地塊化を進め、構造を支配する。周囲の隆起と、相対的な中心部の沈降という造盆地運動

に関係して陥没し凹化した、「沈み行く盆地」といわれる構造盆地で、扇状地の発達、段丘の形成、浸食区から堆積区への変換など、その動きは顕著である。

1965年に行われた国際地球内部開発計画(UMP)の人工地震探査によると、「盆地の表層を構成する砂礫層の厚さは360mである。JR大糸線や東側の砂礫層下に、幅600mほどの破碎帯(糸静線)が存在する。日本最古の飛驒片麻岩が、盆地底下3000mの地下にもぐっている。」といわれ、盆地構造の複雑さを示している。堆積物の多くは後背地の地質を反映した砂礫で、地盤運動や河川の変遷などによって覆瓦状に厚

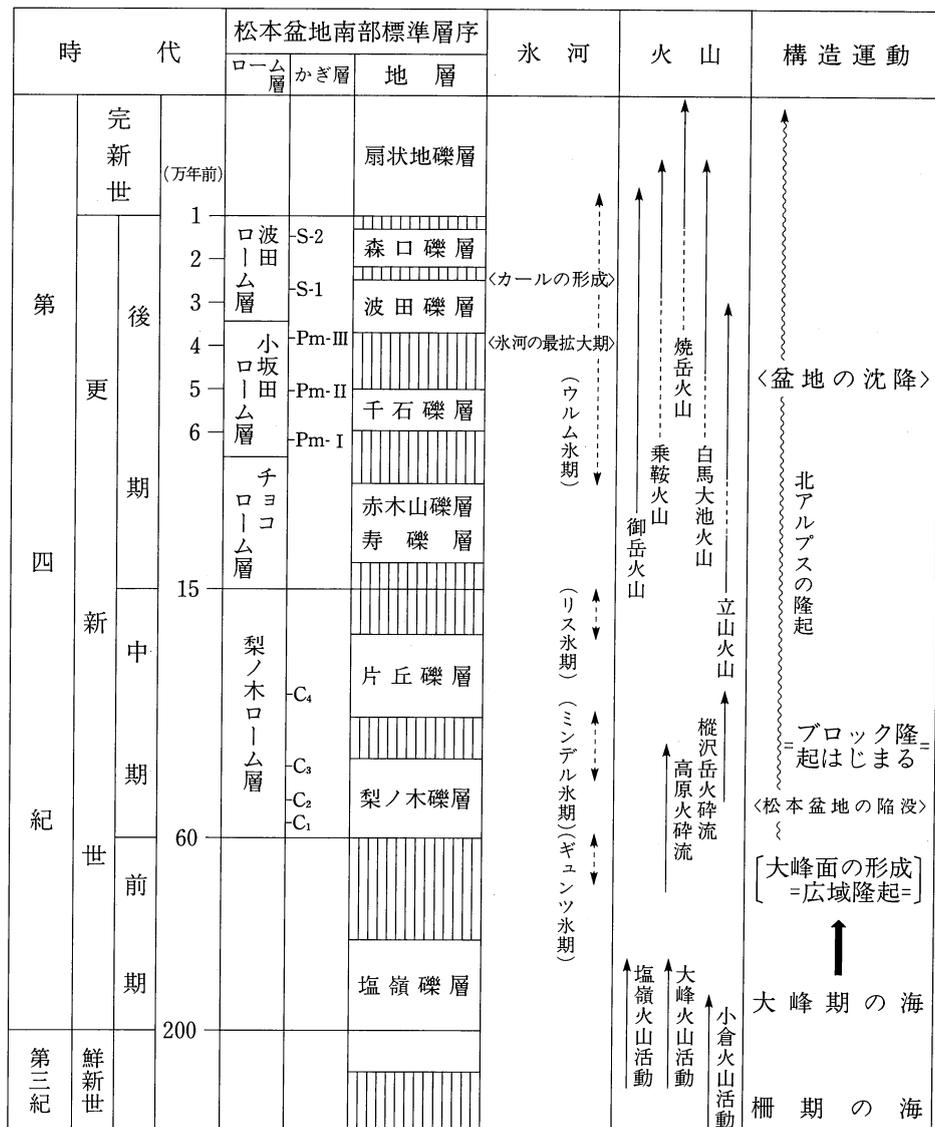


表1 松本盆地南部層序表 (『松本盆地の生いたちをさぐる』より引用)

く堆積する。このうち、上位の礫層は20m内外の厚さで砂利混じり粘土層に変わるが、この層は不透水層となって上位の礫層に表層水をもたらすので、盆地では深くても15m前後で安定した地下水面に到達する。深層水は一般的に30m~100mの深さである。

(4) 盆地の形成

盆地の形成は、約60万年前の更新世中期初頭までさかのぼり、その過程はおよそ、① 盆地の発生、② 盆地の埋め戻し、③ 段丘の形成、④ 沖積低地の形成という4過程に区分される。

① 盆地の発生 (60万年~30万年前)

更新世中期に入ると糸静線の両側に何本かの断層が生じ、隆起した北アルプス側では階段状の落ち込みが形成された。その後、筑摩山地が西側に断層を保って隆起し、これによって両山地の間は相対的に沈降して北部で2km、南部では4kmほどの幅の凹地帯が生まれた。当初は沼沢地的であったが、切首された先行河川が凹地帯を埋積するようになり、クリスタル・アッシュ(結晶火山灰)など火山降下物を挟む砂礫層が厚く堆積した。この堆積物は、塩尻市洗馬梨ノ木、松本市片丘のゴルフ場など盆地の縁の小高い丘陵に分布がみられる。

② 盆地の埋没 (30万年~5万年前)

造盆地運動が進行して陥没地域が拡大すると、後背地の最も広い梓川と高瀬川が主導性をもって盆地を埋積した。さらに、奈良井川が北流に転ずるとともに盆地の埋積に参加する河川も数を増して、盆地の埋め戻しは急激に進んだ。東縁の鉢伏山地山麓では、山地からの不揃いな亜角礫がさかんに供給され、ほぼ30mの厚さで丘陵一帯に堆積する。この礫層は盆地に向かって10°ほど傾いて、盆地底に沈む。

③ 段丘の形成 (5万年~1万年前)

小坂田ロームの降下後、最終氷期に入り、盆地は東縁にのびる断層の活動によって急激に沈降した。その結果、さらに激しく砂礫が運びこまれ、桔梗ヶ原台地などの基盤である波田礫層が堆積し、縁辺部では30m~50mの厚さを測る。その後、盆地側の隆起に伴う河川の回春があり、段丘面が形成される。これらの段丘面は塩尻市から朝日村、山形村、波田町に続く桔梗ヶ原、岩垂原、古見原など広域にわたり、波田ロームにおおわれている。

段丘面	田川		奈良井川				鎮川				梓川	
	右岸	左岸	右岸	左岸	右岸	左岸	右岸	左岸	右岸	左岸		
第1段丘面	▲横町面 750 690	●高出面 710 670	●桔梗ヶ原面 795 670	●本洗馬面 780 750	●西洗馬面 800 760	●古見原I面 850 670	●波田面 750 670	●八景山面 740 640				
第2段丘面	×五千石面 700 660	×野村面 665 640	▲郷原面 790 670	●岩垂面 780 655	●岩垂面 780 655	●古見原II面 840 800	●森口面 700 620					
第3段丘面		×吉田面 660 620	×太田面 725 660	▲今村面 700 650	▲今井面 780 650	×小野沢面 810 790	×上海渡面 710 660	×丸田面 680 610				
第4段丘面							×押出面 680 600	×岩岡面 680 600				

表2 松本盆地南部地域の段丘 (●ローム層被覆▲ローム層一部被覆×ローム層被覆なし)

④ 氾濫原の堆積 (1万年前~現在)

完新世に入って更新統の扇状地が離水し、扇端が急勾配をもって盆地に没した後、安曇野の主要部を占める丸田面、続いて松本市西方に広がる押出面や現河床に続く沖積面が形成された。梓川、奈良井川など

はこの面上を自由に流れ、現在の河川が最も活動をほしいままにした時代であった。その後、盆地の基盤運動によって沖積面の平坦化は進み、梓川右岸の島立扇状地では和田・新村地区の第一扇、島立地区の第二扇、島内地区の第三扇、最下流部付近の第四扇の順に北東方向への合成の跡を示している。また、高瀬川や犀川流域の標高540m以下の地域では、しばしば水害に見舞われる沈降区となっている。

松本盆地は現在も「沈み行く盆地」として、運動が継続中であると思われる。

2 調査遺跡付近の自然環境

(1) 位置

中央道長野線の通過する塩尻市東部は松本盆地の南東部に位置し、東側は筑摩山地に、南側は塩嶺山塊および木曾山脈に囲まれ、西は奈良井川に続く。山地を除いては標高600m～850mにおよぶ崖錐性または複合扇状地性の丘陵地や台地が広がり、犀川上流の田川水系に属する。気候は中央高地式に属し、気温の年較差25℃、年降水量は1050mm内外である。四季の変化は著しく、年間を通して太陽に恵まれた自然環境下にあるといえる。

(2) 地形地質 (図2～4)

一般的には、筑摩山地南部の西麓に広がる丘陵、盆地部の段丘、田川沿いの低地に3区分される。

ア 丘陵部

丘陵部は片丘丘陵と総称されており、沖積錐性あるいは扇状地性の小高い傾斜地である。

みどり湖畔～四沢川間：基底は片丘礫層およびチョコローム層をおおう赤木山礫層で、小坂田ロームの堆積後、浸食が進行して幾筋かの谷地形が形成された。四沢川の搬出した安山岩を主体とする角礫層は、そうした前地形を埋めて扇状地地形を形成し、その上に波田ロームの降下を受けたが、四沢川は地盤の隆起に相乗して流路を北方に転じたのである。

小坂田～竜神間：片丘丘陵の南端に位置し、栗木沢など谷の下刻が進むと、相対的に盆地に向かってのびる比高30m内外のやせ尾根が形成され、起伏の多い複雑な地形にしている。「U」字形をした谷底平地は水田に利用され、その尾根部を形成する堆積物は、後背地より供給された角礫と、火山灰質のマトリックスから構成され、小坂田ローム層またはその下位のチョコローム層に不整合に重なる。高山城跡付近では、古生層の石灰岩、千枚岩層が角礫層下に埋没し、角礫層の上面は波田ローム層によって被覆されている。

南熊井～北熊井間：山裾線から大沢川、松葉沢などいく筋かの小河川が形成した傾斜角7°前後の合流扇状地が広がる。小河川の流路変遷に伴う開析によった空谷地形が各地に残り、河床との比高が5m程度の角礫層からなる舌状台地地形が発達して、波田ローム層に被覆されている。小河川は集水域がせまく、また、扇頂部付近で伏流するため表流水は乏しいが、標高750m付近の遷急点や舌状台地崖などで湧水が見られる。

丘陵部を構成する角礫層は下限が小坂田ローム層のPm2・Pm1または下位のチョコローム層を削った不規則面に堆積し、上限は平坦に波田ローム層の被覆を受けていることから、最終氷期に入って周氷河作用がもたらしたものと思われる。すなわち、構造土が北アルプスでは2500m以上で形成されるのに対し、この地域の後背山地は500m～1000mも低い1650m～2000mで形成されている。したがって、最終氷期の寒冷化が進むにつれて森林限界高度が低下し、後背山地の西斜面では凍結破碎作用が働き多量の岩屑が生産され、それが山麓に運ばれて堆積した(ソリフラクション)。その岩屑は小河川によって下方に運ばれ、沖積錐または扇状地の原形が形成されたものと考えられる。

その後の微地形形成については、南熊井地区に属する竜神沢を埋める最下部の腐植土のC¹⁴年代測定値

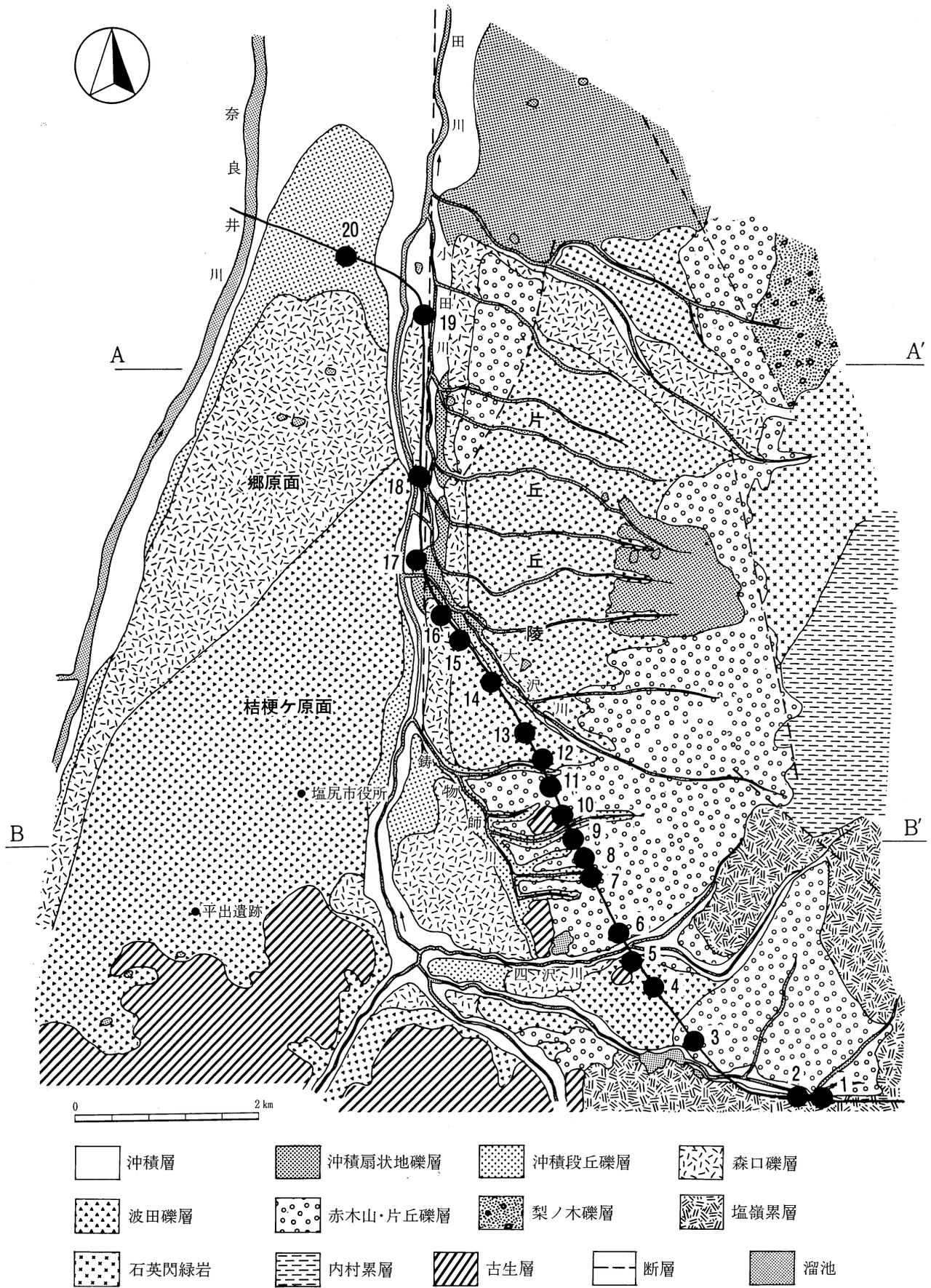


図2 塩尻市東部の地質図(約1:2700)

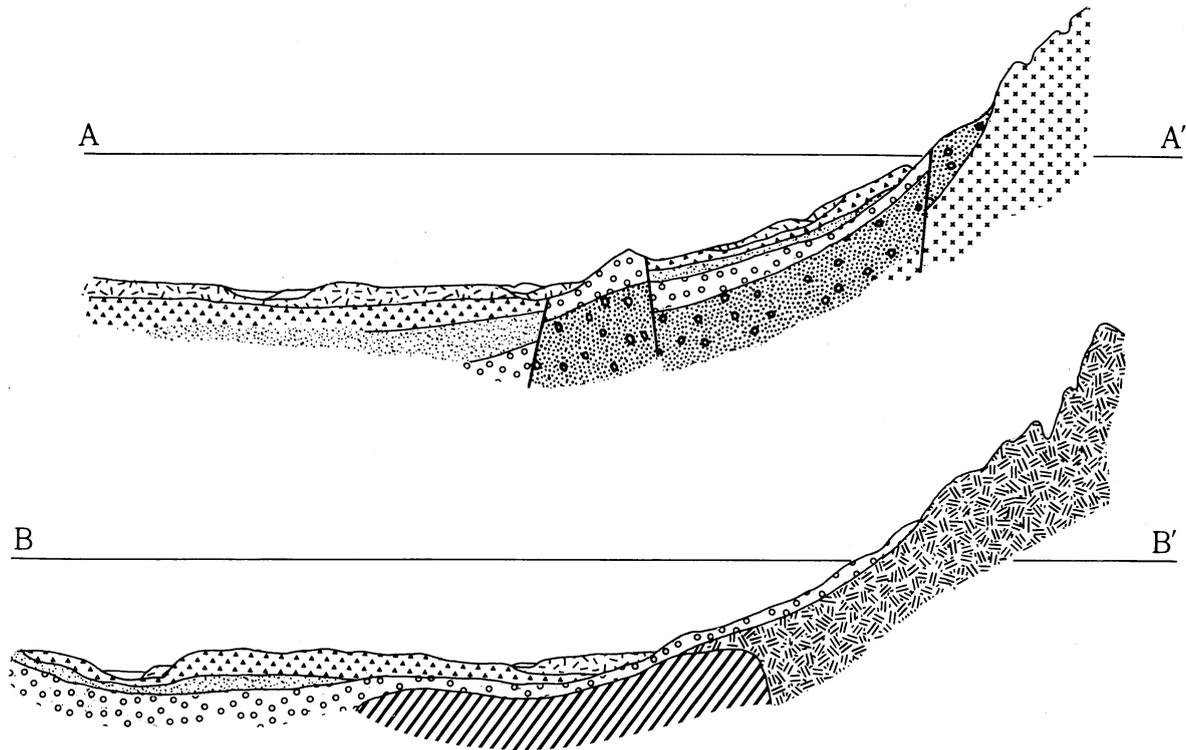


図3 塩尻市東部の地質断面図（約1：2700）

は 7540 ± 140 B. P.を示し、その上位に設けられた集石土壌中の炭片は 4850 ± 100 B. P.であったこと、大沢川扇状地を被覆するローム層上の腐植土層下位の C^{14} 年代測定値は 4730 ± 150 B. P.を示していることから、波田ロームの降下終了後から縄文時代早期までの間に完成されたものと考えられる(註1)。

イ 台地

台地地域は桔梗ヶ原や広丘と呼ばれ、塩尻市宗賀洗馬付近を扇頂として松本市芳川小屋地籍まで達する奈良井川の形成した扇状地で、田川と奈良井川にはさまれる。この扇状地は奈良井川沿いで現河川の浸食を受け、三段の河岸段丘が形成されている。河床からの比高は南で30m～40mと高く、次第に高さを減じて田川沿いでは5mほどである。第一段丘は塩尻市街地をのせる桔梗ヶ原面で九里巾の段丘崖で境される。基底は淘汰の良い中～大礫からなる円礫層で、マトリックスは中粒砂で充填されており、厚い波田ローム層に被覆されている。南方は古生層の山麓に連なって、扇側部に平出、床尾の低窪地をつくっている。一般的に透水性の強い地域のため、地下水位が低く水利が悪い。とくに中央部は乏水域で古くから森林原野が広がり、開発されたのは明治以降であった。第二段丘は主として広丘地籍に展開する郷原面である。この面は桔梗ヶ原面の扇状地礫層が削剝され、終期波田ロームが降下後、ローム層の大部分は削られてその上位に1mほどの砂礫土が堆積した段丘面である。北東方向に傾きをもち、松本市村井地籍の東方で沖積面下に没する。九里巾の段丘崖下に所在する野村地籍では、桔梗ヶ原段丘の涵養水が湧出しており、地下水が浅いこともあって水田地が開けている。また、北方の吉田川西遺跡付近では地下水がもたらす鉄分によって褐鉄鉱が層状に生成され、基盤礫間を膠結状に充填して一面に赤褐色を呈している。第三段丘は、郷原面の段丘崖下を奈良井川沿いに断続して北方へ伸びる。吉田地籍から松本市芳川小屋にかけては小崖をつくって広がり、やがて沖積面下に没する。

ウ 田川沿いの低地部

この地域は沖積層で構成される。旧塩尻宿や堀の内などの集落をのせる田川扇状地をはさんで、東側の

(註1) 波田ローム層の堆積時代は、約28000年～10000年前である。波田ローム層はこの地域の丘陵や台地の表層を被覆しており、洪積面と沖積面を分ける示標となっている。

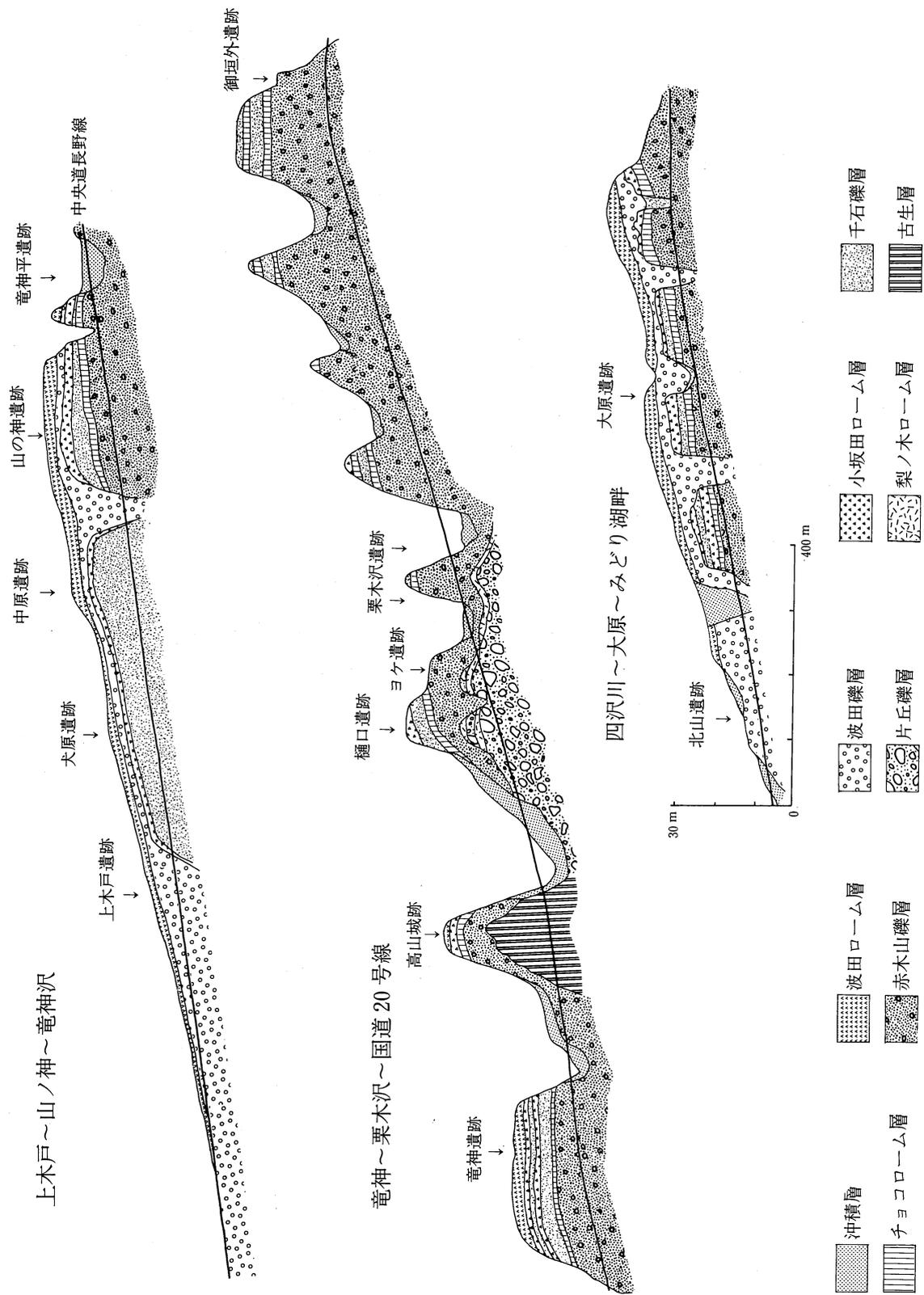


図4 塩尻地区の路線に沿う地質断面図 (水平1 : 12500、垂直1 : 2500)

鑄物師川沿いの低窪地や丘陵の浅谷部、また、西方寄りを流れる田川、四沢川などのつくる狭長な低窪地および田川中流域の小氾濫原が含まれる。

塩尻市金井・上西条地籍では、河川の下刻によって更新統の扇状地が開析され、半島状地形が形成されている。また、中西条地籍では田川、四沢川、権現川などが集まる低窪地となり、塩尻橋付近でほとんど落差をもたず桔梗ヶ原面に接する。一方、棧敷地籍以北の田川右岸では、鑄物師川、大沢川などのつくる扇状地を切って二段の沖積段丘を形成している。左岸の桔梗ヶ原面側には明瞭なもののみられない。

北熊井地籍から吉田向井地籍を経て松本市寿小池地籍にかけては、小田川に沿った低窪地がのびる。これは田川の旧河道に当たる低湿地帯である。広丘野村の高田地籍では、奈良井川系の中礫～大礫からなる基底礫層に沼沢性堆積物が重なる。最下部の砂質粘性土に混じる腐植片のC¹⁴年代測定値は、1480±80あるいは1150±80 B. P. を示して須恵器甕片の出土をみている。このことは、歴史時代以降、田川が河道を西に移したことを意味しており、千本原付近の新しい扇状地堆積物によってもうかがえるように、これには大沢川などの強い押し出しが影響したものと思われる。また、吉田向井地籍をのせる島状地域は、田川の穿入によって郷原段丘から切り離され、東西両側に小崖をもつ微高地帯となったものであろう。

参考文献

- 太田守雄他 1957 「地形・地質」 『東筑摩郡・松本市誌』第一巻自然 東筑摩郡・松本市郷土資料編纂会
 小林国雄・平林照雄 1955 「松本盆地周辺のいわゆる「山砂利」について」 『地質学雑誌』61-712 日本地質学会
 小林国雄 1957 『フォッサマグナ地域の構造発達史』地学団体研究会松本支部
 小林国雄 1961 「いわゆる信州ローム」 『地質学雑誌』67-784 日本地質学会
 小林国雄 1967 「松本盆地ができるまで」 『松本と安曇の話』安曇郷土誌料刊行会
 酒井潤一 1982 「松本盆地およびその周辺の第四紀地質」 『松本平地盤図』長野県建築士会松本支部
 自然観察資料集作成委員会 1983 『松本盆地の生いたちをさぐる』松本市・東筑摩塩尻・南安曇・北安曇教育会
 関 全寿 1982 「自然」 『明科町史』上巻 明科町史刊行会
 田中邦雄・関 全寿 1966 「松本市北方の第三紀P₁₁」 『信大教育学部研究論集』18
 等々力七郎他 1956 「地形・地質」 『南安曇郡誌』第1巻 南安曇郡誌改訂編纂会
 長野県地学会 1957 『20万分の1長野県地質図』 内外地図株式会社
 長野県埋文センター 1986 『長野県埋文センター年報』2
 長野県埋文センター 1987 『長野県埋文センター年報』3
 平林照雄他 1971 「地形・地質」 『北安曇郡誌 自然編』 北安曇郡誌編纂会
 松本盆地団体研究グループ 1977 「松本盆地の第四紀地質 —松本盆地の形成過程に関する研究(3)—」 『地質学論集』14 日本地質学会
 山田哲雄 1968 「松本市北方の地震探査によって探られた糸魚川—静岡線」 『フォッサ・マグナ』地学団体研究会

第2節 歴史的環境

中央道長野線が通過する塩尻市東部の田川に沿った地域は、松本平にあってひとときわ遺跡の分布密度が高いこと、先土器時代から奈良・平安時代に至る各時代の遺跡が連綿として営まれていることで知られている。それは、前節で触れたような地形的要因によるところが大きいのが、諏訪盆地や伊那谷と峠ひとつを隔てて接しているという地理的な要因も無視できない。即ち、松本平ではいつの時代にあっても新しい文化は東あるいは南から波及してきたと考えられるが、その真っ先にたどり着くいわば玄関口に当たるのがこの地域なのである。

近年、中央道長野線建設がきっかけとなって、この地域では圃場整備や道路建設が盛んに行われ、それに伴って埋蔵文化財調査も件数が急激に増加し、次々に新しい知見を加えている。

先土器時代の遺物出土地点は松本平全域を見渡しても20箇所程を数えるに過ぎず、しかもその多くは単独出土であり、厳密な意味で遺跡とはいいがたいものを多く含んでいる。そうした中で、まとまった質と量の石器を出土した遺跡はこの地域に集中しており、高出遺跡群の北ノ原遺跡、柿沢遺跡、青木沢遺跡がある。これらは尖頭器、ナイフ形石器、スクレイパー等を出土し、田川またはその支流に面した段丘の先端に立地する傾向がみられる。

縄文時代の最も古い時期は今のところ早期前半押型文期とみられ、樋沢式の標識遺跡である樋沢遺跡、住居址が検出された向陽台遺跡のほか多量の土器を出土した福沢遺跡があり、今回これに八窪遺跡を加えることとなった。早期後半になると、住居址5軒を検出した堂の前遺跡が著名であり、今回の調査では八窪・栗木沢・竜神平遺跡でまとまった量の遺物が出土した。ところで、前半期の遺跡が高原や段丘上の平坦地に立地するのに対して、後半期の遺跡は沢沿いの南向き斜面に立地し、明らかな異なりをみせている。それは食糧獲得の方法の違いによっていると考えられるが、直接的な道具としての石器の検討が課題となっている。

前期では舅屋敷、白神場、向陽台の各遺跡で住居址が見ついている。

中期は最も遺跡数が多く、したがって調査例も多いが、特に後半の集落址が多いといえる。中期初頭については俎原遺跡で住居址が発見された以外にまとまった資料はなく、竜神平遺跡出土遺物は貴重である。中葉は、「焼町タイプ」と呼ばれる特徴的な土器を出土して注目された焼町遺跡、俎原遺跡で住居址の発見があり、今回山の神・吉田向井遺跡が追加された。後半になると田川やその支流に面した段丘の縁辺に広く展開するようになる。集落址をほぼ完全に発掘した例として柿沢東と俎原の2遺跡が挙げられるが、ともに土壙群を中心にして周りを住居址群が取り囲むという縄文時代に典型的な環状集落である。今回調査した上木戸遺跡も同様な集落と思われ、30軒近い住居址が検出されている。

後期については、断片的に遺物は出土しても遺構の捉えられない場合が多かったが、今回御堂垣外遺跡から敷石住居址及び甕被葬の土壙墓が検出されたほか、八窪遺跡から包含層出土ながら多量の精製・粗製土器が出土し、貴重な資料を提供した。

晩期はエリ穴遺跡において住居址が発見されている以外遺構はないが、舅屋敷・堂の前・福沢・石行遺跡で遺物の出土があり、該期の土器様相はかなり明確になってきている。

弥生時代になると、松本平全体に遺跡数が減少するが、この田川沿いの地域に限っては決して少なくない。弥生文化の生産基盤が米作りであることと考えあわせれば、水田を営むのに田川流域の低湿地帯が好適であったと理解されよう。近年、中島・前田木下・向陽台・田川端遺跡など後期集落址の調査例が増え、今まで不明であった土器の様相も明らかにされつつある。そうした中で、今回調査した上木戸遺跡の出土土

器は外来系土器を多量に含んでおり、注目される。また、柴宮出土の銅鐸は、松本市宮淵遺跡出土品とともに全国的にみて分布の東北限に位置する貴重な資料であるが、未解決の問題をいくつか抱えている。一方、方形周溝墓は、焼町・丘中学校・向陽台・君石遺跡に検出されているほか、今回犬原遺跡でも検出され、集落との関係解明が課題となっている。なお、中期では横山城遺跡に住居址の発見例があり、銭宮・ちんじゅ・福沢遺跡等で良好な遺物の出土がみられる。

古墳時代では、白神場・石行遺跡に住居址が調査されているが、平安時代の集落に比較すると数は少なく、大きな疑問とされている。また、古墳は禰の神など南部の山麓に点々と築かれている。

奈良・平安時代の集落は、低地の吉田向井遺跡に比べて山麓や谷間に分布する舅屋敷・福沢・堂の前・俎原遺跡などはいずれも集落規模が小さいと予想され、その性格について論議を呼んでいる。今回調査した山間の八窪・栗木沢・樋口遺跡でも平安時代の住居址が発見されている。遺物に関しては、土師器、須恵器、灰釉陶器といった焼物の種類を越えて食膳具のセットを捉え、その変遷を明らかにしようとする試みが始められている。

中世以降についてはアプローチできる考古学的資料が非常に少ない。今回調査の遺跡を加えてもわずかに吉田向井・石行・砂田遺跡等に建物址あるいは墓址がみられる程度であり、高山・南熊井・北熊井城跡についても部分的には発掘調査されているが不明な点が多く、総合的調査が待たれている。

参考文献

藤沢宗平他 1973 『松本市・塩尻市・東筑摩郡誌』第2巻歴史上

No.	遺跡名	先	縄	弥	古	奈・平	中	県番号	No.	遺跡名	先	縄	弥	古	奈・平	中	県番号
①	青木沢東		○	○					37	狐久保		○					65-56
②	青木沢	○	○	○		○		65-86	38	石川		○					65-134
③	八窪		○		○	○			39	三獄西		○	○		○		
④	大原		○				○	65-80	40	田川端		○	○		○		
⑤	北山		○	○	○				41	焼町		○					65-64
⑥	御堂垣外		○		○			65-76	42	宗張		○			○		
⑦	栗木沢		○			○	○	65-47	43	青木巾		○	○				65-69
⑧	ヨケ		○	○		○	○	65-46	44	五輪堂		○					65-78
⑨	樋口		○			○			45	柿沢東		○					65-77
⑩	高山城		○					65-45	46	中島		○					65-74
⑪	竜神		○						47	堂屋敷							65-75
⑫	竜神平		○		○	○			48	社宮寺		○					65-73
⑬	山の神	○	○					65-36	49	小坂田		○					65-72
⑭	中原		○					65-35	50	太子山			○		○		65-71
⑮	犬原		○	○				65-34	51	砂田			○				65-63
⑯	上木戸		○	○		○		65-33	52	ちんじゅ		○	○				65-134
⑰	千本原								53	下西条		○			○		65-54
⑱	高田					○			54	西福寺前			○				65-53
⑲	吉田向井		○			○	○	65-3	55	平出		○	○	○	○		65-49
20	吉田川西		○			○	○	65-2	56	昭和電工							65-48
21	松井沢		○					65-87	57	大門			○		○		65-40
22	御野立		○					65-89	58	柴宮			○				65-41
23	下松井沢		○					65-88	59	平林			○				
24	樋沢		○					38-187	60	中島		○	○		○		
25	犬飼原		○					65-84	61	五日市場					○		
26	代官山		○	○				65-82	62	福沢		○					65-44
27	入山					○		65-81	63	堂の前		○			○	○	
28	犬原			○					64	北原		○			○		
29	大石沢		○					65-79	65	向陽台		○	○		○		
30	峯畑		○				○	65-68	66	中挾			○				65-38
31	剣ノ宮		○				○	65-67	67	和手			○		○		
32	記常塚付近		○	○				65-65	68	高出遺跡群	○	○	○		○		65-5
33	御墓堂		○					65-59	69	南熊井城跡						○	65-37
34	大久保		○			○		65-58	70	菖蒲沢窯跡					○		
35	枥久保		○			○		65-57	71	俎原		○			○		65-32
36	銭宮		○	○				65-135	72	大沢		○					

表1 遺跡地名表1 (①~⑱は調査対象遺跡)

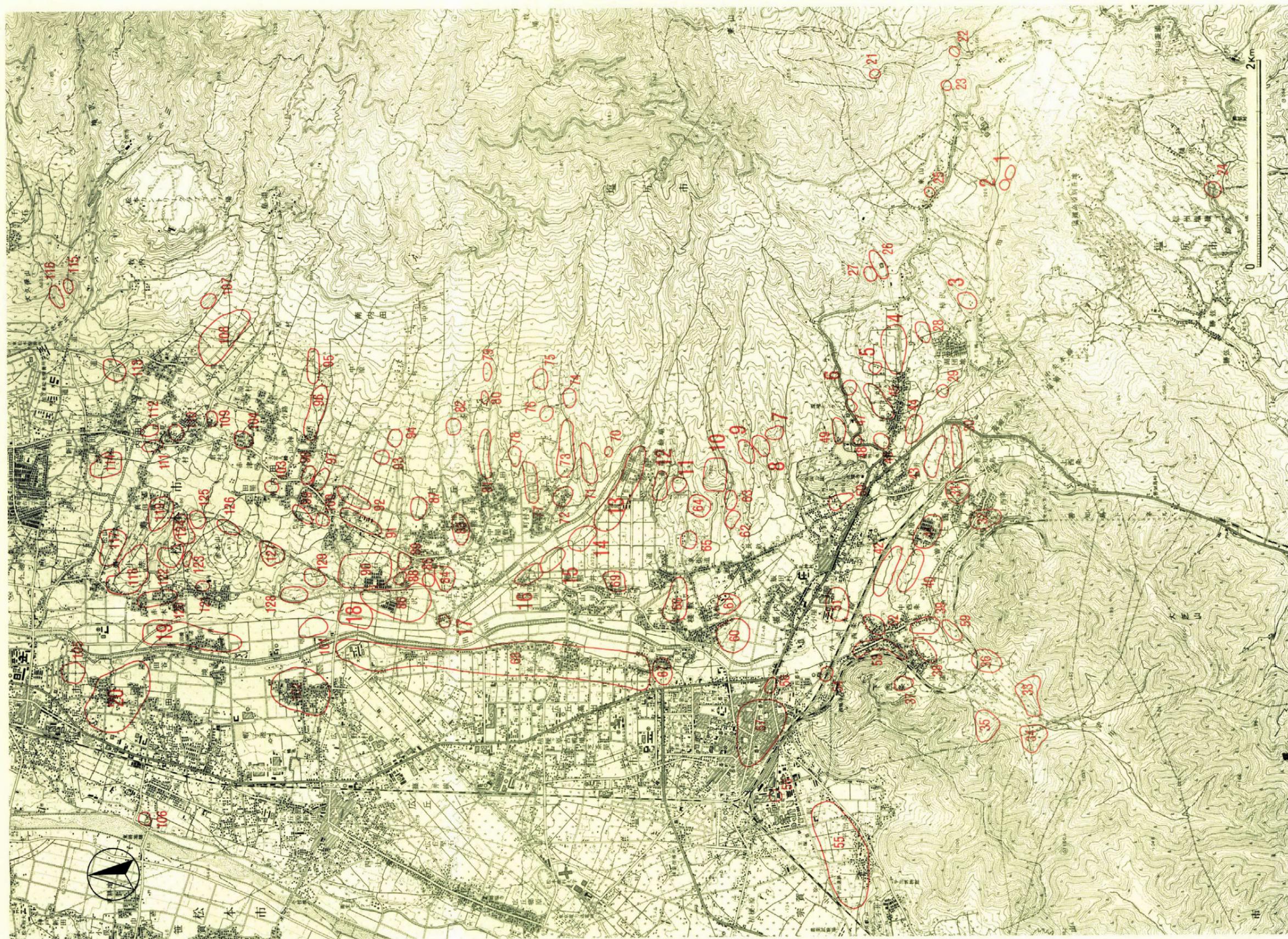
No.	遺跡名	先	縄	弥	古	奈・平	中	県番号	No.	遺跡名	先	縄	弥	古	奈・平	中	県番号
73	中原		○	○		○		65-28	102	野村		○			○		65-4
74	鳶沢		○					65-31	103	矢口		○			○		65-7
75	長者清水		○					65-30	104	大宮林		○					65-6
76	今泉					○		65-29	105	若宮							
77	北熊井城跡						○	65-26	106	長者屋敷		○			○	○	65-1
78	竹ノ花		○						107	五斗林		○					
79	源十窪		○					65-25	108	雨堀		○					64-200
80	富士塚		○					65-24	109	藪沢池		○					64-194
81	舅屋敷		○					65-23	110	花見		○					
82	今泉					○			111	長泉寺					○		64-195
83	竹原		○					65-22	112	くねの内		○					64-192
84	新田		○		○				113	釈迦堂							
85	日向					○			114	エリ穴		○					64-190
86	渋沢			○		○		65-20	115	棚峯			○				
87	境沢		○			○		65-21	116	大久保		○		○			64-177
88	下境沢		○	○	○				117	松山		○					
89	狐塚		○	○	○			65-19	118	北原		○	○				64-83
90	君石		○	○		○		65-18	119	横山城		○	○				64-84
91	二本木		○			○		65-14	120	小赤		○	○				64-85
92	松座屋敷		○			○		65-15	121	赤木		○	○				64-87
93	内田原					○		65-16	122	石行		○	○				64-86
94	小丸山		○			○		65-17	123	清水林		○					
95	古屋敷		○					65-10	124	原度前		○	○		○		64-88
96	别当原		○			○		65-11	125	赤木山	○	○					64-90
97	上手村		○					65-13	126	野石							
98	無量庵		○			○		65-12	127	中山		○					64-91
99	久保在家		○	○		○		65-8	128	前田・木下		○					64-93
100	鍛冶屋敷		○	○		○		65-9	129	白神場		○	○	○	○	○	
101	花見		○	○		○											

表2 遺跡地名表2

第3章 調査

No.	遺跡名	調査年	調査結果の概要	文献
2	青木沢	1984	時期不明円形硬化面3、小竪穴2基、(先土器時代石器、弥生後期土器出土)	塩尻市教委1985
4	大原	1983	時期不明の溝状遺構1、集石址1	塩尻市教委1984
	禰ノ神	1985	古墳後期円墳3	塩尻市教委1986
7	栗木沢	1985	縄文早期(?)住居址1、小竪穴3、集石土壇1	塩尻市教委1986
13	山ノ神	1984	縄文中期末小竪穴41、集石1、溝1	塩尻市教委1985
18	吉田向井	1982	奈良・平安住居址85、建物址3、小竪穴3	塩尻市教委1983
28	犬原	1969	弥生後期住居址2	藤沢宗平・小松虔1970
40	田川端	1986	縄文前期住居址5、弥生後期住居址40、平安住居址18、時期不明住居址1、小竪穴2	塩尻市教委1987
41	焼町	1970	縄文中期住居址13、溝状遺構	塩尻市教委1970
42	宗張	1987	縄文前期集石遺構2、時期不明集石2	塩尻市教委1987
45	柿沢東	1983	縄文中期後半住居址23、敷石住居址1、小竪穴130	塩尻市教委1984
51	砂田	1985	中世掘立柱建物址2	塩尻市教委1986
60	中島	1979	縄文中期前半住居址1、縄文中期後半住居址13、小竪穴3、弥生後期住居址5、奈良~平安住居址1、中世末期土壇2、溝状遺構1(館?)	塩尻市教委1980
62	福沢	1984	縄文早期集石1、小竪穴1、縄文晩期末~弥生中期初土器集中区1、縄文晩期末~弥生中期初小竪穴6、ピット群、平安後半住居址4	塩尻市教委1985
63	堂の前	1984	縄文早期住居址5、集石3、縄文中期住居址3、小竪穴36、中世建物址3、火葬墓7、土葬墓1、柱列址1、集石2、平安後半住居址1	塩尻市教委1985
65	向陽台	1985	縄文早期住居址4、縄文前期住居址4、縄文中期小竪穴13、弥生後期住居址6、方形周溝墓1	長野県埋文センター1985
	丘中学校	1982	弥生末~古墳初方形周溝墓1、平安後半住居址5、平安後半以降小竪穴21(南北朝時代?)、平安末~中世初環状土器集積遺構1	塩尻市教委1983
68	高田	1979	平安前半住居址3、時期不明小竪穴1	塩尻市教委1979
	高出	1965	縄文早期配石址2、弥生後期住居址1(1950年代に4軒発見されている)、平安住居址4、建物址2、平安(?)墳墓、(その他1957年平安住居址6、1977年平安住居址14)	長野県教委1966
71	俎原	1985	縄文中期初頭~末葉環状集落(住居址147、小竪穴169)平安後半住居址19	塩尻市教委1986
81	舅屋敷	1981	縄文前期住居址6、小竪穴42、集石1、縄文後期土器集中区1、平安後期住居址7	塩尻市教委1982
86	君石	1985	平安後半住居址1、方形周溝墓1(弥生後期?)、縄文前期小竪穴17、溝1	塩尻市教委1986
93	内田原	1968~1969	平安後半住居址18、柱穴群(柵?)1	原 嘉藤・山田端穂1969
94	小丸山	1969	縄文中期住居址26、小竪穴1、平安住居址1	『長野県史』
108	雨堀	1980・81	縄文中期住居址19、縄文中期土器集中区1、集石状遺構1、小竪穴11、平安後半小竪穴2、時期不明小竪穴37	松本市教委1981 松本市教委1982
114	エリ穴	1967・68 1971	縄文晩期住居址1、配石遺構2、集石遺構1	藤沢宗平1967、松本深志高校 1968・1969・1971
118	北原	1984	縄文早期集石1、平安住居址1、土壇3	松本市教委1985
119	横山城	1966	縄文前期~中期、ピット1、弥生中期住居址2、平安住居址4、時期不明焼土址2	藤沢宗平1966
122	石行	1985	縄文土壇5、ピット群1、焼土面1、晩期土器集中区7、古墳前期住居址8、土壇4、古墳中期住居址1、平安後半住居址12、平安以降土壇46、火葬墓4、近世墓址17	松本市教委1987
128	前田木下	1983	縄文中期住居址11、土壇37、竪穴状遺構2、弥生後期住居址1、平安前半住居址1、中世住居址1、土壇20	松本市教委1984
129	白神場	1984	縄文前期末住居址6、土壇114、集石2、弥生中期土壇20、弥生~古墳、方形周溝墓3、古墳前期住居址3、土壇1、古墳中期住居址1、平安前半土器単独埋設1、近世竪穴状遺構6	松本市教委1985

表3 既調査遺跡の調査結果概要



第3章 調査

第1節 あおきざわひがし 青木沢東遺跡 (EAH)

1 遺跡の概観

遺跡は塩尻市東山1553番地B一帯に所在する。塩嶺山地南部の塩尻峠付近に源を発した田川は、はじめ狭い谷を刻みながら西流し、平地に至る辺りで北に向きを変え、やがて奈良井川に合流する。その田川によって開析された狭い谷の左岸にあって、南方より押し出した砂礫が形成する扇状地から西側の山腹に続く急な北向き斜面にかけて遺跡は立地している(註1)。眼下には田川を挟んで青木沢遺跡(本書第2節)が展開する。遺跡の標高はおよそ885m、田川との比高差は約10mである。

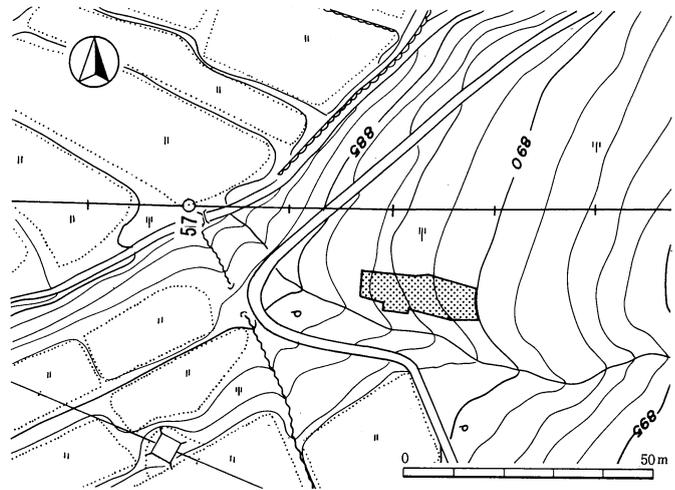


図1 地形及び発掘範囲図 (1:1500)

2 調査の概要と経過

遺跡の範囲は西側山腹にあり、中央道建設用地にかかっていないと考えられていたが、工事開始直後の昭和59年8月、土取りが進む現地で遺物が採集されたことから、日本道路公団、長野県教育委員会、塩尻市教育委員会三者の協議を経て新たに調査対象遺跡に加えられた。しかし、工事の進行によりすでに原地形は失われ、遺跡範囲の把握は困難で、調査対象面積は遺物が採集された付近の84m²に限定された。工事開始前の調査区を含む扇状地一帯は荒地であ

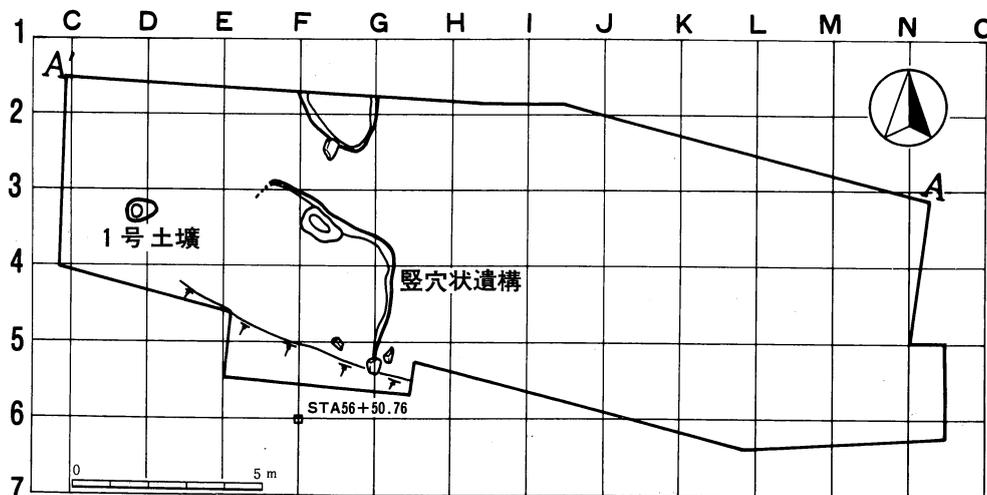


図2 遺構分布図 (1:200)

あったが、昭和30年代までは桑畑として利用されていたところである。

発掘調査は10月8日から22日まで2週間にわたって実施し、調査研究員4名が当たった。調査開始時には工事による土取りが進み、調査区の東

(註1) 西側山腹に営まれる水田の造成時に遺物の出土したことが知られている。

側は高さ5 mを超える垂直な崖となっていたので土層観察はその崖で行った。

測量は遣り方とグリッド杭を用いた割付けの両者を併用した。測量基準点は日本道路公団の工所用杭 STA56+50.76(X=9585.1051、Y=-43332.1051)とし、座標の明らかな複数の工所用杭から座標北を求めた。グリッド及び遣り方の設定は基準杭を基に光波測距儀を使って行った。標高も工所用杭から算出した。

整理作業は12月初めより行い、図面の整理、遺物の水洗、注記、一部の遺物実測を年度内に終了した。その後、報告書刊行に向けての整理作業は昭和61年4月に再開し、本報告に至った。

3 調査の結果

(1) 層序と地形形成 (図1)

基本的な層序は、I層：表土(すでに削平)、II層：暗褐色土、III層：黒褐色土、IV層：礫を多量に含む黒褐色土、V層：暗黄褐色砂礫、VI層：黄褐色砂礫であり、II層上面からIV層下面までの厚さは約30cm。これは、西から押し出した扇状地礫層の上部が土壌化したものである。遺物はII層から出土したが、量は少なく、明瞭な包含層とはいえない。

(2) 遺構と遺物の概観 (図2)

調査前に縄文時代晩期末から弥生文化波及期にかけての土器片10点余りが表採されたことから、該期の遺構や遺物の検出が予想された。しかし、調査の結果、検出されたのは時期不明の竪穴状遺構1基と土壇1基であり、そのほか土器片20点程が出土したが、該期については土器片数点を加えたにとどまった。

(3) 縄文・弥生時代の遺物 (図3)

調査前の表採資料に発掘資料を加えた縄文時代晩期末から弥生文化波及期にかけての土器片10数点と石器2点がすべてである。土器の4は口縁部が直線的に開く深鉢である。口縁部には退化した小突起がつき、頂部には条痕に用いた工具の圧痕が加えられる。体部は細密条痕に近い条痕が羽状あるいは格子状に施される。薄手で、焼きは堅い。推定口径24cm。なお、同一個体の破片が他に3点ある。2は甕の肩部、1は体部、6は底部である。条痕はいずれも4に比べると粗く、斜位または縦位に施されるが、やはり細密条痕に近い。4は氷I式より後出の土器である。他は氷I式に含まれる可能性もあるが、4と共伴すると考えておく。石器の1はチャート製の石匙。刃部は念入りな加工によって片刃状につくられ、完形品である。

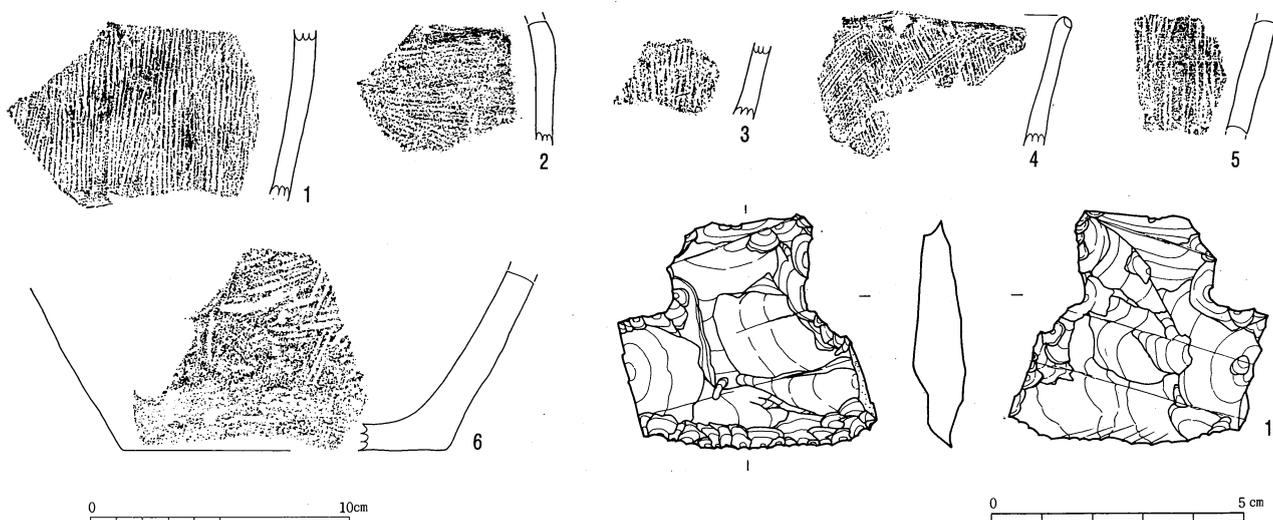


図3 遺構外出土遺物実測図

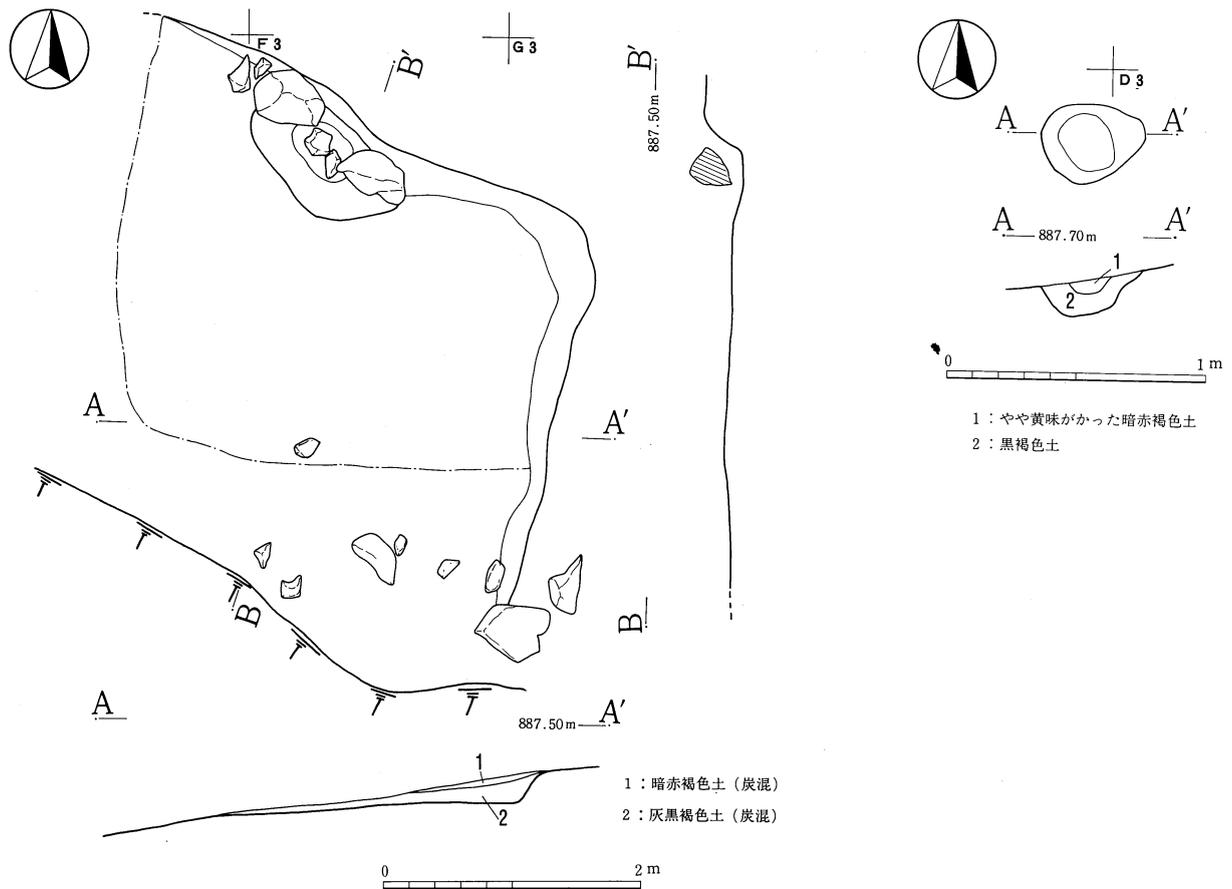


図4 1号方形竪穴状遺構及び1号土壙実測図 (1:30)

このほか黒曜石の剥片が10点余り出土している。

(4) 時期不明の遺構

ア 方形竪穴状遺構 (図4)

調査区中央部に検出され、傾斜のために南と西は壁が残存せず全容は不明だが、推定3.5m×3mの方形を呈し、平らに整地された堅い床面をもつものの、柱穴、炉あるいはカマドももたない遺構である。III層上面から掘り込み、V層中に床を構築し、壁の高さは最も高い北側で40cmを測る。埋土は、床面上にボロボロした炭混じりの灰黒褐色土が堆積し、それをII層が覆う。北壁に接して巨礫があり、付近にわずかな焼土と多量の炭が分布したが、カマドとは認められなかった。遺構内より出土しているのは摩滅した土器片と黒曜石剥片だけであり、時期や性格については推定の手がかりとなる資料を欠く。

イ 土壙 (図4)

方形竪穴状遺構の西に検出された。IV層上面から掘り込む。プランは0.8m×0.6mの楕円形で、深さは30cm。遺物は出土していない。

5 小 結

ごく限られた狭い範囲の調査であり、遺跡の性格を探るには余りにも資料は少ない。しかし、弥生文化波及期の遺物がこのような山間の地に発見されたことは、課題となっている該期の文化動態を追求する上で貴重である。また、時期不明ながら遺構の存在したことは、人々がかつてこの地になんらかの係わりをもったことを物語っている。

第2節 ^{あおきざわ}青木沢遺跡 (EAK)

1 遺跡の概観

遺跡は塩尻市大字東山8222番地一帯に所在する。塩嶺峠の南に源を発した田川は、狭い谷を刻みながら西流し、やがて盆地平坦部に至る。その田川が開析した谷の最も奥にあって、支流松井沢と田川の合流点に形成された台地の南向き斜面上に遺跡は展開する。標高およそ880m、田川との比高差約10mを測る。

現在、遺跡の山側は畑、谷側は水田となっているが、昭和10年代に水田を開いた際土器片等が出土し、中期を中心とした縄文時代の遺跡であることが知られた。その後、長野県教育委員会が実施した中央道長野線関係の分布調査では、土器のほかに尖頭器も採集されて、先土器時代の遺跡でもある可能性が指摘されていた。

2 調査の概要

塩嶺トンネルを出たばかりの中央道長野線は遺跡南端の標高が最も低い地域を通過し、調査対象面積は380㎡である。調査は昭和59年5月1日から5月31日、および7月26日から8月1日にかけて実施し、調査研究員は主に3名が当たった。

調査の初期は地層の堆積状況と包含層の有無を調べるため、調査区全域に、傾斜方向及びそれに直交する方向のトレンチを5本設けて掘り下げた。その結果、01トレンチと04トレンチで遺物の出土があり、また01トレンチにかかって焼土壙1基が検出されたので、その周辺を面的調査することにした。面的調査時、水田の盛土を取り除くために重機を導入した以外はすべて手作業による。測量基準点には日本道路公団工事用杭 STA58+00(X=9614.3554m、Y=-43422.9655m)を使い、これを基に、調査区内に独自のベンチマークを設定した。遺構の測量にあたっては遣り方を用いた。

1号焼土壙より出土した木炭は、テレダインジャパン社にC¹⁴年代測定を依頼した。

3 調査の経過

昭和59年度

- 5月1日 発掘調査開始。
- 5月3日 トレンチを掘り下げる。I b層～II層より黒曜石片多数と土器片少量が出土。I a層から槍先形尖頭器が出土したので、先土器時代遺物包含層の有無を確認するためIII層を掘り下げる。しかし、III層中からの遺物の出土は皆無。
- 5月10日 05トレンチIII層上面で焼土壙検出。
- 5月15日 05トレンチを設定し、また、02トレンチを延長して掘り下げたが、遺物の出土は微量。
- 5月21日 グリッドを設定して面的調査に移る。
- 5月25日 I b層、II層の掘り下げを開始するが、両層の識別は困難である。
- 5月31日 焼土壙のプラン検出し、遣り方設定。

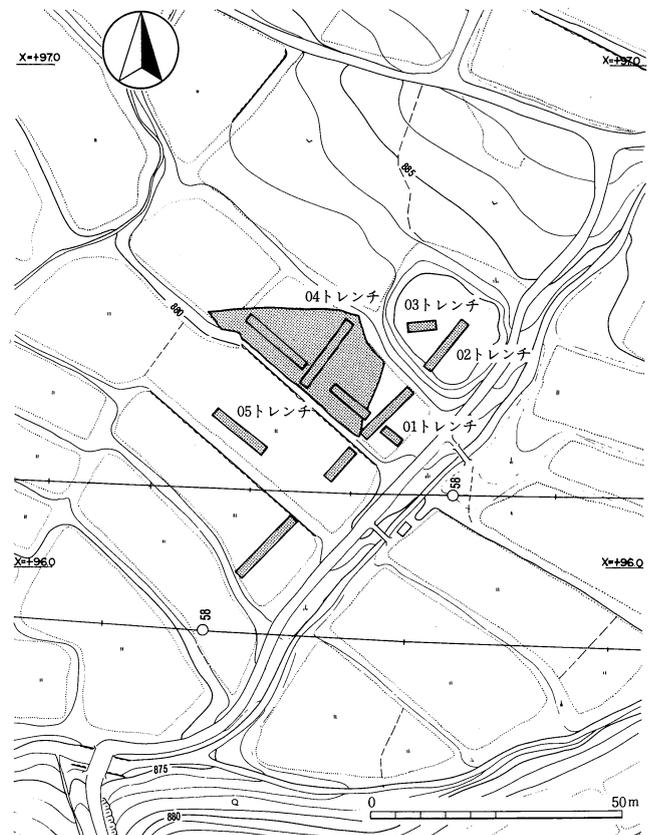


図1 地形及び発掘範囲図 (1 : 1500)

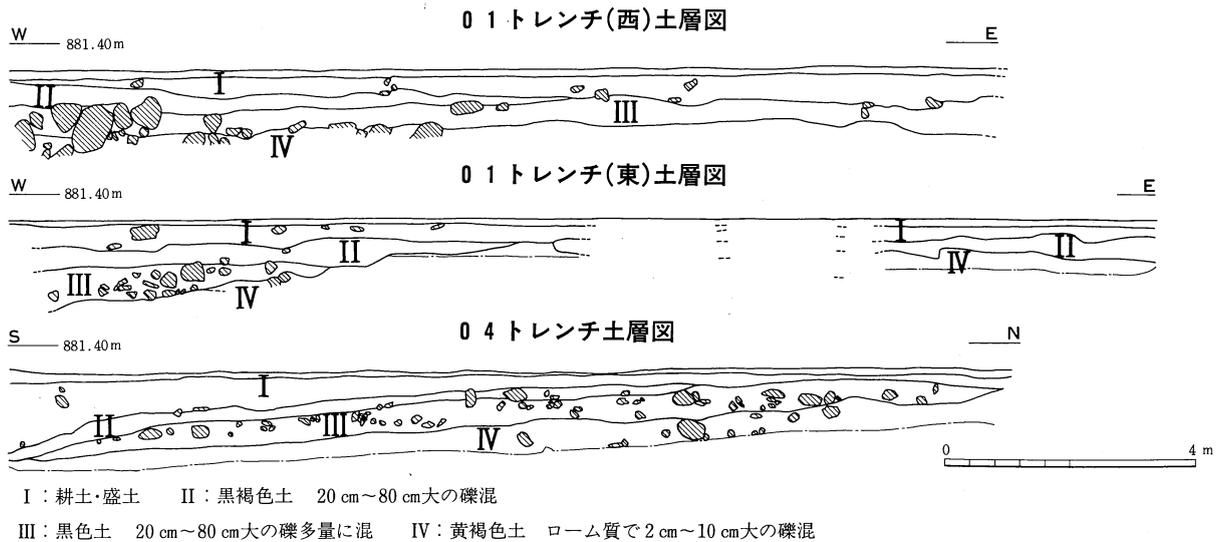


図2 土層図 (1:120)

(6月1日~7月25日 中断)	昭和61年度
7月26日 調査再開。焼土壇の掘り下げ開始。	8月~3月 整理作業再開。遺物の実測、図版及び写真図版を作成し原稿を執筆する。
7月31日 焼土壇を完掘し、実測。	
8月1日 I b・II層を完掘し、調査終了。	
11月28日 遺物の水洗、注記、遺構図の整理等基礎的な作業を開始。年度末までに終了。	

4 調査の結果

(1) 層序と地形形成 (図2)

基本層序は、以下のとおりである。

I a層：水田耕土と水田やため池造成時の盛土で、I b層にII・III層の土壤が混じる。

I b層：黒褐色土。旧表土である。20cm~80cm大の礫が部分的に多く含まれるが全体としては少ない。

II層：黒色土。III層が土壌化したもので、20cm~80cm大の礫がやや多量に含まれる。

III層：黄褐色土。粘性をもつローム質土と砂質ローム質土がある。2cm~10cm大の礫が含まれる。

水田造成時の削平によりI b層、II層は山側で欠ける。特に、II層はIII層が土壌化したもので、大小の礫が混在することから、山側からの押し出しがあったと考えられる。III層は二次堆積ロームであり、大略現地形を形成している。遺物包含層はII層である。

(2) 遺構と遺物の概観

遺構としては、平安時代末頃と推定される焼土壇1基が検出されたのみである。遺物は縄文時代の土器、石器、また、平安時代以降の土師器、内耳土器が出土している。土器はいずれも少量でまとまらない。I層出土ではあるが、先土器時代~縄文時代草創期に属する石器類が比較的量が多く、注目される。

(3) 先土器時代~縄文時代草創期の遺物 (図3、PL3)

ナイフ形石器4、槍先形尖頭器6、搔器2がある。いずれもI層盛土から出土した。この盛土は、水田造成時に高所から低所に移動したもので、遺跡外から持ち込んだ土壤ではない。なお、一部でIII層黄褐色土を掘り下げたが、遺物は出土していない。

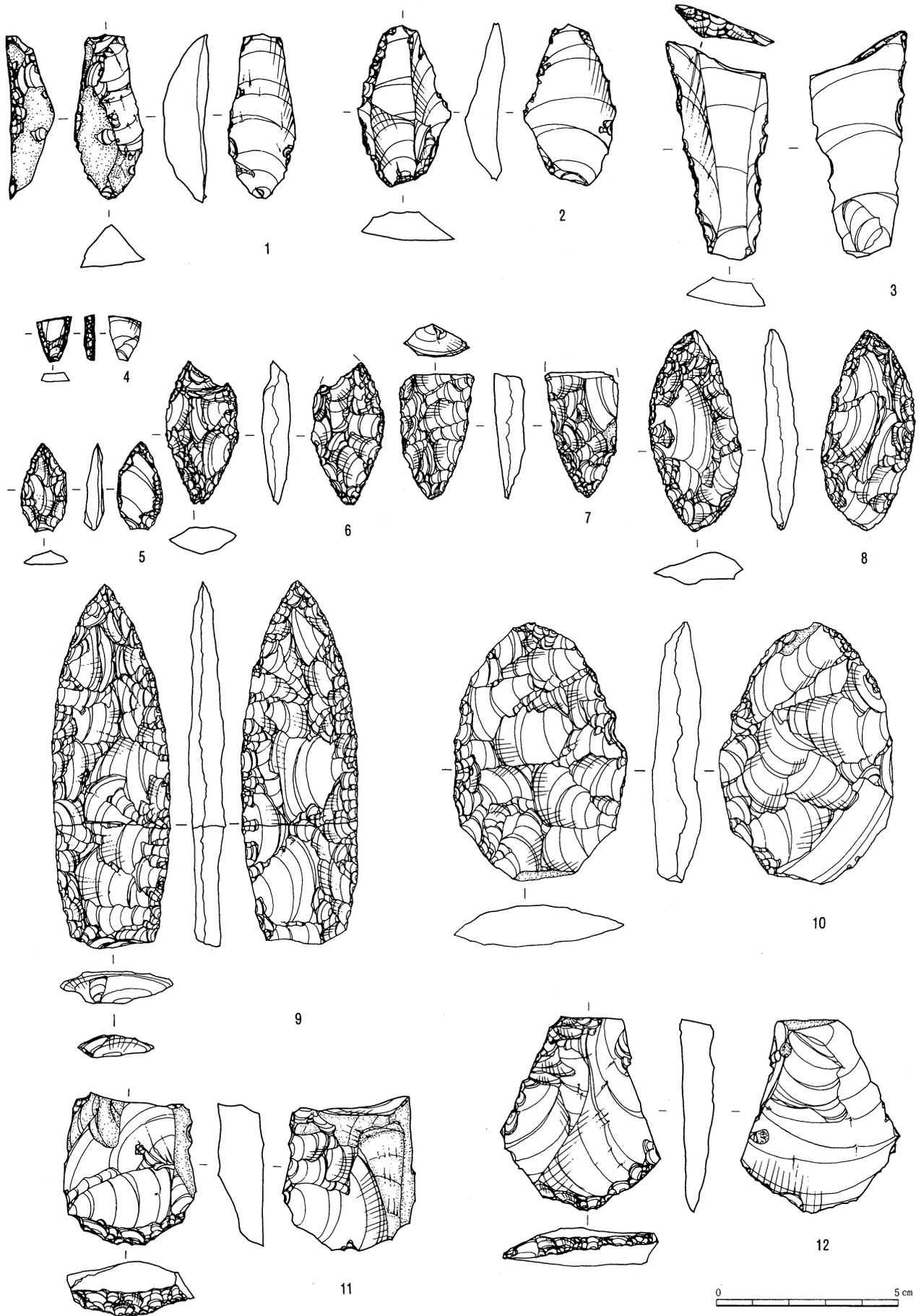


図3 先土器時代～縄文時代草創期の石器実測図

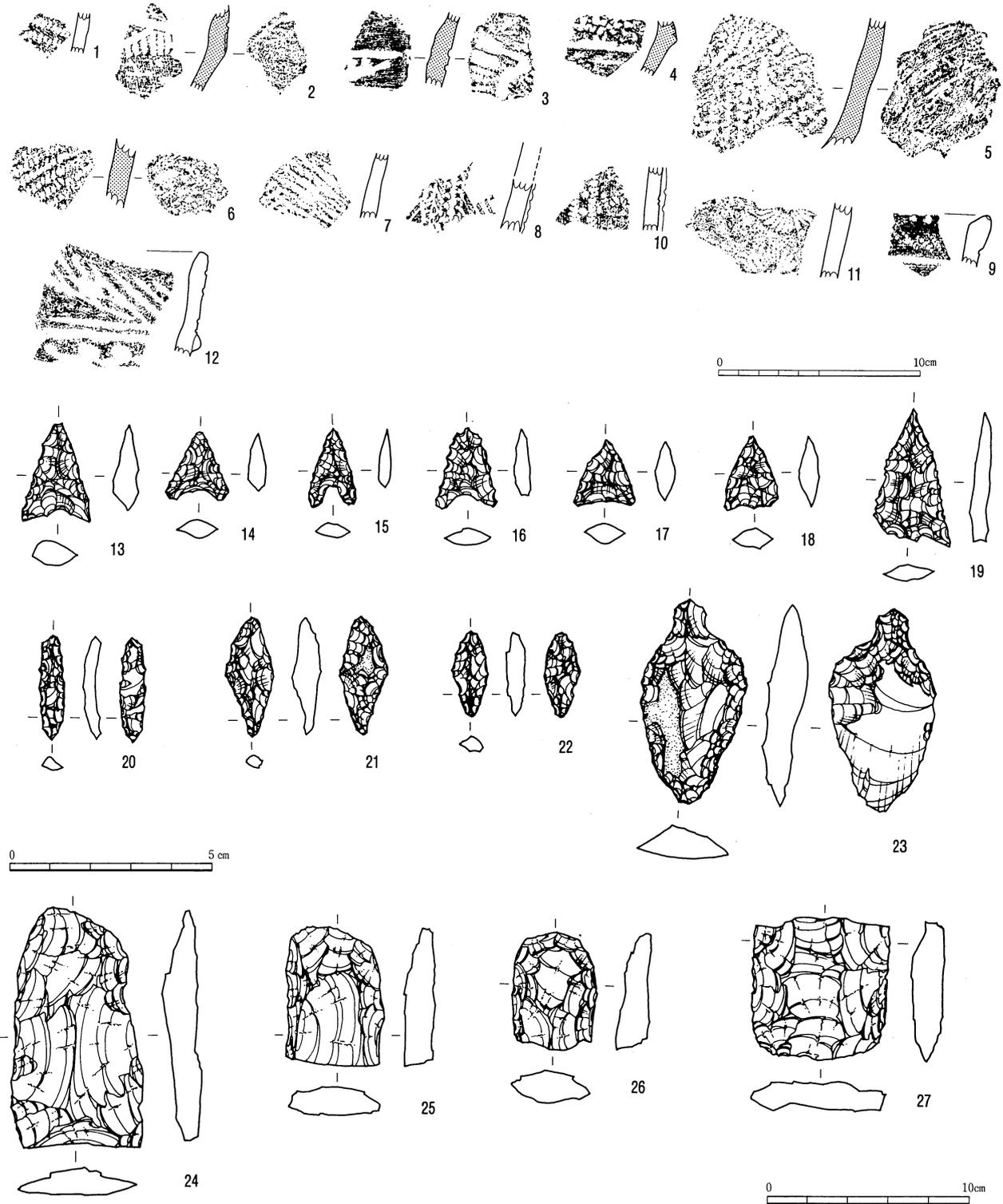


図4 縄文時代遺物実測図及び拓影

ナイフ形石器 (1~4)

1~3はともに黒曜石の縦長剥片を素材としている。1・2は左側縁に素材の形状を大きくは変形させないような刃潰し加工が、3は剥片の末端を断ち切るような刃潰し加工が認められる。4はチャート製で、基部が残っているだけで全体の形状はわからない。両側縁に急斜な刃潰し加工が認められる。

槍先形尖頭器 (5~10)

5はチャート製小形の半両面調整品である。6~9は中形ないし大形の両面調整品である。特に9は基

部を欠損しているものの現存長10cmを測り、伊那市神子柴遺跡に代表されるような、いわゆる先土器時代最終末から縄文時代草創期にかけてみられる超大型の槍先形尖頭器と考えられる。石質は、6～8が黒曜石、9がチャート。10は先端、基部ともに自然面を残し、調整の剥離も粗いことから、槍先形尖頭器の未製品と考えられる。黒曜石製。

搔 器 (11・12)

2点ともに黒曜石製。図中下端にやや急斜な角度の刃部をもっている。ただし、11は、板状礫を素材として、図中裏面にも平坦剥離が施されており、槍先形尖頭器の未製品であるとも考えられる。

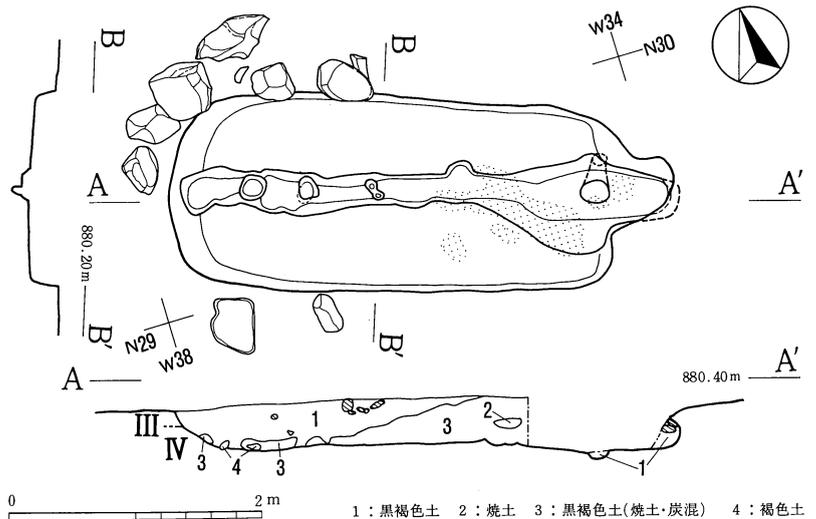


図5 1号焼土壙実測図 (1:60)

(4) 縄文時代の遺物 (図4)

土器の量は少ない。1は絡条体圧痕文を付した土器で繊維を含まない。2～6は繊維を含む一群で、太めの沈線で区画し、中を平行沈線でうめる(2・3)、結節状沈線を加える(4)、縄文を施す(5・6)などのバラエティーがある。これらは早期後半に比定される。7は羽状縄文を施し、胎土に少量の繊維を含む。8は地文沈線に結節状浮線文を3条加えている。ともに前期に比定される。また、口縁部に縄文を施し、口唇部に刻みを加える(9)、三角押文(10)、連続爪形文(11)、口縁部が波状をなし頸部に隆帯を貼り付け指で押さえる(12)など中期初頭から中葉の特徴を有する一群がある。

石器は、石鏃(13～19)、石錐(20～22)、石匙(23)、小剥離痕のある剥片及び打製石斧(24～27)がある。石鏃はすべて黒曜石製であり、凹基、平基が多い。19は側辺部に特徴があり、一般に縄文時代でも後・晩期に多いとされるものである。石錐はつまみを持たない棒状のものばかりが3点出土。石匙は縦形で、その刃部は丁寧に調整される。チャート製。打製石斧は5点出土しているが、完形品は1点もなく、すべて胴部で折れている。砂岩製。

(5) 平安時代の遺構 (図5)

1号焼土壙は、N29W39付近の南南西に緩く傾いた斜面上に位置する。II層上面で検出。掘り形は3.5m×1.6m、深さ20cmの隅丸長方形を呈し、北側に張り出し部を、また、長軸に沿って張り出し部から南にのびる深さ30cmの溝を設けている。溝の中には径20cm、深さ10cm～30cmのピットが間隔をおいて垂直あるいは斜めに掘り込まれる。床や壁には火熱を受けて焼土化した固い部分がみられ、特に東部の溝周辺に顕著である。埋土は大きく上層と下層に分けられる。このうち下層には木炭、焼土が含まれ、なかでも中央部から東部にかけて量が多い。こうした構造は、近年調査例の増えつつある中世火葬施設あるいは炭焼施設に類似するが、骨が全く見られないことから、後者の可能性が大きい。

遺物の出土はなく、時期を知る手掛りとしては出土した木炭のC¹⁴年代測定結果がすべてである(註1)。それによれば平安時代の所産と推定される。

(註1) B. P. 900±80(I-14152) テレダインジャパン株式会社

5 小 結

今回の調査では、先土器時代、縄文時代、平安時代の遺物が出土したものの、検出された遺構は平安時代と推定される焼土壇1基だけであった(註1)。

先土器時代～縄文時代草創期の石器は、いずれも盛土中からの出土ではあるが、この地に該期の人々が生活したことを物語るもので、山間という遺跡立地と合わせ考えれば注目に値する。すなわち、松本平においてこの期の遺物集中出土地点はわずかに数箇所を数えるのみであり、それらが平坦な台地上に立地する傾向をもつのと比較して本遺跡の立地は特異といえる。

縄文時代早期から中期にかけての遺物も、量は少ないが、付近に生活の場があったことを示している。

焼土壇とした遺構は、形態は中世の火葬施設に類似するが、人骨の出土は認められず、八窪・竜神平遺跡例と同様平安時代の炭焼窯と考えたが、さらに類例の増加を待って詳細に検討する必要がある(註2)。

参考文献

塩尻市教委 1985 『堂の前・福沢・青木沢』

(註1) 昭和59年7月、塩尻市教育委員会によって調査区の東側が発掘調査され、やはり先土器時代～縄文時代草創期、縄文時代早期、前期、中期、後期の遺物が出土し、このほか弥生時代後期の遺構、遺物も検出している〔塩尻市教委1985〕。

(註2) 本書第12節竜神平遺跡の中で若干の考察を加えている。参照されたい。

第3節 ^{はちくぼ}八窪遺跡 (EHK)

1 遺跡の概観

本遺跡は塩尻市柿沢764番地1を中心に所在する。国道20号線との分岐点から国道153号線を南下すると善知鳥峠のふもとで西流する田川を渡る。田川をわずかに遡り灌漑用ため池のみどり湖のすぐ東に迫る尾根の先端近くに遺跡は位置する。遺跡のある尾根は塩嶺山地の西麓に派生し、南側を田川、北側をその支流が開析する。尾根の上は現在畑及び山林として利用されている。この山林は約20年前に植林されたもので、部分的には表土を剥ぐと植林以前に使用されていた山道が、現在の山道とほぼ平行して通り、調査区東端で重なる。植林以前につくられた暗渠が旧山道より北側の斜面に間隔を置いて3本平行して残されており、古くは水田だった時期があったのかもしれない。

2 調査の概要

遺跡は尾根の上の平坦面を中心に、その先端部から西へ派生する小尾根上にかけて広がる。調査対象となったのは平坦面から小尾根にかかる部分で、遺跡のほぼ東半分に対応する。

調査対象面積は5060㎡で、昭和59年6月1日から7月25日、8月2日から11月27日まで調査を実施し、主に3名の調査研究員が当たった。調査は、地形の傾斜に平行及び直交する方向に9本のトレンチを設定して、土層堆積状況や遺物包含層の有無、遺構の有無の確認から始めた。包含層や遺構の確認された05トレンチ以北は面的調査を実施した。調査は抜根を含めてすべて手作業で行った。包含層の遺物取り上げに当たっては、グリッド杭を使用し全点の位置を計測した。遺構実測や遺構内出土遺物取り上げは遣り方測量を用いた。測量基準杭は日本道路公団工事用杭 STA69+83.665 (X=9966.0614, Y=-44524.2535) を使い複数のセンター杭から座標北を算出した。レベルは STA70+40 (標高839.365m)、STA70+80 (標高838.599m) を使用した。地形測量は2m方眼で標高を測り、後に比例配分によって地形図を作成した。これらの測量は調査研究員が行った。整理作業は、昭和59年12月から昭和60年3月、昭和61年8月から昭和62年3月まで断続的に行なった。

3 調査の経過

昭和59年度

6月1日	調査区東端、幅10mの工事用道路部分の発掘調査開始。01・02・03トレンチ掘り下げ開始。	以北のIII・IV・V層では縄文時代早～後期、古墳時代の遺物が多出。05トレンチ以南では遺物は少量。
6月6日	III層は縄文時代中期の土器片や土師器片多し。焼土址群も土師器片の分布域で検出。	8月27日 05トレンチ以北の面的調査開始。
6月11日	遺物包含層の分布する平坦面から北側斜面にかけて面的調査を開始。	9月25日 III層上面で1号焼土壙を検出。
7月2日	焼土址の1つがカマドをもつ住居址と判明。1号住居址とする。	10月1日 III層掘り下げ開始。平坦面では縄文時代中期や古墳時代の土器片と焼土址群、小尾根部では縄文時代後期の土器片などが主に出土。
7月5日	1号住居址を完掘。縄文時代の包含層の調査。	10月4日 北側斜面で3号焼土壙を検出。
7月25日	調査区東端部の調査を完了し、青木沢遺跡の調査に移る。	10月22日 III層中で石囲炉検出。付近より縄文時代後期の土器片が多く出土。精査したが他の施設、遺構なし。
8月2日	調査再開。調査区全域にかかるように01～09トレンチを延長、新設して掘り下げ開始。05トレンチ	10月24日 IV層掘り下げ開始。縄文時代中期の土器片出土。
		10月29日 V層掘り下げ開始。小尾根部で縄文時代早期の土器片の出土多し。土壙群を検出。

- 11月9日 小尾根部のVI層上面で、縄文時代早期の竪穴住居址2基を発見。2号・3号住居址とする。土壌群も新たに検出。
- 11月20日 2号住居址の調査終了。
- 11月21日 3号住居址の調査終了。
- 11月27日 土壌群の調査を終了し、調査完了。
- 11月28日 整理作業開始。遺構図等記録の整理と補訂、遺物の水洗、注記を年度内に終了。

昭和61年度

- 8月18日 整理作業再開。見解の調整、図版、写真図版を年度内に作成。

昭和62年度

- 11月30日 原稿執筆終了。



古墳時代甕出土状況



図1 地形及び発掘範囲図 (1:2000)

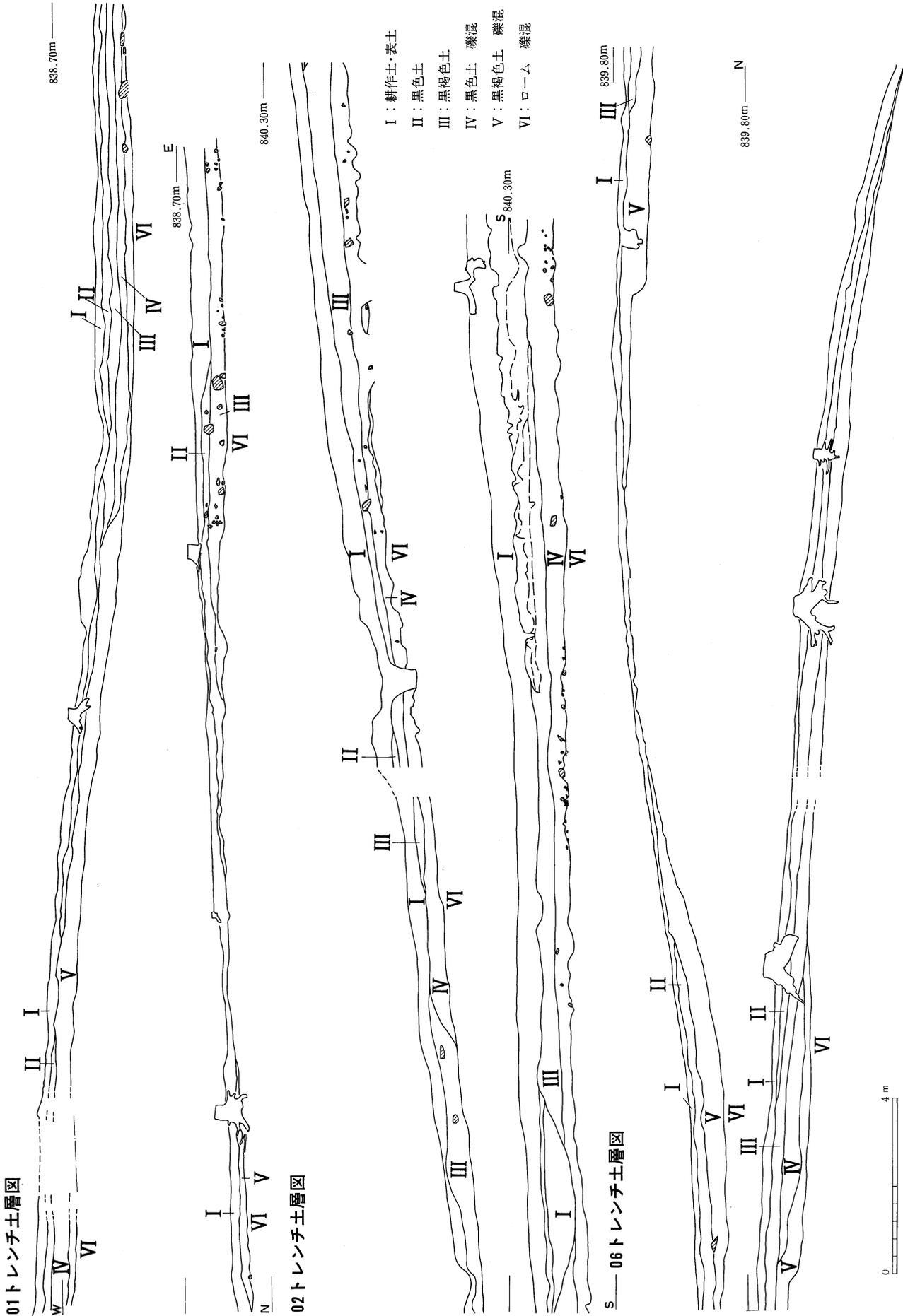


図2 トレンチ土層図 (1 : 120)

4 調査の結果

(1) 層序と地形形成 (図2)

基本層序は次の通りである。

I層：表土・耕土

II層：黒色土 ローム質土で、礫の混入はほとんどない。平坦面から小尾根北側斜面に分布する。

III層：黒褐色土 ローム質土で、礫の混入は少ない。小尾根頂部付近を除いてほぼ全面に分布し、小尾根の北東斜面や平坦面の周辺近くで厚く堆積する。古墳時代や平安時代の遺構が検出され、縄文時代早・中・後期、古墳時代、平安時代の土器片が多く出土する。

IV層：黒色土 ローム質土で、指頭大の礫が混在し、拳大の礫も少量含まれる。平坦面の周辺部に分布し、縄文時代早・中・後期の土器片が少量出土する。

V層：黒褐色土 IV層とVI層の漸移層で、指頭大の礫が混在する。縄文時代早期の土器等が若干出土する。

VI層：ローム

VI層上面ですでに尾根上の平坦面、北向き斜面、西側の小尾根部という現地形とあまり変らない地形が形成されたとみてよい。III～V層は遺物の含まれかたからみて、年代的な差を認めることができず、また

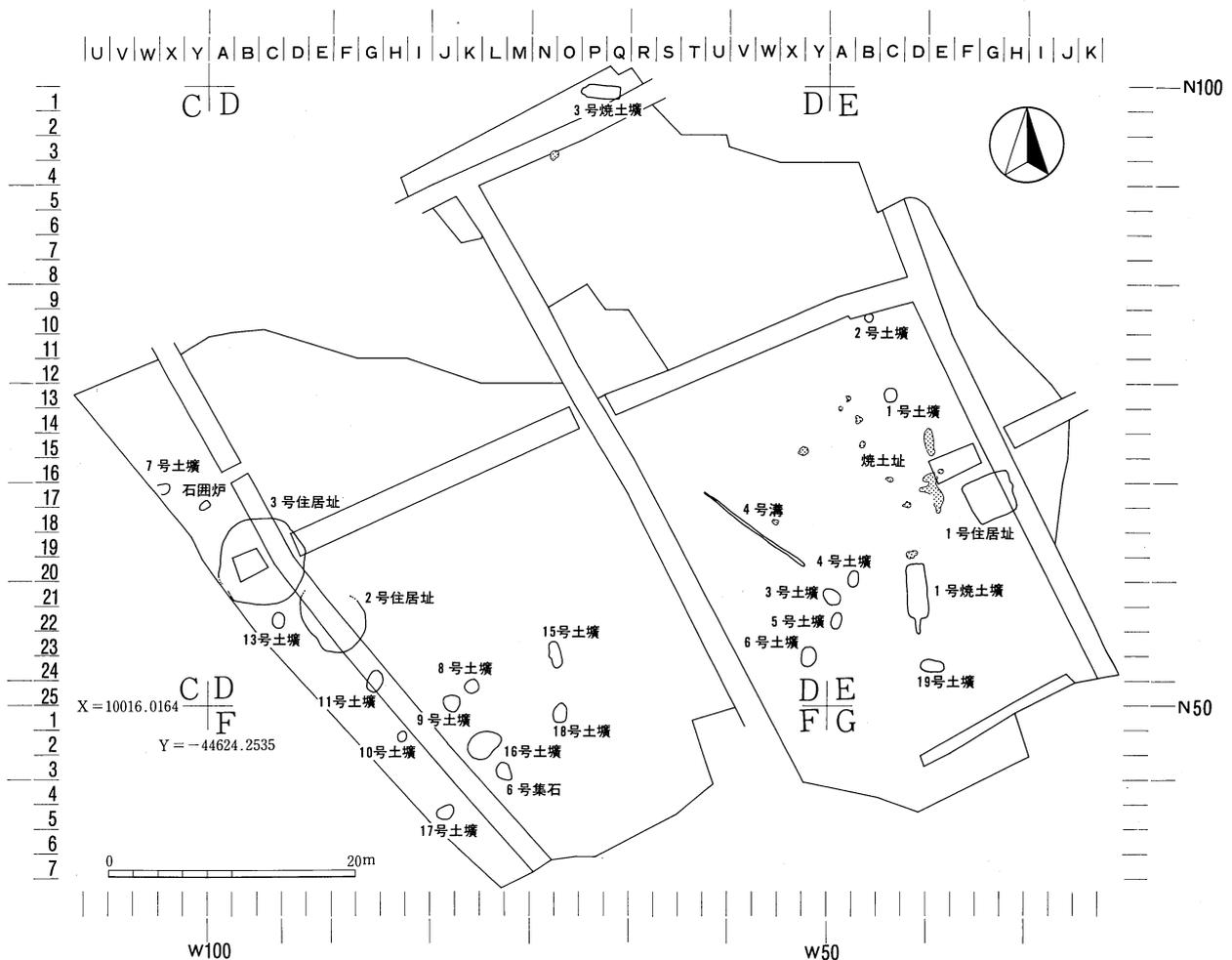


図3 遺構分布図 (1:600)

欠層したり層厚が薄かったりし、自然流失が認められる。また平坦面中央ではI層直下にVI層があり、湧水もみられる。

(2) 遺構と遺物の概観 (図3)

縄文時代～平安時代の遺構、遺物が発見されたが、層位の差が必ずしも年代差となり得ておらず、時代や時期を確定できない資料が多かった。

縄文時代の遺構は、早期前半の竪穴住居址2、前期末の土壇1、不確実ながら早期前半の可能性のある集石1と後期中葉の可能性のある石囲炉1、時期不明の土壇13があり、若干の土壇以外は西側小尾根部に位置する。遺物は西側小尾根部に早期前半、同後半～末葉、後期中葉の土器が集中し、東側の尾根平坦部に中期と後期中葉の土器が集中する。いずれも石器を含んでおり、ブロックが形成されていたと理解されるが、そのブロック以外からも散漫に出土する。ほかに縄文時代前期や晩期の土器が少量あるが、特に集中することはない。石器は既に記した理由から帰属時期を特定しにくい、器種、量とも豊かで、中でも石鏃のバラエティーと磨石、特殊磨石が目立つ。

古墳時代の遺構は焼土址13で、大半が東側尾根平坦面に位置する。周辺からは古墳時代前期及び後期の土器がまとまって出土した。

平安時代の遺構は竪穴住居址1のみで灰釉陶器をもつ。東側尾根上平坦面に位置し、周辺からはそれと同時期の土器が出土している。

そのほか、時期不明の土壇3、焼土壇2、溝1があるが、いずれも平安時代以降に属すると思われる。

(3) 縄文時代の遺構と遺物

ア 住居址

① 2号住居址 (図4・5、PL4・17)

検出：調査区西部に位置し、北側に3号住居址が隣接する。IV層上面で検出したが、遺物の出土状況より、V層中からの掘り込みと考えられる。**規模・形状：**プランは楕円形であるが、斜面下位に当たる北端部を失っている。5.5m×4.6mを測る。主軸方向不明。**埋土：**拳大の礫を含む黒褐色土と暗褐色土の2層からなる。**床面・壁：**壁は高さ25cmを測り、立ち上がりは緩やかである。床面は軟らかく、平坦で、中央に向かって少し傾斜する。**炉：**なし。**柱穴：**床面に1、壁にかかって1の計2個のピットがある。深さは20cm～30cmと十分であるが、柱穴と断定はできない。**遺物の出土状況：**床面直上には少なく、大部分は埋土中のものである。**遺物：**土器の出土量は多かったが、すべて破片である。1群1類A種79点(1～17)、2群12点、3群1類2点、同2類4点(19)、無文86点である。1群1類A種の内訳は、格子目文20点(1～3)、市松文32点(4～13)、山形文6点(14～16)、楕円文12点(17)である。いずれも密接施文され、4～13は横位、他は縦位の構成となる。1群2類A種のような帯状施文例は1点もない。また、施文原体の押圧が弱いめかすれたりして文様の不鮮明なものが多い。18は1群1類A種と共通の胎土だが器面に擦痕が目立つ。1群1類A種と無文土器とが共伴することは注目される。石器には石鏃2点(1・2でともに分類ではI類B-C)とピエス・エスキュー1点があり、いずれも黒曜石製である。特殊磨石(3)は角閃石安山岩製で、a面は1面だけだが摩耗し、ほかの機能面は観察されない。**時期：**土器の量比より立野式期に属するものと考えられる。

② 3号住居址 (図6～8、PL4・17)

検出：2号住居址北に位置する。IV層上面で検出したが、遺物の出土状況より、V層中からの掘り込みと考えられる。**規模・形状：**プランは円形で、7m×7mを測る。主軸方向不明。**埋土：**拳大の礫を含む

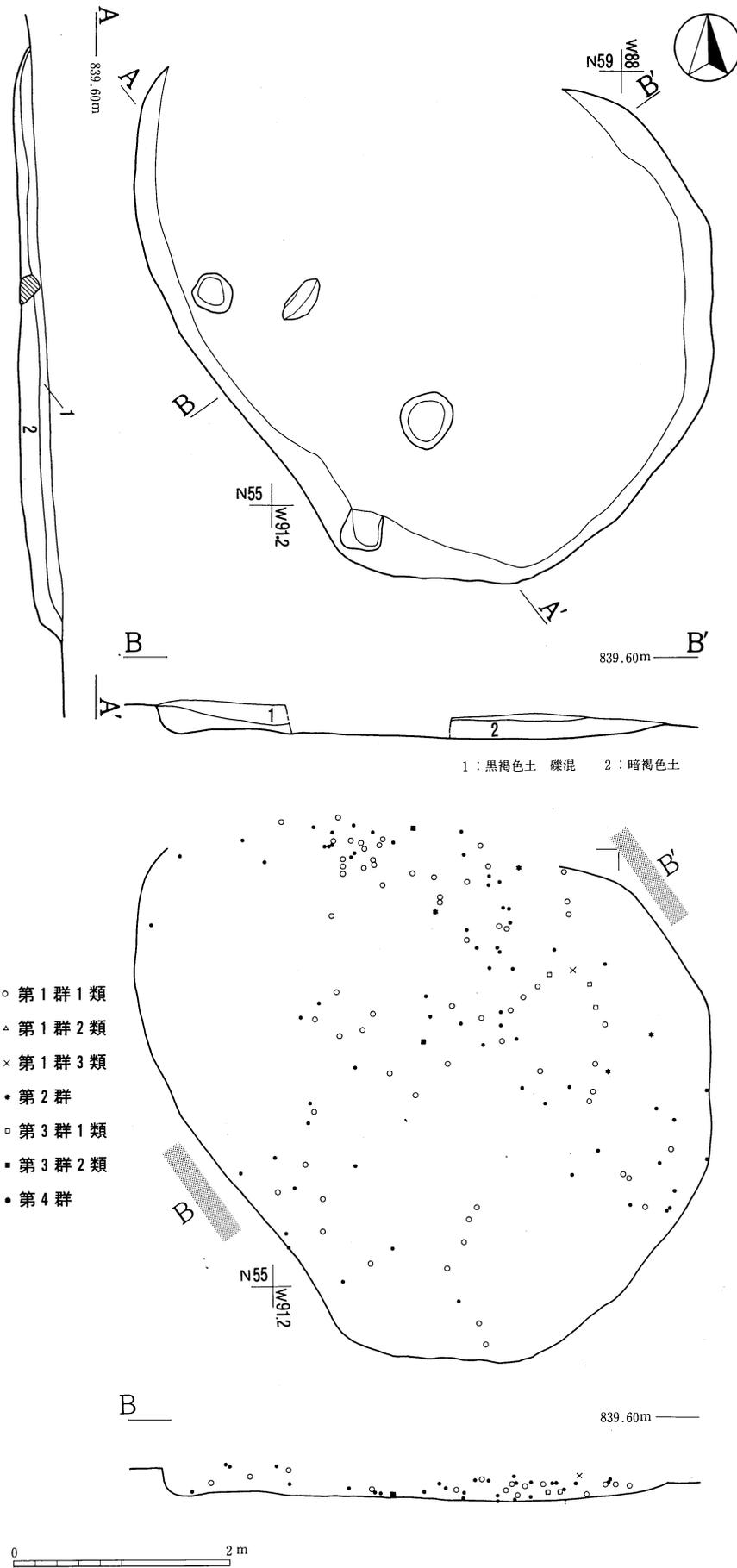


図4 2号住居址実測図及び遺物分布図

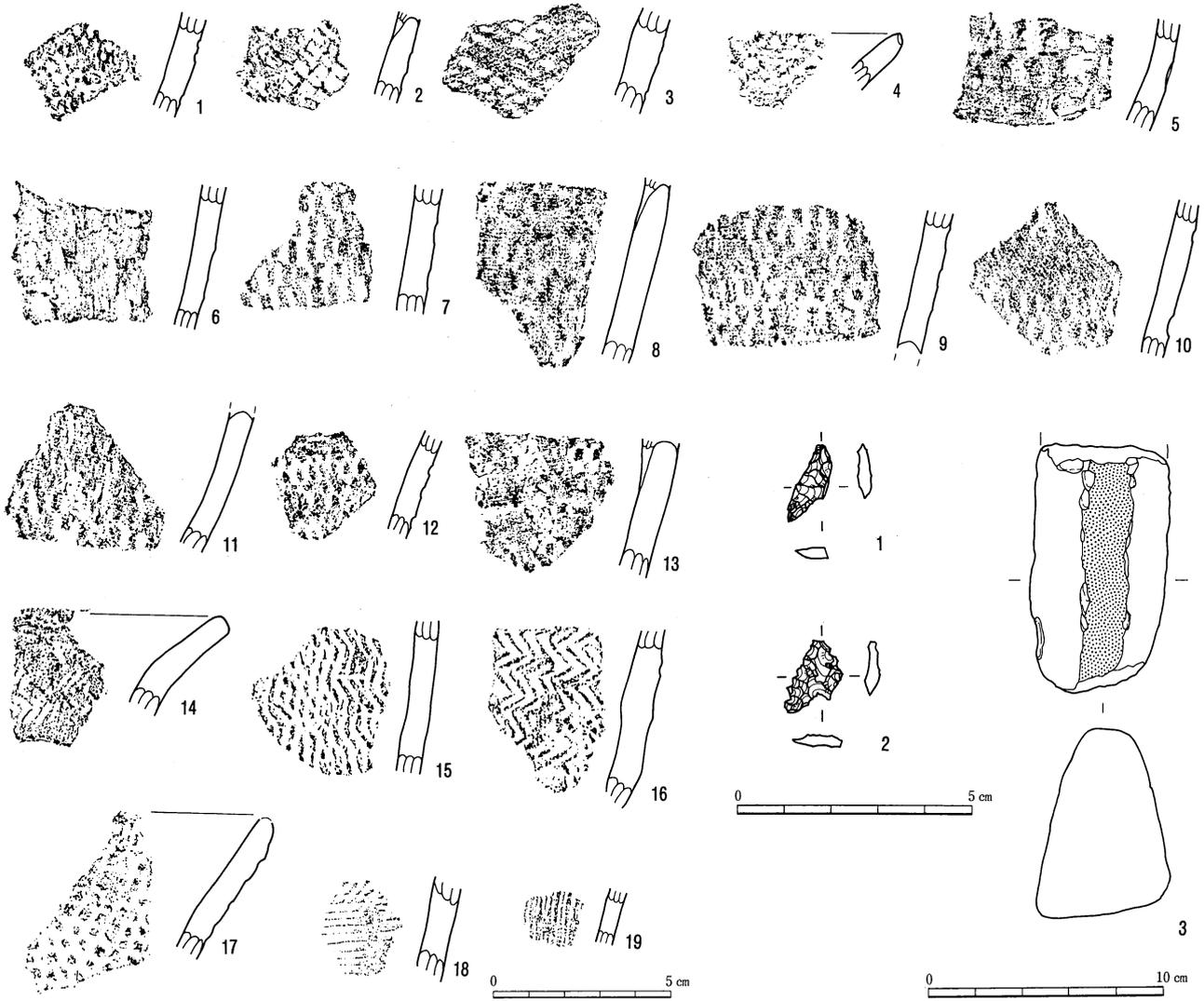


図5 2号住居址出土遺物実測図・拓影（1～19=1：2）

黒褐色土中に、焼土を含む黒褐色土がブロック状に入る。その下層に礫を含まない暗褐色土が堆積する。礫の分布は散漫で南東から北西にかけて分布している。**床面・壁**：壁は高さ30cmを測り、立ち上がりは緩やかである。床面は軟らかく、平坦で、中央に向かって傾斜する。**炉**：なし。**柱穴**：なし。**遺物の出土状況**：出土遺物の多くは埋土第1層から出土した。**遺物**：1群1類A種65点(20～39・59)、同2類A種3点、同B種19点(40・41)、同C種1点(43)、同3類19点(42)、2群12点(44～46)、3群1類2点(50・51)、同2類9点(47・48・52～58)が出土している。1群1類A種の内訳は格子目文44点(20～30)、市松文9点(31～35)、山形文6点(36・37)、楕円文12点(38・39)となる。1群2類B種のうち16点は、図14に示した2号住居址の上層出土土器(102)と接合した。住居址埋没後の混入品であろう。石器のうち4～6は石鏃で、それぞれI類-C-a、III類-C-b、I類-B-c(P89参照)に分類される。7・8はピエス・エスキュー、9は小剥離痕のある剥片II類である(P98)。また、図示しえなかったがスクレイパーA類1点、小剥離痕のある剥片II類2点がある。これらの石器はすべて黒曜石製である。10は打製石斧である。ホルンフェルス化頁岩製で節理から破碎し風化した厚い板状礫を素材とする。風化面が両面に残り、剥離が大きく、加工途中で折損したと思われる。11は磨石で輝石安山岩の円礫を素材とする。風化が進み不明瞭だが、a面は作出されないらしい。**時期**：2号住居址同様、土器のあり方からみて立野式期に属すると考えられる。

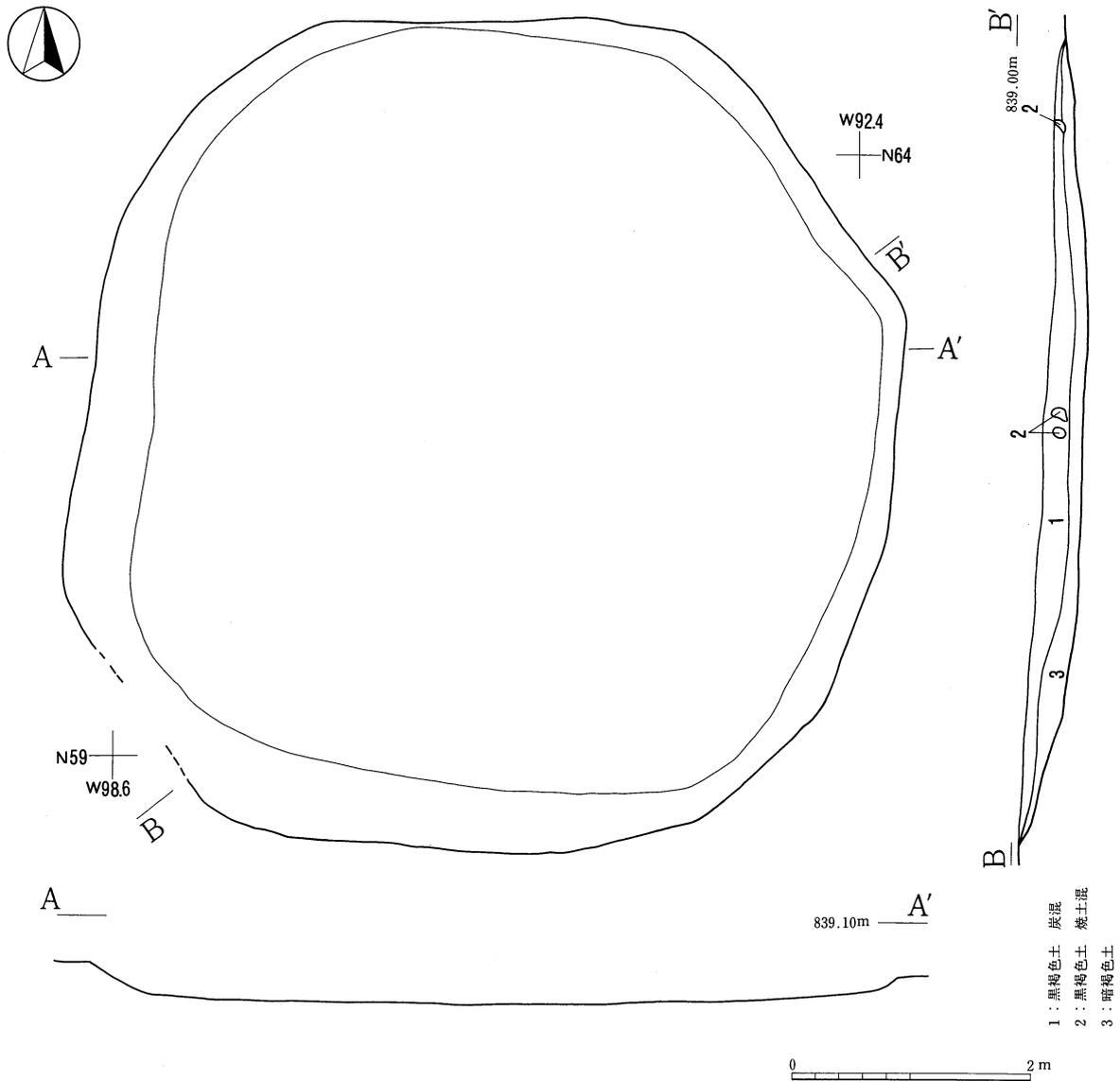


図6 3号住居址実測図

イ 土 壙 (図9~12、PL5・17・18)

前期に属する9号土壙以外は時期を特定できないが、III層上面検出の2・3・19号土壙を除けば縄文時代のいずれかの時期に帰属させられると考える。縄文時代の土壙は東側の尾根上平坦面に1号土壙及び3基近接した4~6号土壙が分布し、西側小尾根頂部~南斜面に8~11・13・15~18号土壙が集中的に分布する。また、西側小尾根北斜面には7号土壙が存在する。

4~6号土壙はほぼ同形状、同規模で一直線上に並ぶ。内部施設はないが、検出面での平面形が楕円形、底面の平面形が長方形に近く、いわゆる陥穴に似た形態を示す。

小尾根頂部周辺の土壙群のうち9号土壙以外をみると、11号土壙を除けば埋土に礫やロームブロックが入り、短期間に埋没したことが想定できる。11・13・15号土壙は同形状で底面に数個の小穴が付随しており、やはり陥穴に似る。他は円形に近い平面形で特に施設はないが大形で深く、形態上は9号土壙に似る。

小尾根北斜面の7号土壙も大形で深く、埋土はロームブロックを含む。単独で存在したのではなく、用地外に群在する土壙群の1つと考えたい。

これらの土壙から出土した遺物は若干あるが、いずれも土壙に伴っていたとは言い切れず、埋没時の混

第3章 調査

- 第1群1類
- △ 第1群2類
- ▲ 第1群2類(102の接合個体)
- × 第1群3類
- 第2群
- 第3群1類
- 第3群2類
- 第4群



図7 3号住居址遺物分布図及び出土遺物実測図

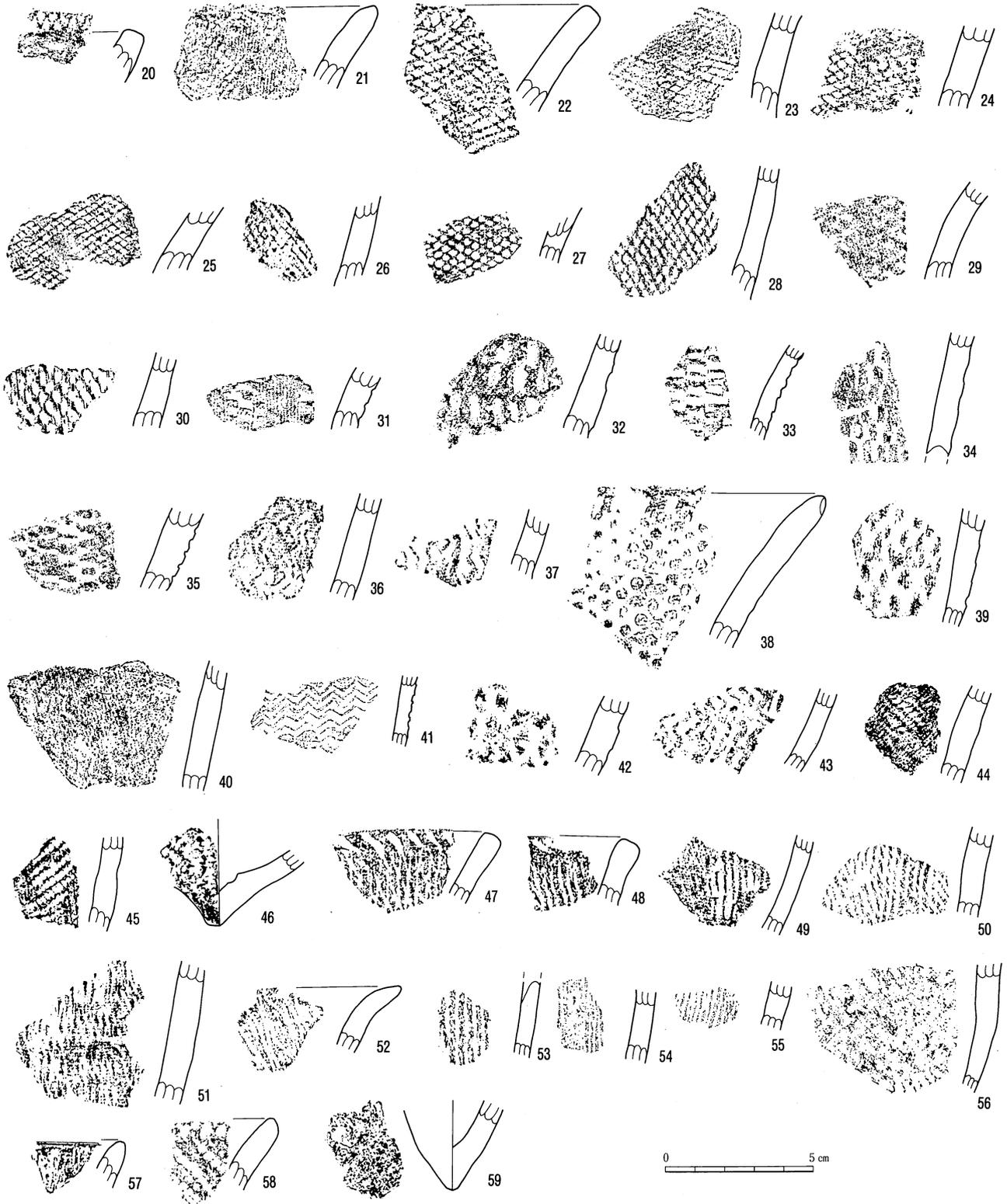


图8 3号住居址出土遺物拓影 (1 : 2)

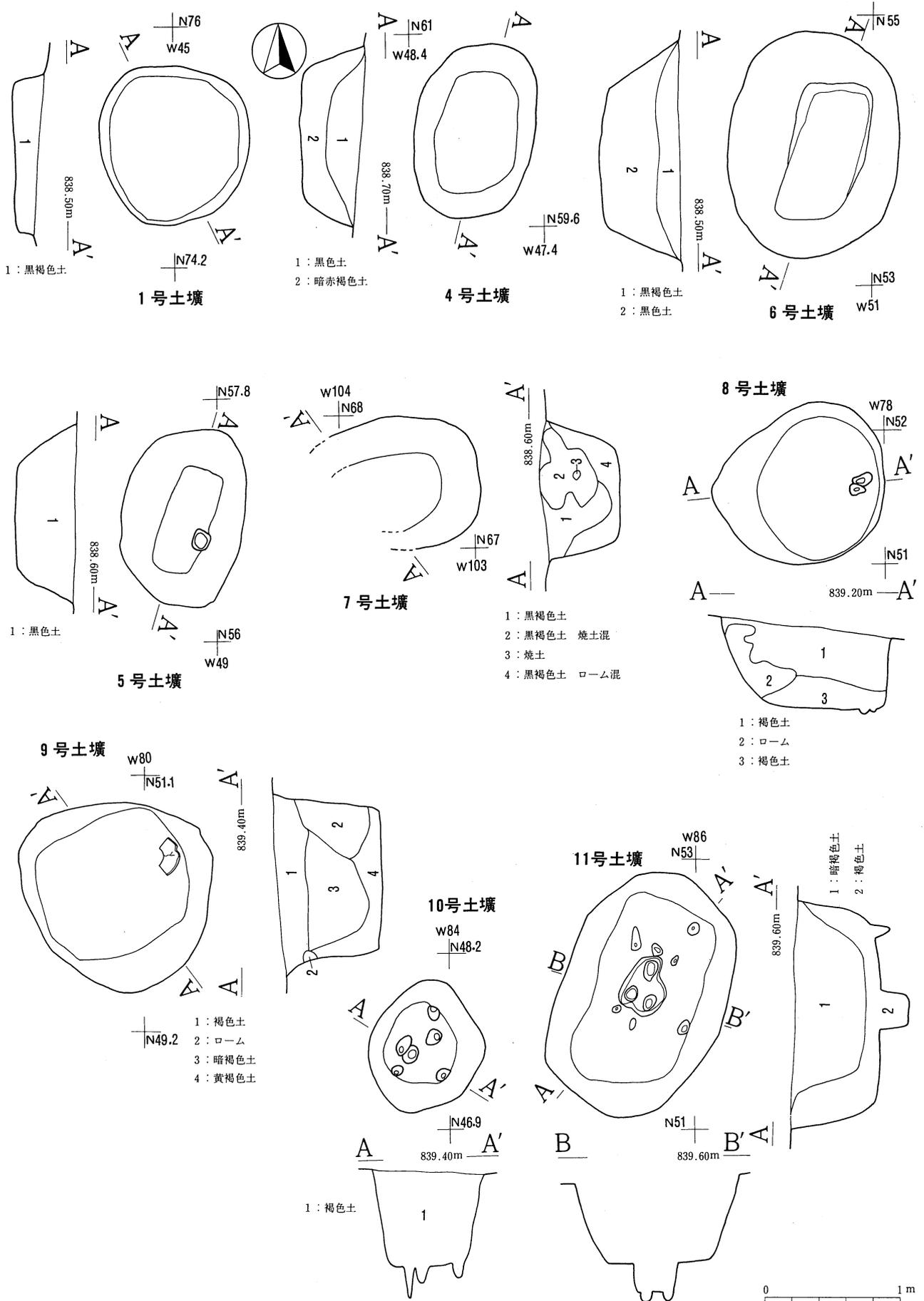


图9 土壤实测图1

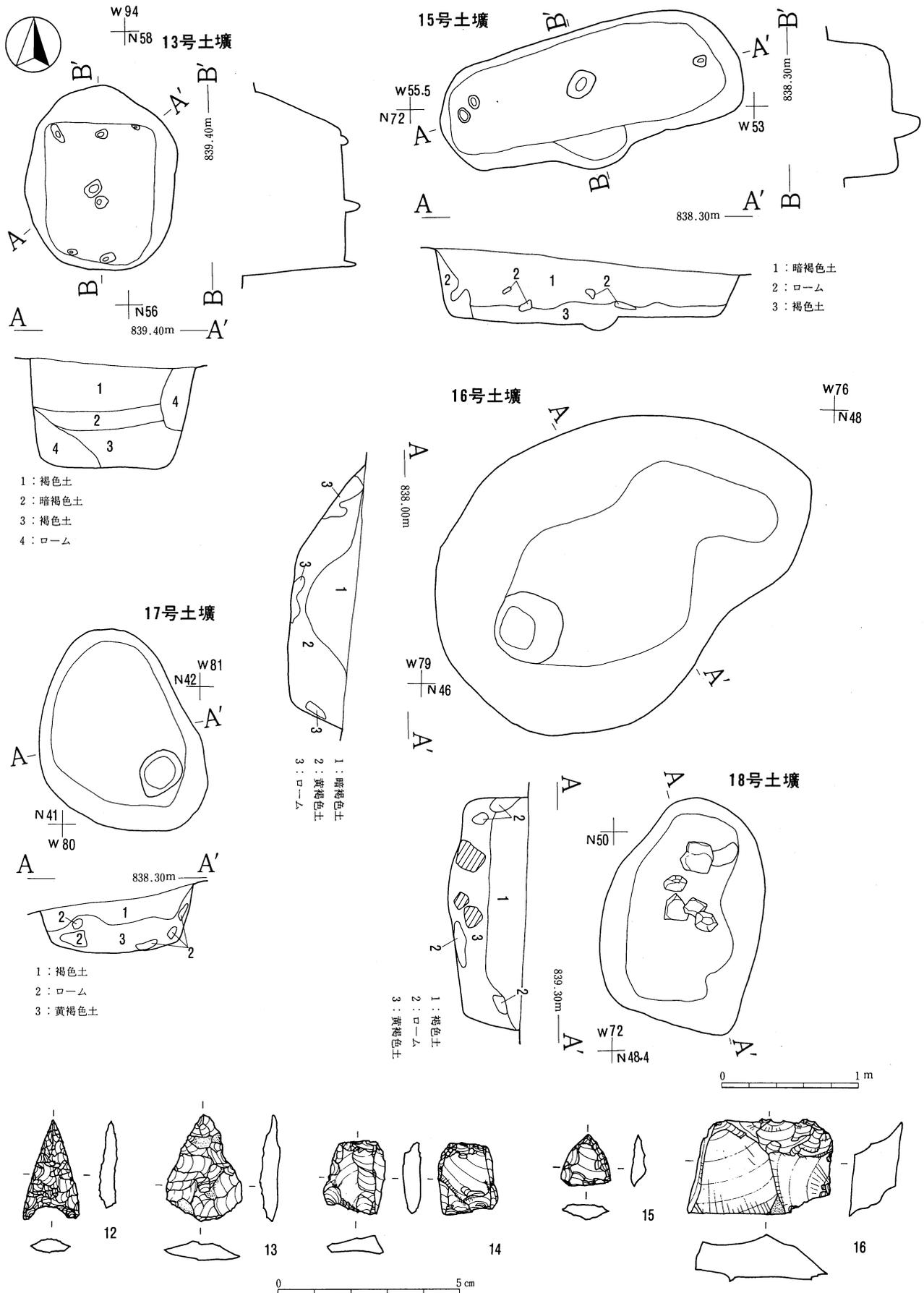


図10 土壌実測図2及び出土遺物実測図1 (12~14=7号土壌、15・16=9号土壌)

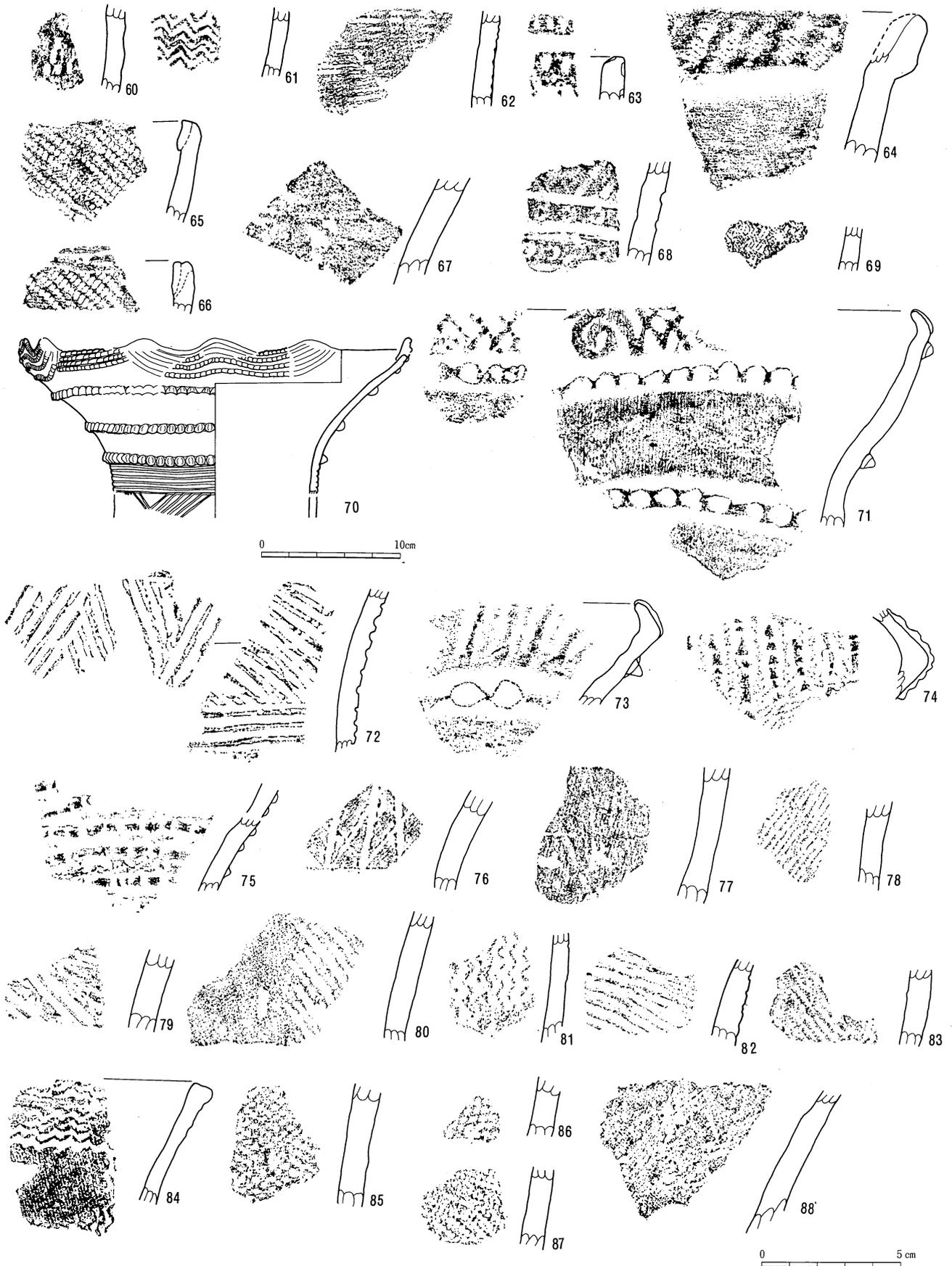


図11 土壙出土遺物実測図・拓影2 (1 : 2、60~67=7号土壙、68・69=8号土壙、70~75=9号土壙、76・77=10号土壙、78~80=11号土壙、81=13号土壙、82~84=15号土壙、85~88=16号土壙)

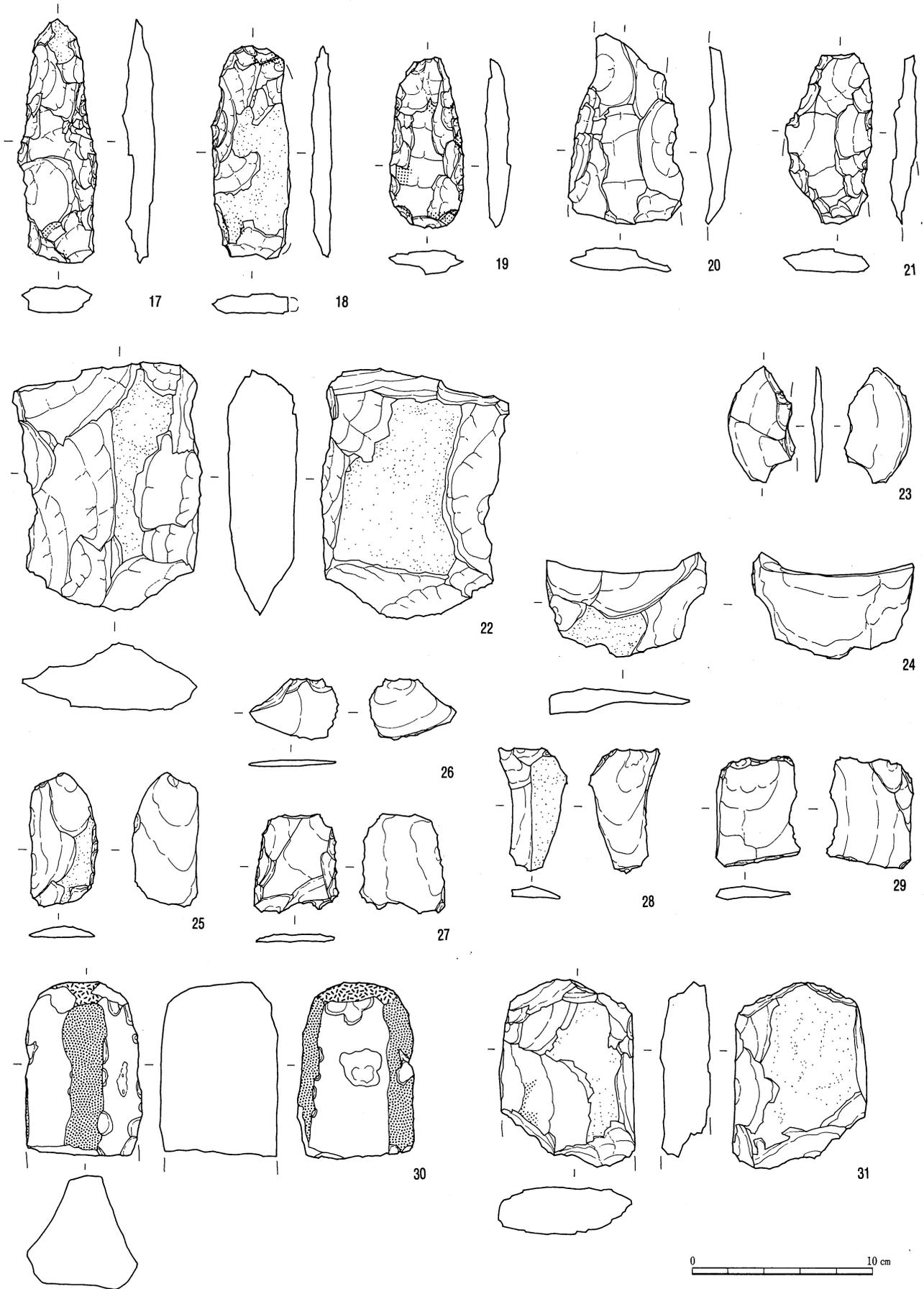


图12 土壙出土遺物実測图3 (17~29= 9号土壙、30= 7号土壙、31=15号土壙)

入の可能性が高い。このうち15号土壇出土の打製石斧(31)は両平面の突出部分と両側面が研磨され、特に側面は著しい。研磨痕はすべて長軸に平行している。

9号土壇は平面円形で、大形かつ深い。埋土はいくつかのブロックに分かれ、埋め戻された後さらに陥没した可能性をもつ。底面付近から器体の3分の1程を残存させた土器(70)が正位に置かれて出土し、石器も多かった。土器は6点あり、大洞遺跡の分類(三上1987)に従えば前期末～中期初頭の第1群に該当する。70～73はその中でも第3種に、74は第4種または第5種に当る。70は2個1対の小波状口縁をとり、I-1文様帯には横走する結線状浮線文、I-2文様帯には3条の指頭圧痕付き隆線文、II-1文様帯には重層する平行沈線によるV字状、逆V字状の構図が、それぞれ描かれる。石器類にはチャート製で無茎平基の石鏃(15)、黒曜石の石核(16)、打製石斧6点(17～22)、打製石斧製作時の剥片12点(23～29)がある。打製石斧は本体、剥片ともホルンフェルス化頁岩を用いる。22は破碎した厚い板状礫を素材とし、大きな剥離痕だけが残るので加工初期で放棄されたのだろう。他は剥片を素材とするが、20には欠損後の再加工が試みられている。剥片には主要剥離面の反対面に古い剥離痕が、主要剥離面の打点付近には縁辺加工とみられる小さめの剥離痕が残り、打製石斧の加工・再加工時に生じたことは疑いない。また、17・20・23は同一母岩を用いているとみてよく、24・25と剥片1点、26～29もそれぞれ同一母岩であった可能性がある。打製石斧と関連剥片が一括されていたと考えてよい。以上のような状況からみて、9号土壇は副葬品をもった墓であった可能性が指摘できよう。

No.	長径×短径×深さ(cm)	平面形 (底の平面形)	施設	埋土	検出	遺物
1	118×110×22	円形		単層	IV層上面	
4	128×88×45	楕円形		2分層	V層上面	
5	134×92×49	楕円形 (隅丸長方形)		2分層	V層上面	
6	170×125×65	楕円形 (隅丸長方形)		2分層	V層上面	
7	(100)×152×55			2分層 ブロック含み	IV層上面	土器60～63(早期前半第1群)、64(早期後半第6類)65・66(前期)67(後期)石器12・13(石鏃)、14(ヒエス・エスキーユ)
8	125×120×68	円形 (楕円形)	底面に小穴2	2分層 ブロック含み	VI層上面	土器68(早期前半)69(同後半)
9	144×140×80	円形 (隅丸長方形)		3分層 ブロック含み	VI層上面	土器70～75(前期末)、石器類15(石鏃)、16(石核)、17～22(打製石斧)23～29(打製石斧剥片)
10	88×86×75	隅丸長方形	底面に小穴若干	単層礫含み	VI層上面	土器76(田戸上層式)
11	195×132×62	隅丸長方形	底面に小穴10	2分層	VI層上面	土器78(早期前半第1群第1類)、79(同第2または3類)、80(前期)
13	135×110×80	隅丸長方形	底面に小穴7	3分層 ブロック含み	VI層上面	土器81(早期前半第1群第2類)
15	218×100×55	隅丸長方形	底面に小穴4	単層ブロック含み	V層上面	土器82・83(早期前半第2群)、84(同第1群)、石器31(打製石斧)
16	290×210×48	楕円形	底面に径50cmの穴1	2分層 ブロック含み	V層上面	土器85・86(早期前半第1群)、87(前期)、88(後期)
17	158×112×50	楕円形	底面に径30cmの穴1	2分層 ブロック含み	V層上面	
18	162×115×55	楕円形		2分層 礫ブロック含み	V層上面	

表1 土壇一覧表

ウ 集石 (図13)

6号集石は西側小尾根南斜面に位置し、拳大の亜角礫が1.2m×1.2mの範囲に分布している。V層中で検出。付近の遺物より、早期押型文期に属する可能性があるが、確実ではない。

エ 石囲炉 (図13)

西側小尾根頂部北斜面に位置する。III層中で検出。付近より後期の土器片が多出したので住居址の存在を予想したが、掘り形や床面、柱穴等は検出されなかった。北東に開く「コ」の字形に縁石を配し、南西部は三角状に張り出して縁石は焼け、数個の塊に割れていた。炉床は15cm程掘り込まれていたが、炉床には焼土はなく埋土中に焼土粒が認められたのみである。

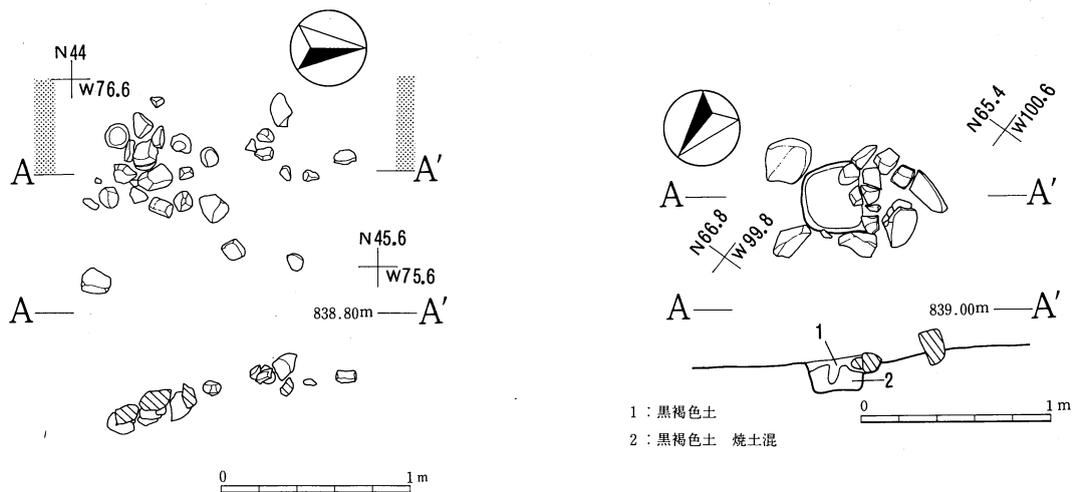


図13 6号集石及び石囲炉実測図

オ 出土土器の分類

量が多く内容の豊富な早期前半(押型文土器が中心)、早期後半～末葉(貝殻条痕文系土器が中心)、後期中葉(加曾利B2式前後)については独自に分類し、検討を加える。

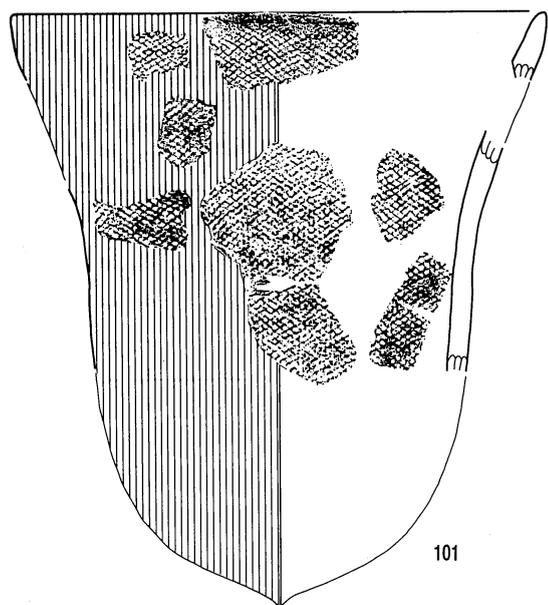
① 早期前半の土器 (図14～23、PL6～10)

第1群 押型文土器

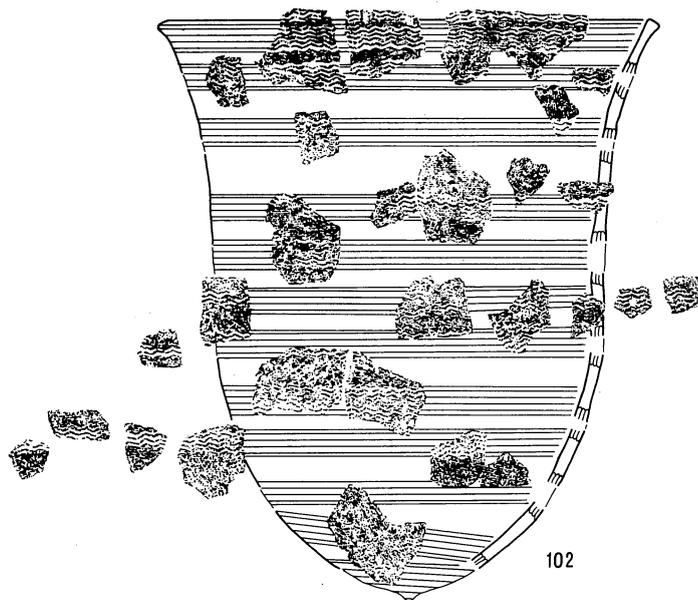
第1類 立野式土器 (101・103・105・108～215)

A種 全面施文されるもの (101・103・105・108～190)

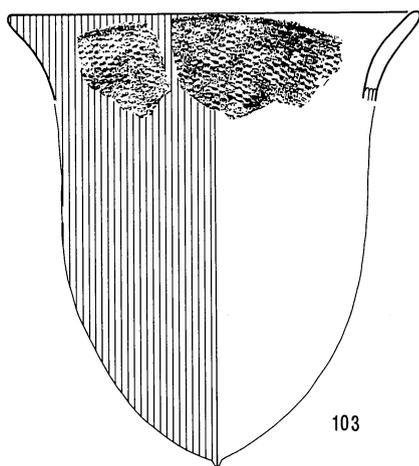
器壁は7mm～10mmと厚く、胎土には多量の石英、白い軽石、スコリア、雲母、輝石等を混入する。文様は格子目文、市松文、山形文、楕円文、ネガティブな楕円文がある。108～124は格子目文が縦位密接施文される。124のみ破片上部で縦位、下部で横位に施文されている。1類の格子目文はほとんどが菱形を呈しているが、数点正方形のものがあつた。口唇部形態は面取りして平らになるものと、平らにならず断面山形を呈する2種類に大別され、後者は110・115のように口唇部内側がいくらか削ぎ気味のものと、そうでない108などに分けられる。全体の器形は、図上復元した101・103・105(図14)の3種類に収約されるが、格子目文の場合103・105の器形が多い。125～155は市松文をもつ。口唇部付近では縦位密接、それ以下は横位密接施文される傾向が強い。129～131のように口縁部付近では斜位に施文されるものも見られる。150～153・155は、文様が直交する部分で、151を除いていずれも頸部～胴部付近と思われる。151は口縁部付近で横位以下縦位という文様構成が考えられるが例外的である。市松文の各々の形は、正方形、長方形、隅丸方形とバリエーションに富んでいる。口唇部は、格子目文のそれとほぼ同形態であるが、刻みをいれる129・130、口縁部にややはみ出して刻みを入れる128、回転施文するとみられる131の3つに分かれる。市松文の1粒



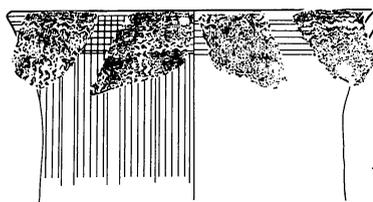
101



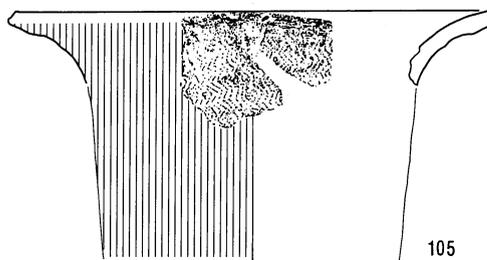
102



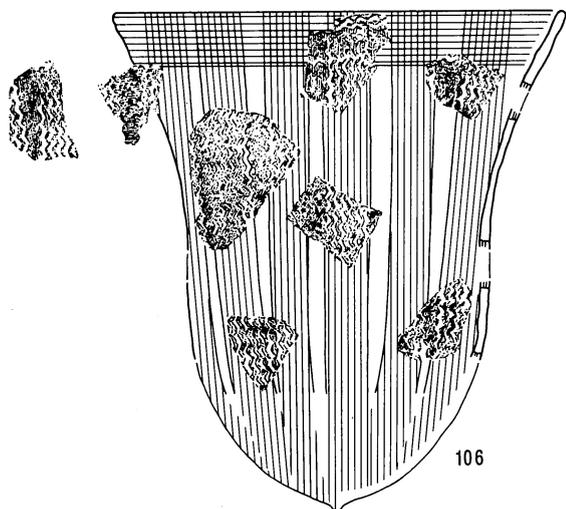
103



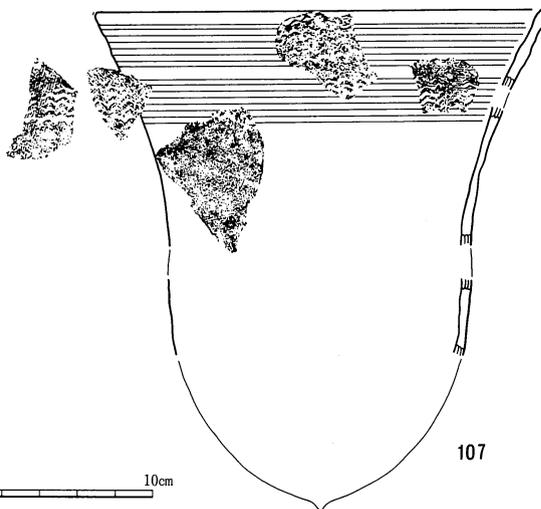
104



105



106



107

0 10cm

図14 縄文時代早期前半土器実測図・拓影1 (1:4)

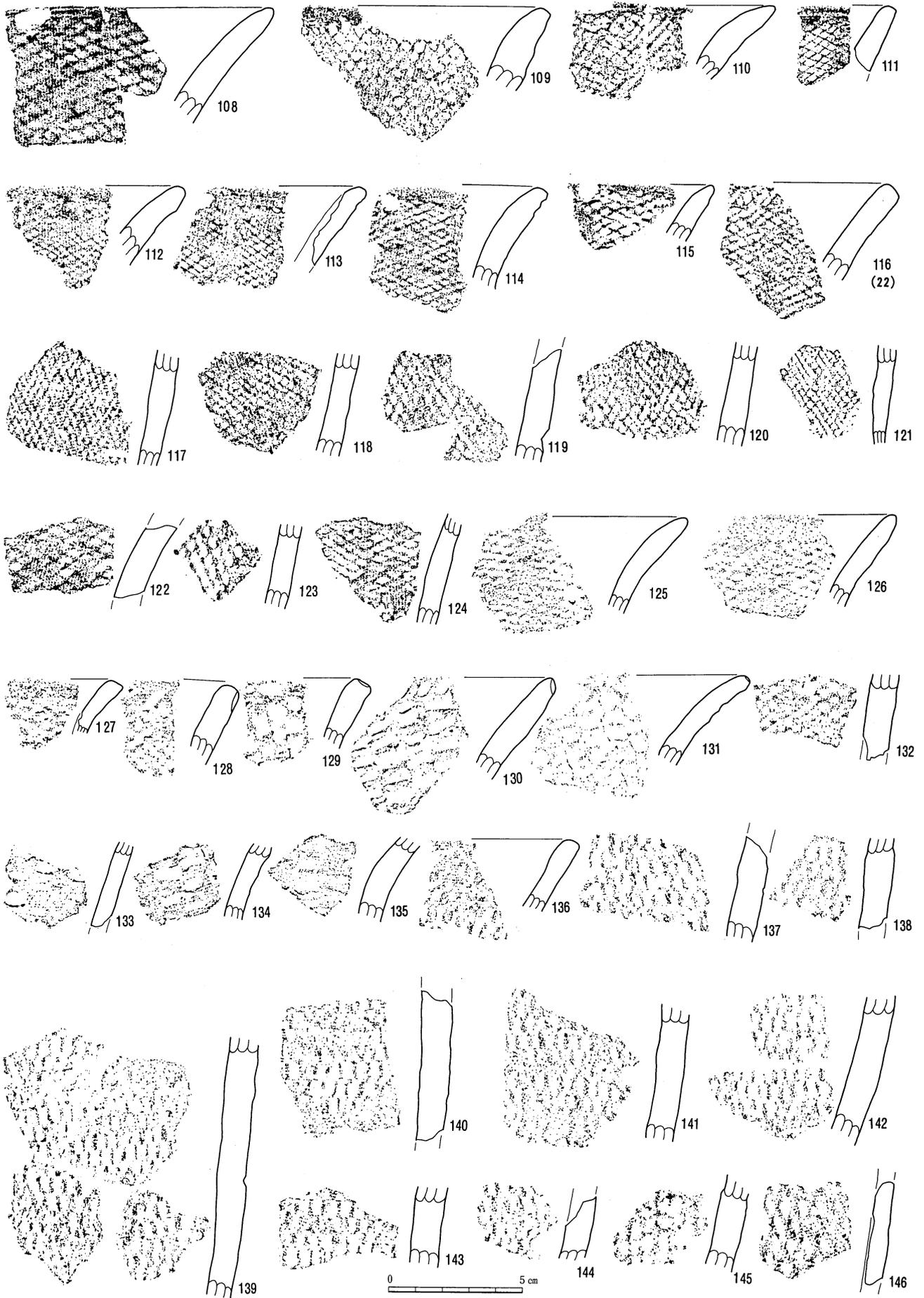


图 15 縄文時代早期前半土器拓影 2 (1 : 2)

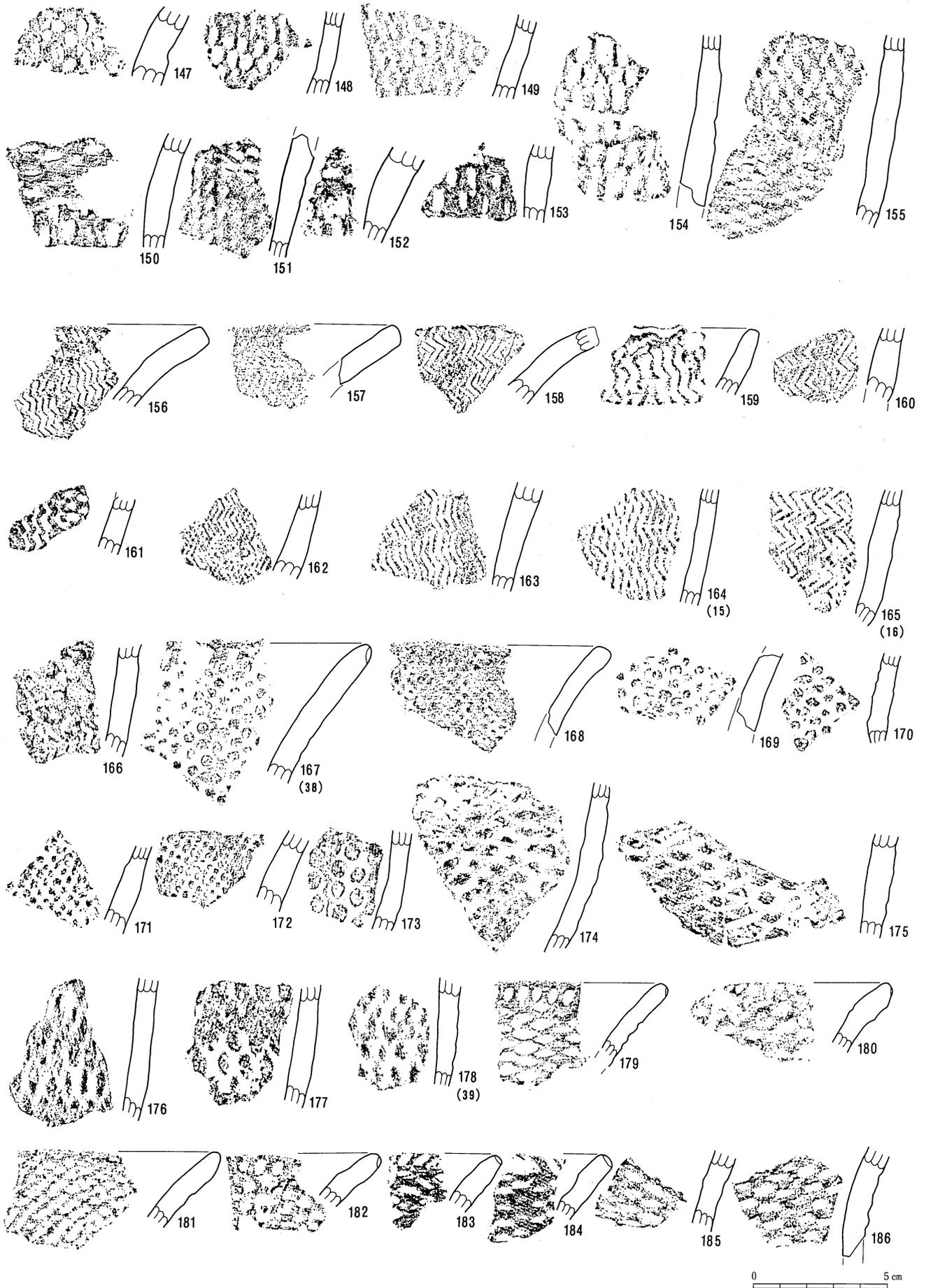


図 16 縄文時代早期前半土器拓影 3 (1 : 2)

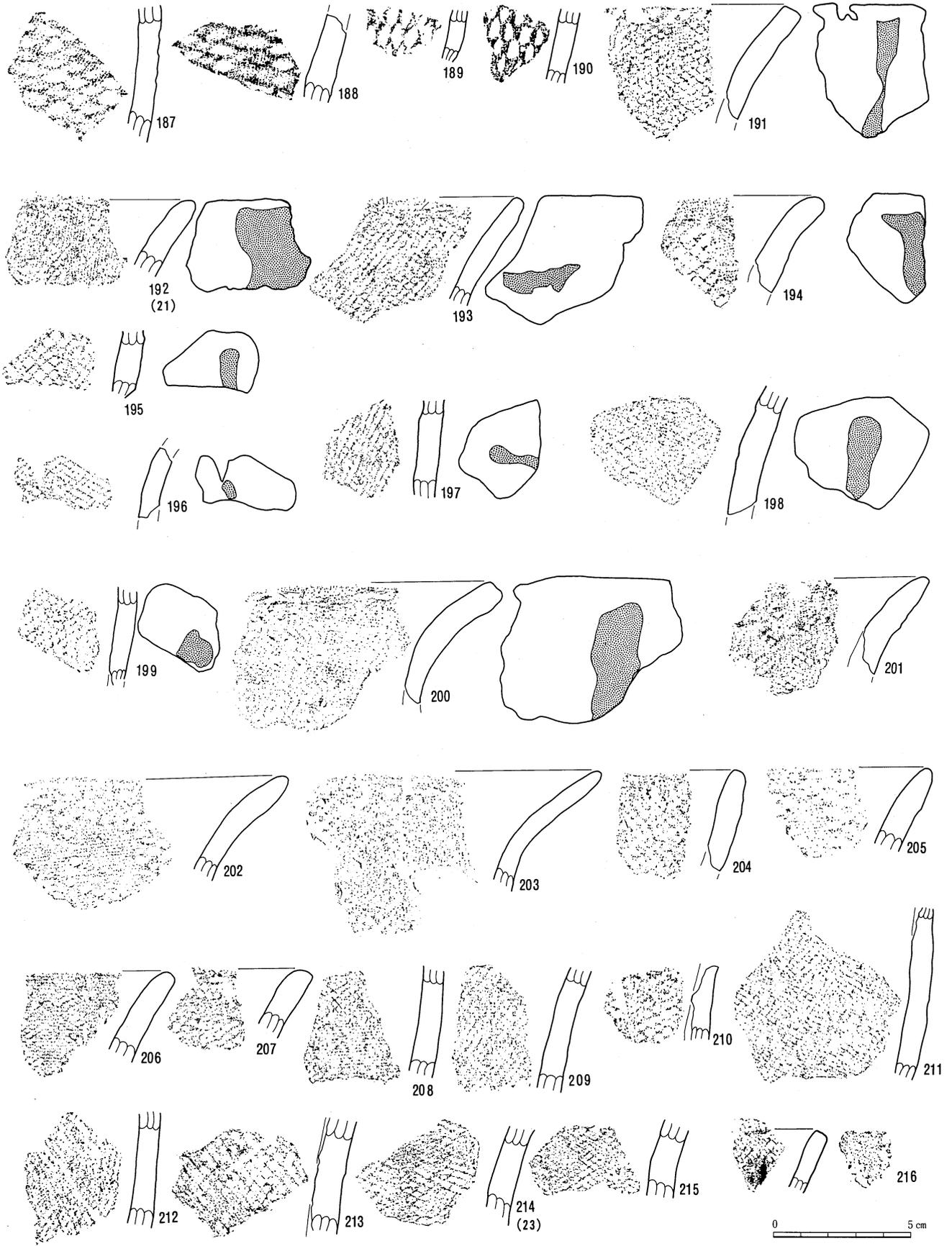
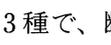


図17 縄文時代早期前半土器拓影4 (1:2)

が大きいものほど、口縁部付近では、やや斜位密接施文される傾向がみられた。156～166は山形文で、原体に対して線的な陰刻を施しているが、159・161など例外も見られる。口縁部から縦位密接に施文されると思われるが、底部付近の様子はわからない。口唇部は面取りされ、その上に刻みを施す156、回転施文される159の二者がある。167～178は楕円文が施される。文様は、楕円というより正方形の市松文のかどを削り丸くしたものと、1粒が1cm前後と大きくやや菱形を呈するものの2種類ある。前者は縦位密接の傾向があり、後者は直交密接施文である。口唇部形態は他と同じく2種類ある。179～190はネガティブな楕円文が、口縁部付近では、縦位、以下横位に施文される。平面楕円、断面舟底形を呈する明確な例のみとりあげたが、その原体に施される文様を後項(P116)で復元した。口唇部には、刻みを入れる例が多い。181は格子目文のようにも見えるが、文様の1単位の断面が舟底形を呈するのでここに入れた。文様は  の3種で、断面は  の2種類ある。器形は103のように口縁部がひらき胴部が砲弾状になるものが多い。格子目文、市松文の原体の復元は反復の読みとりが難しく、131が長さ1.6cm前後で2条の刻みをもつことがわかるのみである(註1)。山形文も線的な陰刻のため反復の読みとりは難しい。第1類の土器には押型文の主要文様要素がすべて含まれ、山形文と格子目文は縦位、市松文とネガティブ楕円文、楕円文は縦位+横位をとる傾向が見られた。

B種 全面施文の後磨消されるもの (191～215)

下り林遺跡1群1類B種(註2)と同様なものと、無文部を意識したものを集めた。器厚、胎土への混入物ともA種と同様である。磨消しのやや明確なもののみスクリーントーンで示した。磨消しの多くは縦方向のようである。191の口唇部には撚糸の圧痕のようなものが見られた。200は端を山形に沿ってV字状に加工した原体で、最初から間隔をおいて縦位に施文し無文部をつくっており、明らかに帯状施文の胎動がある。207は口縁部直下横に磨消しを施す。磨消しが格子目文に多く、帯状構成の起源を考えていくと、沢遺跡や栃原岩陰遺跡のように格子目文が帯状施文される例は注目すべきと思う。また161は大川式に見られる山形文とネガティブ楕円文の併用型で、1点のみだが注目される。山形の条数は2条で原体は短い。併用型とはいえ縦に帯状施文される点は注目される。胎土は1類と同様であった。第1類はバリエーションに富み、今後詳細な分析からなお系統的追求の可能性があるとと思われる。

第2類 樋沢式土器 (84・102・104・106・107・217～272・276)

A種 胎土に黒鉛を含み帯状施文されるもの (217～222)

217～222は器壁が4mm～6mmと薄く胎土に黒鉛を含み青灰色を呈する。また、白い軽石、長石、輝石、スコリアの小粒子が混入している。器面は221を除き外面に光沢がありつややかで内面がややざらざらしている。221は表面がざらつき化粧粘土を施してあり、長さ10cm前後、径4mmの短く細い原体に4条前後で2単位の起伏のゆるやかな山形文を刻んでいる。文様構成は口唇部と口縁部～頸部に1～2条横位に、以下直交して縦位に無文部を多く残し帯状施文されるものと思われる。また口唇部はややふくらみを持っており特徴的である。218～220は口唇部に施文され口縁部は横位帯状施文される。222は文様の直交部分である。A種は10数片で、沢式と呼ばれる土器と同じである。本遺跡での在り方は長い期間を通じて主体とはならなかった西からの搬入品と考えられる。

B種 帯状施文されるもの (84・102・223～262)

A種以外の胎土で帯状施文される土器を一括した。223のみ精選されて混入物をほとんど含まない淡い黄

(註1) 条の定義は岡本東三の見解〔岡本1987〕に従った。

(註2) 下り林遺跡の報告〔近藤尚義1987〕で分類した第1群1類B種の土器とは、立野式の中で全面施文された後に文様を部分的に磨消したもののことをいう。これは、赤木清の指摘〔赤木1937〕と若干異なるものの、文様効果という点では注目されるべき手法と思われる。

土色の胎土である。他と異なり丸みをおびた口唇部と内湾気味の口縁部を持っており、縦位に帯状施文されている。224~251は山形文をもち器壁が4mm~6mmと薄く焼成も良好である。胎土には石英、長石、白い軽石、スコリア等を含んでいるが、いずれも1類土器よりも粒子が小さい傾向が見られる。224・225・239・240はB種中でも最も短かく細い2条2単位、長さ10mm、径4mm前後の原体を使用していると思われ、胎土等から同一個体の可能性がある。内外面ともあまり調整は良好ではなくややざらついている。文様構成は口縁部に1条横位、以下直交して縦位に帯状施文され、さらに口唇部、内面にも横位に1条帯状施文している。口唇部はややふくらみをもつがA種ほどではない。235は表面の摩耗がひどく施文状況が明確ではないが、拓影左側にやや斜位に帯状施文され、右側上部には山形文が横位帯状施文されるのが観察された。84は直交する帯状施文で縦の帯状施文の間隔が広い。口唇部はA種のようなふくらみを持っている。原体は3条2単位で長さ15mm、径3.8mmである。249は横位2条はやや間隔をあけ、以下縦位に帯状施文している。102は図上復元した土器である。文様構成は口唇部には横位、口縁部に横1条、以下胴部下まで横位に帯状施文される土器である。原体幅以上に無文部を残すのは頸部あたりと思われ、他は間隔に規則性はあまりなく、底部あたりではやや斜位になったり密になったりしている。推定口径26cmで口唇部はやや肥大している。器壁は5mm前後と薄い。胎土にはやや粒子の粗い長石、軽石が混入され焼成は良好である。5条2単位、長さ14mm、径3mmの原体を使用している。横位に帯状施文される文様構成は、細久保遺跡第1類b群に見られるタイプだが、A種と極めて類似した口唇部をもち、原体が短く山形の形状も小さくかどがはっきりしており、樋沢式に近い土器であろう。この土器については後項でさらに考えることにする。253~262は小粒の楕円を陰刻した原体で帯状に施文した土器である。261・262の様にクロスする帯状施文をとり、縦位の施文は253・254の様にやや密になるものもみられ統一性に欠ける。253~255は原体の両端までは押捺されない。口縁内面に横位に施文する土器は見あたらなかった。

C種 直交密接施文されるもの (104・106・107・263~272・276)

従来普門寺式の名称で呼ばれた土器である(註1)。104・106・107は図上で復元した。104は口縁部片のみであるが、口縁部に横位に1条、以下縦位にやや無文部を残し、次に横位に施文している。口縁部内面にも1条横位に施文されて口唇部にも施文されている。表裏とも摩耗がひどいが、縦位はほとんど無文部を残さずに施文されているようである。原体は5条2単位で長さ18mm前後、径25mm前後である。胎土への混入物では雲母、石英が目立つ。106・107は胴部上部から口縁部にかけて朝顔型にひらく器形になると思われる。推定口径約24cmで、縦位の無文部を残し、口唇部から底部まで施文される。口縁部は縦位施文の後に横位に重複して施文し、口縁部内面には横位に2条をやや間隔をあけて施文している。胎土には大粒の長石が多く含まれる。原体は6条2単位で長さ22mm、径25mm前後である。263~265は同一個体らしく、104・106と同様な文様構成と思われるが、縦位は無文部を残さずに施文される。また縦位施文された後に横位に施文される、山形類1条のみ観察できることから原体の端から端までを使用していないようである。106と異なり口縁部はやや直立気味で内面に施文はない。原体は4条以上の2単位で、長さ20mm以上、径17mmと太い原体を使用している。胎土にはやや大粒の長石や小粒子の雲母を含んでいる。原体の形状から271・272も

(註1) 普門寺式は、園田芳雄が報告した普門寺遺跡出土の第六類押型文土器(a)山形押型文土器〔園田1949〕を指標とするものである。文様構成は口縁部に横位に1条、以下縦位に施文し、さらに口唇部にも施文されている。片岡肇は樋沢式土器を再検討するなかで普門寺式をHCタイプ「口縁部に横帯施文、これに接して以下縦位密接施文(異方向の密接構成)」とし、樋沢式の1つのタイプと考えた(片岡1980)。また、中島宏は普門寺遺跡出土の押型文土器を再検討する中で沢遺跡出土の押型文土器を中心に樋沢I式、「樋沢遺跡の口縁部から胴上部に横帯をもち、胴部が密接施文される類(片岡分類のHCタイプ)―細久保遺跡1類a群も同類である―と細久保1類b群、2類a群などの土器」(中島1986)を樋沢II式と考え、普門寺式を樋沢II式の分布地域の周縁の地にある土器で、樋沢II式に収束されるべきであるとした。中島の言う樋沢II式には、普門寺式と細久保遺跡1類a群が含まれているようで、この二つのタイプが「器面全面施文の傾向」という点で一括されるのは問題であろう。今後、各遺跡での在り方と文様の変遷を検討する中で追求が必要になると思う。

本種に含めたいが、271・272は横位の施文が口縁部なのか頸部あたりまで下がるのかわからず、また、横と縦の施文が重ならずに接したり無文部を残したりするので、若干時間差を示すのかわからない。276は山形文のバリエーションで起伏がほとんどなく直線的である。胎土にやや細かい雲母が目立っている。原体は5条で長さ15mmほどである。施文は縦位施文の後横位施文しており、さらに口唇部内面にも行っている。

第3類 細久保式土器 (274・275・277～344)

A種 直交密接施文されるもの (275)

275は細久保遺跡で分類された第1類a群のタイプである。器厚は5mm前後、焼成良好で、長石が目立つ。原体の反復は読みとれないが長さは20mm以上であると思われる。

B種 横位帯状施文されるもの (274・277～324)

器厚が5mm～7mmで、胎土中には1類、2類と同様の混入物があるが、白い軽石が1類、2類より圧倒的に多い。274・277・278は山形文の上に刺突に近い沈線が施されている。279は刺突の形状から原体端であると思われる。原体は7条で長さ25mmのものを使っている。279の刺突は、無文部に対して縦に施される細久保遺跡2類a群と共通し、282・283は胎土、刺突の形状等が類似しており、横位の楕円文に沿って刺突される同一個体であろう。同様な刺突は鍋久保遺跡第1群第4類の山形文に見られる(註1)。282は口縁に2帯で1単位の横位施文が重複して施文される。313～322は口縁部から底部までいくらか間隔をあけるもののほぼ横位に密接に施文されていると思われる。280～284・292・293・300～323は楕円文で、274・277～279・285～288・291・294～299は山形文、289・290は山形文と楕円文の併用タイプである。292・302はやや斜位に施文されている。302は横位密接施文と重複して斜位に施文されている。313～322は同一個体と思われ楕円文が横位に無文部を残しながら施文される。原体に楕円文を陰刻するまえに縦に削ったあとが荒く残り、それが楕円文の間に現れている。323はやや小粒の楕円文が不規則に施文される。324は日計式を連想させる変形文を横位にやや重複させて施文している。胎土に繊維の混入は見られなかった。B種は2類で見られた異方向の帯状施文のうちの縦の要素がほとんど見られなくなり、横位施文が優性になってきている。また本来の無文部に刺突を施すなど2類の構成からはずれてきている。器形は2類よりも口縁がひらかず、底部付近でややふくらむ傾向がある。器壁の厚さ、胎土への混入物、文様構成、文様の4要素から検討すると、小粒の楕円文を使用する253～262・280～284・300～308が2類と3類の過渡期的様相を示すようである。帯状施文の山形文とこれらの楕円文の同時性については問題が残った。

C種 横位密接施文されるもの (325～340・343・344)

325～340は器壁が10mm前後と厚く、胎土中には多量の雲母、輝石の小粒子が混入される。口縁部直下から底部まで分布もかなり集中して1個体と考えられる。胴部付近の破片では、横位に施文し器面を一周して重複するものが認められる。文様構成はほぼ横位密接に施文される細久保遺跡2類b群と同様であり、大形の土器である。岡谷市大洞遺跡出土の土器(註2)も同様な楕円文で横位密接構成をとり大きさも同様である。343・344は器壁が10mm前後と厚い。大粒な楕円文を横位におそらく密接施文していると思われる。

第4類 高山寺式土器 (345～349)

345～349は楕円文と胎土に繊維を混入することを特徴とする。器厚は10mm～13mmほどで焼成は良好である。楕円の一粒は15mm前後と大きく口縁部から斜位に重複して施文される。口縁部は高山寺遺跡〔浦 浩

(註1) 鍋久保遺跡第1群4類の横位帯状施文の山形文に見られた刺突は、おそらく原体端部で、文様の上下に横一列に並ぶものである。

(註2) 大洞遺跡例は、楕円文のみの文様が横位密接施文されるという純粋な在り方であり、本遺跡では混在の傾向が強いながらも地点的にはまとまりをもって存在していた。

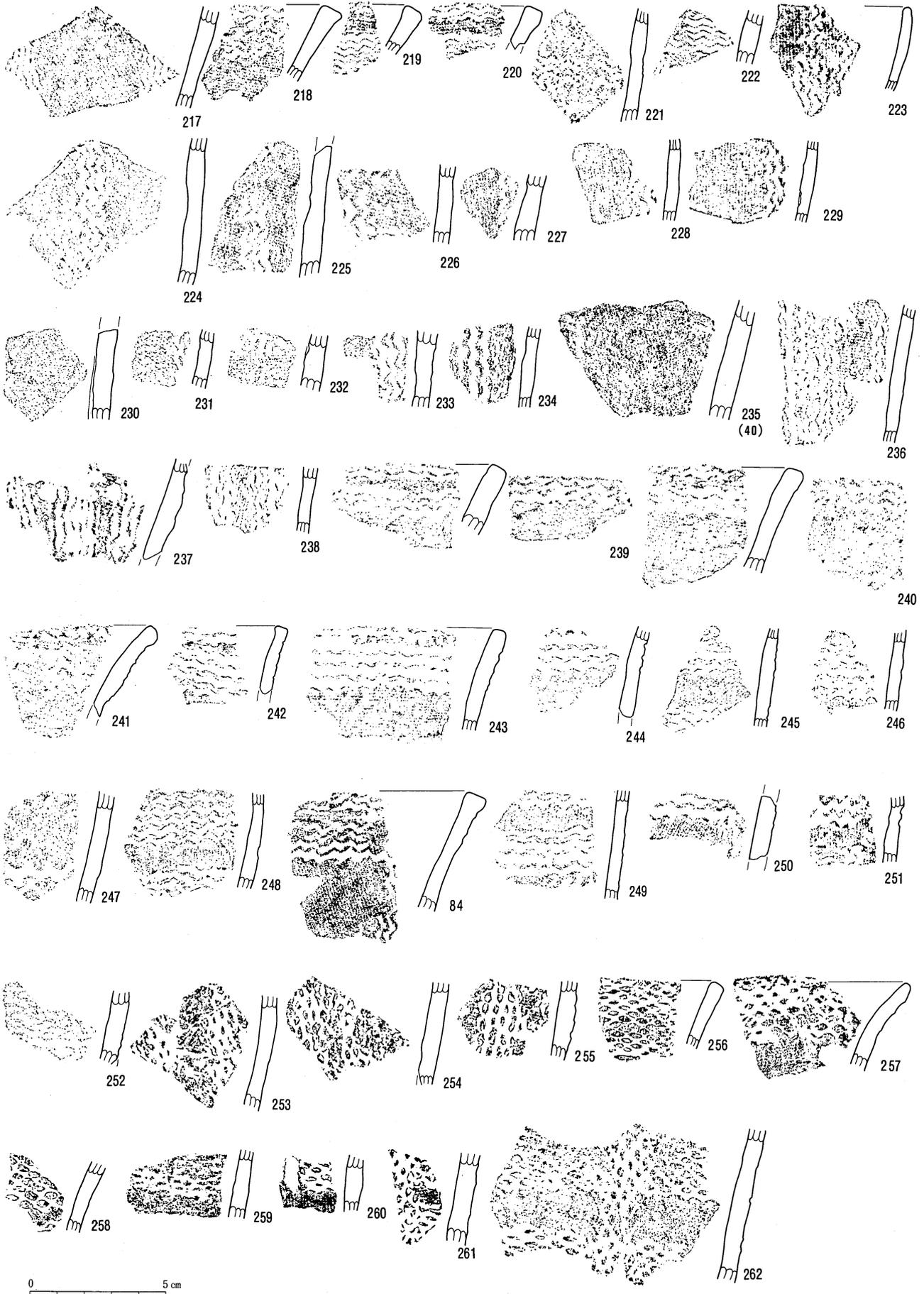


図18 縄文時代早期前半土器拓影5 (1:2)



図19 縄文時代早期前半土器拓影6 (1:2)

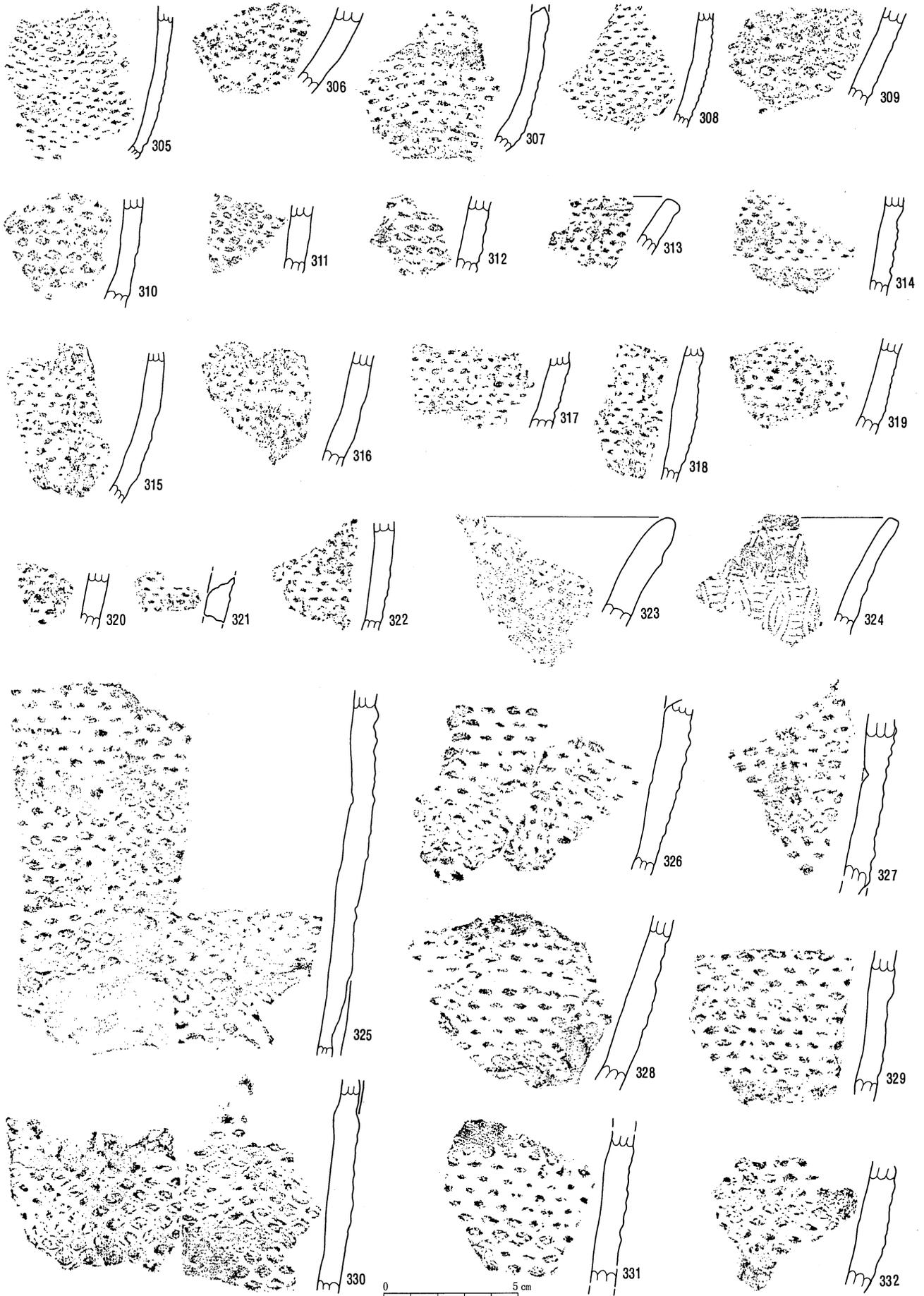


图 20 縄文時代早期前半土器拓影 7 (1 : 2)

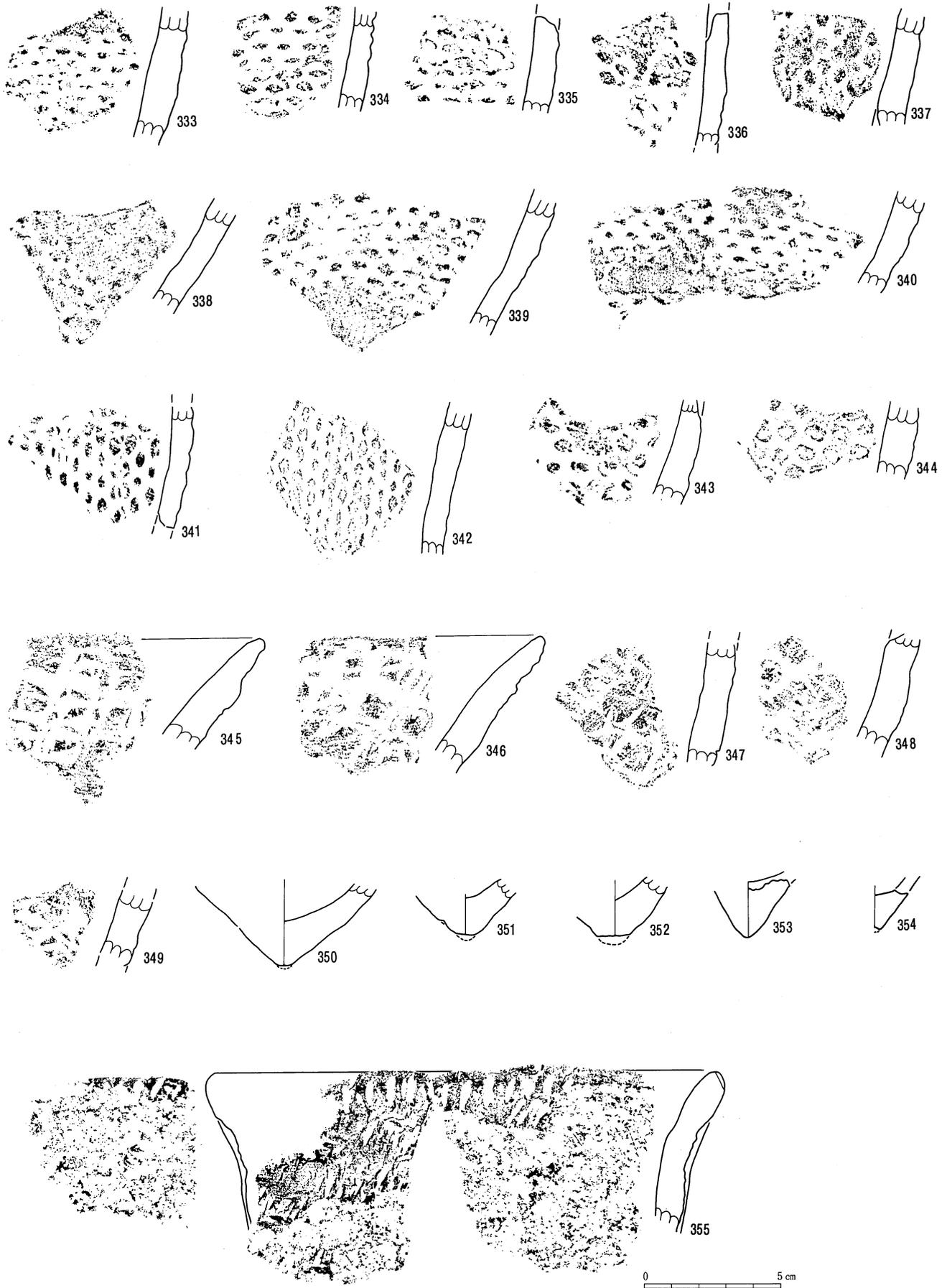


図21 縄文時代早期前半土器拓影8 (1:2)

1939)、先刈貝塚〔山下勝年1980〕で見られたように大きく外反するが、高山寺式に特徴的な口唇部の内側から胴部にかけての斜行沈線は認められない。

その他 (341・342・355)

341は楕円文が直交密接施文される。上部は横位の1条と直交して縦に重複する部分を持ちながら施文される。器壁は8mm前後で厚い。胎土には雲母の粒子が混入される。342は楕円文が縦に密接施文される。器面はかなり摩耗しており器壁は8mm前後と厚い。胎土には白い軽石が目立っている。341・342は第1群2類C種か第1群3類A種のどちらかに入ると思われるが、決定的な根拠がないので竜神平遺跡の楕円文と同様保留にしておく。355は器壁が10mm前後と厚い。器面はかなり剥落しており、山形文らしきものを縦に施文しているように見えるが明確でない。口唇部には刺突に近い断面V字の刻みが施されている。胎土には長石と白い軽石が多く見られる。焼成は良好である。

第2群 縄文施文の土器 (356~386)

356~358は第1群第1類と同様に雲母、石英を多量に含む胎土をもっている。縄文の撚りは、356・357がRLで横位に施文している。359~372は縄文が帯状に施文される。器厚は5mm~9mm前後と一定していない。胎土には石英、スコリア、白い軽石、輝石、雲母等を含んでいるが、356~358ほど多くはない。360は頸部~胴部にかけての破片と思われるがLRの原体を縦に帯状施文している。間隔が狭い部分、やや広い部分が見られ器面に規則的に配列しているとは思えない。縄文を帯状施文する例は横山遺跡出土の土器に見られる〔林茂樹1962〕。しかし樋沢遺跡の口唇部横位、口縁~胴部に横位に3帯の帯状施文以下縦位にほぼ密接施文される〔小杉康1987〕土器と比較すると、帯状施文が胴部以下でなく頸部に近いあたりから、横位でなく縦位になされる。横山遺跡例はこれに近く、樋沢遺跡例はやや遠いと考えられる。口縁部に近く367は器面をていねいに調整し、さらにLR原体を横位施文している。368もRL原体を内外面とも横位施文している。370は口唇部にLRを横位、さらに口縁部横位、以下縦位に直交施文、内面にも施文されている。371はLR原体を直交して施文している。373~375は他と比較してかなり大粒の長石が含まれ内面に指頭圧痕が多く見られた。373・374がRLを横位に、375がLRを横位に施文している。376~386は全面施文される。376は胎土に多量の長石や雲母の小粒子を含み、LRの原体を横位に施文している。379は羽状に施文されているが、原体は不明である。380の原体はRLでやや間隔をあけて縦位に施文している。383は口縁部上部に縄文が施文されている。384・385は内外面ともに施文され、384は雲母が、385は白い軽石が目立って多い。385の内面には炭化物が付着していた。386は乳房状を呈する底部で縦に施文しているようである。

第3群 撚糸施文の土器 (387~420)

撚糸が施文される土器は軸棒に格子目状に撚糸を巻きつけたもの(第1類)と、軸棒にコイル状に巻きつけたもの(第2類)の2種類がある。第1類は立野式土器を出土した二本木遺跡、高山寺式を多く出土した先刈貝塚〔山下1980〕などにある。立野式土器に伴う可能性が高いものは格子目が小さく〔神村透1982〕、高山寺式に伴うものは格子目がやや大きい傾向がありそうである(註1)。第1類と第2類の間に時間差を認めることは、資料的な制約もあり難しい。ここでは器面に現われる文様の差で大きく2つに分け、その中で胎土、施文構成等から第1群土器と対比しながら観察していくことにした。

第1類 軸棒に格子目状に撚糸を巻きつけ施文するもの (387~395)

全体に器壁は7mm~10mmと厚く、胎土中には多量の石英、雲母、白い軽石、輝石等が混入されている。この点は第1群第1類A種・B種の土器と共通している。387・389・394は器面をていねいにみがいている。

(註1) 神村透氏の御教示による。林頭遺跡〔神村1983〕、稲荷沢・二本木遺跡〔神村1983〕でみられる格子目状の撚糸文は小さく、先刈貝塚〔山下1980〕は大きいといった傾向がありそうであるが、今後さらに共伴関係等を検討していかなければならない。

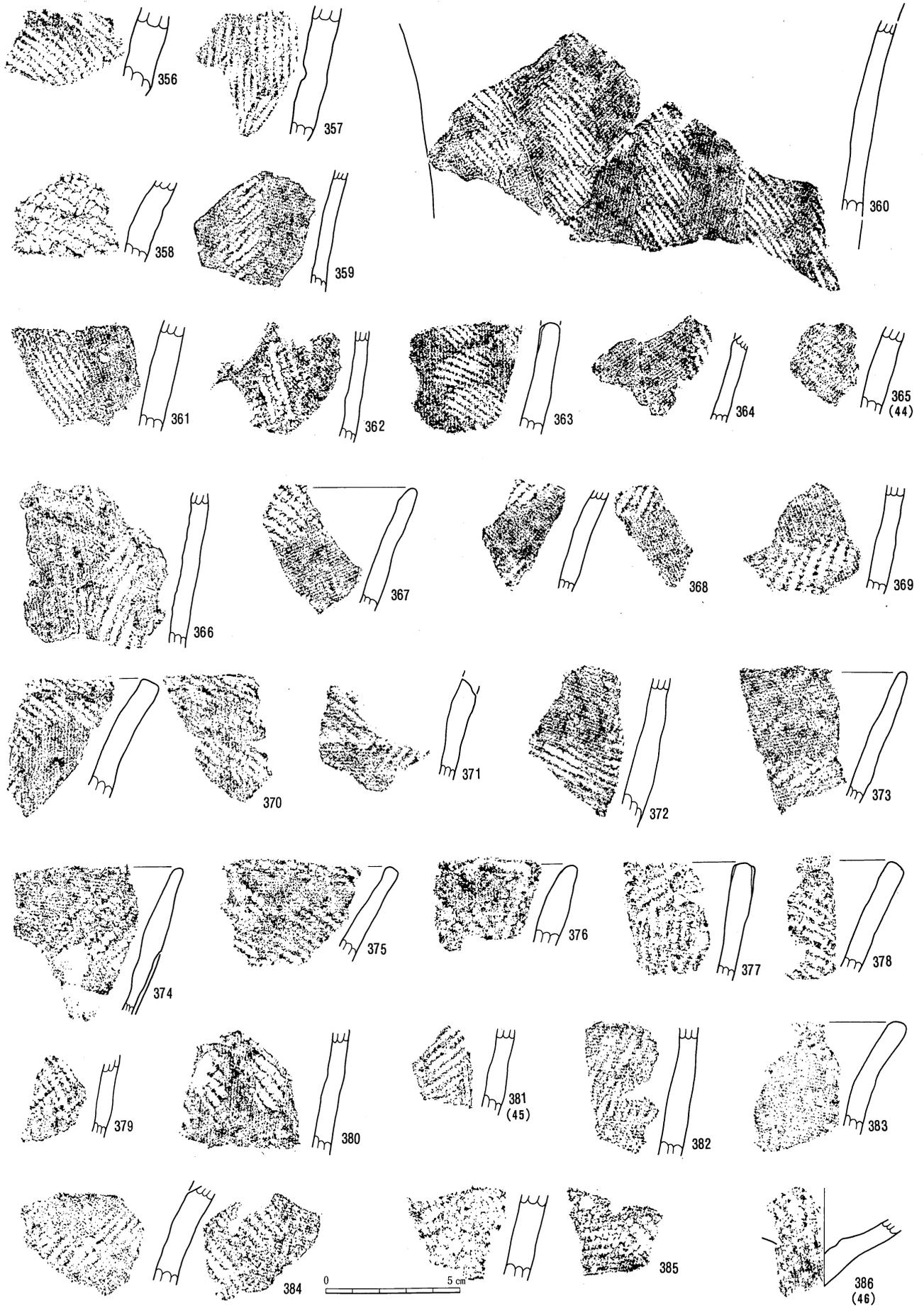


図 22 縄文時代早期前半土器拓影 9 (1 : 2)

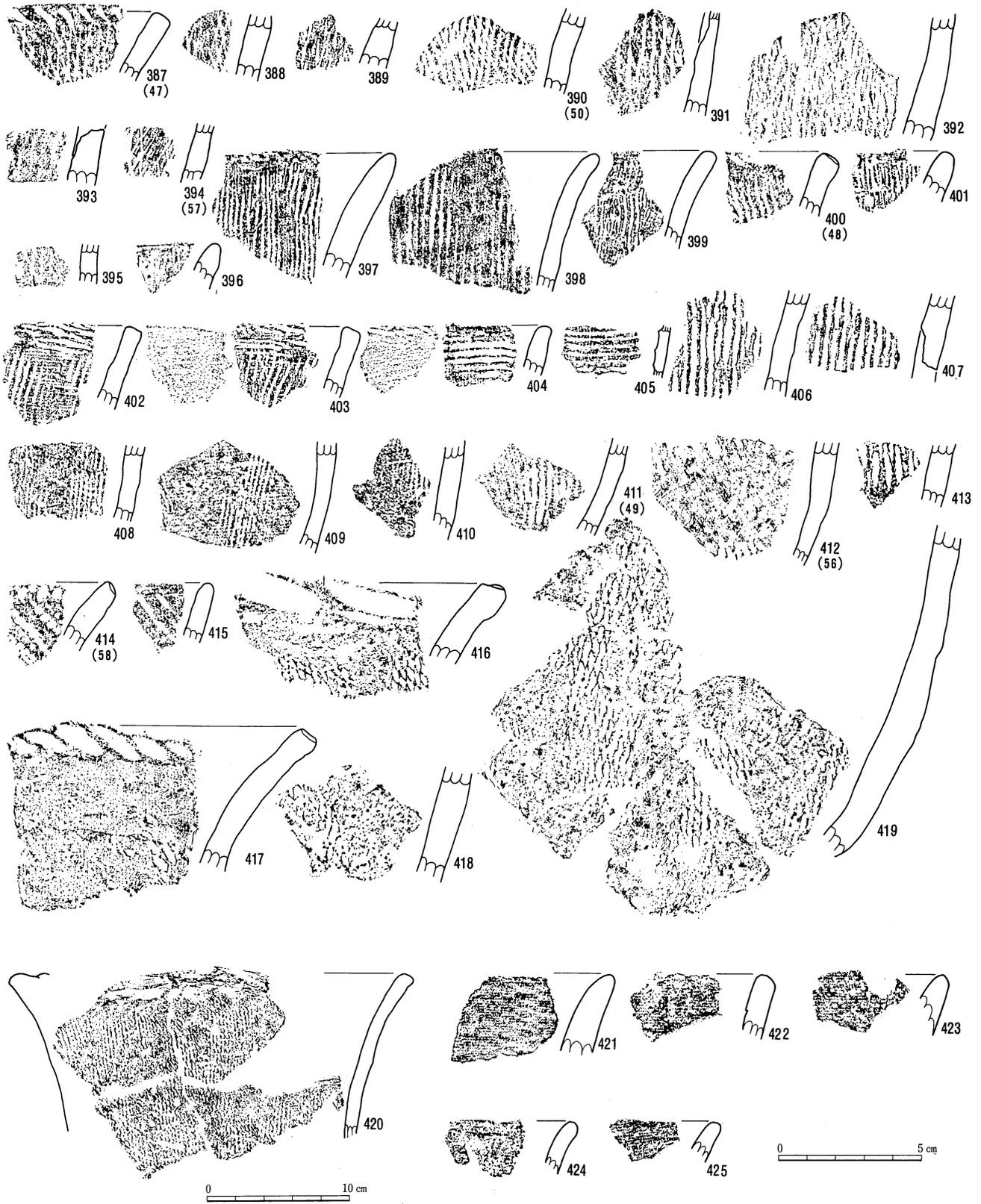


図 23 縄文時代早期前半土器拓影 10 (421~425 = 1 : 2)

施文される格子目の形状はいずれも長軸を縦にする菱形であり、また、格子目の小さいのが特徴としてあげられる。小破片ばかりだが、施文方向と施文構成を推定してみると、すべて縦位で器面全体に施文されている可能性が大きい。387は口唇部をていねいに面取りし、その上に斜めに刻みを入れている。口唇部の刻みは第1群第1類・第2類の市松文、山形文、楕円文を施文する土器にも見られた。395の胎土は他と異なり石英、雲母がほとんど混入されていない。軸棒に巻かれた撚糸は、すべて無節で387・388・393・394がLの撚り、389～392・395がRの撚りである。

第2類 軸棒にコイル状に撚糸を巻きつけ施文するもの

A種 繊維が混入されないもの (396～415)

器厚は5mm～8mmで統一的ではない。396～401・406・407は縦位に密接施文される。397と400は第1群第1類・第2類土器と類似し胎土に多量の石英、雲母等を含んでいる。397は器面の表裏ともていねいに磨かれ、さらに400は口唇部に先の第3群第1類土器に見られた刻みが施されている。402・403は口縁上部は横位、以下縦位密接施文され、口唇部や内面にも横位に施文される。403の口唇部から裏面にかけては、調整時の粘土の折り返しのあとが観察された。404・405は撚糸が横位に施文されている。408～411は無文部を残す帯状施文をとる。409は胎土、施文構成等からは、第1群第2類土器と類似している。413は原体をやや間隔をあけて軸棒に巻きつけていたようにみられる。414・415は斜位に撚糸痕が見えるが、これは軸棒に斜めに間隔をあけて巻き縦位に施文した結果と思われる。414は口唇部に刻みをもっている。原体は撚糸を施文したものか、LRの縄文を斜位に押圧したものかはっきりしない。胎土は他の刻みを持つものと異なり石英、雲母が少なく粒子の粗い白い軽石、輝石が多く混入されている。軸棒に巻かれる撚糸は396～399・401～403・408～410・412・415がLの撚りで400・406・407がRの撚りである。

B種 繊維が混入されるもの (416～420)

A種と異なり器壁が10mm～12mmと厚く胎土中に繊維を含んでいる。他に大粒の長石、小粒の輝石、スコリア、白い軽石、雲母の微小粒子が混入され、焼成は良好である。器壁の厚さ、胎土中への繊維混入等から第1群第4類土器に近いと思われる。417・418のように無文部を残すものと420のように無文部を残さない例があり、ほぼ2個体と考えても良いであろう。416・420は口唇部に深く長い刻みを入れ、口縁部から底部へLの撚糸文が全面に施文される。417～419は口唇部に短かく斜めに刻みを入れ、Lの撚糸文が無文部を残して施文される。また撚糸も第1類とは異なり粒が粗い。

第4群 無文土器 (421～425)

第2群のA種、B種等の様に無文部が多い土器と無文土器の識別は困難であるため、破片に文様が施文されないものは便宜的に無文土器として扱うことにする。押型文土器が共伴するであろうことは向陽台遺跡〔小林康男1985〕、樋沢遺跡〔小杉1987〕等で知られており本遺跡でも共伴していたと思われる。421～424は第1群第1類土器と同じ胎土であるが、器壁はそれよりもやや薄手である。また、421・422の口唇部はやや稜をもち、内面もていねいにナデられている。421・422とも器面にはわずかに市松文が観察されるが、ナデ消されたか、弱い押捺によるかして不鮮明である。第1群第1類の属性をもつが文様効果の欠如という点から第4群に入れた。423の器面はややざらつき、口唇部はいくらか丸味をもつ。424は421～423よりも雲母が目立つ胎土をもつ。器面の調整はやや雑である。口唇部の形態は第1群第1類の8に類似する。425は小粒子の石英、輝石をわずかに混入し、器面はていねいにナデられている。

② 早期前半貝殻沈線文系土器 (図24、PL11)

図示したものを含めて、総数8点出土している。431は波状をなす口縁部破片。波頂下に縦位の短沈線を施し、その両端部には小さなボタン状の貼り付けが加えられている。文様は横位の沈線とそれに平行して施文された斜方向からの刺突文とにより構成されている。内面は口縁上部を中心として比較的ていねいに

研磨されている。田戸下層式～田戸上層式にかけてのものであろう。432～436は胎土に繊維を含む一群。432は鋭い細沈線による格子目文の下に2条の刺突文をめぐらし、さらに2～3条の波状文を加えている。433～436は平縁の口縁部破片。433・434は内湾ぎみに立ち上がり、他は先細りしながら外反する。433・434の口縁上部には数条の刺突文がめぐられ、433の内面上部には横走する貝殻条痕をとどめている。これらは胎土中に繊維のほか、雲母を多く含んでいる。総じて焼成は良好とは言い難い。田戸上層式の中でも新しい段階の所産であろう。

③ 早期後半～末葉の土器 (図24～28、PL11～13)

総数430点余りとまとまった出土をみせている。早期後半、貝殻条痕文系野島式に含まれるものから、いわゆる早期末葉の土器とされている一群までと広い時間幅をもっており、その内容も多岐にわたっている。その分類基準は本報告書に掲載される同時期の資料のすべてに共通するものとし、詳細は岡谷市下り林遺跡出土土器を対象とした分類項目〔百瀬忠幸1987〕におおむね準じている。本土器群中での「群別」は行わず、「類」・「種」の分類にとどめてある。「類」は一部例外的なものを除き一定の時間的(型式的)単位に相当し、「種」は類の中でのバリエーションおよび類の下位に存在するより小さな時間的単位を表わしている。

第1類土器 (437～438)

貝殻条痕文系、野島式に比定されるもの。図示した2点がすべてである。437は幾何学状に施された沈線間を刺突に近い短沈線で埋めており、438は同様なモチーフを短沈線のみで描いている。ともに口縁破片で口唇部にキザミを有し、437は平縁、438は波状口縁である。比較的硬質なつくりであり、437の口縁下には補修孔がみられる。

第2類土器 (439～446)

貝殻条痕文系、鶴が島台式に相当するものを本類とした。小破片を除き、図示したものがおおむねすべてである。439～441・443は同一個体。口縁下より2本の隆線を垂下させ、隆線間には沈線と円形刺突文を加えている。隆線区画外には幾何学状の沈線区画を配し、部分的に押し引き状をなす斜方向からの刺突文を充填している。442は現存最大径21cm程をはかり、文様帯を区画する段を有している。段上部は内外面ともにていねいな調整が加えられ、外面には沈線による幾何学状の区画文と押し引き状刺突による充填文が施されている。段部より下は内外面ともに横～斜方向の貝殻条痕をとどめ、凹凸が著しい。内面の段部以下にのみ炭化物の付着が認められる。444は沈線区画内を短沈線で埋めるもので、胎土に粗砂、小石を多く含むなど他とは趣きを異にしている。445・446は定型的なモチーフを描かず、植物茎の束による多条の沈線を曲線的に施した後、やや下方からの円形刺突文を空白部に埋めている。ともに粗砂・石英粗粒を多く含み、硬質な焼成である。

第3類土器 (447～482)

貝殻条痕文系、茅山下層式に相当するものである。早期後半～末葉の土器群中、最も出土量が多い。

A種(447) 沈線による区画内にルーズな押し引き沈線が加えられるもの。447は口縁下に2条の沈線を横走させ、沈線間に押し引き沈線を鋸歯状に施文している。胎土中に多くの繊維を含み、調整も粗雑である。

B種(448～455) 押し引き沈線により種々の文様が描かれるもの。

448～453は多条のルーズな押し引き沈線により、第2類土器にみられた幾何学状文の形骸化したモチーフを曲線的に描いている。施文工具は植物茎の束であろう。448・449は平縁の口縁部破片で、内削ぎ状を呈する口唇面には同様の工具によるキザミが加えられている。450～452は類似する胴部破片。453は蛇行して垂下するモチーフが用いられている。454・455はRL縄文を地文として押し引き沈線文が施される。448～453に比べ文様が直線的で、より定型的なモチーフを採っている。また、448～453が裏面に条痕を明瞭にとどめているのに対し、454・455は条痕をほとんどとどめておらず、調整においてもやや性格を異にし



図24 縄文時代早期末葉土器拓影1

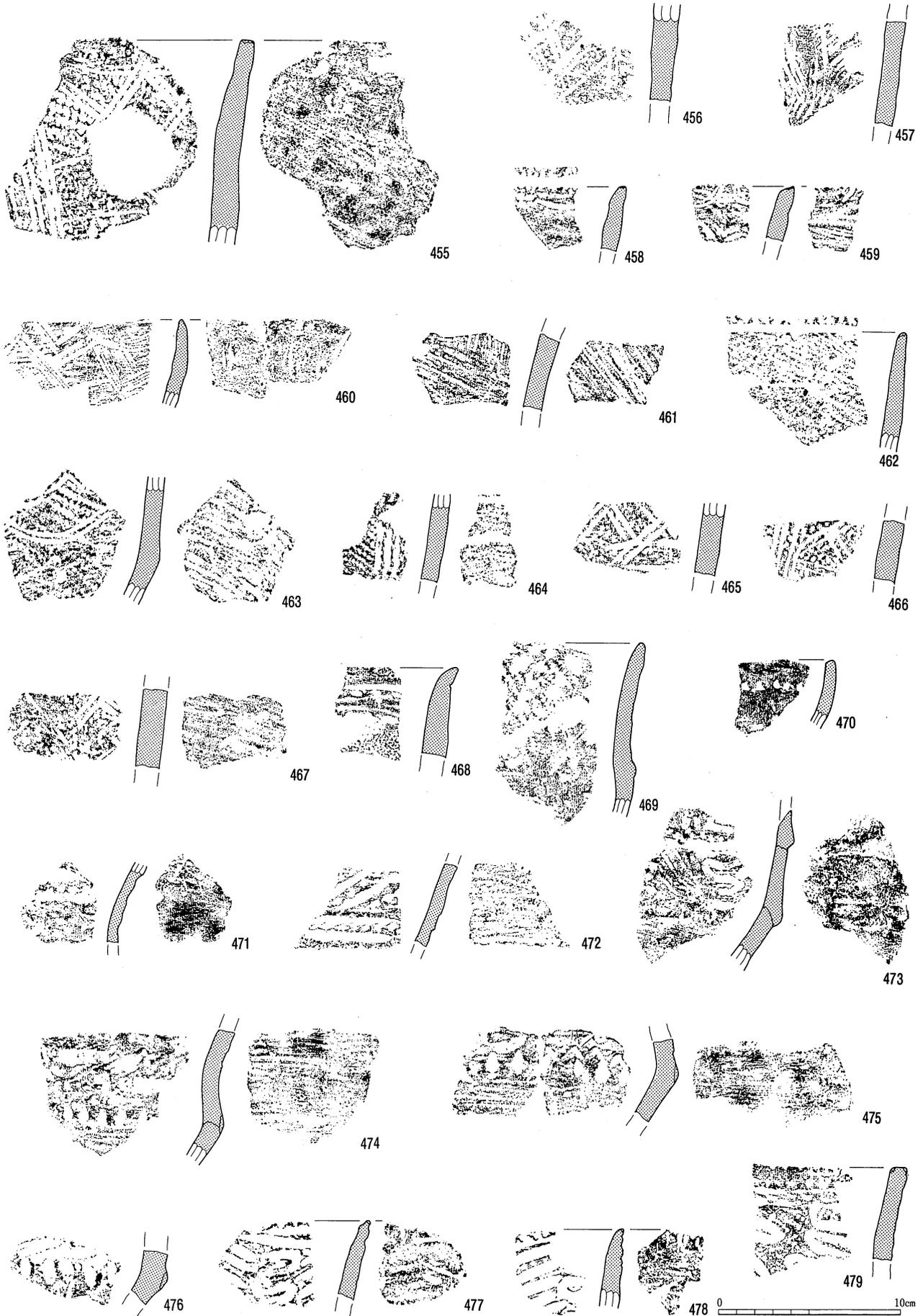


図25 縄文時代早期末葉土器拓影 2

ている点が先の文様の違いとともに注意される。本種は総じて胎土に粗い石英その他の粒子を多く含み、外見上粗雑なつくりのものによって占められている。

C種(456~467) 沈線により文様が描かれるもの。

458・459は内削ぎ状をなす口縁部破片。口縁下に弧状の沈線文を配し、口唇面には棒状工具によるキザミが加えられている。460はB種の施文工具に類似した束状の工具による数条が集合した幅広の沈線により、鋸歯状、弧状の文様が施されている。内外面にはそれぞれ縦位、横位の条痕がみられる。462~467は縄文を地文として沈線文が描かれ、縄文原体は467がLRであるほかはすべてRLである。B種同様に、格子目状など直線的なモチーフが描かれるもの(462・464~467)と、曲線的なモチーフが描かれるもの(463)とがある。器面に条痕をとどめる割合は少ないものの、胎土、焼成等はB種に近似している。

D種(468~470) 主として刺突文が施されるもの。

468は先細りしながらわずかに外反する平縁の口縁部破片。口縁下に沈線と刺突文とを交互に2条めぐらせている。469は段により区画された上部に、半截竹管による格子目状の沈線文と連続刺突文とが施された口縁部破片。胎土中に多量の繊維のほか、白色の砂粒などを多く含んでいる。

E種(471~482) 太くて浅い凹線様の沈線の特徴とするもの。

471・472は横位および斜位に施された沈線間に、斜方向からの刺突文を連続させている。内面に条痕をとどめ、胎土には石英粗粒を多く含み、ともにやや薄手のつくりである。473は上下2段により区画された部分に蛇行懸垂文などを施している。胎土に石英粗粒を多く含み全体に粗い。474・475は同一個体に属する胴部破片。原体LRの縄文を地文として、横走する太い沈線や蛇行沈線を施している。太い沈線内には斜方向からの刺突文を加えている。器壁が9mm~10mmと厚手のつくりであり、器面には条痕をとどめている。477・478はともに尖頭状を呈する波状の口縁部破片。横位~斜位の太い沈線を施した上に、蛇行する沈線を垂下させている。479は原体RLの縄文を地文として蛇行懸垂文が施されるもので、口縁下には「三日月」状をなす下方からの刺突文がめぐる。角頭状をなす口縁の両端部には細かいキザミを加えている。480にもみられるこうした口縁部形状は第4類土器に引き継がれている。480~482は縄文を地文として縦位ないし斜位の太い沈線を数条相接するように施し、沈線間に生じた頂稜部に半截竹管による「C」字状の刺突文を加えてある。480は調整時の擦痕、481・482は条痕をそれぞれ裏面にとどめている。

第4類土器 (465)

米粒状ないしそれに類する連続刺突文により、山形状を基本とする文様が構成されるもので、貝殻条痕文系茅山下層式の新しい段階に位置づけられるものである。

図示した1点のみ出土している。小片のため全体の構成については不明であるが、いわゆる「なぞり」手法によりできた頂稜部に米粒状の小さな刺突文を連続させている。胎土中に繊維を多く含み、裏面には横走する条痕をとどめる。

第5類土器 (484~487)

連続爪形文により波状ないし横位の文様が施されるもので、東海地方に主体的な分布を示す粕畑式の特徴を有するものである。貝殻条痕文系茅山上層式の段階に位置づけられよう。

図示した4点がすべてである。484は内外面の口縁下に連続爪形文を横位にめぐらしている。487は山形をなす波状の口縁部破片であり、中央部がくぼんで扁平な口端面を形作っている。連続爪形文は数条波状にめぐらされるようである。器面には条痕をとどめるものの、その後の調整により不鮮明となっている。

第6類土器 (488~499)

いわゆる絡条体圧痕文が施されるものである。2種に細分される。

A種(488~493) 胎土中に多量の繊維を含み、「イモムシ」状の太くて丸みのある絡条体圧痕文が施されるも

の。横位ないし斜位のみと複雑なモチーフを描かず、器面に条痕をとどめる場合が多い。

488は端部が指頭ないし棒状工具で押圧された口縁部破片。口縁下に丸みのある幅広の隆帯をめぐらせ、隆帯上を押圧している。押圧原体が絡条体であるか否かやや疑問を残すものの、全体的な特徴から本類に含めて扱った。但し、隆帯の貼り付け手法は東海系の上の山式に通ずる要素を備えている。胎土に繊維のほか多量の白色の砂粒を含んでおり、焼成は不良。489も丸く押し潰されたような隆帯を横走させ、隆帯上に絡条体圧痕文を縦位に施文している。絡条体圧痕は長さ25mm、最大幅9mmをはかる。内面の条痕は貝殻によるものであろう。490・491は横～斜方向に施された絡条体条痕の上に、斜位の絡条体圧痕が加えられている。492は内面に絡条体圧痕がみられる。条痕施文時につけられたものと思われる。総じて胎土中に白色砂粒を多く含み、焼成不良なものによって占められている。例外的に493は比較的堅緻なつくりであり、文様とともに趣きを異にしている。B種に含められるべきかもしれない。

B種(494～499) 器面に条痕をもたず、ナデ調整されるもの。施される絡条体圧痕は幅が狭く細長い。胎土への繊維の混入は、A種に比べ少なく、より多様な文様構成をもつ場合が多い。

494～496は平縁の口縁部破片。口縁直下に細くて丸い隆帯をめぐらせ、隆帯下に絡条体圧痕文を数条横位に施文している。この3者は同一個体であるかもしれない。497～499は横位構成をもつ胴部破片。499はやや弧状に施文しているようにも見える。器面調整はA種に比べてていねいになされ、A種の胎土中に特徴的に認められた白色砂粒の混入はほとんどみられない。焼成も比較的良い。

第7類土器 (500～529)

縄文のみ施文されるものを一括した。胎土、焼成等に一定の特徴を見出し得ず、時間的にも特定し得ない。その多くは第2類～第6類土器に伴う胴部破片、もしくは粗製土器と考えられる。ここでは、第6類土器群中にみられた胎土中への白色砂粒の混入という点に着目し、同粒子を多く含むもののみを他と分けて抽出するにとどめた。500～507は裏面に貝殻条痕をとどめているもの。500は平縁の口縁部破片で、円頭状をなす口端部の一部にも縄文施文が及んでいる。508～518は条痕をともなわないもの。508～509は平縁の口縁部破片であり、口唇面には棒状工具によるキザミが加えられている。510は段をなす頸部破片で、胎土、焼成等は477・478・450と類似している。519～529が胎土中に白色砂粒を多く含むものである。519・522は口唇面にキザミが加えられた平縁の口縁部破片。523とともにやや薄手で、比較的ていねいなつくりである。白色砂粒の混入量は他に比べてやや少ない。520・521・524・528は明茶褐色を呈し、白色砂粒の混入が多いという点とともに第6類土器A種の489～492に類似している。同種土器に伴う縄文施文の土器である可能性が大きい。本類の縄文原体の多くはRLであり、LRのものはほとんど見られない。

第8類土器 (530)

撚糸文のみ施されるもの。図示した1点のみ出土している。530は弱いくびれをもつ胴部破片で、くびれ部を残して上下2段に原体Rの撚糸文を斜方向に施文している。胎土中に含まれる繊維の量はあまり多くなく、堅くしまっている。

第9類土器 (531～559)

条痕のみとどめるものを一括した。531～539は内外面、540～559は外面のみにそれぞれ条痕をとどめている。556は平底、555は丸底であろう。条痕の工具は貝殻によると思われる。532・533・538・542は胎土中に白色粒子を多く含んでいる。すべて胴部～底部にかけての破片であり、他の有文土器の一部であると考えられる。

第10類土器 (560～575)

無文の土器を一括した。560は外反しながら開く平縁の口縁部破片。口縁下に薄く扁平な隆帯を1条めぐらせている。胎土に白色砂粒を多く含み、第6類土器の488によく似ている。561～564は尖頭状をなして外

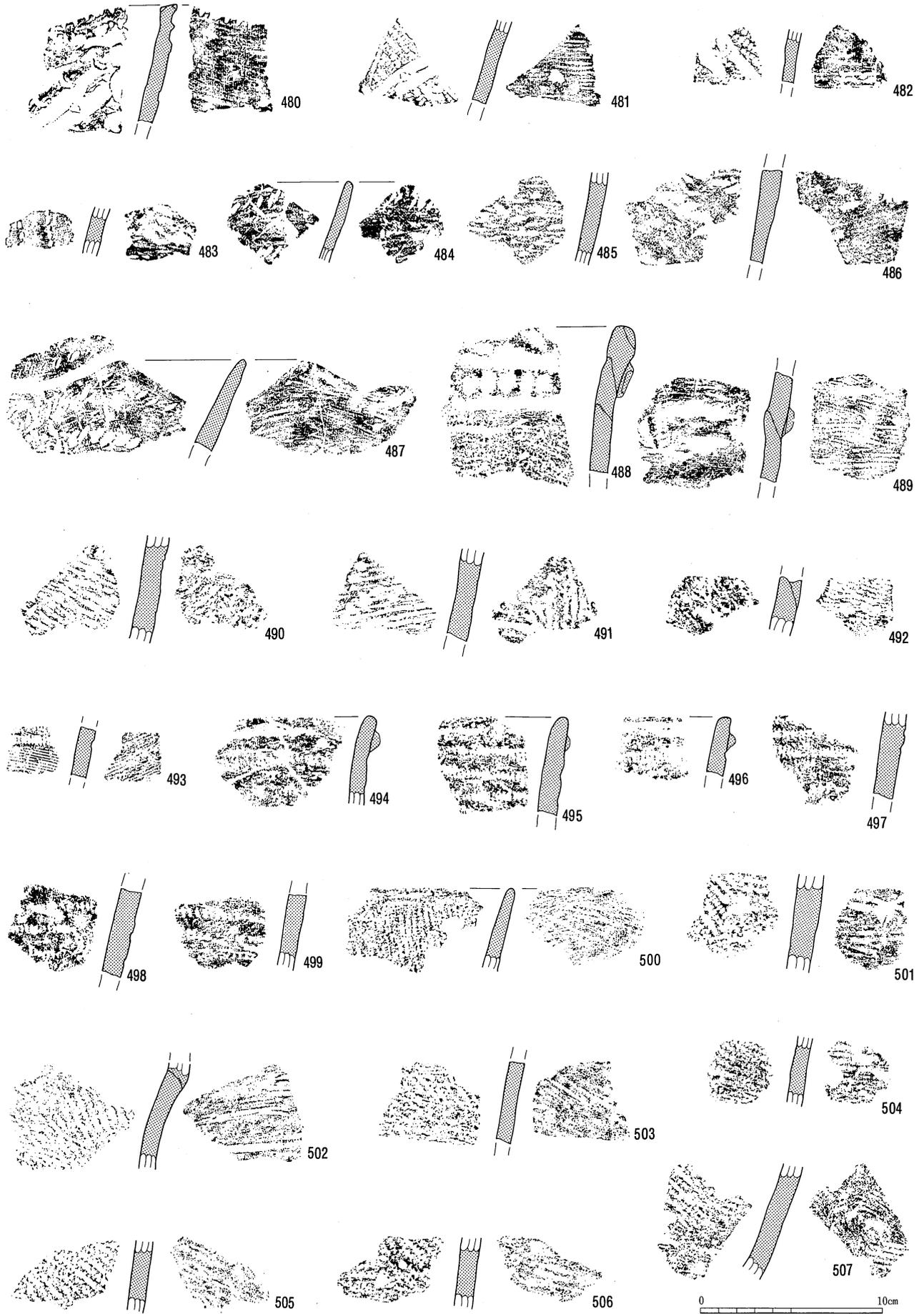


図26 縄文時代早期末葉土器拓影3

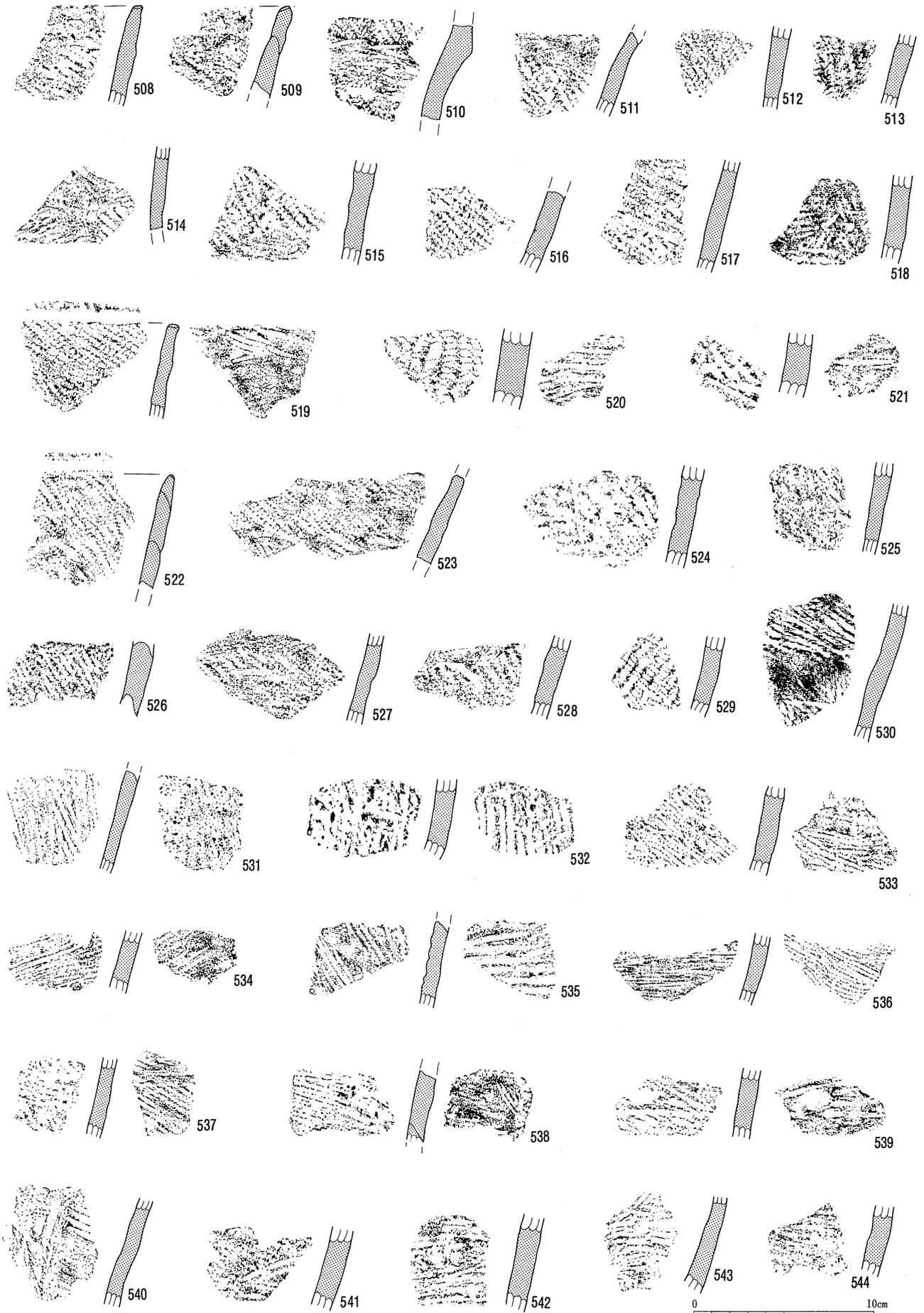


図27 縄文時代早期末葉土器拓影 4

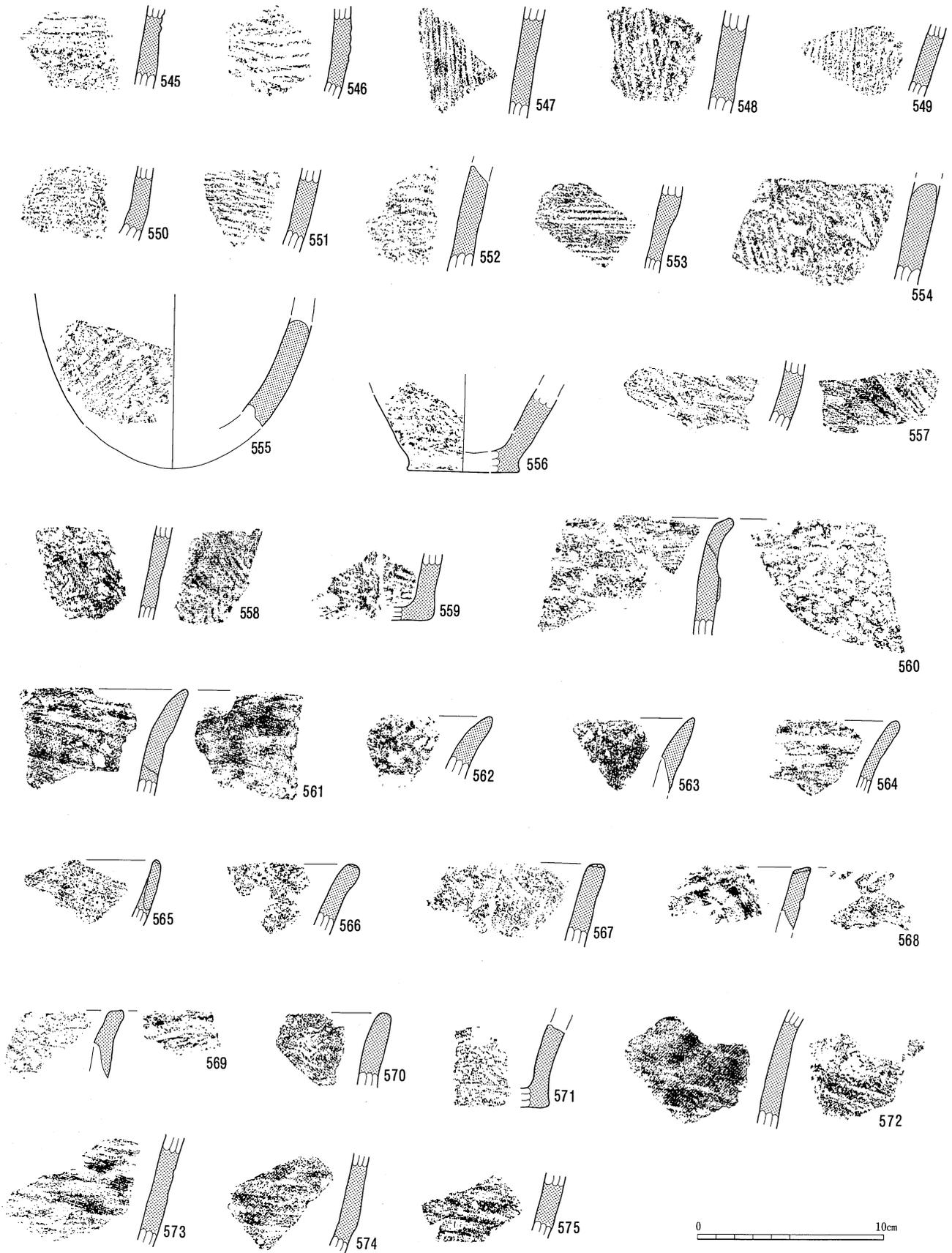


図28 縄文時代早期末葉土器拓影 5

反する無文土器の口縁部破片。胎土に雲母、石英粒などを多く含む。565～570は角頭状をなす口縁部破片。570を除き、口唇面にキザミを加えている。裏面に条痕をとどめる568・569は胎土中に繊維を多く含み、569には白色砂粒が多く混入されている。571は平底をなす底部片。572～575は胎土中に雲母、石英粒を多量に含むもので、561～564に類する胴部破片である。外面には整形時の調整痕が顕著にみられる。

早期末葉の土器は第1類～第10類土器に分類されるように、様々なバラエティーをもつものであった。そうしたバラエティーがおおむね時間差を反映していることは明らかと言える。

土器群の分布と分布の変遷を明らかにすることは、往時の人々が八窪遺跡において如何なる生活を送っていたのかを復原するための一助となるように思われる。また、それとともに各々の土器分布にみられる偏在性、隔絶性、重層性の検討を通して、逆に各類土器の時間的な特性をつかみ直すことが可能になろう。

図29に示したとおり早期末葉の土器群の分布は、西側小尾根部の先端にある狭小な平坦部を中心としてその北側斜面部に拡がりを見せるとともに、東側尾根部緩斜面の縁辺と北端近くの緩斜面にも若干量の出土をみせている。

しかし、先に示した土器のバラエティーに代表されるより小さな時間的単位ごとにみると、それらが時間的流れを追って微妙に変化していることがわかる。

個別に検討してみると、まず第1類土器の段階についてはきわめて乏しい資料ではあるが、西側小尾根部先端に出土が確認される。続く第2類土器の段階ではこれも資料的に弱い一面を残すものの、DW21・22グリッドとDH16グリッドとに大きく2分されたあり方を示している。但し、前者については同一個体で

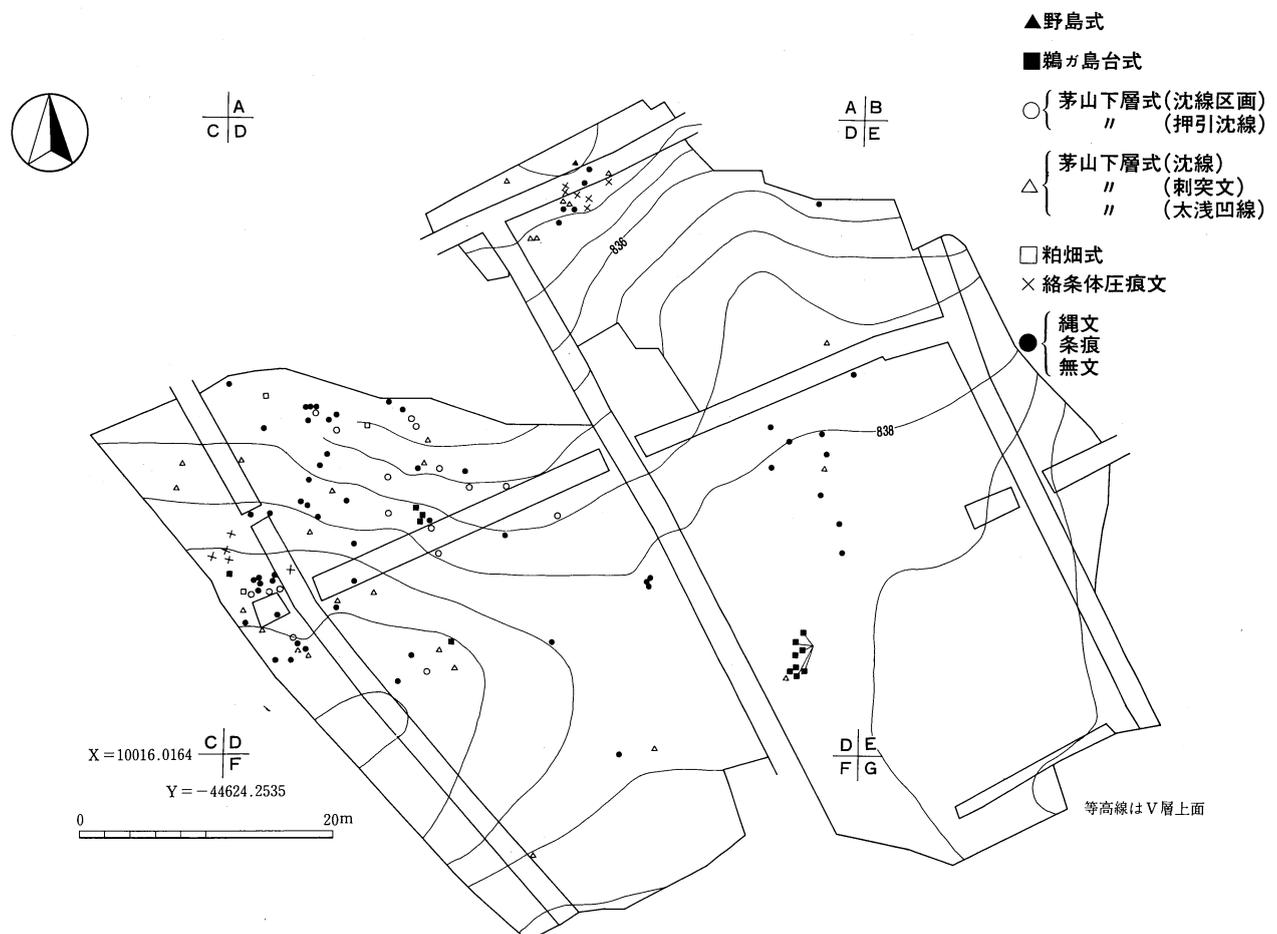


図29 縄文時代早期末葉土器分布図 (1:600)

ある可能性も残しており、他の土器にみられる包含層的な出土状況とは区別して考えねばならないかもしれない。例えば、この付近に分布する土器で時期の判明しているのはこの第2類土器のみであり、それが先の西側小尾根部とは隔絶した分布域を占めている点に注目すると、同分布域と接するように検出された3基の土壇との関係も浮かび上がってくる。つまり、土器の分布に現われた東西に離れたあり方と遺構群の占地に現われた二者との関係は、それぞれきわめて密接なものと捉えられるのであり、中央を南北に走る鞍部を挟んで東西に対峙するような行動がなされたことを暗示していると解釈することもできよう。その原因については、時期比定に問題を残すとはいえ、土壇の機能が強く影響を及ぼしていたことが考えられる。

出土土器の大半を占める第3類土器は、前者とは異なり西側小尾根先端部の狭い平坦面から、緩やかに傾斜する北側斜面に集中する分布を呈している。第3類土器内部の「種」段階で分布をみると、A～E種すべてが分布域をほぼ共有していることが理解されるものの、後出的な要素をもつE種がA～D種に比べ若干分布域を拡大している点を指摘しておきたい。

第4類土器は1点のみで分布特性については不明と言わざるをえないが、その1点はD P06グリッドより出土している。第5類土器はこれも4点のみの出土と少ないものの、第3類土器と重なるような分布を示す。第6類土器の分布は特徴的で、古い要素をもつA種とより新しい要素をもつB種〔百瀬忠幸1987〕とが、それぞれ全く分布域を異にしていた点は注目されてよい。すなわち、第5類土器に後続すると考えられるA種が同類土器と同様な地点に遺存していたのに対し、A種より後出的なB種が、小さな谷頭状の鞍部を隔てた発掘区北端付近の緩傾斜地に距離をおいて分布していたことである。土器の属性より考えられた時期差—先後関係が、分布域の相異という傍証によって裏付けられる一例として重視したい。

第7～10類土器については個々の時期比定も困難であり、おおむね第3類土器と同様な分布を呈するとともに、発掘区中央西寄りの鞍部平坦面にもやや孤立的に若干量の分布をもっていたことを指摘するにちどめておきたい。

④ 縄文時代前期の土器 (図30・31)

前期の土器は9号土壇と、西側小尾根の先端寄り及び東側の尾根の先端寄りから散漫に出土した。コンテナに2箱程度で、9号土壇出土の70以外は小破片ばかりである。

前期の土器は大きく3つの時期に区分できる。581は神ノ木式の小破片で風化が著しく、他に同時期の土器はない。602～607は黒浜式後半期の土器で、胎土にわずかに繊維を含むことが多く、竹管による沈線文が縄文と併用される。582～601の縄文のみの土器は前期土器の大半を占めるが、おそらくは黒浜式に共伴するだろう。608～614は前期末頃の土器で70～75の9号土壇出土土器も同時期である。結節状浮線文や三角形の陰刻文が施される。出土量はわずかである。614は唯一の関西系の土器で、搬入品であろう。

⑤ 縄文時代中期の土器 (図30～33)

中期の土器は東側の尾根中央の鞍部とその北側斜面を中心に出土した。コンテナ4箱程度とまとまっているが、各時期毎にみれば量は少ない。器形を推定しうる個体は全くなかった。

中期初頭～末葉まで継続的に存在するが、後半には断絶がある。615～621は中期初頭の土器で、前期末葉の608～614とつながると考えられる。いずれも在地の土器であろう。622は中期初頭では後出的で、内面に沈線文をもつ。623～626は猪沢式土器で、623は指頭圧痕が著しく古相を呈する。627は猪沢式期に属すると思われ、隆帯の裾に竹管による平行沈線が引かれ、指頭圧痕を残す。628～635は平出ⅢA系統の土器で、中期初頭～猪沢式期に併行するものばかりである。636は猪沢式の土器で、竹管による浅い沈線文と圧痕を付した細めの隆帯に特徴がある。637は猪沢式期～新道式期に属し斜行沈線文をもつ土器である。639～651は新道式土器で、大小の結節状沈線文が特徴である。652～654は新道式期の土器と思われ、竹管

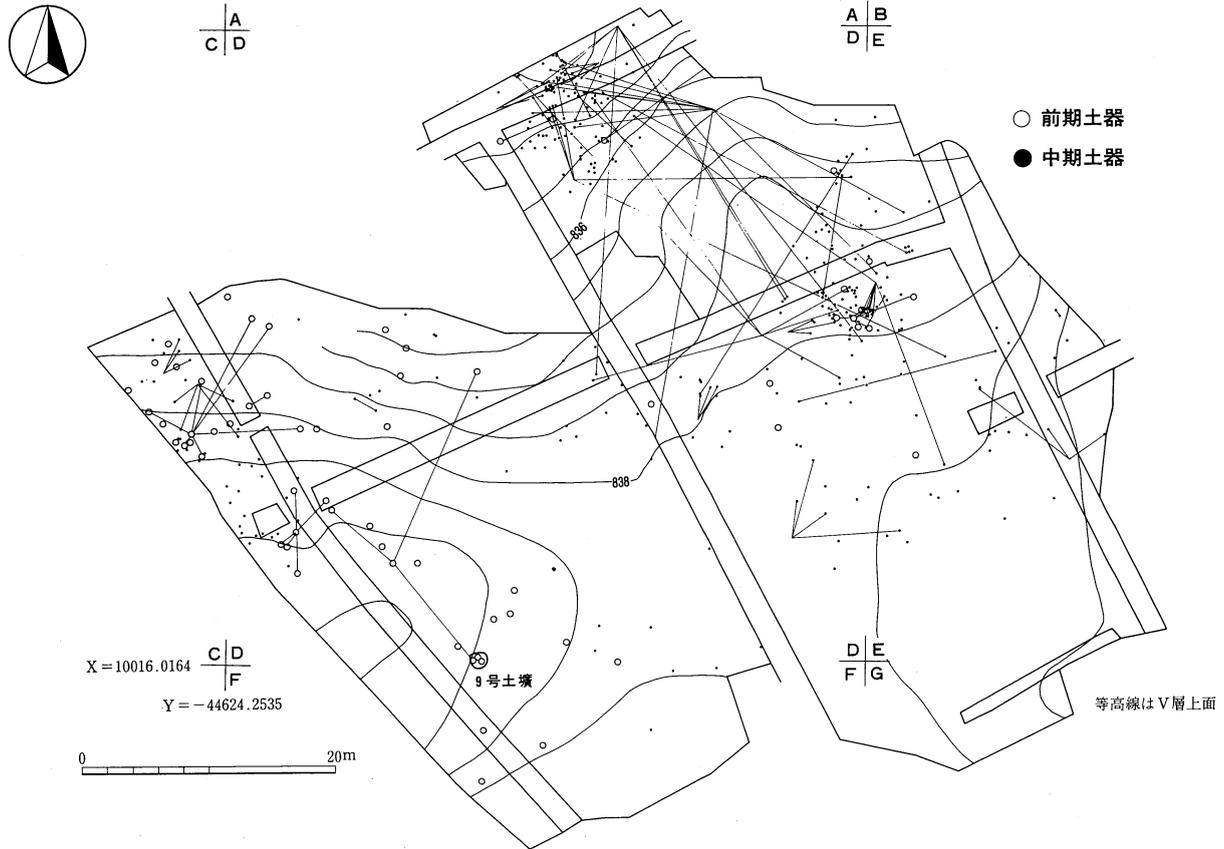


図30 縄文時代前・中期土器分布図 (1:600)

による区画文をもち、縄文を併用する。638・655～665は藤内式土器で、各種の区画文が多用される。666・667は藤内式末～井戸尻式前半頃の土器であろう。667は吉田向井遺跡出土土器に類例の優品がある(第19節)。668～677は井戸尻式後半の土器であろう。675はいわゆる楯形文土器の破片である。678は唐草文系の第2段階、曾利II式併行期の土器とみられるが、1点しか出土しなかった。679は加曾利E2式頃の土器であろう。680～685は中期末葉の土器で、加曾利E式系統が目立つ。

⑥ 縄文時代後期の土器 (図33・36～42, PL14～17)

前葉～後葉まで断続的に存在する。いわゆる精製土器の大半は中葉に属するので、粗製土器もほとんどが中葉に属するとみてよいだろう。そこでこの中葉の土器を分類し、以後の検討に備えることにしたい。なお、前葉及び後葉の土器は少量で、中葉との間に時間的なギャップがあるようだ。両者は概観するに留めておきたい。

前葉の土器 (686～692)

時期的には686とそれ以外とに二分される。686は称名寺式の小片で、沈線内は研磨されず、充填縄文手法を用いている。類例がもう1点ある。687～692は堀之内式とみられ、沈線は何回も引き直されて無文部分は研磨される。687・688は体部が丸く張り口縁部が外反する深鉢、689は注口土器の把手であろう。同時期の土器は他に数点存在する。

中葉の土器

加曾利B2式を主体とし、一部に加曾利B1式の新しい段階を含む精製土器はコンテナ3箱程ある。無文の粗製土器がコンテナ5～6箱ある。中葉の土器は東側の尾根の頂部及び西側の小尾根の北向斜面に分布する。両者の間に若干接合例が存在するが、それぞれ独立したブロックと考え、西側を1号ブロック、東



図31 縄文時代前・中期土器実測図・拓影

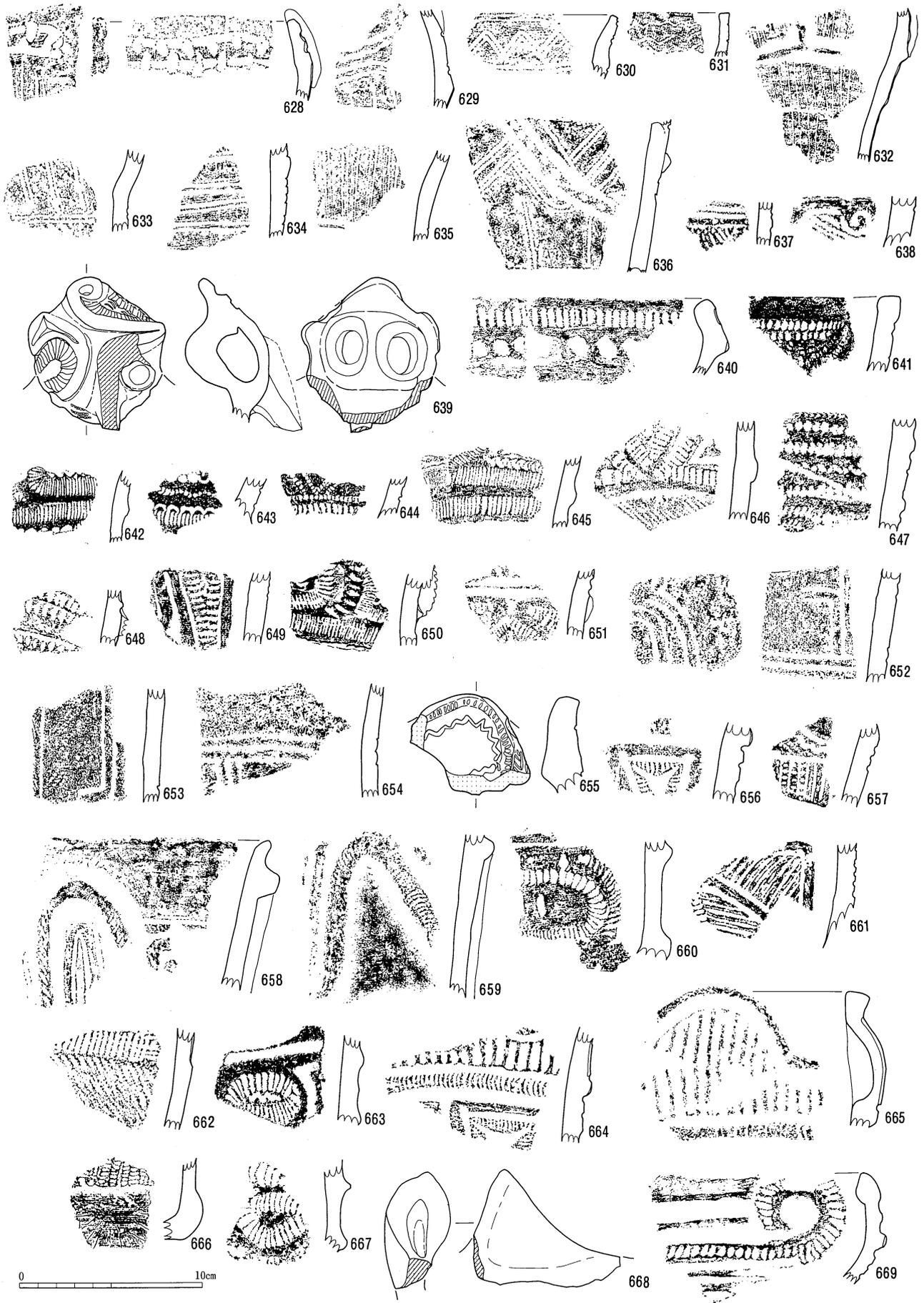


図32 縄文時代中期土器実測図・拓影

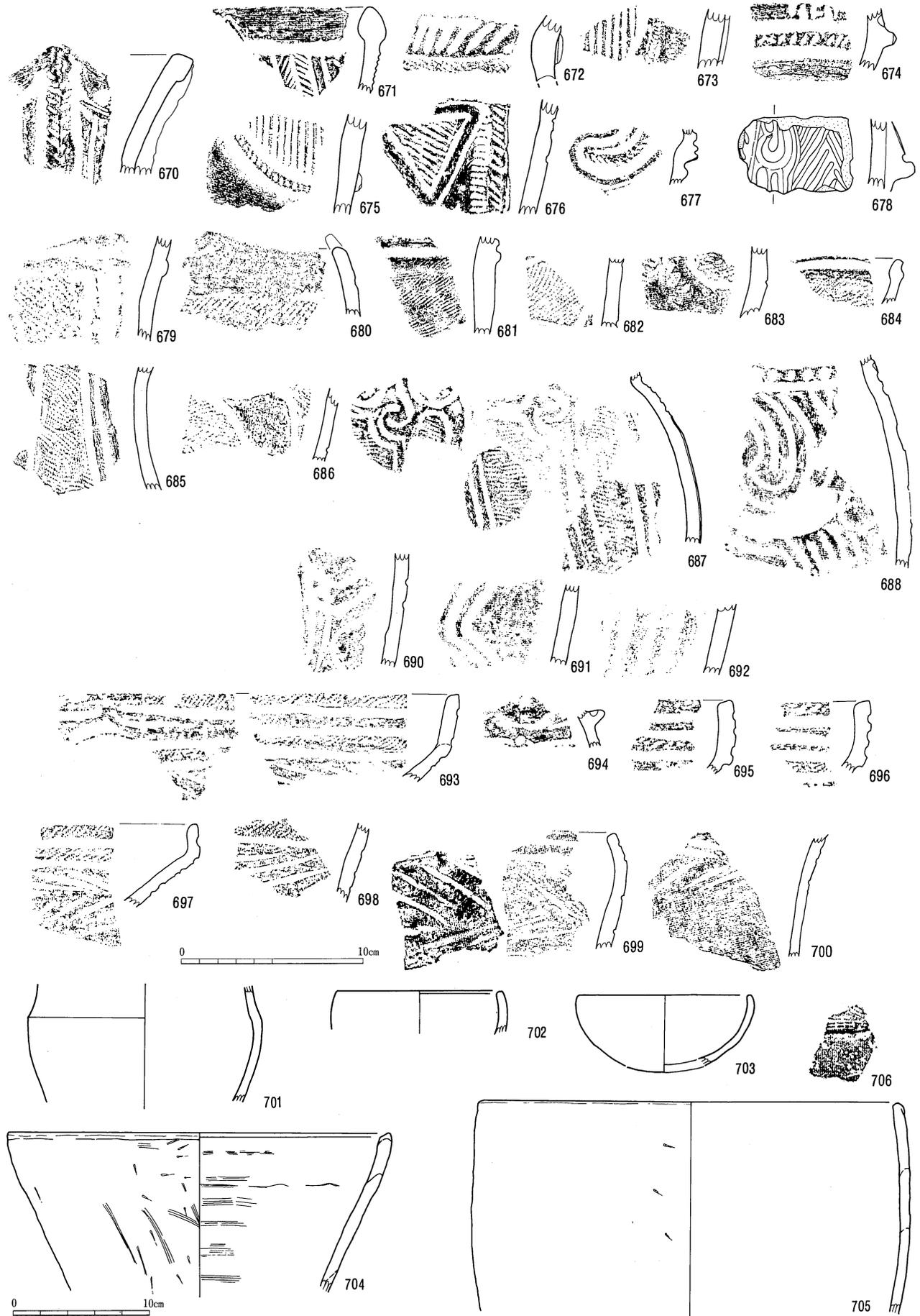


図33 縄文時代中～晚期土器実測図・拓影

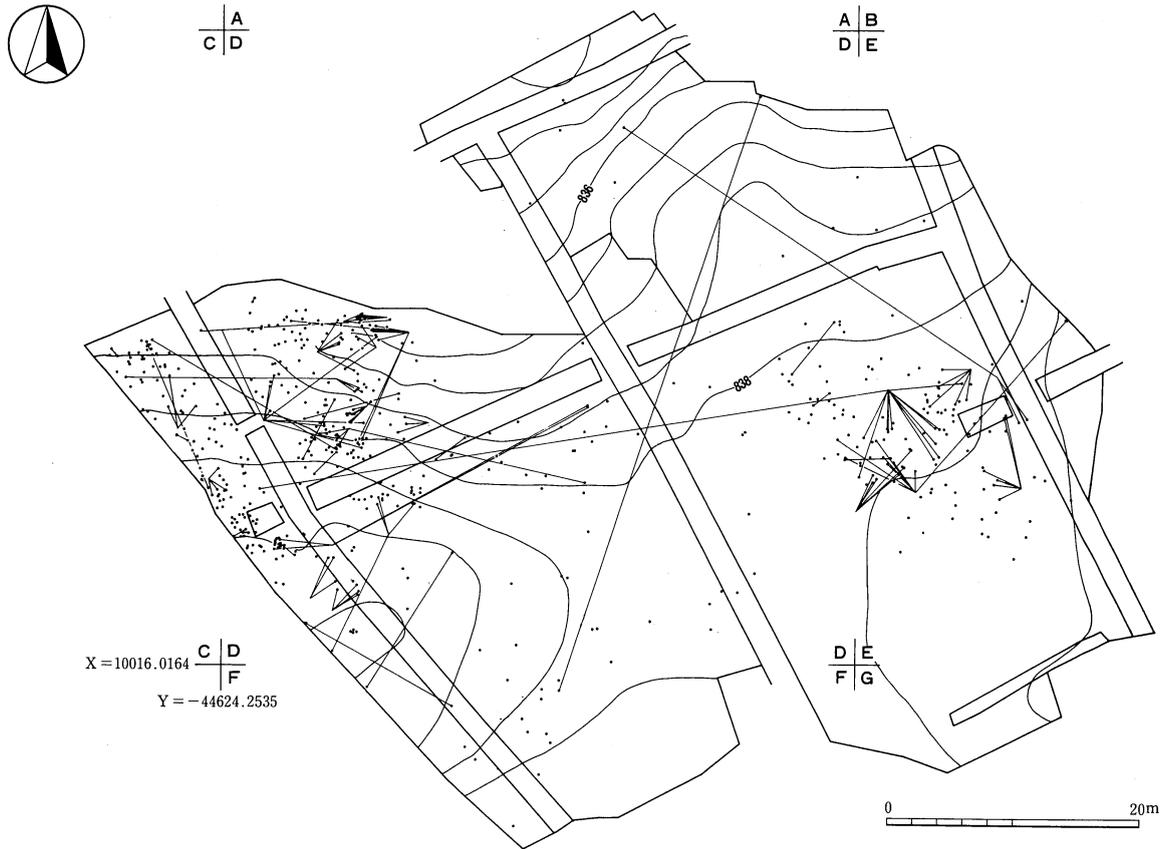


図34 縄文時代後期中葉土器分布図1(精製土器) (1:600)

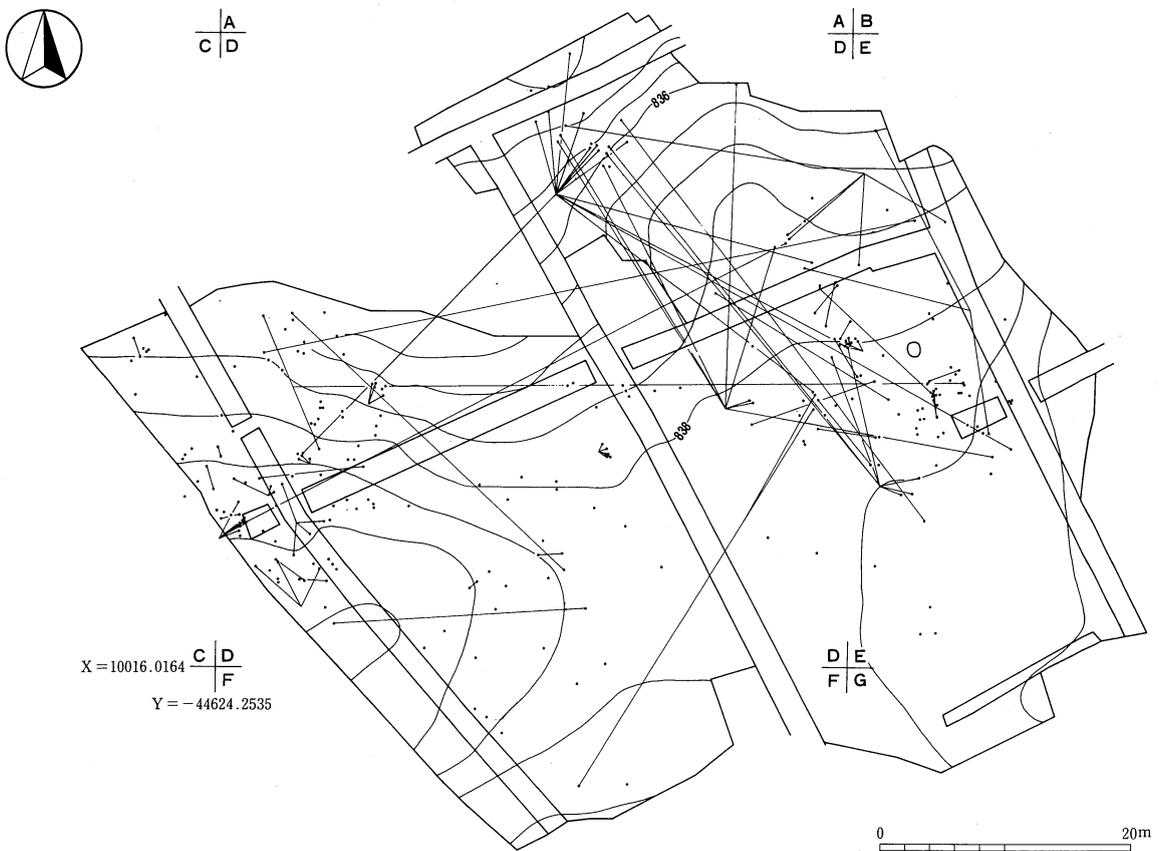


図35 縄文時代後期中葉土器分布図2(粗製土器) (1:600)

側を2号ブロックとする(図34・35)(註1)。以下、両ブロックの土器を一括して、製作技法を観察し、分類を行う。

(i) 製作技法

土器の胎土は精製、粗製を問わずに三者が存在する。いずれも火山岩の風化物とみられる岩片、輝石、角閃石を含むが、それらが主体的なタイプで、他に花崗岩が風化したとみられる石英や斜長石が多いタイプと、川砂とみられる堆積岩が多いタイプがある。土器の諸類型との間には特別な相関関係はない。おそらく三者とも在地の胎土と思われるが、水系を異にする等小さな地域差が含まれているためであろう。

精製土器の底部には粘土紐の剥落痕が数多く残され、粗製土器の口縁部には粘土紐の接合痕がよく残っている。精製、粗製とも成形技法は差がないものと思われ、以下のように復元できる。まず底部の円板をつくる。円板は中央部がやや盛り上がる傾向があり、円板周辺部は指でオサエてくぼめ、次いでナデて浅い溝状の凹部を一周させる。この凹部上に粘土紐を積み上げるが、最初は太く、次第に細くしてゆく。接合面は下面を丸くして円板凹部に対応させ、上面は内傾させている。体部の屈曲は成形時に明瞭に作り出されている。接合部は強くオサエ、次いで整形が行われる。底部外面には網代圧痕がみられる。

精製土器は内外面とも研磨するが、器表は平坦なため軽いケズリが加えられたものと推測される。体部下半は縦位、上半は横位の研磨が多い。粗製土器は内外面ともケズリ痕が顕著だが、ナデのみの整形もみられる。ケズリは器体上位では右から左へ、下位では下から上へ行われるが、その後のナデは垂直方向に行われることが多い。研磨、ケズリ、ナデとも、規則性が捉えられなかった。

(ii) 分類

中葉の土器は大きく加曾利B式の枠の中で捉えてよいと思われる。しかし加曾利B式には地域差があることが知られており、長野県内の土器は西関東のそれに最も近い様相をもつものの、細部にわたっては独自性があるとみられる。地域差、時間差のあることが予想されるので、ひとつの系統(群)、ひとまとまりの時間(類)に属すると仮定したい。加曾利B式は精製土器(註2)、注口土器、粗製土器の3種類に大別され、それぞれ独自に変遷することが知られている。本遺跡出土土器も同様だが、それら三者はさらに細分できる。ここでは共通した文様をもつ土器のまとまりを「種」とし、精・粗等の区分は説明の都合上使用するが、ひとまず種の中に解消してかかることにしたい。

A種 (710~722・728~732・745~763・826~831・842~856・875~878・886~892)

口縁部を中心にして横帯文(註3)をもつ精製土器である。三単位の把手をもつ深鉢(A a)、把手のない深鉢(A b)、体部の丸い浅鉢(A c)等に細分されるが、破片ではその違いは明瞭に捉えきれない。

A aは精製土器の過半を占めており、最も特徴的かつ主体的な土器である。体部にシャープな屈曲をもち、口縁部も短かく鋭く内屈する。文様は口縁部に狭い無文帯を残して体部上半に施文されており、屈曲部以下に施文されることはない。横帯文、把手に対応する位置の単位文、単位文の中間の区切りなどがあるが、単位文と区切りは位置を交換することがある。縄文が必ず用いられる。沈線内や無文部分が必ず研磨されるので、施文順がわかりにくいのが、充填縄文が主となるらしい。把手から口縁部にかけてのカーブはなめらかで、波状口縁状の外見に似る。把手の中間の口縁部には小さな突起が貼付される。口縁部内面の屈曲部付近には沈線が引かれることが多い。A b・A cについては詳細を省略する。

(註1) 東側の尾根の先端部寄りに若干遺物が集中する。しかし、接合状況から見て2号ブロックからの転落物の可能性が高いので孤立したブロックとは認定しない。

(註2) いわゆる半精製土器を含む。用いられる文様が精製土器と共通するからである。

(註3) 横帯文、単位文、区切等の用語は、大塚達朗のそれにならった〔大塚1983〕。

B種 (723・764～771・838・839・857・858・882・893・894)

内外面に横帯文をもつ精製浅鉢である。系統的変遷を明らかにできないものを一括しており、今後別の種に変更する可能性が高い。丸い体部の外面に横帯文のみをもつB a、外面は無文で口縁部が内屈し、内面に横帯文や単位文をもつB b、小波状口縁で内外面とも横帯文、単位文をもつB cに細分する。

C種 (772～789・859・860・895)

シャープに内屈する幅広の口縁部に文様帯をもつ精製浅鉢で、体部は無文、把手はつかない。口縁部の文様は横帯文もしくは弧状沈線文で単位文が加わることもある。縄文を併用するC a、縄文のかわりに刺突文を用いるC bに細分するが、両者のモチーフは若干異なりそうだ。

D種 (790～798)

シャープに内屈する幅広の口縁部及び体部上半に文様帯をもつ半精製深鉢である。平口縁で把手はつかず内面には施文されない。もし口縁部がさらに屈曲して直立すれば、そろばん玉状の器形をもついわゆる大森式の深鉢になる。口縁部の文様は連続する上向き弧線と、弧線の接点の単位文で、縄文が併用される。体部の文様はA種の横帯文の変形(D a)または羽状沈線(D b)とみられる。

E種 (799～802)

平口縁で口縁部は単純に外傾し、外面に幅広で深い羽状沈線を施文する半精製深鉢である。体部下半に屈曲部を持つ可能性がある。口縁部内面に沈線、口端部から口唇部に圧痕をもつ。

F種 (803・804)

波状口縁で口縁部は外傾し、外面に羽状沈線を施文する半精製深鉢である。E種に近似した特徴をもつが、口端部内面側が肥厚する。

E種、F種の体部下半は屈曲部以下が無文となる(805)のが原則らしい。806のようにさらに下方まで施文される例(註1)は施文手法や胎土には差はないものの、「群」のレベルでの差をもつ可能性がある。

G種 (724・725・807・808・861・863・898～900)

口縁部が単純に外傾する無文の半精製土器で、内面に沈線が施文される。体部の様相しだいでは別途分類の必要があろう。波状口縁を含んでいる。

H種 (832)

単純に外傾し、口縁部～体部に沈線帯をもつ半精製土器である。口唇部に指圧痕が残される。

I種 (862)

沈線を密接に施文した注口土器である。研磨が著しく、黒色を呈し、把手をもつ。

J種 (733～735・809・864)

I種以外の注口土器を一括する。文様は横帯文や単位文の変形かと思われるが、全体像が復元できない。さらに細分が必要な種であろう。

K種 (737・810～813・833・834・901～905)

口縁部に粗大な隆帯を貼付する厚手の粗製深鉢で体部は無文である。器形は不詳だが体部が屈曲する破片は見つかっていない。隆帯上には隆帯に平行する指頭圧痕が付され、口唇部にも口唇部に平行する指頭圧痕が加えられることがある。装飾のあり方から時間的区分が可能と思われる。

L種 (738・814・815・835～838・865～868・884・885・906～908)

口唇部の指頭圧痕を唯一の装飾とする粗製深鉢である。体部は不詳で、器壁は厚いものが多い。隆帯を除けばK種と差がない。

(註1) いわゆる大森系列には存在しない現象で〔鈴木正博他1981〕、東関東の特徴である。

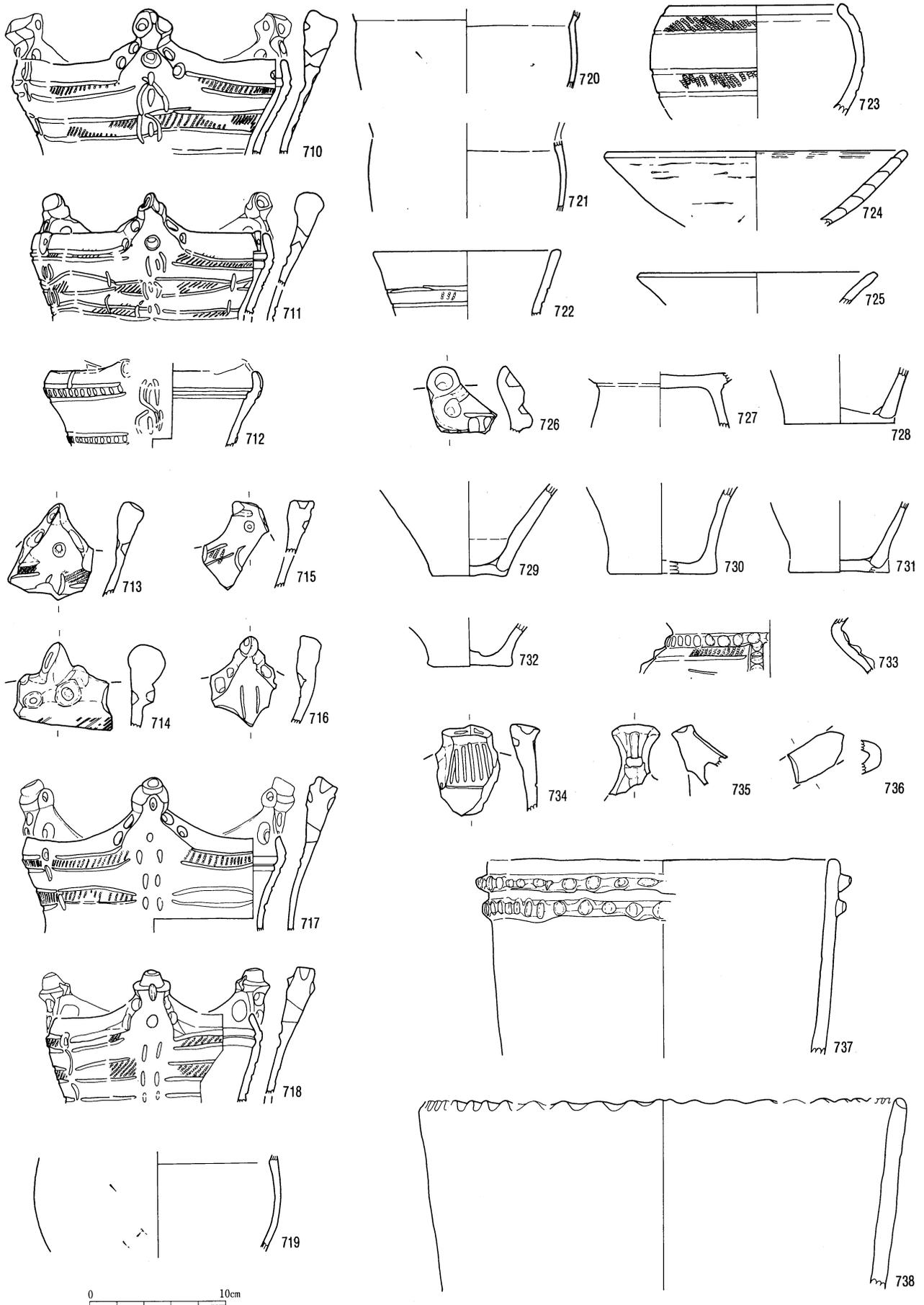


図36 1号ブロック出土縄文時代後期中葉土器実測図1

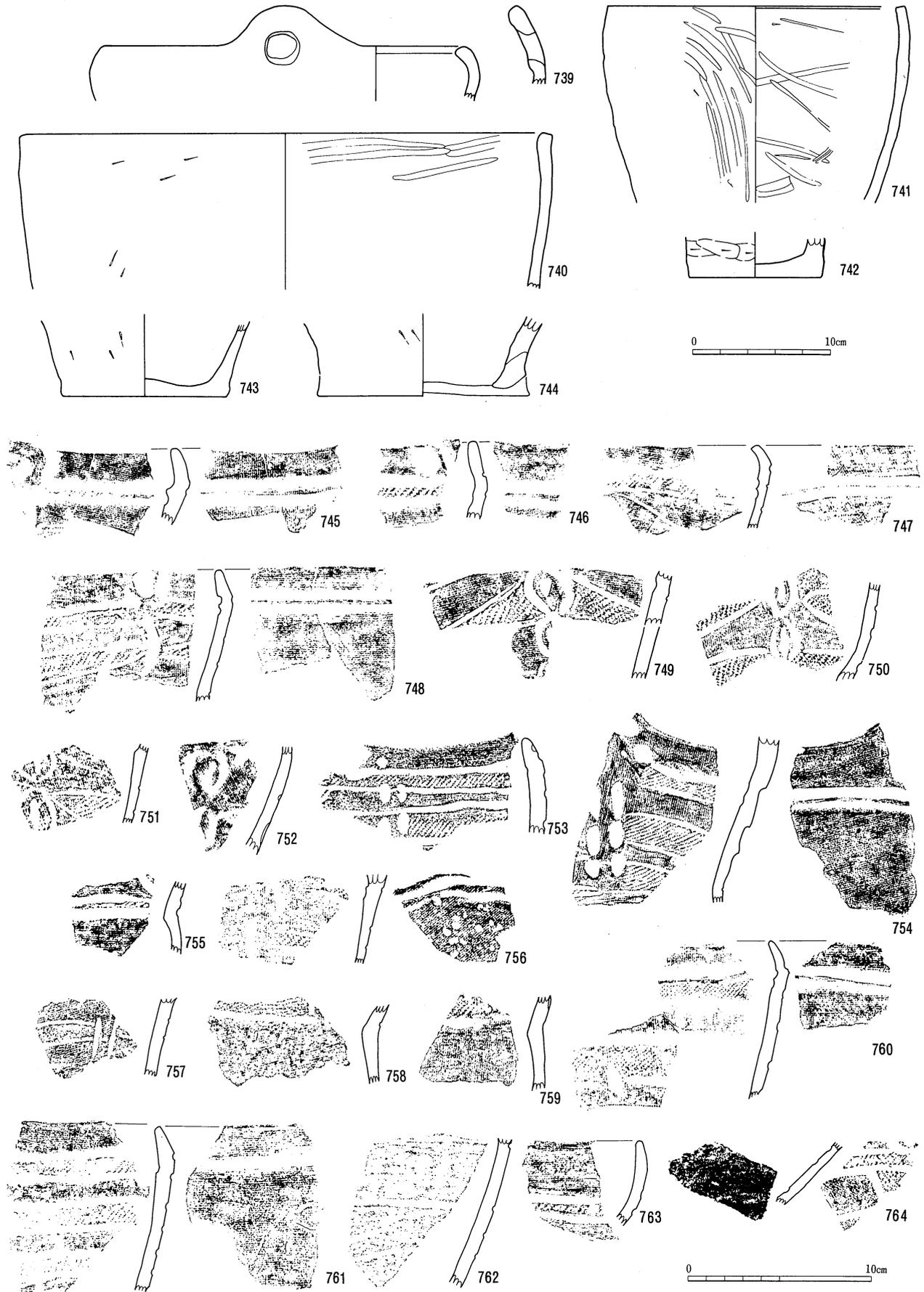


図37 1号ブロック出土縄文時代後期中葉土器実測図・拓影 2

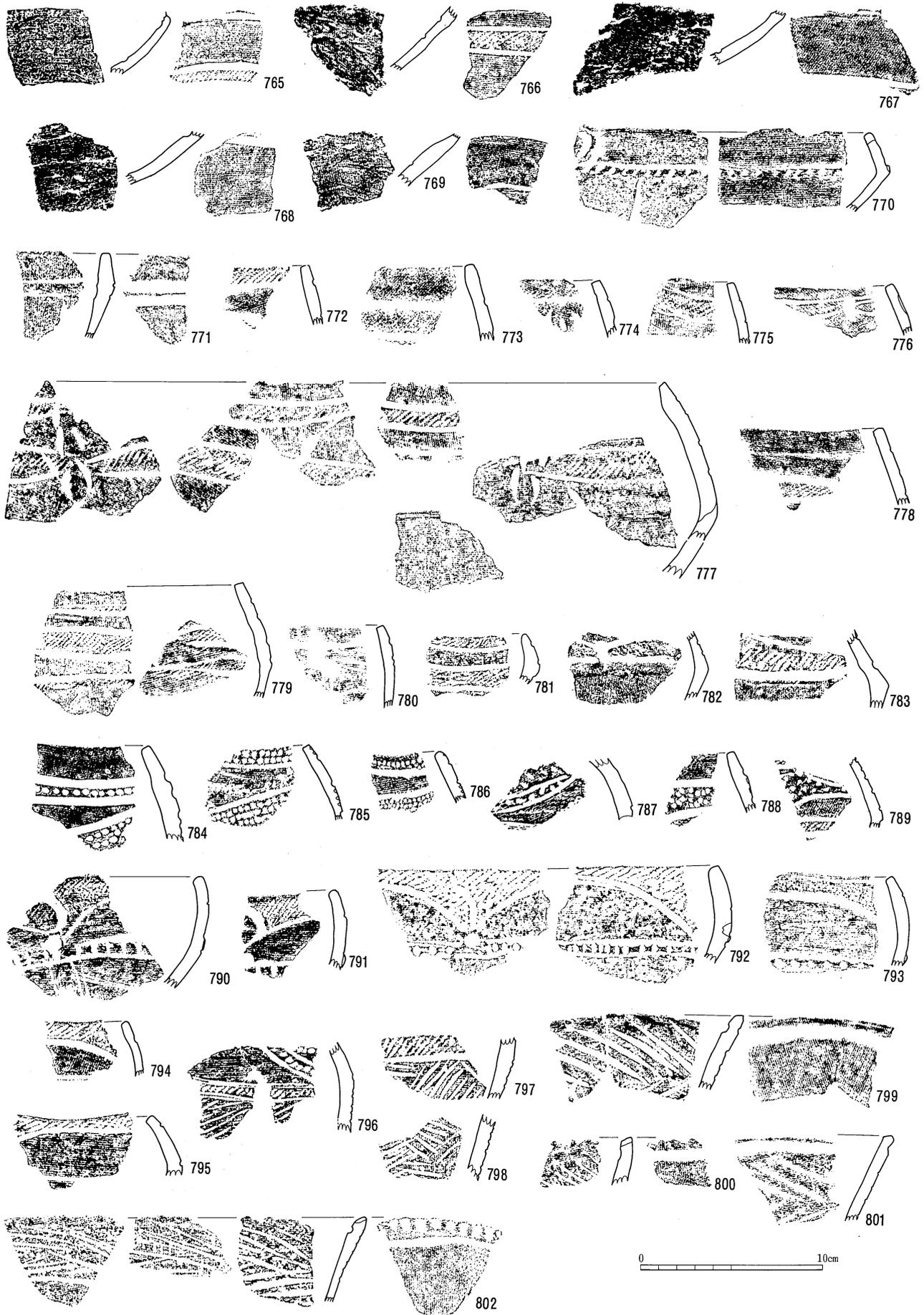


図38 1号ブロック出土縄文時代後期中葉土器拓影3

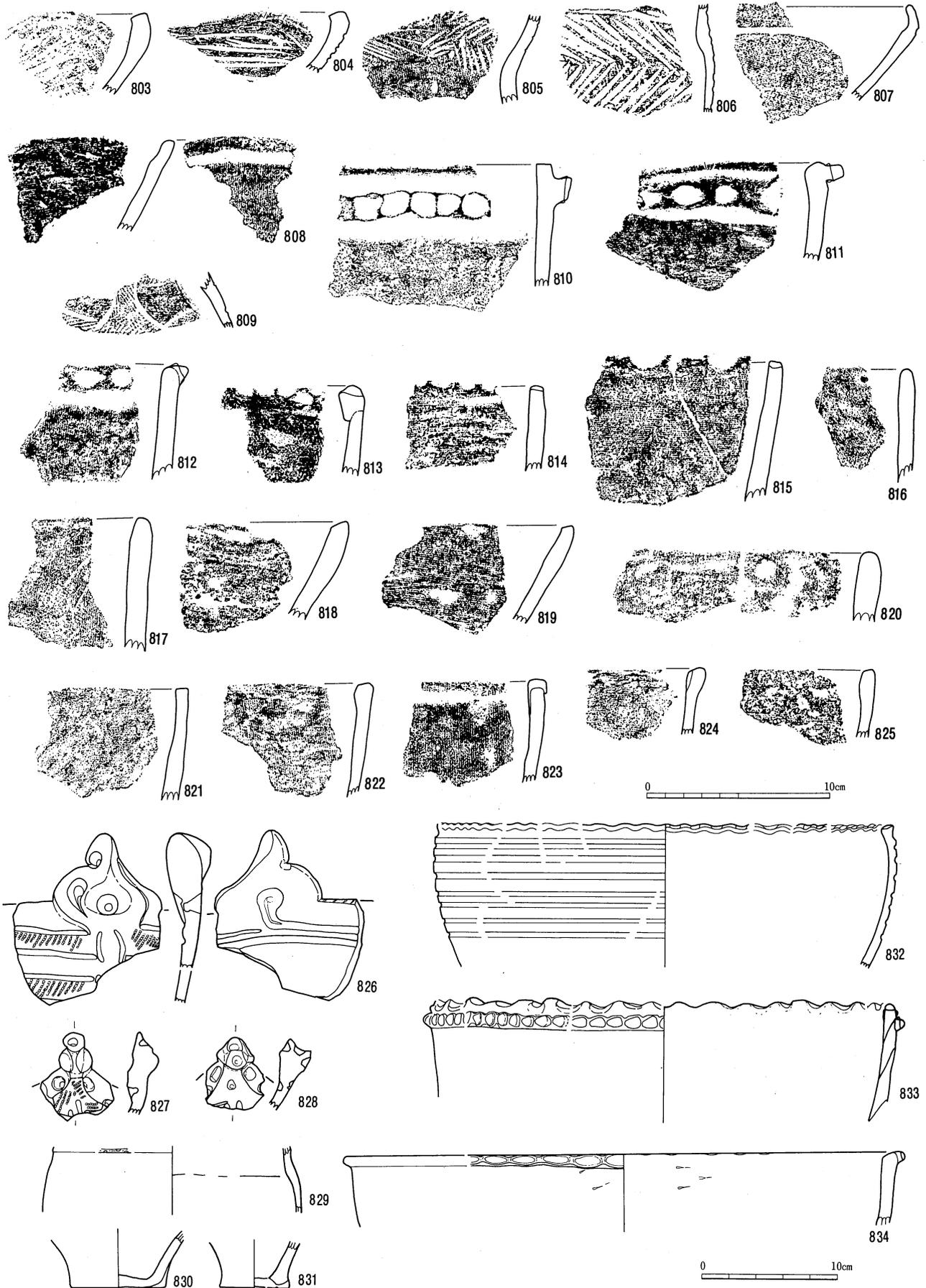


図39 1号ブロック(803~825)及び2号ブロック(826~834) 出土縄文時代後期中葉土器実測図・拓影1

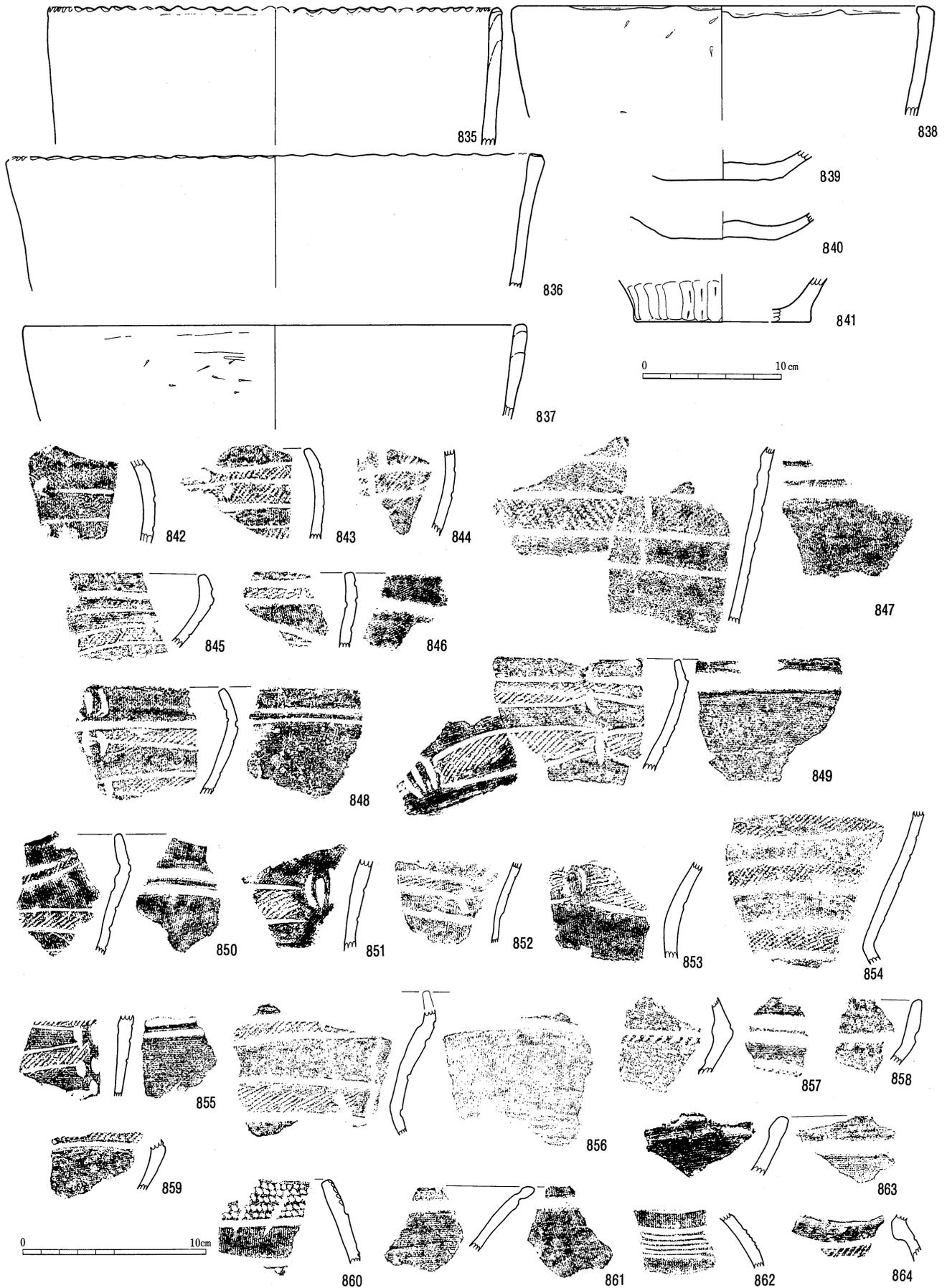


図40 2号ブロック出土縄文時代後期中葉土器実測図・拓影2

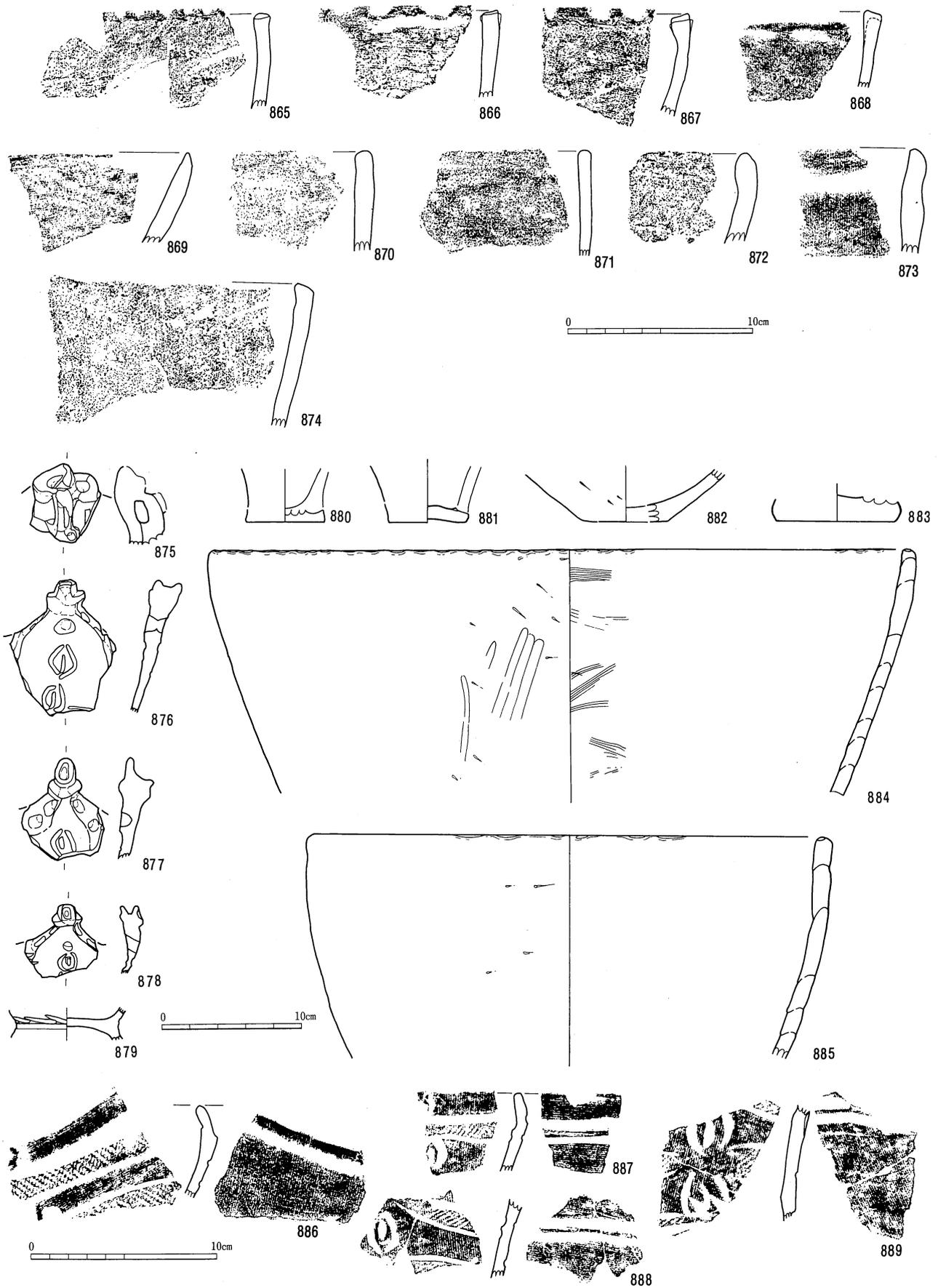


図41 2号ブロック出土縄文時代後期中葉土器実測図・拓影3

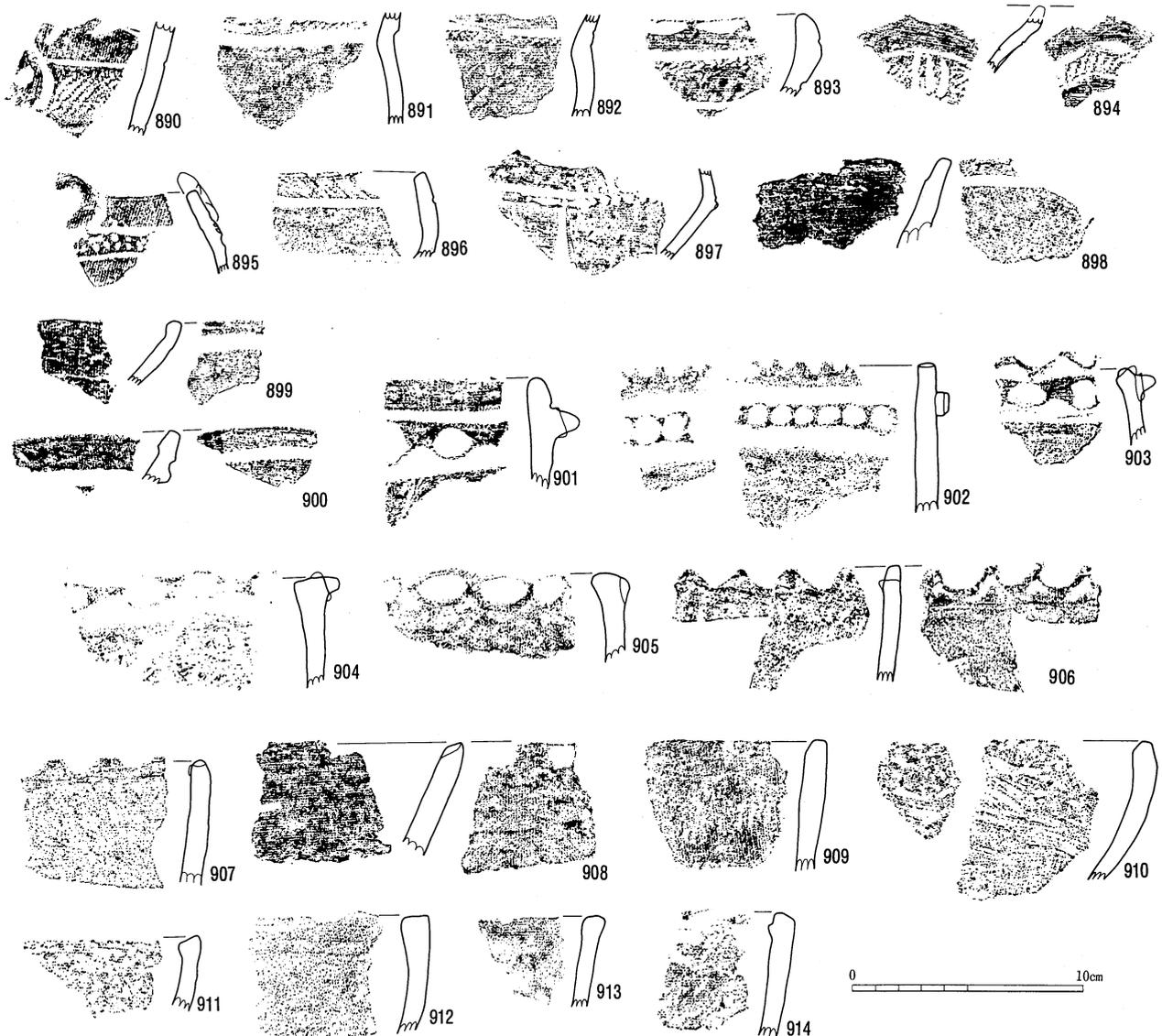


図42 縄文時代後期中葉の土器拓影

M種 (739~741・816~825・869~874・909~914)

全く装飾のない無文粗製土器である。大半が深鉢となろうが器形は不明である。口縁部断面形を見ると、単純に丸いタイプ(Ma)、口唇部をナデて平坦面をつくるタイプ(Mb)、主に内面側を肥厚するタイプ(Mc)がある。なお、口縁部に小把手をもつ無文土器(739)を、便宜上含めてある。

後葉の土器 (693~700)

中葉のC種、D種との系譜関係が考えられる土器である。単位文が大きな丸い瘤となる693は高井東式に、縦長の瘤となる694はそれ以後に比定されそうで、他の破片の大半も高井東式に含まれるだろう。同時期の土器は他に数片存在する。

⑦ 縄文時代晩期の土器 (図33)

後葉~末葉の浅鉢、甕、深鉢が若干ある。肩部で屈曲する浅鉢(701)はおそらく無文で、屈曲のない無文浅鉢(703)と共伴しよう。甕は小片が1点のみ(706)で、長石、雲母が目立つ東海の胎土に近い。深鉢(704・705)も無文で、定型的な整形技法が看取できる。細密条痕をもつ土器が欠けているのが特徴的である。

カ 出土石器の分類 (図43~55、P L18~21)

① 石 鏃 (32~167)

(i) 概観

八窪遺跡出土の石鏃は、破損品及び未製品を含めて266点出土している。遺構からの出土は8点にとどまり、その大半が包含層出土である。層位別では、I層60点、II層32点、III層105点、IV層13点、V層48点を数える。平面分布は調査区西よりの小尾根上に比較的多くなっている。完形品(先端部が若干欠けるものも含む)は83点(31%)存在する。石材について見ると黒曜石が圧倒的に多く、255点(95.9%)を占め、チャートが9点(3%)、ホルンフェルス化砂岩1点、ホルンフェルス化頁岩1点である。

(ii) 分類

基部の形状から、I類(無茎凹基)、II類(無茎平基)、III類(無茎円基)、IV類(有茎)に大きく分け、V類を未製品にあてた。細分類は、対象物への第一次の殺傷力を中心に据えた。A～Cの分類は対象物に対する鏃身全体の角度(刺さりやすいか否か)を考慮し、長幅比を基準とした。Aは長さが幅に対して1.4倍以上のもの、Bは $1.4 > X > 1.0$ のもの、Cは1.0以下のものとした。a～cは側辺の形状から、aは内湾及び直線的に先端に至るもの、bは外湾、cは蛇行するものとした。また、対象物の差や飛距離に関わる法量の大小については大きいものから順次並べた。その他の観点については別項目において触れることとする。

I-A-a・b (a=32~41, b=42~47) : 長い鏃身を呈する。丁寧な調整剥離が行われているものがほとんどで、左右対称の流線形を成すのが特徴である。脚部は鋭角な逆刺し状のものから平坦になるものまで各種ある。基部はなだらかに湾曲するものが多く、深く抉り込むものは認められない。

I-A-c・I-B-c (48~54) : 先端部のみを鋭利に加工し、脚部はある程度開脚するもの。

I-B-a・b (a=55~77, b=78~99) : 大きさ、厚さ、先端部・脚部・基部(抉り)の形状などにバラエティーが多い。いくつかのグループに分けられる可能性があるが、その差は漸移的である。特徴的ないくつかについては後述する。

I-C-a・b (a=98~109・113, b=110~112・114~118) : I-B同様バラエティーに富む。a種は先端部を鋭利に作るが、b種には鋭利になるもののほか鈍い先端部となる例も存在する。

II (119~143) : 平基。若干の基部調整の認められるものと、まったくないものが存在する。前者のうち、長幅比で長軸の大きい長い石鏃には側辺が左右対象にならないものがある(121・122)。

III (144~152) : 円基。三角形小形尖頭器とも呼ばれる類である。長幅比A～Bで、まるみを持って外湾する。厚みがあり、法量に比して重いものが多く、石鏃全体の中では大形品が多い傾向にある。

IV (153~156) : 有茎。長幅比の大きいものが主流となる。先端部の鋭い例が多い。155を除いて脚部が鋭角であり、対象物に刺さったのち抜けにくい工夫がなされている。

V (157~167) : 未製品。三角形に形を整えただけのもの、及びそれに先端部の加工を施した段階のものを含めた。仕上段階の調整の破損品については、使用後の破損との区別が不明瞭のため除いてある。

(iii) 破損状況

破損品は266点中185点(69.5%)にのぼる。破損部位は、先端を破損したものが67点(36.2%)、脚部を欠損したものの122点(65.9%)である。ここには、先端と脚部の両方を欠損していたもの等も含めてある。

欠損した時期を見極めるのは困難である。多くのものは打点が鏃身の平らな面にある場合が多く、製作完了後から廃棄後に折れたことはわかるが、矢として使用した時点での破損か否かを言いあてることはできない。一方、側縁からリングの広がるものがあり、製作途上での欠損と推定できるものも含まれている。観察し得た例は13例で、その内訳は基部の抉り込み調整時のものが11例、側縁部を鋸歯状に加工する時点でのものが2例認められた。

(iv) 製作について

明らかな未製品、及び調整中に誤って破損した例をもとに見ていくこととする。石材は先にも触れたよ

うに黒曜石がほとんどである。黒曜石製品は粗雑なものから丁寧なものまで各種あり、しかも未製品や剥片、石核も存在しており、この地点での製作を裏付けている。これに対して、チャート製品は点数が少ない上、調整がひじょうに丁寧になされている。粗雑なものがないほか未製品や剥片、チップがほとんど見られない。

素材の選択や加工は一定の方式によらず、石鏃に見合う大きさの素材であれば、多少の形状の差は調整剥離の段階でカバーしている。素材となる条件は全体の形状が三角形にしやすいことと先端部の作出が可能なことだけ、と言っても過言ではあるまい。

未掲載の例には薄い剥片を利用しており、素材の選択の時点ですでにある程度先端角を持っていたためか、先端部の調整を後に残して側辺及び基部の形状を整えることから始めているものがある。剥離はひじょうに丁寧になされており、この段階ですでに、仕上げを兼ねていたものと考えられる。

157ほか、先端部調整からはじめるもので、ほとんどの例がこの類である。157は先端部加工を途中まで行ったのち基部の厚みを落し切れなかったものである。この例は3面に自然面が残っており、素材としては小形の転石をそのまま利用していたことがわかる。

仕上げの小剥離は素材の差によって形状を整える段階から併行して行われる場合と、ある程度形状を整えた後に加える例がある。仕上げの小剥離中に破損した例のほとんどは、基部の凹部分の調整中に脚部が折れてしまったものである(42)。この段階のものは、先端や側辺の調整を終了しており、このことから、仕上げ段階においても先端から基部に向かって調整が進められていることがわかる。さらに仕上げの終了段階で側辺部を鋸歯状にする例があり、この段階の破損も目立つ。

② 石 錐 (168~179)

石錐は17点出土し、未調整の個体を含めた完形10点(58.8%)、つまみ部欠損品1点(5.9%)、錐部欠損6点(35.3%)である。石材はチャート1点、ホルンフェルス化頁岩1点、他は全て黒曜石である。これらは形状によって3分類できる。

I-A：つまみ部を有し、錐の長さが短いもの(168~172)

幅広の比較的薄手の剥片を利用し、平面三角形の短い錐部先端を作出する。調整はこの先端部に集約されるものが多い。171は片面調整で他は両面調整である。

I-B：つまみ部を有し、棒状の錐部を持つもの(173~175)

肉厚の棒状の素材から、つまみ部と錐部を作出している。錐部の断面形態はI-Aほど扁平になるものは認められない。

II：つまみ部を持たない棒状のもの(176~179)

棒状に近い素材(176)を利用し、全面に調整を加えて入念に棒状の錐部を作出している。

使用痕については、肉眼観察によって大きく3タイプに分けることができる。

(i) 錐部先端付近で、明瞭な横方向の摩耗痕が認められるもの(176・178)。これは、回転運動による穿孔具の可能性を想定し得るものである。

(ii) 錐部先端付近の稜につぶれの認められるもの(168~170・173~175・177・179)。

(iii) 摩耗痕がなく、稜のつぶれも不明瞭なもの(171・172)。

(i)の認められるものは意外と少ない。また、(ii)と(iii)の差が単なる使用頻度の差であるのか、対象物の差であるのかは判然としない。

③ 石 匙 (180~185)

6点出土している。I類横形石匙(180・181)と、II類縦形石匙(182~185)の二者が認められる。石質は、181・183がチャート、他は黒曜石である。

I類：180は完形、181はつまみ部分を欠損する。

II類：183は正面図右側縁を両面から調整し、刃部断面は両刃状を呈するのにたいし、182・184・185は、表裏いずれか片面からの調整によって刃部が形成され、刃部断面は片刃状を呈している。

④ スクレイパー (186~203)

総数42点出土している。縄文時代のスクレイパーは、素材となった剥片が多様な形状を呈し、スクレイパーそのものの形状も様々なものが見られ、それらは不定形石器として評価されたこともある。しかしながら本書では、形状にはとらわれず、刃部の在り方で分類した。以下、分類の視点と基準を提示しておくたい。

第1に単刃か複刃か。スクレイパーと認定したものは、剥片の縁辺に加工が施され、それを刃部としているものである。その剥片に刃部が1箇所か複数あるのかで大きく分類した。1箇所のを単刃とし、2箇所以上のものを複刃とする。

第2に片刃か両刃か。大きく3タイプが見られる。a = 剥片の表裏いずれか一面側から加工を施し(片刃調整)片刃状の刃部を呈するもの。いわゆる搔器的な刃部形態で、使われ方は、scrape, whittleなどが推定されている〔梶原 洋1982〕 b = aと同様に片面調整ではあるが、刃部の断面は両刃状になる。c = 両面調整のもので、刃部の断面形は両刃状になる。b・cは、cut、grave、saw、chopなどの使われ方が考えられている。

第3に刃部の形状の3タイプ。a = 直線状の刃部を有するもの。b = 内湾もしくはノッチ状の刃部を有するもの。c = 外湾する刃部を有するもの。以上の観点から本遺跡のスクレイパーを観察すると以下の7形態に分類される。

I - A類：単刃片刃状。刃部平面形は直線状を呈す。調整は片面から施されている。(186~188)

I - B類：単刃片刃状。刃部平面形は外湾する。調整は片面から施されている。(189~192)

I - C類：I - A類と同様の刃部の在り方を呈するが、調整は両面に施されている。(193~194)

I - D類：I - B類と同様の刃部の在り方を呈するが、調整は両面に施されている。(195~196)

I - E類：単刃両刃状。刃部平面形は直線状を呈する。調整は両面から施されている。(200)

I - F類：単刃両刃状。刃部平面形は外湾する。調整は両面から施されている。(197~198)

I - G類：単刃片刃状。刃部平面形は内湾状を呈する。調整は片面から施されている。(199)

II類：複刃のものを本類とする。II類は、単刃であるI類の刃部が組み合わさったものと考え、表記方法は、II - ABといったように呼称する(201~203)。

分類別の数量は、I - A類7点、I - B類5点、I - C類5点、I - D類3点、I - E類13点、I - F類2点、I - G類1点、II類6点であった。

⑤ ピエス・エスキーユ (204~225)

総数56点出土している。ピエス・エスキーユとしたものは、器体の上端及び下端に剝離痕の認められるものである。本遺跡のピエス・エスキーユは、すべて黒曜石製であるが、形状はバラエティーに富んでいる。ピエス・エスキーユの形態分類は、形状による分類、剝離痕の在り方による分類などがその主たる基準となっているようである。本書では、形状による分類を主とし、大きく2つに分類し、それぞれに剝離痕の観察を行った。2分したのは、縦横の長さがほぼ同じ正形状を呈すもの(I類)と、縦長のもの(II類)である。表面に残された剝離痕の観察については、北海道聖山遺跡において素材面を残すものから全面剝離痕で覆われているものを両極剝離の進行の度合としてとらえ、さらにそこに刃部の90°転移を加味し、I~III類に分類した〔阿部朝衛1979〕。一方東京都利島大石山遺跡では、剝離痕の種類に着目し、それらを3種に分け、個々のピエス・エスキーユにどのような組み合わせで看取されるかを観察した〔大竹憲昭1985〕。本書にお

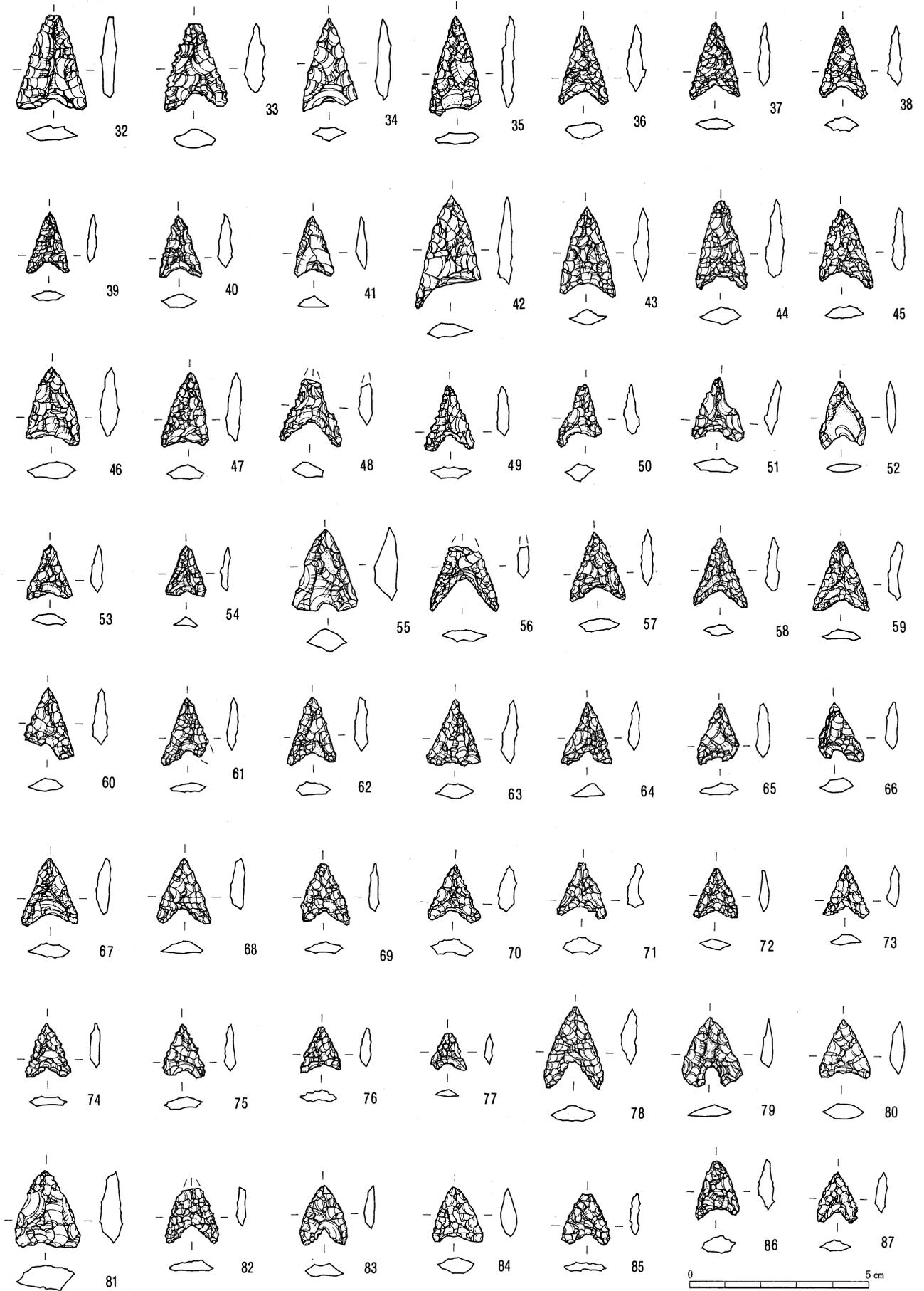


図43 遺構外出土石器実測図1

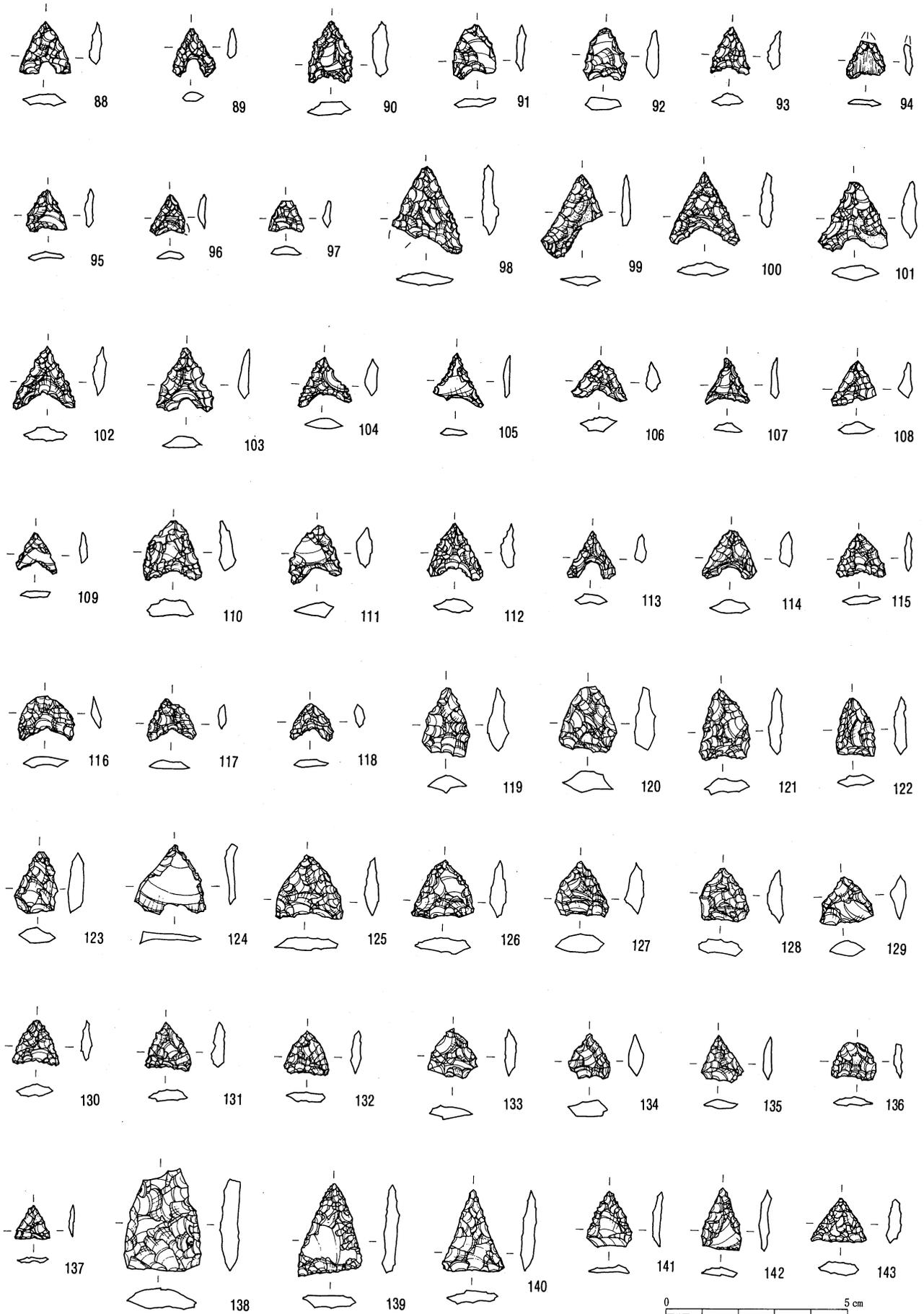


图44 遺構外出土石器実測图 2

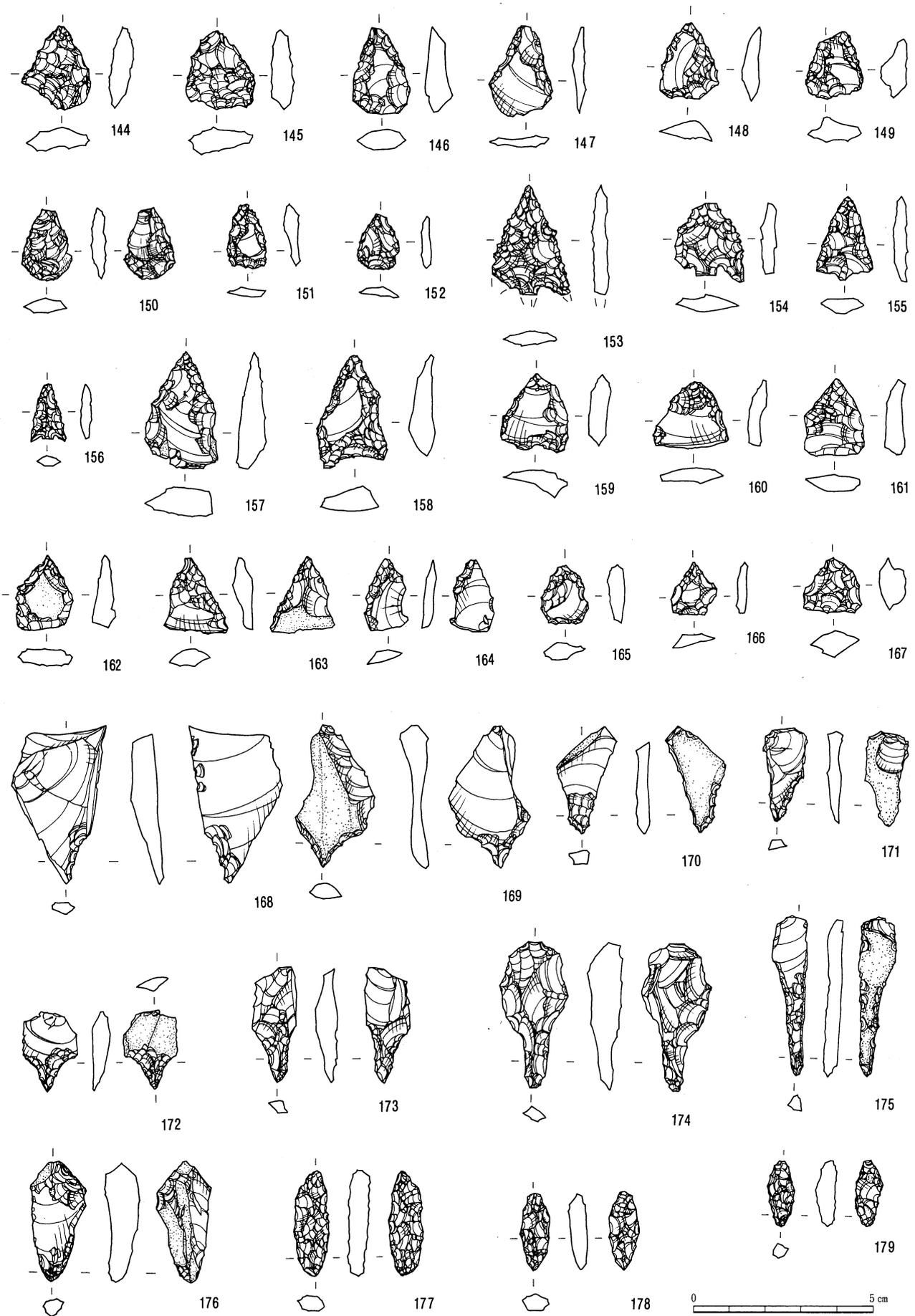


図45 遺構外出土石器実測図3

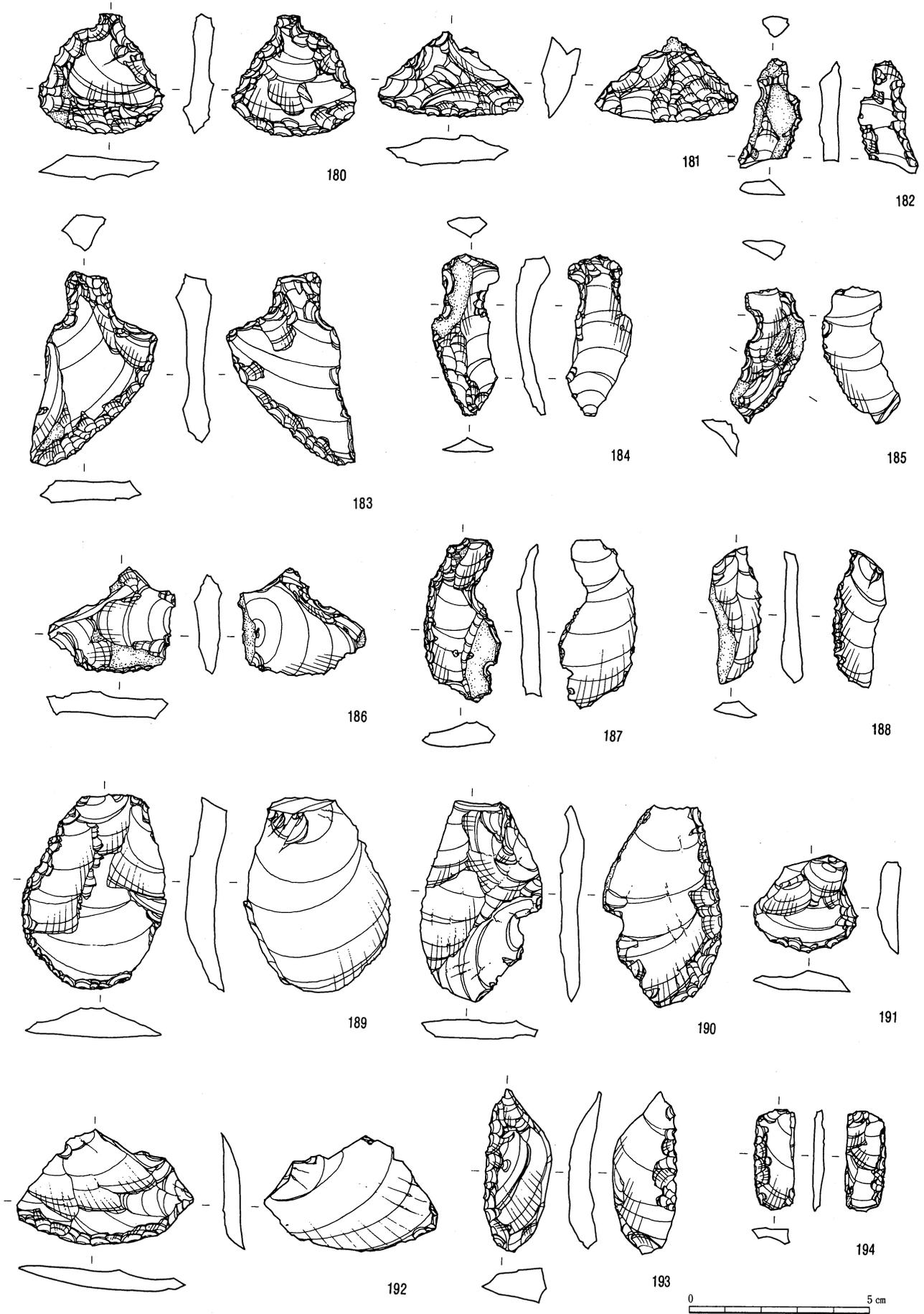


図46 遺構外出土石器実測図4

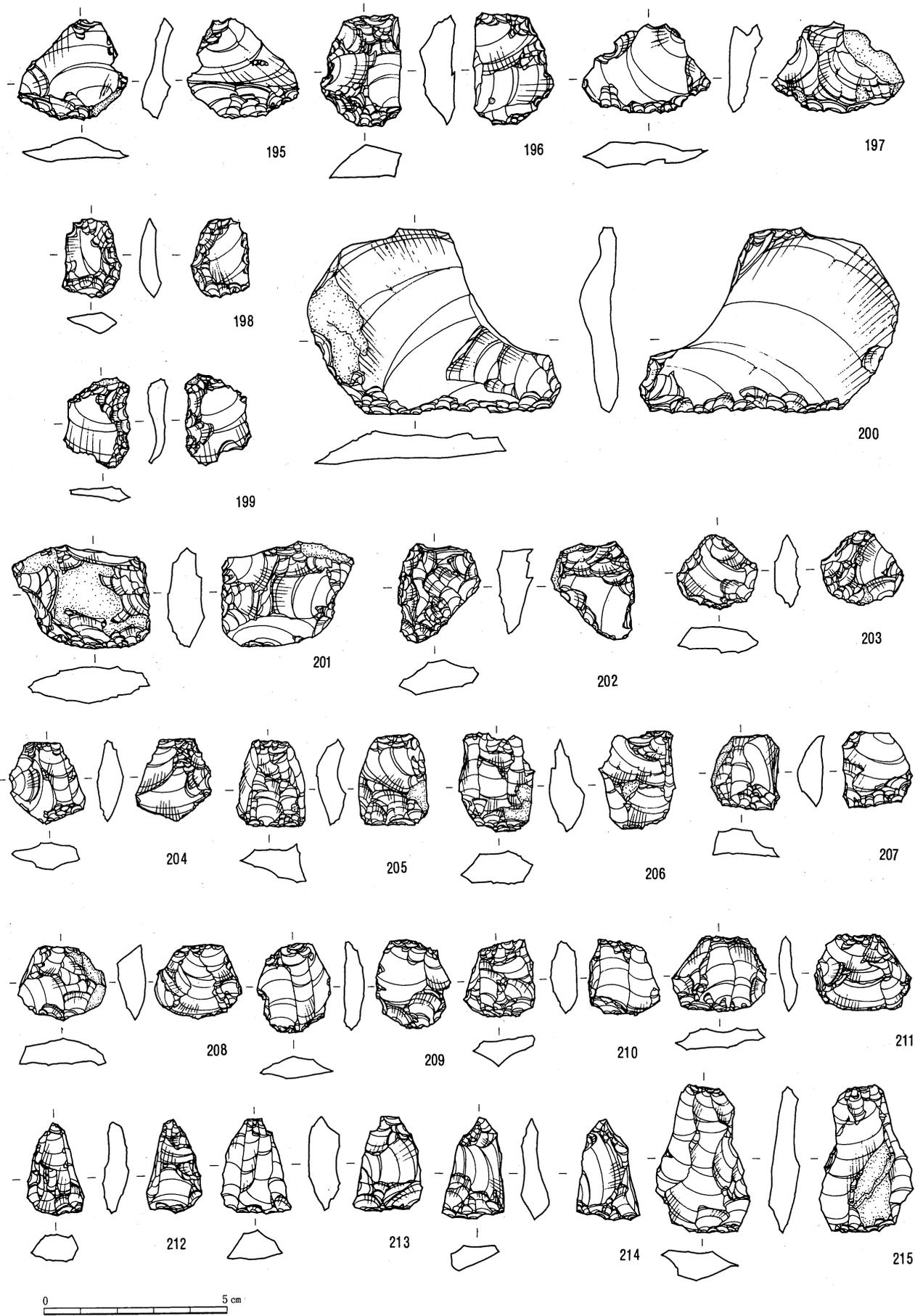


図47 遺構外出土石器実測図5

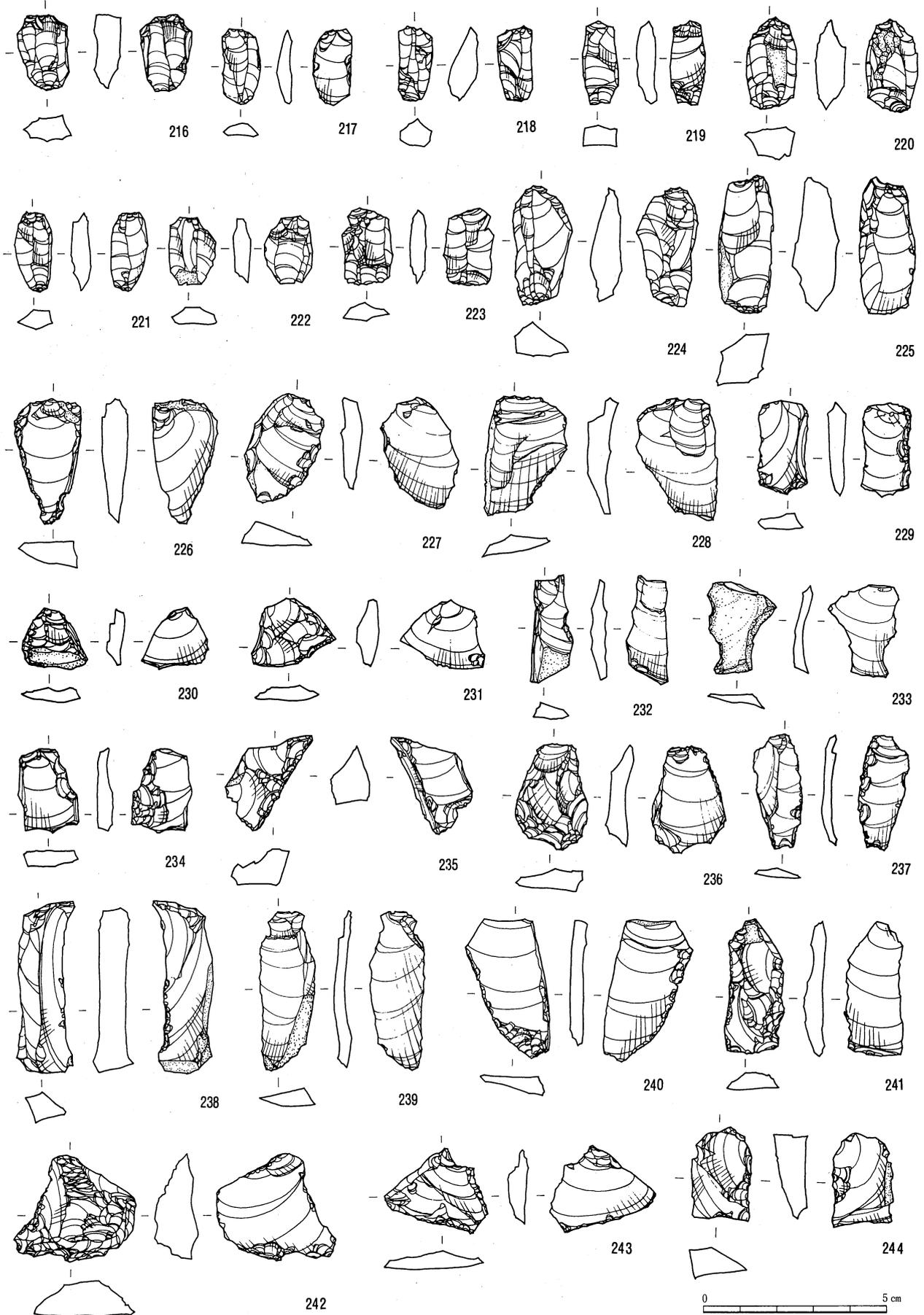


図48 遺構外出土石器実測図 6

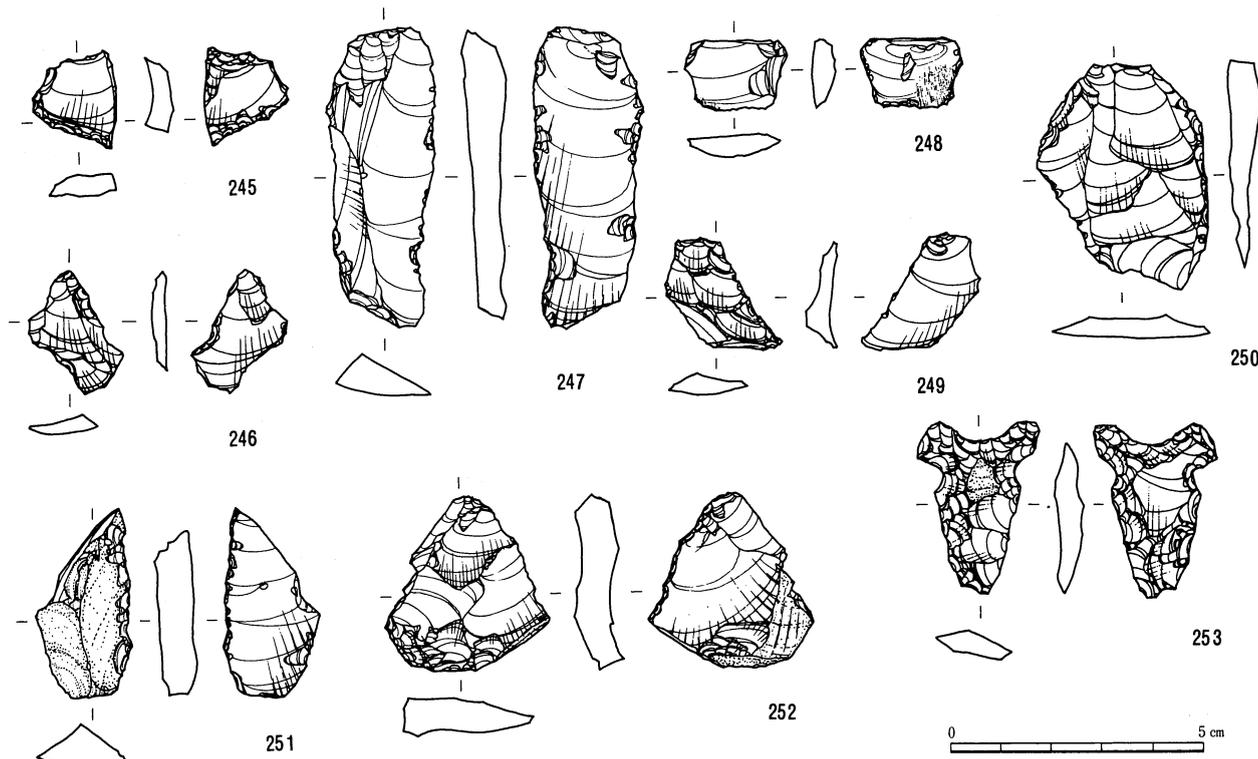


図49 遺構外出土石器実測図7

いても大石山遺跡の観察にしたがってピエス・エスキーユを見ていった。なお、剥離痕の3種とは、剥離痕 a = 上端から下端までまたは下端から上端まで抜ける大きな剥離痕、剥離痕 b = 上端及び下端に見られる階段状の剥離痕、剥離痕 c = 上端及び下端に見られるつぶれたような微細な剥離痕のそれぞれである。

204~211はI類としたものである。剥離痕 a は比較的稜線が波うっている。剥離痕 b も顕著に見られる。また剥離痕 c は上下両端ともに連続性をもってみられる。212~214はI類と考えられるが、側面が切断していたり、剥離痕 a などが看取され、欠損品の可能性がある。

215~225はII類としたものである。特に216~223は、大きさに共通性があるところが注目される。剥離痕の特徴としては、剥離痕 a は直線的な稜線が2~3条走っており、I類の剥離痕 a とは対照的である。また剥離痕 b はあまり顕著でなく、剥離痕 c も局部的となる傾向にある。215・224・225は大形のもの。

以上が各類の特徴である。本遺跡全体としてはI類が16点、II類が22点出土している。その他に分類不可能なピエス・エスキーユの破片が18点出土している。

⑥ 小剥離痕のある剥片 (226~252)

総数92点出土している。小剥離痕のある剥片としたものは、剥片の側縁に微細な剥離痕が認められたものを指す。それらはまず、小剥離痕の認められる部位によって2分される。1側縁に認められるものをI類、2側縁以上に認められるものをII類とした。さらに、小剥離痕の種類によって細分され、以下の4形態に分類される。

I-A類：連続する小剥離痕が1側縁に認められる(226~236)。

I-B類：不連続かつ不揃いな(刃こぼれの)小剥離痕が1側縁に認められる(237~244)。

II-A類：連続する小剥離痕が2側縁以上に認められる(245・246)。

II-B類：不連続かつ不揃いな(刃こぼれの)小剥離痕が2側縁以上に認められる(247~252)。

分類別の数量は、I-A類26点、I-B類33点、II-A類10点、II-B類23点であった。

⑦ 打製石斧 (254~270)

加工途中や再加工時に生じたとみられる剥片(小剥片と仮称)10点を除き、52点ある。3号住居址から1点、9号土壇から6点(小剥片7点)、15号土壇から1点出土したが、他は包含層出土で、帰属時期の推定は困難であった。

形態の推定できる打製石斧を一般的分類に従って、短冊形、撥形、分銅形に区分した。それをもとに、法量(長さ、幅、厚さ、重さ)をグラフ化して示した(図56)。分銅形は1点のみで短冊形、撥形はほぼ等量である。形態と法量との間には特に関連性はなさそうであるが、法量ではとりわけ厚く重い個体が若干存在するのが注目される。

石質と素材のあり方を図56に示した。東山山麓の諸遺跡に共通の、ホルンフェルス化した頁岩が多いが、これは節理が発達しているため、それに従って破碎したフレイクを素材に用いている。また風化して表面がとろけたような外見を呈する素材も用いられている。大形の打製石斧はこの素材からしてふ厚い。いずれも板状の素材だが、手頃な厚さに加工するのは難しいようで、加工途中で放棄されたり、節理に従って割れてしまった個体も少なくない。

刃部、側縁部は原則的に両面加工で例外は稀である。側縁のノッチやつぶしは12点に観察された。摩耗は6点にみられた。完形品は16点で欠損品の大半は器体長軸に直交する方向に折れている。刃部側又は表裏いずれかの側からの打撃によるのだろう。2点のみ側縁側からの打撃で折れていたが(254・267)ともに刃つぶしのある位置からの打撃であった。

接合資料267は撥形で、図右面の中央部に著しい摩耗痕がある。刃部の摩耗と対応しており、この面が前主面であろう。いったん使用された後、再加工時の側縁部刃つぶしの際に折れたものとみられる。265も撥形だが節理で破碎したふ厚い礫を素材とする。剥離はすべて大きく、最終的な調整がなされていない。刃部は角度が大きく、欠損品の再加工というよりも、適度な刃をつけるに不向きな素材を加工したのかと思われる。268は唯一の分銅形で、中央の抉りはやや緩やかで大きい。深いノッチのついた撥形ともとれ、側縁の抉り部分は研磨されて面ができています。

⑧ 横刃形石器 (271・272)

2点出土しているが、いずれもホルンフェルス化した頁岩の横剥ぎ剥片を素材とする。271の刃部は片面加工で、背部の刃潰しは十分行われぬ。刃部側からの打撃で欠損し残存重量は78.5gである。272も刃部は片面加工で、背部は素材の主要剥離面の打面が残されているが、完形品で34.9gある。

⑨ 粗製大形石匙 (273)

273のみでホルンフェルス化した頁岩の横剥ぎ剥片を素材とする。刃部は両面から小さな剥離を行う。背部も両面加工で、つまみ部分は摩耗する。完形品で34.9gある。

⑩ 磨製石斧 (274~280)

7点あるがいずれも定角式である。274~276・280は普通の大きさで、刃部側又は表面裏面のいずれかの側からの打撃で折れている。280は刃側からの打撃で剥離した刃部の小片で、剥離面側を一部研磨している。クサビ等に再利用されたのだろうか。他は小形品で、277のみ完形、42.8gある。279は特に小さく形も不整形である。274・276が蛇紋岩製、他は輝緑凝灰岩製である。

⑪ 磨石・凹石・敲石(磨石類) (281~313)

特殊磨石43点を含め71点ある。2号住居址出土の特殊磨石、磨石各1点(3・11)以外は包含層の遺物である。特殊磨石が早期土器の分布と重なること、発掘域東側平坦面出土の磨石数点が中~後期の土器と共存することが推測されるが、他は帰属時期が特定できない。磨石、凹石、敲石の三機能を併存させる個体が少なくないが、特殊磨石も同様である。円礫を素材として磨面、凹み、敲打痕をもつ石器を「磨石類」として一括し、細長い素材の稜に独自の磨面をもつ「特殊磨石」とそれ以外の「磨石」とに区分し今後の検

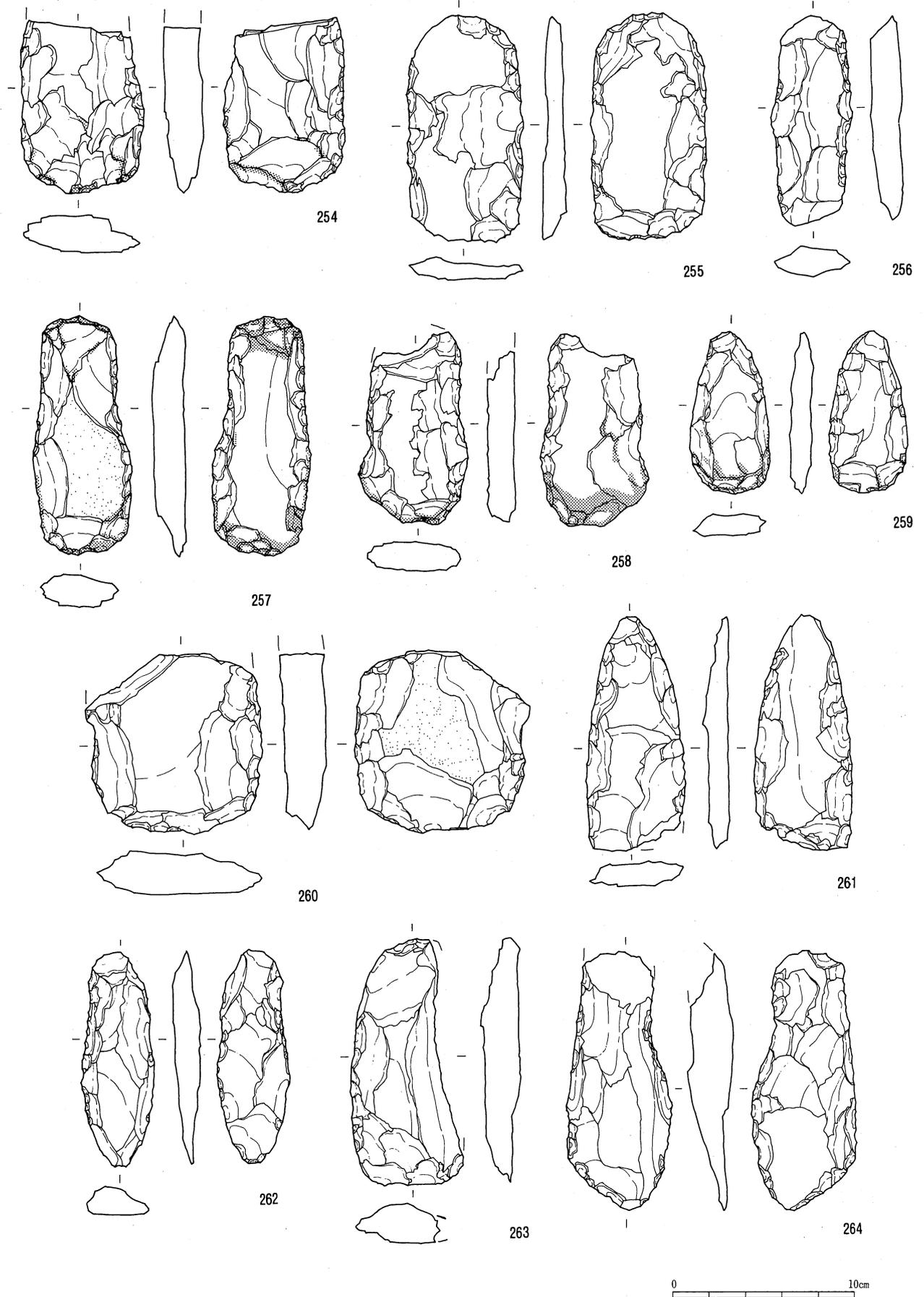


図50 遺構外出土石器実測図 8

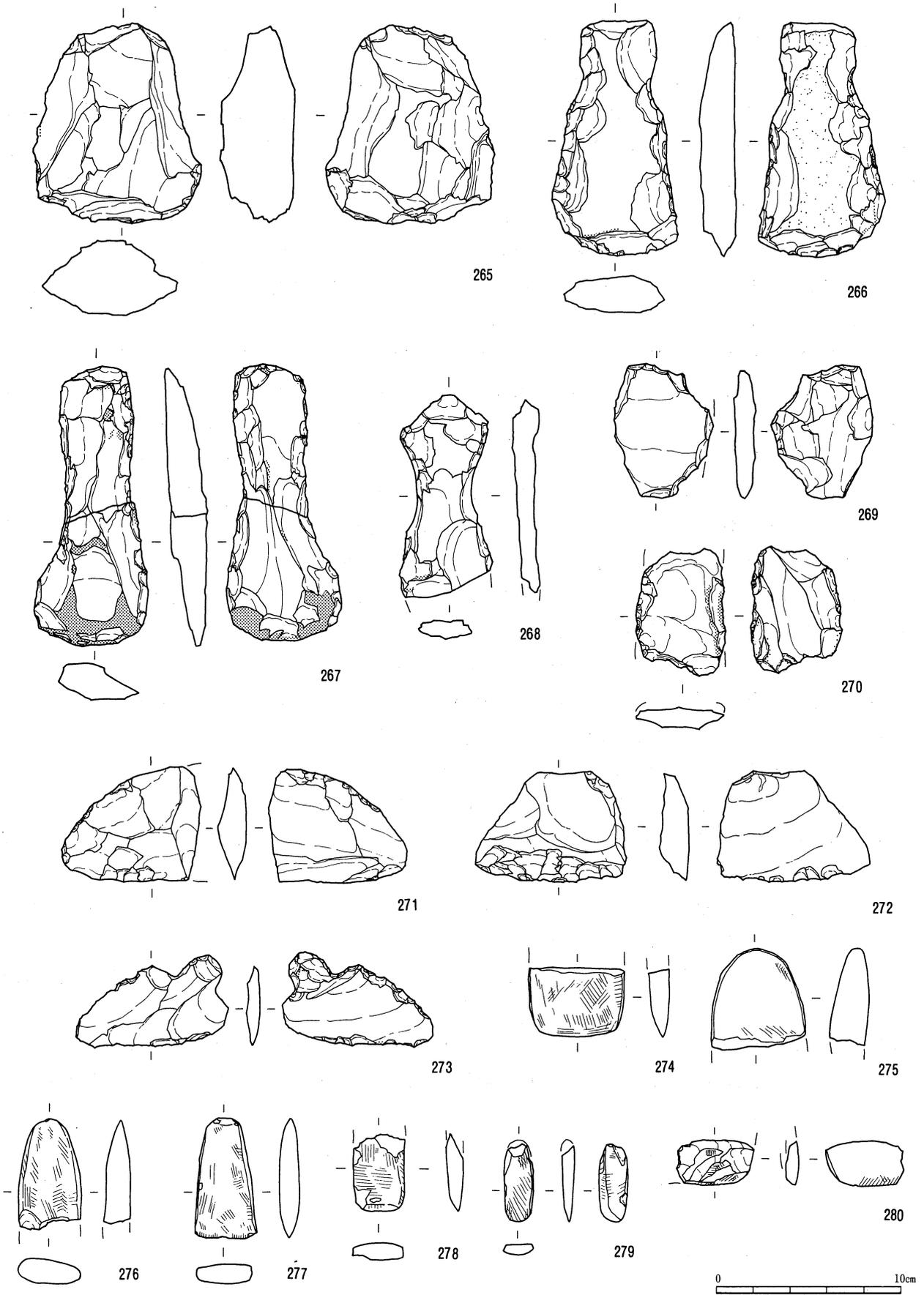


图51 遺構外出土石器実測图 9

討に備えたい。

磨石類の法量を図56に示し、特殊磨石と磨石を比較した。また石質を図56に示したが、砂岩系と安山岩系が大半を占める。両者の比率は特殊磨石では約2：1、磨石では約1：1となる。

磨面をもつ磨石類は66点で特殊磨石が43点含まれる。特殊磨石を規定する機能磨面であるA面〔八木充則1976〕とよく似た磨面は磨石にも見出される。それは他の面に対して明瞭な稜をなし必ずしも滑らかでない磨面で、特殊磨石のA面と合わせてa面と呼びたい。a面をもつ磨石類は61点、特殊磨石は43点すべてが含まれる。凹みの状態も八木充則の区分〔八木1976〕を援用して、円錐形におちこむ凹み(a)と、不規則で浅い凹み(b)に区分する。凹みのある磨石類は15点ある。特殊磨石3点が含まれるが、そのすべてが浅い凹み(a)である。磨石12点のうち円錐形の凹み(a)は6点、そのうち312は凹みの1つの中央に深い線状痕が残されており、頁岩製で素材の形態も特異である。

打痕をもつ磨石類は19点で特殊磨石14点が含まれる。平坦な器表が荒れた程度から浅い凹み状を呈する場合まで多様で、その範囲も2cm～5cm四方と幅がある。集中的な打痕は浅い凹み(b)に近似するが、両者が近接して併存することが少なくない。敲打痕のある磨石類38点のうち特殊磨石は26点である。そのうち313は偏平な素材(片岩)の2側縁につぶれ状の敲打痕が連続的に残る。磨面や凹みのない本格的なハンマーで、敲石の名称がふさわしい。特殊磨石の敲打痕は1端に残されることが多いとされるが、稜線上にも存在する。稜線上に敲打痕があるのは6点、端部にあるのは25点のうち両端が1点、1端が2点、無いことが確認できるのは1点である。磨石の敲打痕は側面や端部にみられる。

磨石類の諸機能の組み合わせをみると、特殊磨石の完形品8点はすべてa面以外の機能を併存させるが円錐形の凹み(a)は破損品を含めても共存しない(図56)。磨石の完形品19点(313を除く)のうち単独機能のみは7点で、側面にa面をもつ磨石には円錐形の凹み(a)が伴わないようだ。

磨石類の折損は器体短軸にほぼ直交する折れが圧倒的に多い。長軸方向の折損は特殊磨石にみられるが、剝離状の欠損はほとんどない。特殊磨石には完形品が少ない点も注目すべきだろう。

⑫ その他の石器 (253・314～318)

6点あり314以外は器種が特定できない。253・316以外はホルンフェンス化頁岩を用いている。

253は異形部分磨製石器あるいはトロトロ石器といわれている石器に形状が似ているが、磨製部分はみられない。黒曜石製の完形品。

316は輝緑凝灰岩製で全面研磨する。刃部は片刃に研ぎ出し、背部は面ができる。形態は石庖丁に似るが器幅が狭く、弥生土器も未発見であるため、判断できない。

315はぶ厚い剝片を素材とし、2側縁に小さな剝離痕が残る。小剝離痕のある大形剝片と言えようか。173gと重量がある。

318は粗大な亜角礫を素材とする。左図右側縁と右図両側縁、下縁に剝離がなされるが、形態が整えられておらず、ぶ厚く、自然面を残す。317も亜角礫素材で、鈍い角度の刃がつけられる。いずれも加工不十分のまま放棄されたのではないか。

314は円板状石器、円板状石製品等の名称で呼ばれる石器(石製品)に似る。偏平円礫を片面加工(一部両面加工)するが刃部は鈍い。上木戸遺跡から、より整った円板状石器(石製品)が出土しており、参照されたい。

(4) 古墳時代の遺構と遺物

ア 焼土址

焼土址は13箇所、北側斜面下にある1箇所を除いてすべて東側尾根上の平坦面に所在し、III層上面からIII層中にかけて検出された。掘り込みはなく、平面形は不規則で、長径20cm～160cmと大きさも様々であ

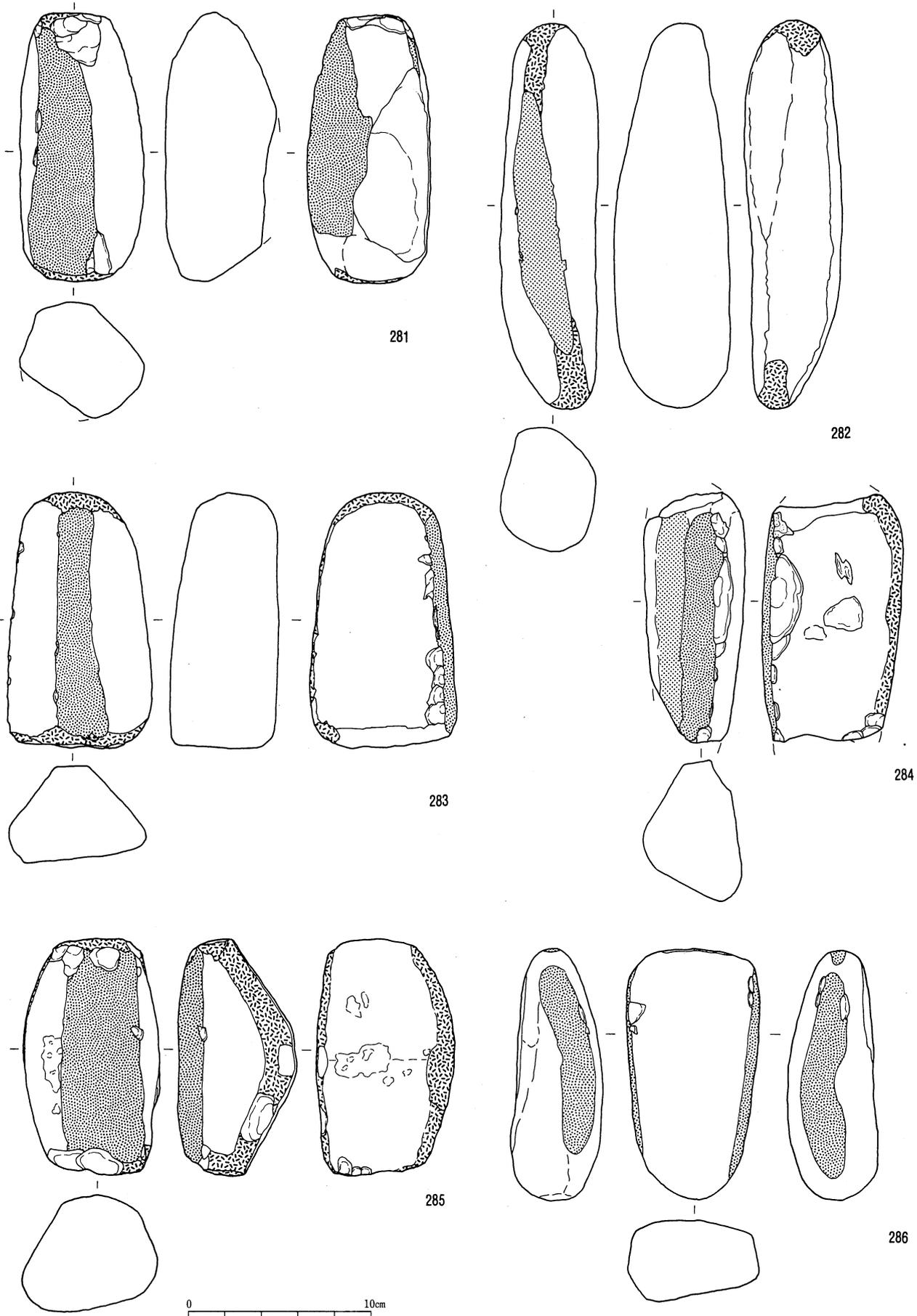


図52 遺構外出土石器実測図10

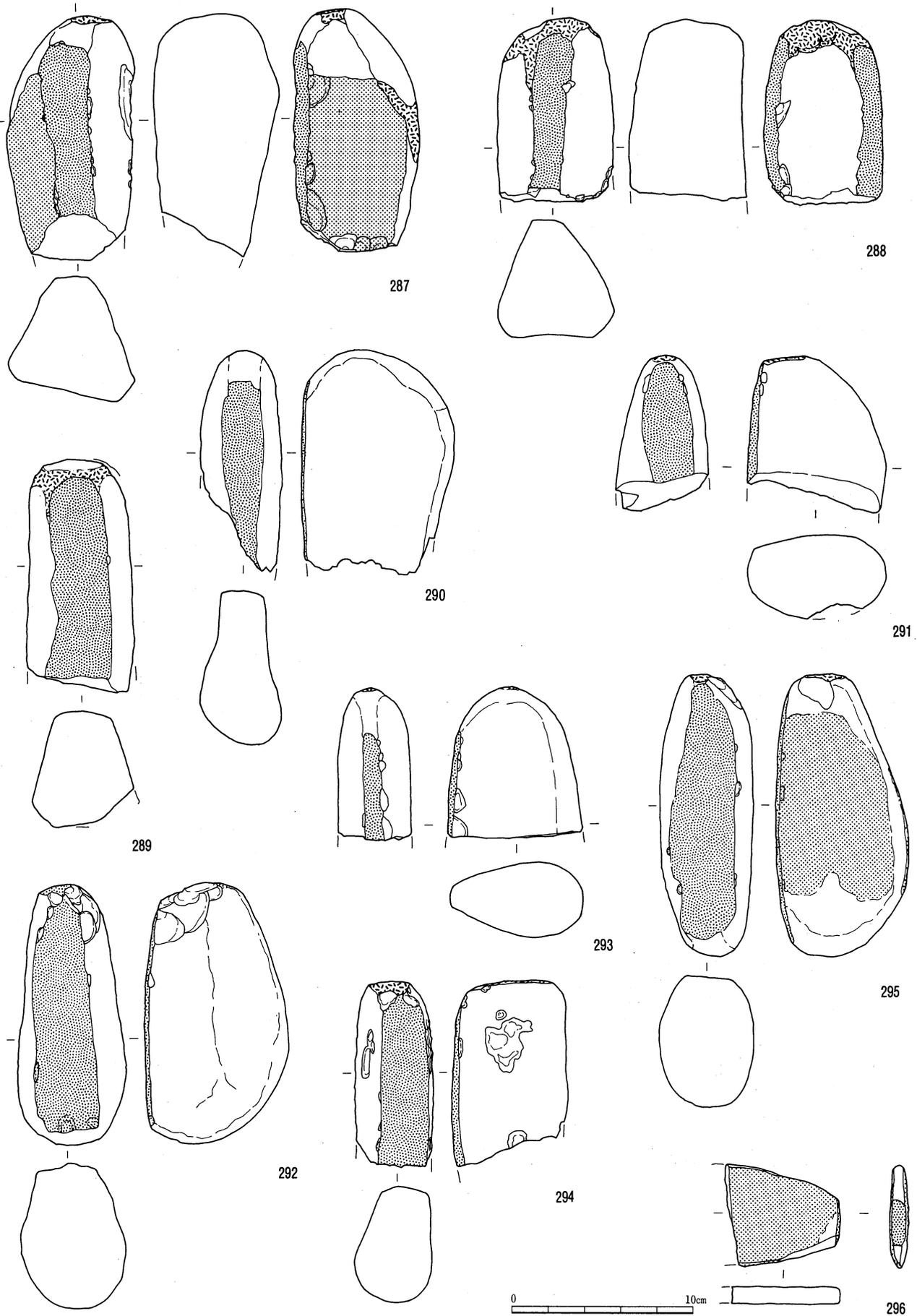


図53 遺構外出土石器実測図11

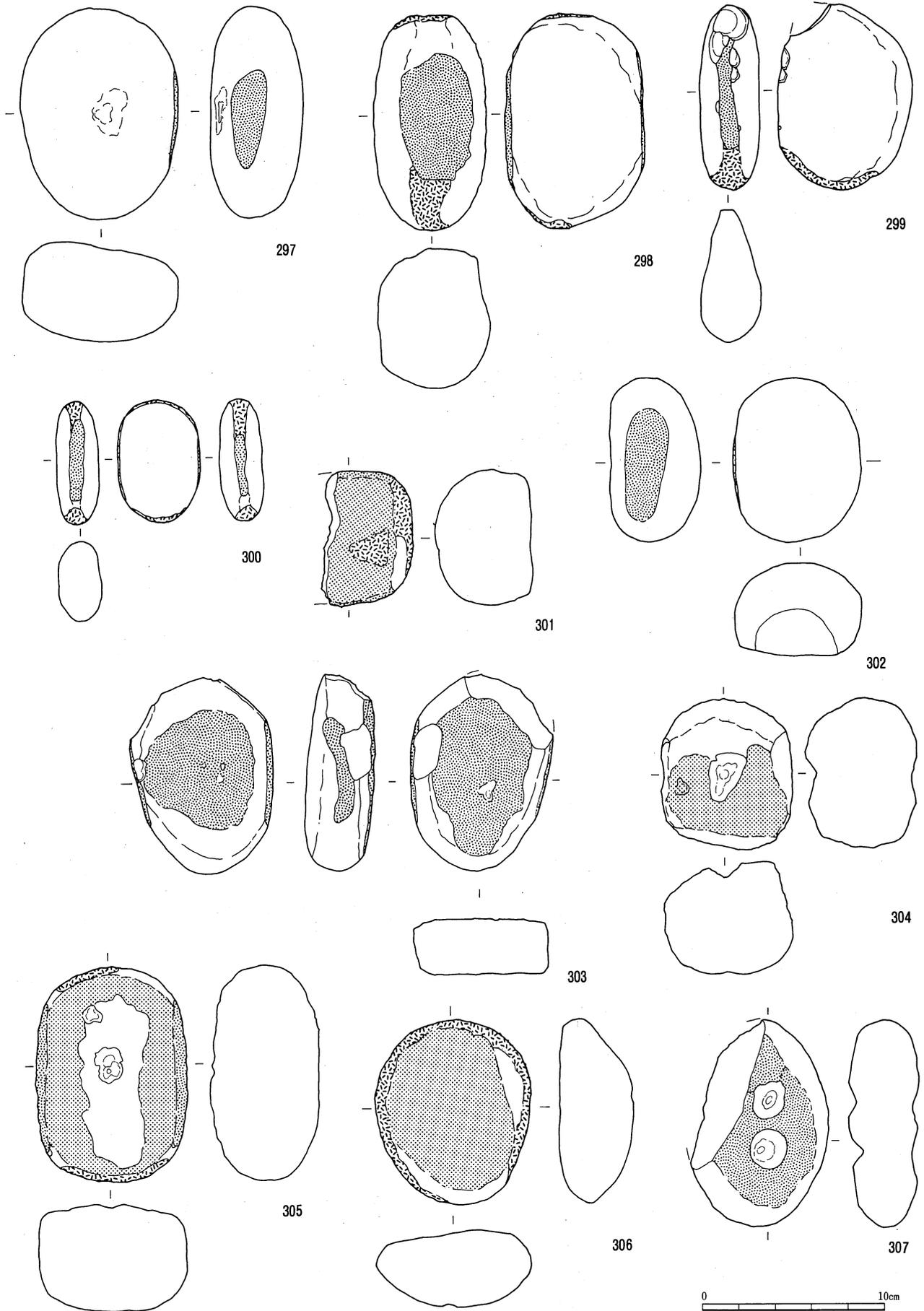


図54 遺構外出土石器実測図12

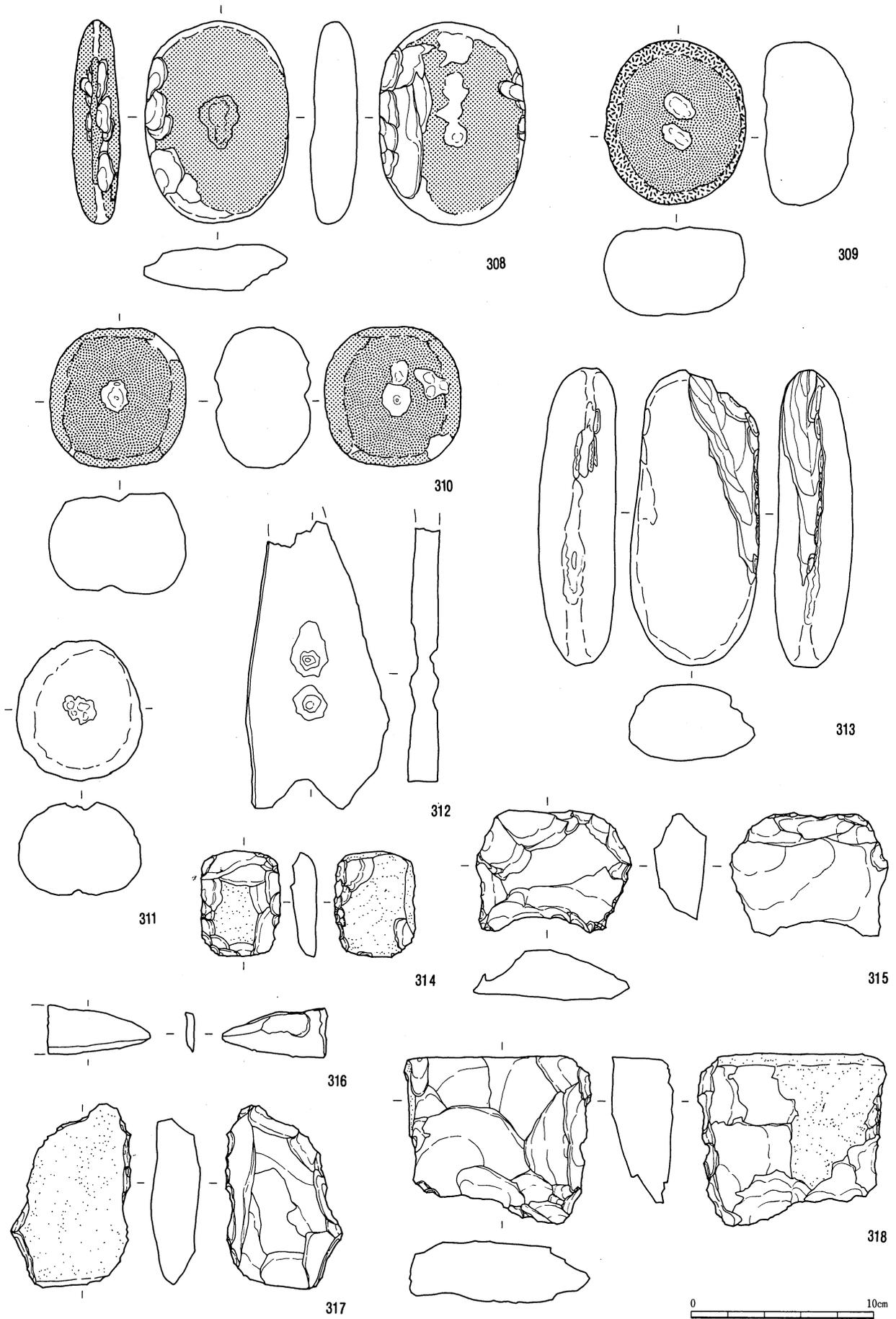
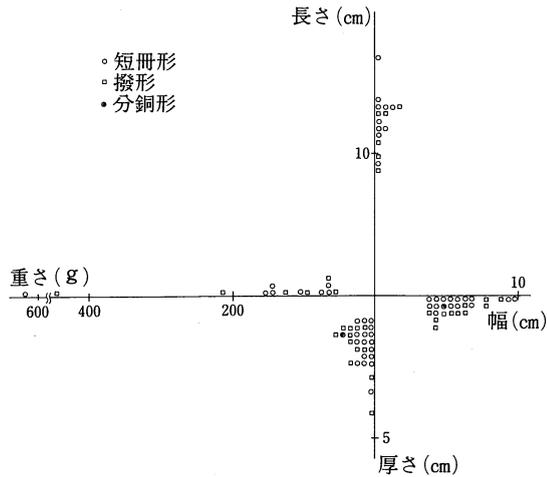
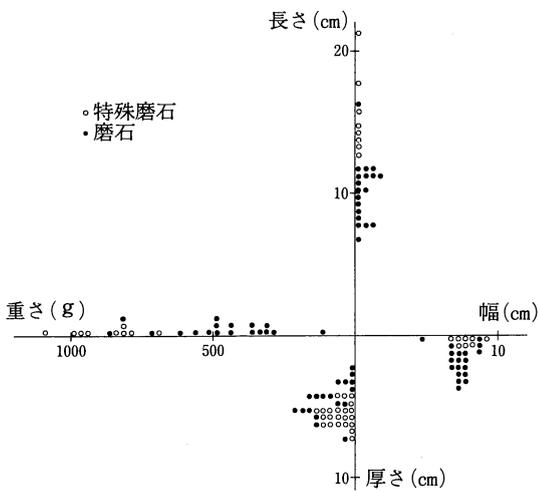


图55 遺構外出土石器実測图13



(1) 打製石斧の法量グラフ



(3) 磨石類の法量グラフ

種類	欠損部			
特殊磨石	7	27	8	1
磨石(a面あり)	8	3		2
磨石(a面なし)	8	6		1

(5) 磨石類の欠損

器種	打製石斧		横刃		石匙		他		計
	フレイク		コ	コ	コ	コ	コ	コ	
	縦	横	ア	フレイク(横)	ア	フレイク(横)	ア	フレイク	
頁岩		2							2
ホルンフェルス化頁岩	2	42		2		1		1	3
ホルンフェルス化砂岩		4							4
片岩		2							2
輝緑凝灰岩								1	1

(2) 打製石斧の素材と石質

石質	種類	特殊磨石	磨石	計
		砂岩(粗粒)	9	
砂岩	砂岩(細粒)	6	4	10
	凝灰質砂岩	2	1	3
	硬砂岩(粗粒)	7		7
	硬砂岩(細粒)	5	1	6
安山岩	輝石安山岩	9	8	17
	角閃石安山岩	5	1	6
	石英安山岩		1	1
閃緑岩		1	1	1
変成岩	頁岩	1	1	2
	片岩		1	1

(4) 磨石類の石質

図No.	種類	a面		打面		円錐形凹み	浅い凹み・打痕
		部位	稜側平	稜端平	平		
1	特殊磨石	1	1	1			1
2	"	1		2			1
3	"	1	2	2	2		1
13	"	4	2				1
26	"	3		2			1
37	"	2	2	1	1		
45	"	1	2	2			
63	"	2	1	1			
5	磨石	1	1	1			
8	"	1					
31	"	1	2	1	2		
53	"		6				2
54	"	1		4	1		2
55	"		2	1			2
56	"		1	4			1
57	"		2				2
59	"	2	2	2			2
60	"		2	4			3
61	"	1	1				
62	"	1	3				
66	"	2	2				1
67	"	2	1	1			
68	"	1	1				1
69	"	2					
70	"						2
71	"						2
72	"						1

(6) 磨石類の機能面の組み合わせ

図56 石器の分析

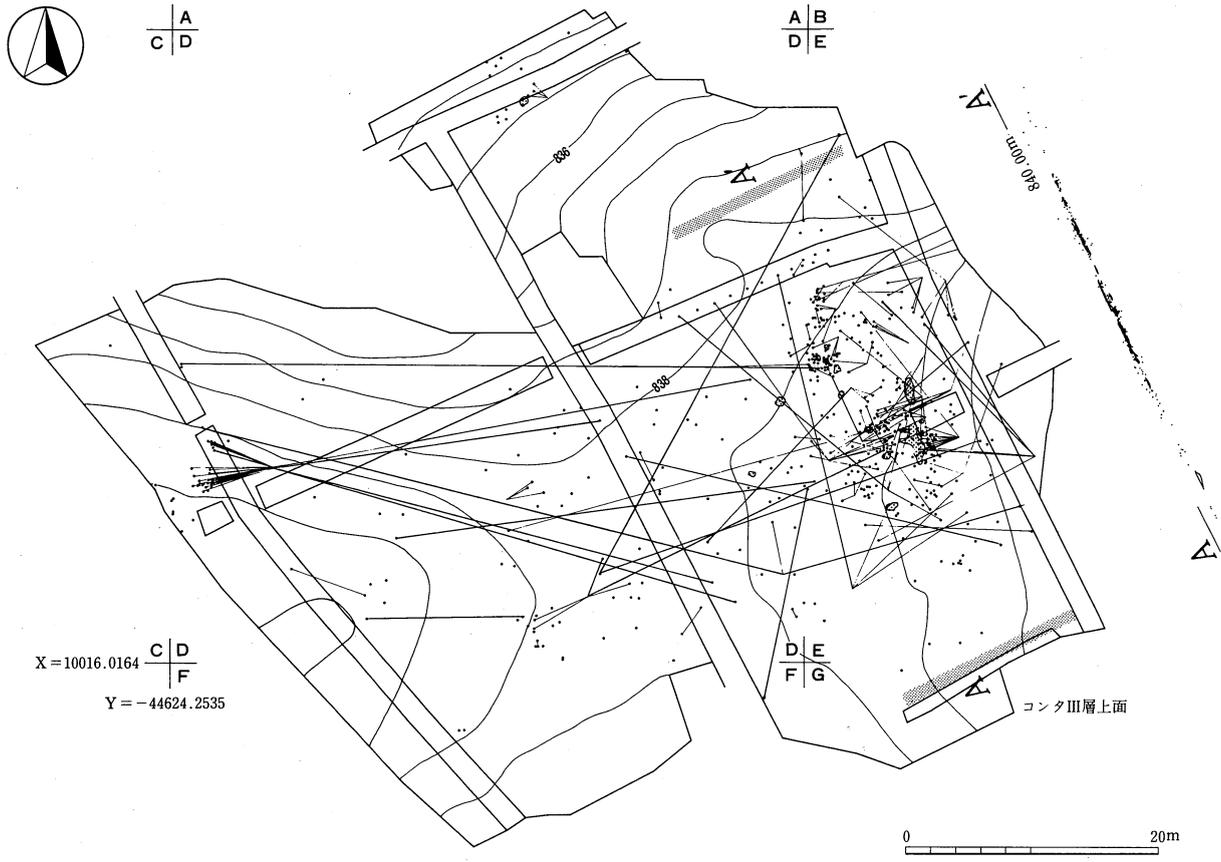


図 57 古墳時代土器分布図 (1 : 600)

る。焼土の密集する部分と焼土粒の散在する部分より成り、堅くしまった焼土はなかった。これらの焼土址と古墳時代の土器片の平面分布、垂直分布が重なるので両者は関係が深いものと考えられる。

イ 遺構外出土遺物 (図57・58)

出土した土器は大きく見て、古墳時代前期、後期の2時期に分けることが出来る。特に古墳時代前半の遺物が多い。しかし、層位的、地点的には把握できなかった。

古墳時代前期の遺物は、いずれも破片であるが、壺(921)、甕(922・923)、高杯(924)、器台(925)、埴(926~932)、鉢が出土している。壺には小形で有段口縁をもつもの(921)の他に、外反する口縁部に球形胴部がつくもの等がある。921には細かなミガキが施されている。甕には台付甕(922・923)の他に、口縁部に粘土帯を貼付したものや、S字状口縁部付甕口縁部(註1)も出土している。しかし、他の器種に比べ甕の出土量は少ない。高杯や器台は1個体ずつしかない。924は杯部が半月状になる小形の高杯で、三方透しを持つ。925は小形器台で受部と脚部の間に貫通孔を持つ。埴の破片が多く、長い口辺部に扁平な体部を持つ大形埴(926~932)、あげ底で扁平な体部を持つ小形埴(929・930)と外反する口縁部に半球形の体部を持つ小形埴(931・932)の3者に分けられる。931・932は若干時期が下る可能性がある。鉢には鉄カブト形の崩れたものや、外反する口縁部を持つ丸底気味のもの等がある。

古墳時代後期の遺物として、壺(936・937)、甕(934・935)、高杯(938~941)、杯(944・945)及び須恵器杯蓋(946)、甕(947)が出土している。いずれも破片である。壺は口頸部がほぼ直立し、球形胴部を持つ936が主で、他に小形品がある。甕は口縁部が屈曲し、やや長めの胴部を持つものが大半を占めるが、甕の出土量は非常に少ない。高杯には杯部に稜を持つもの(939~941)と、杯部が半月状のもの(938・942)の二者がある。脚部と裾

(註1) 赤塚次郎の分類によるC類に該当する〔赤塚1986〕。

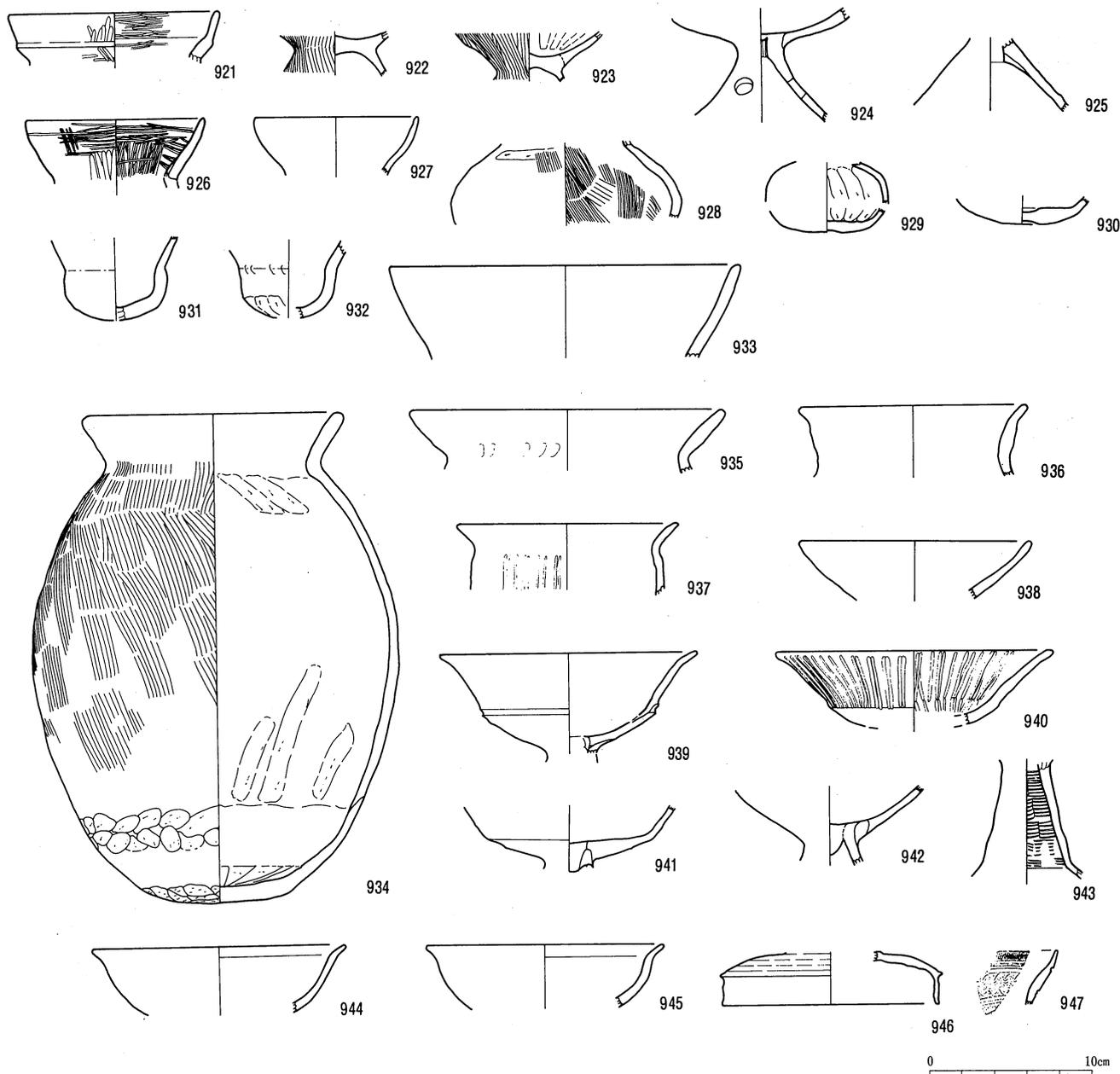


図58 遺構外出土古墳時代遺物実測図

部の境が明瞭でないものが多い。杯には外斜口縁のもの(944・945)と半球状のものがほぼ同じ割合で存在している。945の内外面には細かなミガキが施されている。また、この時期に多い内黒のものは見られなかった。須恵器のうち杯蓋(946)は、天井部から稜付近に至るまでヘラケズリが加えられている。搬入品と思われる、陶邑編年〔中村 浩1978〕のI形式の3段階に比定される。

古墳時代の土器片は調査区東部の平坦面に集中する(註1)。この区域には焼土址群が分布し、焼土址群は土器と同時期、つまり古墳時代前期に属すと考えられる。土器片は03トレンチ周辺の南グループと、北に離れた北グループに分けられるが、両者には接合したり、同一個体と考えられる土器片が存在する。土器片はほとんど細片で出土したが936のみはほぼ完形で出土した。III層中で検出され、口縁部を下に体部下半が上半部内に落ち込んでいた。周囲には掘り込みは認められなかったが、甕の体部上半が直立した状態で出土したことから、土器は埋設されていた可能性が大きい。

(註1) 遺物分布図は、II層出土土器片分布とIII層のそれではほとんど差がないことから両者を含めて図示してある。範囲外にトレンチの区間で示してあるものはI層出土のものである。

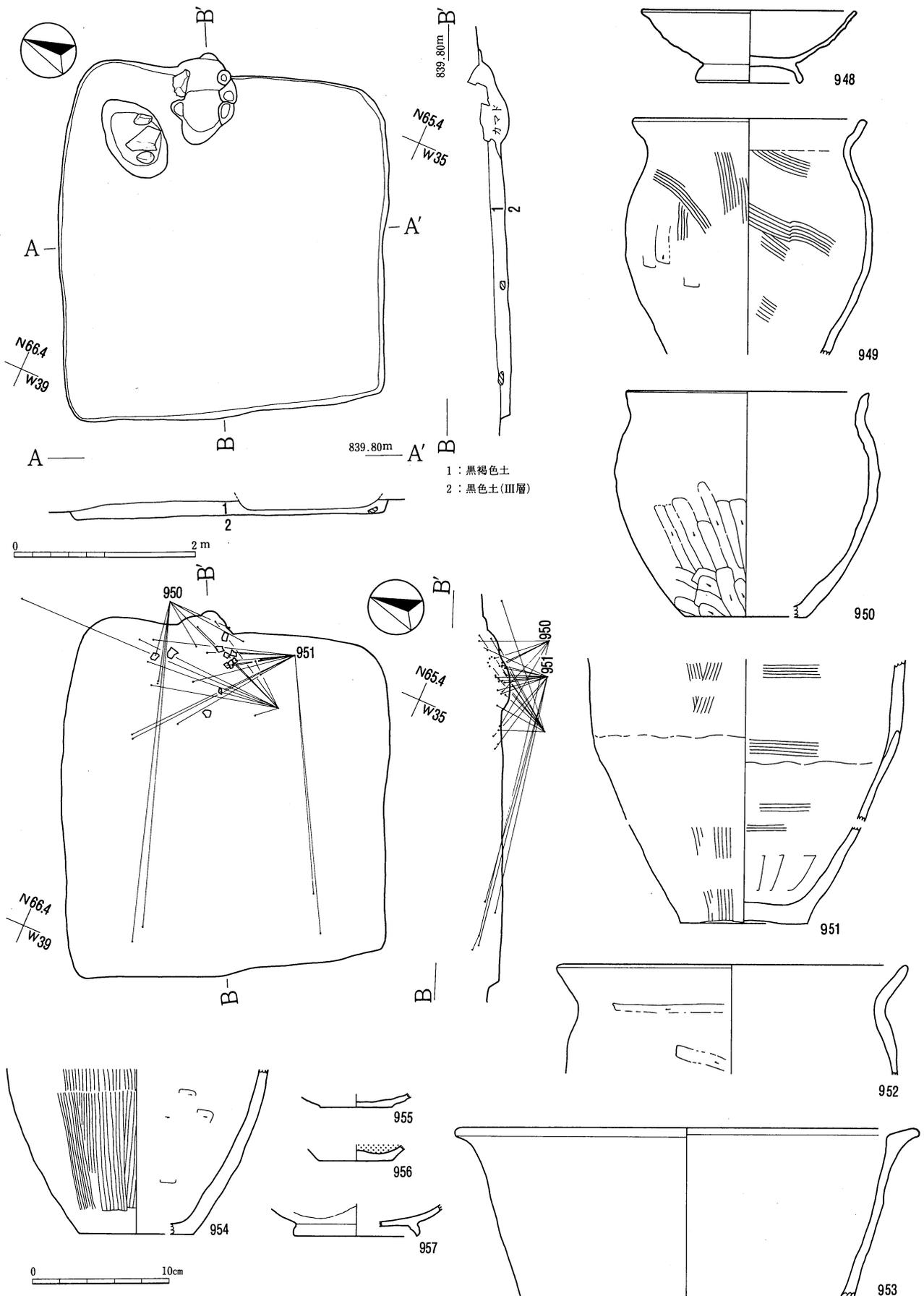


図59 1号住居址実測図・遺物分布図、1号住居址出土遺物(948~953)及び遺構外出土遺物(954~957)実測図

(5) 平安時代の遺構と遺物

ア 住居址

① 1号住居址 (図59・60)

検出：調査区東部に位置する。Ⅲ層上面で検出。**規模・形状**：プランは3.9m×3.6mで、主軸方向はN65°E。**埋土**：黒褐色土の単層。**床面・壁**：床はⅢ層中に構築され、堅い面は見られない。壁は高さ15cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。**カマド**：東壁中央やや北寄りに設けられる。住居廃絶時に石組みは抜かれ、原形をとどめない。**柱穴**：ない。**その他の施設**：カマドに接して北側にピットが掘られている。深さ30cmを測り、埋土は灰粒を含む黒色土で焼土が上面を覆う。**遺物の出土状況**：カマド周辺に多く分布する。**遺物**：土師器碗(948)、甕(949~953)がある。煮沸形態の土器が大部分を占める。948は糸切り痕が残り、体部外面に回転ヘラケズリは施されていない。高台は「ハ」の字状に広がり、端部はやや内傾する。949・951の体部外面にハケメがあり、949は体部下半ではヘラケズリとなる。951の底部には木葉痕が残る。952は体外面にはヘラケズリ痕が残っている。950は器高の低い甕で、口縁は直立し、口縁部は尖る。体外面下半をヘラケズリする。953は口縁部を短く外反させ、体部外面をタテにナデている。**時期**：平安時代後期に属すると考えられる。

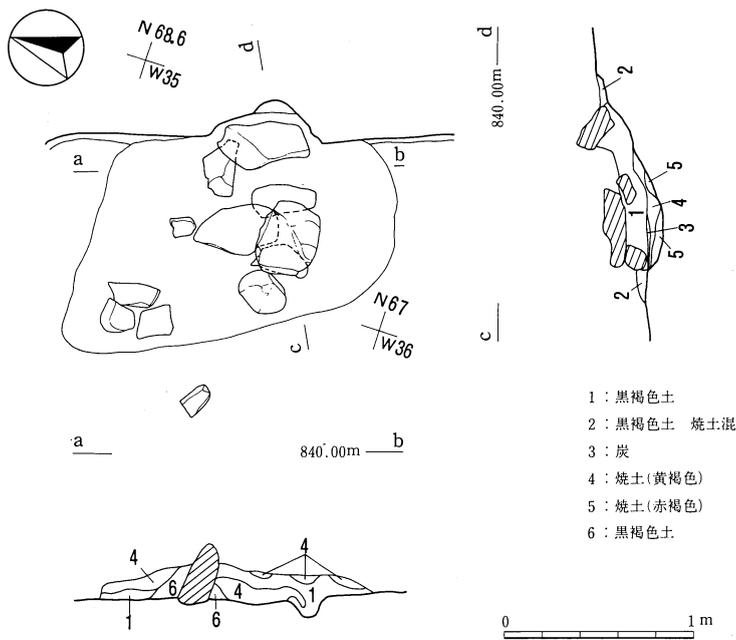


図60 1号住居址カマド実測図

イ 遺構外出土遺物

ほとんどは1号住居址周辺より出土したものである。土師器甕(954)、内面黒色土器杯(956)、灰釉陶器(957)等がある。

(6) 時期不明の遺構

ア 焼土壇 (図61、PL5)

① 1号焼土壇

N59W43付近に位置し、東側尾根上の平坦面に所在する。Ⅲ層上面で検出された。埋土は上層と下層に分かれ、上層は暗褐色土で、下層は木炭の多量に混在する黒褐色土である。下層には焼土粒も多く、また底面直上には焼土も堆積していた。本址は主体部と煙道

部に分かれ、主体部は隅丸長方形を呈し、4.35m×1.7m、深さ45cmある。煙道部は1.25m×0.6mである。主軸は南北で、南に煙道がのびる。底面はほぼ平坦で、主軸に沿って、幅20cm、深さ10cmの溝があり、煙道部に向う。主体部と煙道部の境では、溝の先端が楕円形の窪みとなる。底面は焼けて焼土化した部分が数箇所認められる。主体部南半分の西壁寄りでは、底から壁にかけて主軸と平行したり直交する方向に炭化材が遺存しており、主軸に平行するものは底や壁に付くようにしてあり、付着した部分が炭化しきらずに残っていた。煙道部は主体部よりなだらかに立ち上がり、東側ではⅢ層をくり抜いている。煙道部が主体部に接続する部分では天井部の落下した様子が認められた。

出土遺物は木炭の他にほとんどなく、土師器片が若干出土したのみである。木炭のC¹⁴年代測定ではB. P. 800±80 (I-14153)と出ている。炭焼窯の可能性がある。

② 3号焼土塋

N99W68付近に位置し、北側斜面下の傾斜がゆるくなった所に所在する。III層中で検出され、埋土は上層が暗褐色土、下層が黒褐色土で、下層に多量の木炭が混在する。本址は主体部と煙道部に分かれ、主体部は隅丸長方形で、2.9m×1.2m、深さ20cmあり、煙道部は0.35m×0.6mである。地形の傾斜に直交して東西に主軸をもち、西に煙道を出す。底面は平坦で、煙道部側にやや傾き、中央が広範囲に焼土化している。底面の主軸に、径5cm~10cm、深さ20cmの小ピットが並び、主軸に平行して炭化材が壁際に遺存していた。

遺物は木炭以外出土しなかった。木炭のC¹⁴年代測定では、B. P. 1080±80(I-14194)が出ている。やは

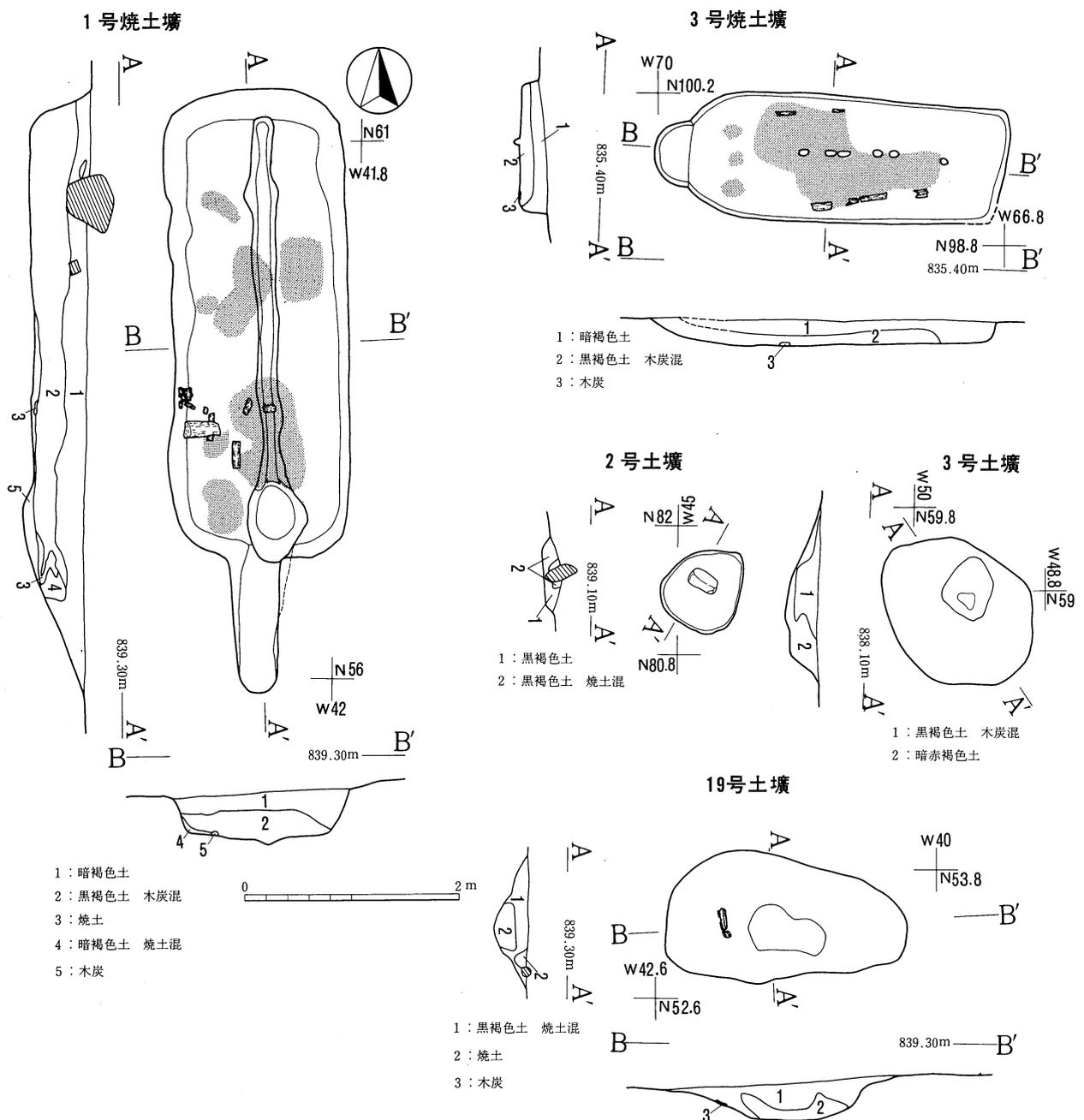


図61 1・3号焼土塋及び2・3・19号土塋実測図 (1:60)

り炭焼窯の可能性が大きい。

イ 4号溝址

N62W52付近からN67W60付近にのびる。東側尾根の平坦面のⅢ層上面で検出した。埋土は黒色土で、規模は幅30cm、長さ10m位、深さは10cmある。底面は南東から北西にゆるく傾斜し、断面はU字形である。

ウ 土 壙 (図61)

2・3・19号土壙があり、ともに東側尾根の平坦面に位置する。2号土壙には扁平な石が立てられ、その周囲に焼土が分布する。出土遺物はない。3号土壙は埋土上層に木炭粒が多く含まれていた。古墳時代の土器片が出土したが、検出面よりみてそれより新しいと考えられる。19号土壙は、楕円形を呈し、2.3m×1.2mで深さ30cmである。埋土には焼土粒が混入し、底部に焼土が10cm～20cmの厚さで堆積し、堅くしまっていた。壁は底部から緩やかに立ち上がり、断面は搗鉢状を呈するが、西壁では傾斜が最もゆるくなっている。また西壁に付着して板状の木炭があった。遺物は土師器片が少量出土したのみである。出土した木炭のC¹⁴年代測定によるとB. P. 1190±80(I-14154)が出ている。

5 成果と課題

(1) 縄文時代早期前半の土器 —八窪遺跡出土第1群土器の検討—

八窪遺跡から出土した押型文土器は900点にもおよび、長野県下の出土例中では多い方である。また立野式土器やその住居址も検出され、今後の研究に資する好資料が呈示されたと思われる。ここでは、土器の分布状態および層位を基軸に、原体復元、文様構成など若干の考察を行いたい。

ア 水平分布と垂直分布 (図62～67)

押型文土器を中心とした縄文時代早期前半の土器は、遺跡調査区西側小尾根上に位置する2軒の住居址を頂点として、斜面の低所へ放射状に広がる分布を見せている。この分布状態は、縄文時代前・中・後期、古墳時代、平安時代等の分布の在り方と異なっている。

押型文土器は、Ⅰ層からⅤ層のすべてから出土している。図66の様に同じ層で接合するものもあれば、層を越えて接合する例も見られる。層位的には完全な状態であるとは言えないが、各層位毎の文様別、施文方向別の量について統計的な検討を試みることにした。なお文様の施文方向については、原体と原体の間が少しでもあいているものは帯状施文として扱った。

グラフから文様毎に見ていくと、格子目文は縦位密接施文される傾向が強く、Ⅴ層にピークがあり上層にいくほど少なくなっていく。市松文は、口縁部から胴部にかけて縦位密接施文、以下横位密接施文される破片がいくつかあり、主体は直交密接施文であることが想定できる。格子目文は同様にⅤ層が多く、上層にいくほど少なくなる。山形文は、市松文、格子目文の在り方と異なりⅢ層が多い。文様構成は、普門寺式(口縁部横位、以下縦位密接施文)類似か、細久保Ⅰ類a群(胴部以下が、縦位密接施文)類似かはわからないが、無文部を多く残す典型的な樋沢式は少ないと思われる。Ⅴ層では、縦位の施文が横位の施文よりもやや優勢であるが、同層中の横位帯状施文のほとんどが同一個体であった。またⅢ層でも縦位の施文がやや優勢である。楕円文はⅢ層にピークがあり、山形文より少量ながら同様の傾向がある。どの層でも横位の施文が優勢で他の文様の場合と異なっている。Ⅴ層中の横位密接施文のほとんどが325～340の土器である。また無文土器の在り方は格子目文、市松文と同じ傾向を示している。格子目文と市松文のほとんどが第1類土器であり、出土量、文様施文の方向等の傾向はこの文様にほぼ示されている。最下層Ⅴ層は、帯状施文よりも密接施文が多いと言えよう。また、3号住居址において102の横位に帯状施文される土器は、2号住居址内出土土器と比較すると、レベル的に高い位置にほぼまとまる。102の土器は、やや厚みを持った口

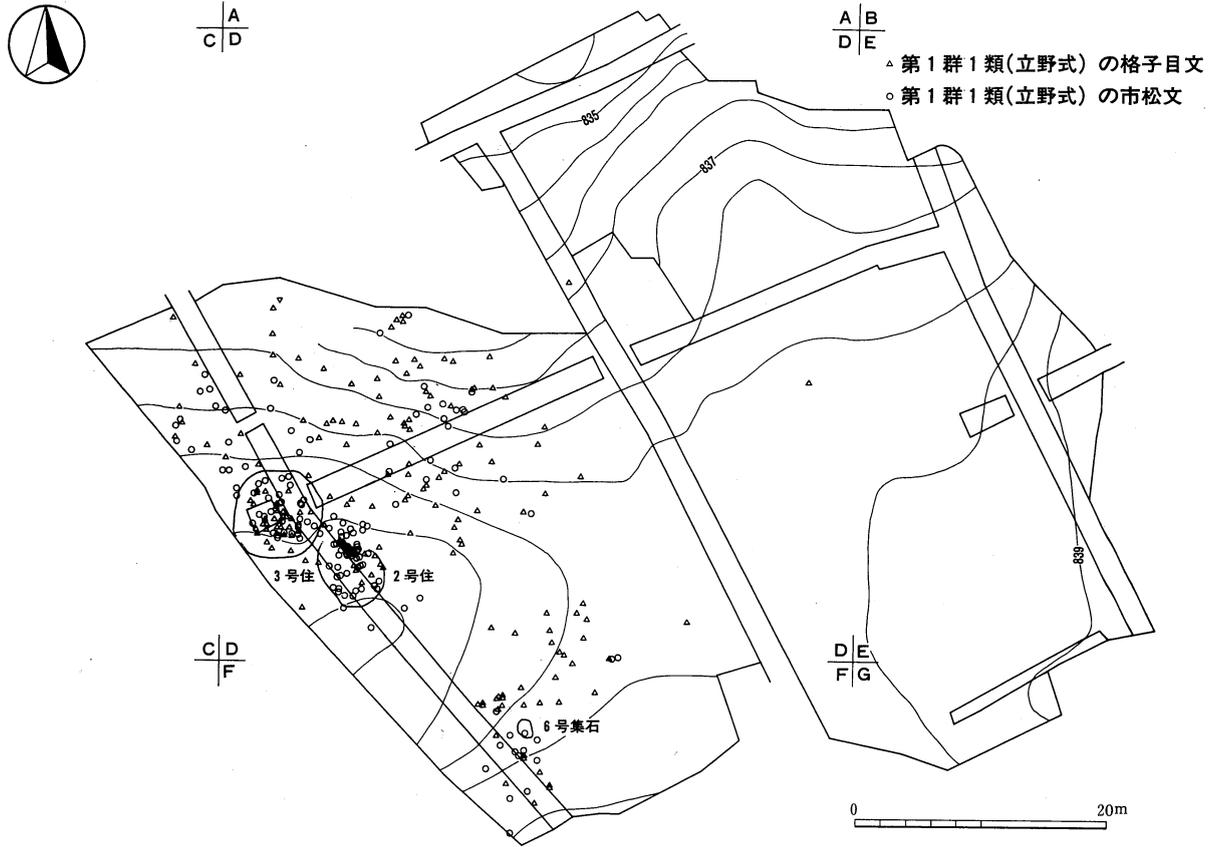


図62 縄文時代早期前半土器分布図1 (1:600)

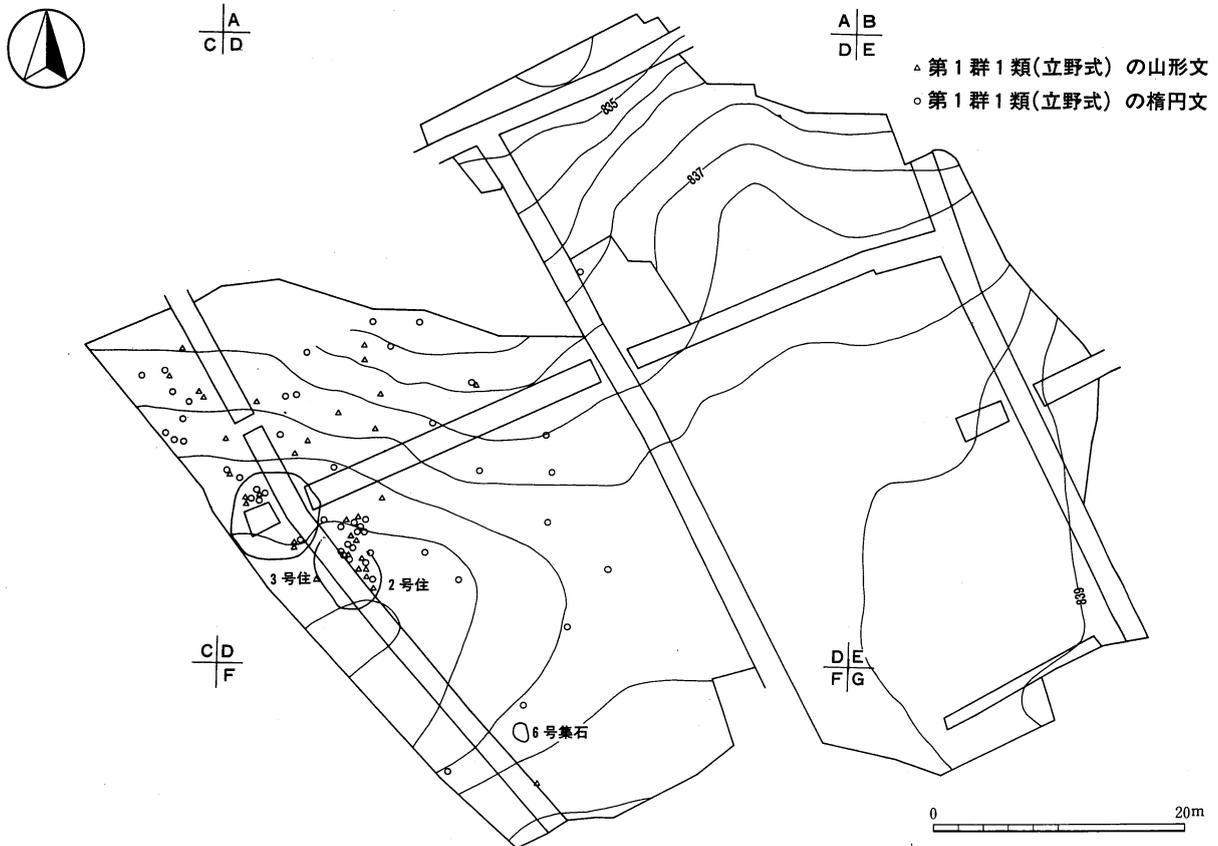


図63 縄文時代早期前半土器分布図2 (1:600)

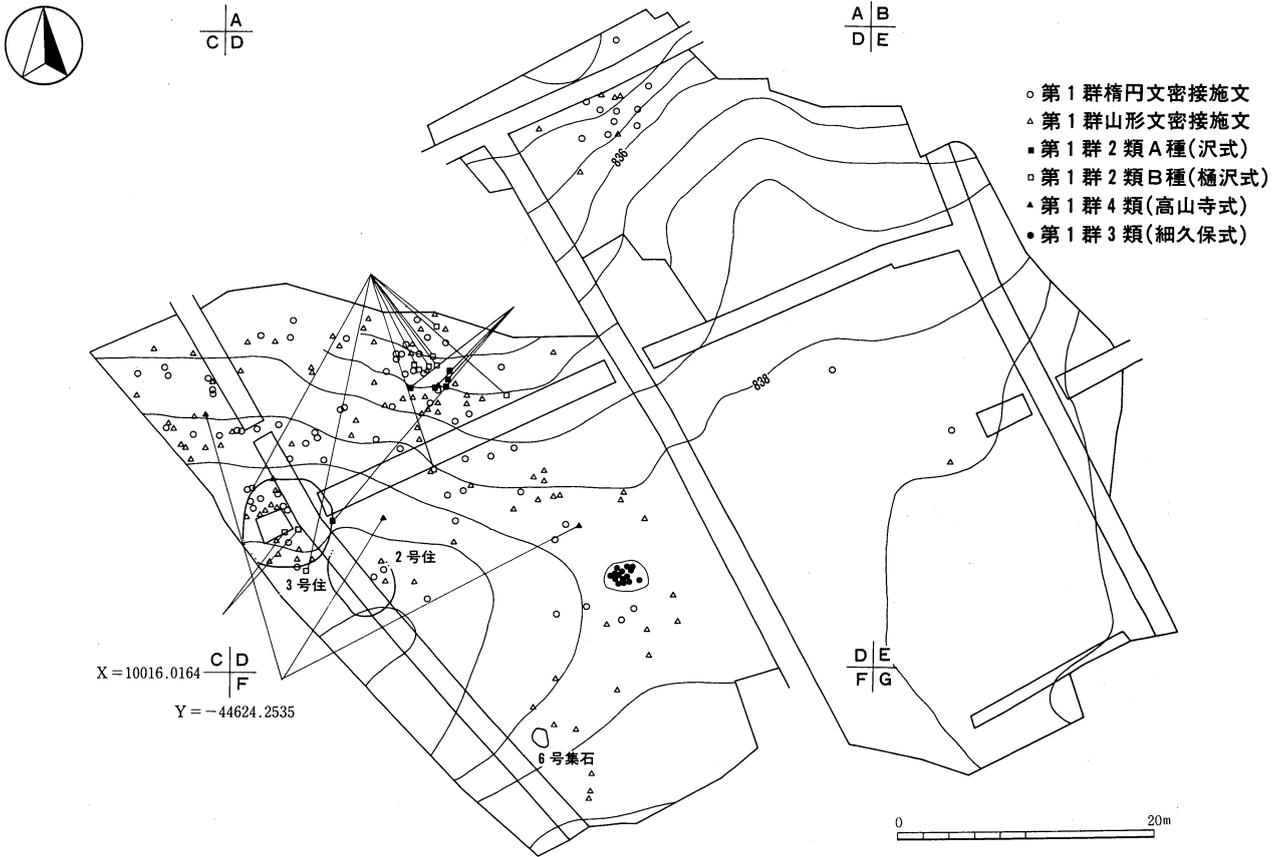


図64 縄文時代早期前半土器分布図3 (1:600)

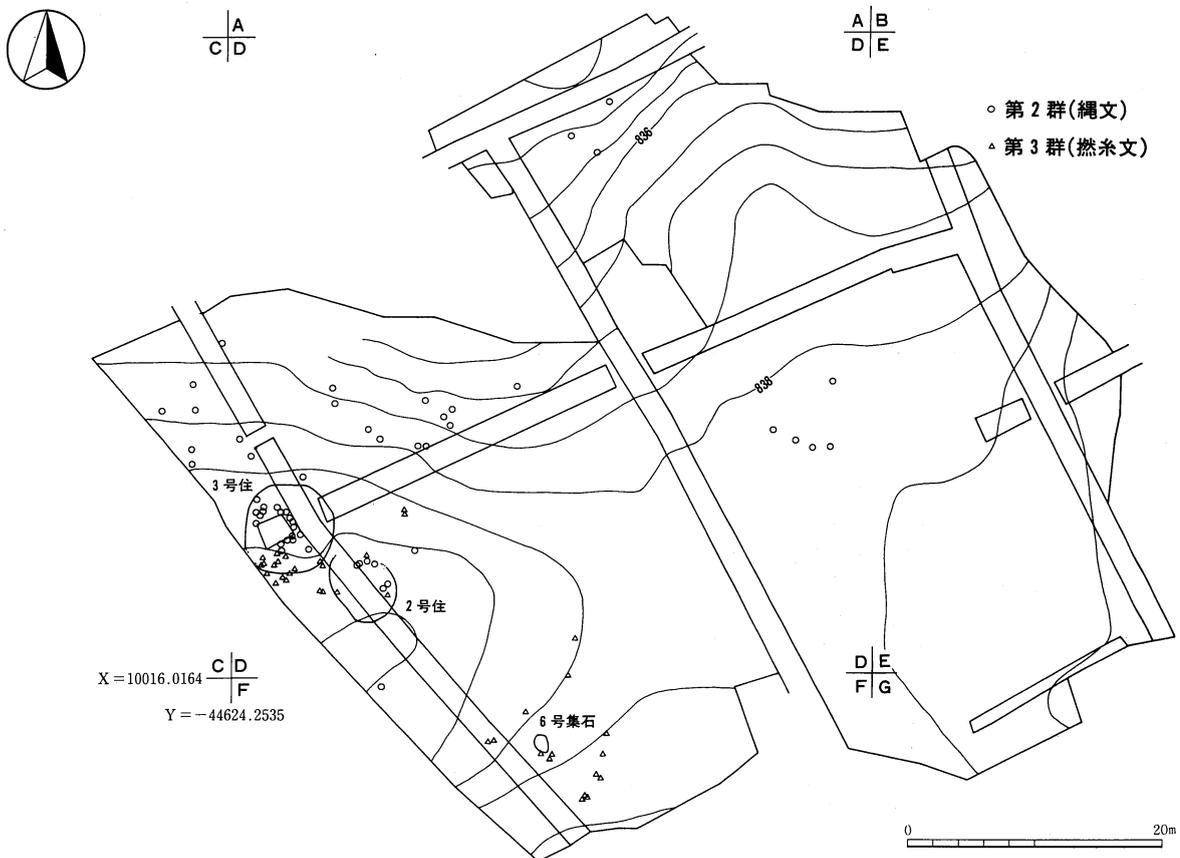


図65 縄文時代早期前半土器分布図4 (1:600)

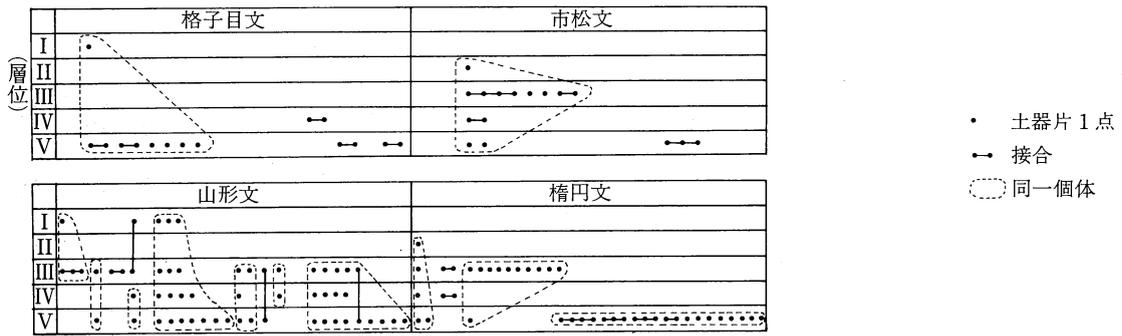


図66 文様別垂直接合状況

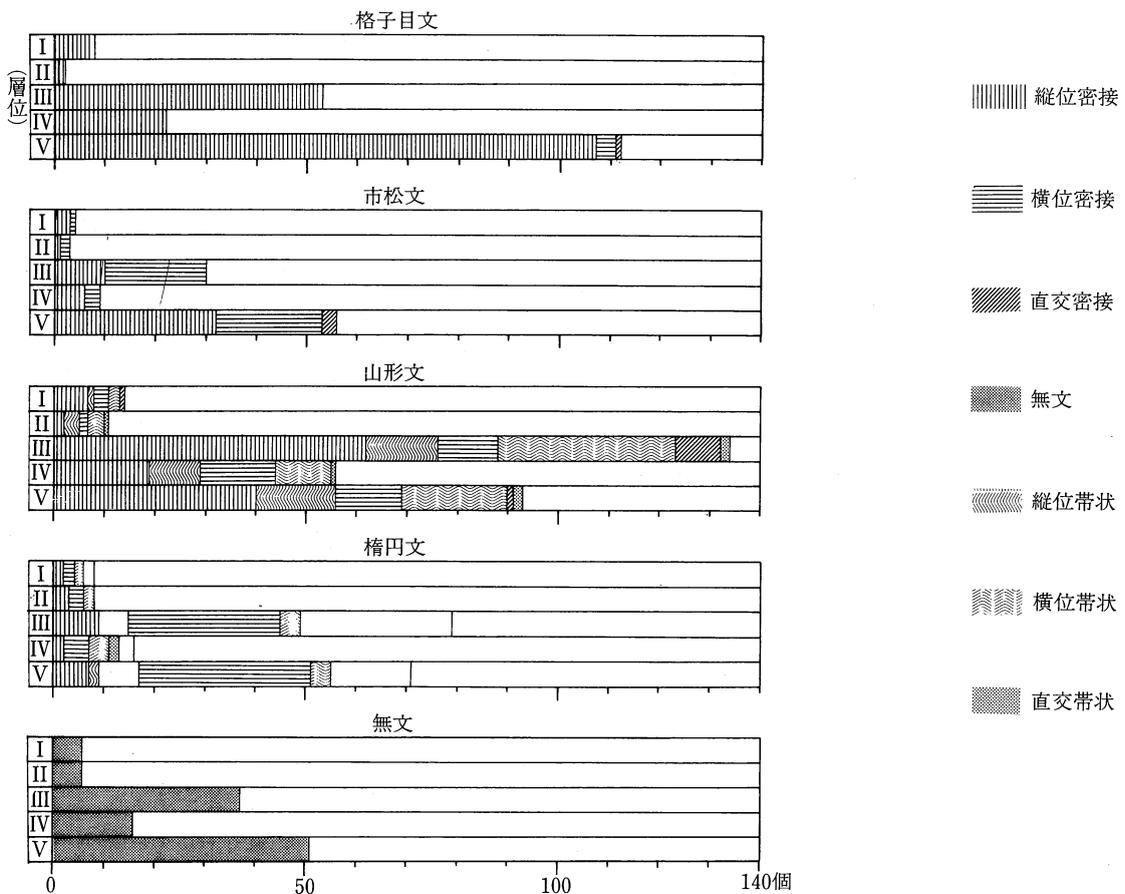


図67 層別施文方向の割合

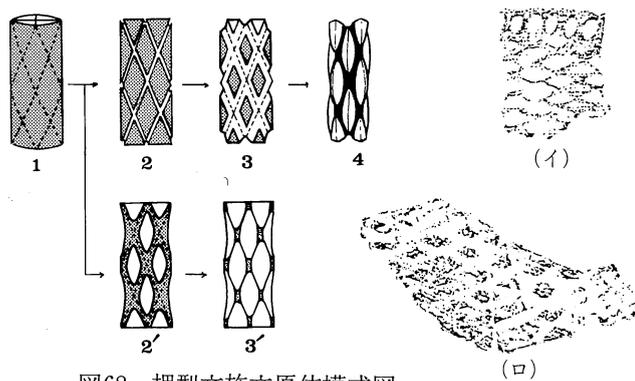


図68 押型文施文原体模式図

唇部に施文されること、山形文の形状などからは樋沢式に近く、直交して施文されていない点ではより新しい要素をもつと言える。

イ 原体について

ネガティブな楕円文が施された土器が何点か出土した。この原体復元に関しても長い研究史があり、これを飛躍的に進展させたのは、片岡肇〔片岡1972・1978〕、岡本東三〔岡本1982〕の二人である。片岡は特にこれらの文様の断面が舟底形になる点に注意し、原体A・B・Cを復元し、これらを押圧、半回転、回転することにより合計9パターンの施文を想定した。また、岡本はネガティブ楕円文に見られる起点と終点に着目し、その反復の様子をA・B・C紋様に区分し原体を復元した。両説は、「シンポジウム押型文系土器文化」〔樋沢遺跡研究会1982〕でも対立した。焦点の1つは、断面が舟底形になるかという点であった。岡本は、自らも復元した原体のかどを切り落すことにより舟底形になると主張した。ネガティブな楕円文は神宮寺式や大川式に多く見られる。器面にかなり深い凹部が現れる大川式は、当然のことながら原体への陰刻が深い。この深い陰刻の格子目文からやはりネガティブな楕円文が生まれたと考えていくのが妥当といえよう。原体への陰刻が深くなればなるほど、凸部のかどを切り落すことは容易になっていくと思われる。したがってネガティブな楕円文は、格子目文のバリエーションと考えて良いだろう(註1)。図68は、八窪遺跡から出土した2点の土器に施文される文様の原体を復元したものである。イはネガティブな楕円文、ロは1粒1粒が接する楕円文である。両者は1のように原体の割り付け線に沿って陰刻していくと2の浅い格子目文、3の深い格子目文になり、そのかどを切り落とすと4のネガティブな楕円文の原体になる。また2'のように1で割り付けた中を正確に陰刻していくと3'のような1粒1粒が接し粒が浅い楕円文が生まれる。3'から通常みられる1粒1粒が離れた楕円文や、凸部が深い楕円文に移行するのは、簡略化という視点で見ると可能になる。4は器面に押捺、回転する時の強弱によりさまざまな形状を呈し、ある程度のネガティブ楕円文のバリエーションに対応できるだろう。原体に陰刻される文様の結びつきについては、上野佳也〔上野1967〕、可児通宏〔可児1969〕、橋本正〔橋本1969〕等により、積極的に論じられてきた。原体の系統発生を論じるとき常に中心に置かれてきたのはポピュラーな山形文であった。最初の山形文から他の文様にどう変化したのかに関心があった様に思われる。しかし層位的出土例を基礎に検討した会田進の「下層ではネガティブな楕円文、市松文、格子目文が主体を占め」という指摘〔会田1987〕通り、この文様組成の中から山形文の発生を考えていくべきなのだろう。2、2'の様に原体の陰刻を考えていくと市松文と格子目文は割り付け線に沿って陰刻するか、割り付け線で囲まれた部分を陰刻するかの違いで近い関係にあり、楕円文は3'の様に格子目文の関係に近いものと、松永幸男が指摘する市松文の1粒1粒が接しないもの(註2)との両方に関連があり、いずれも簡略化することによりノーマルな楕円文の原体になると考えられる。山形文のみで系譜をたどるにはやや困難があるが、立野遺跡で見られ、山形格子目文と呼ばれたものが近い関係にあるかも知れない(註3)。

ウ 文様の組み合わせと文様構成

立野式に関しては、未解決な問題が残る。神村透は1957年立野遺跡の報告で、立野式と呼ばなかったものの、以下に列挙する特徴をもって1つのまとまりを持つ押型文土器として捉えていた。①文様の主体が

(註1) 松永幸男はネガティブな楕円文の施文原体の復元を考える中で、「このようにかなり複雑な施文原体の製作にあたっては、まず格子目状の割り付けをなすことが必要であったであろうと考えられる。そして原体製作の次の段階として、その割り付けられた各区画内を彫刻して彫りくぼめたり、目的とする隆起部を形成したりする作業がなされたであろう。」〔松永1984〕とし、格子目文の割り付けについて岡本と同様に注目している。

(註2) 市松文を「A：方形状凸部の四隅が明確な角をなし、各方形状凸部がその四隅で互いに接し合っているもの。B：方形状凸部の四隅の角が円みを帯び、各方形状が互いに接し合っていないもの。」と2つに分類している〔松永1984〕。

(註3) 格子目文1粒が菱形を呈する場合の割り付けから山形文を陰刻することは不可能ではないと思われるが、立野遺跡の山形格子目文は、逆に山形文のバリエーション的にも見え、ここから検討するのはやや難しいと思われる。

格子目文、山形文と市松文、②山形文の施文原体における陰刻の統一性、③器壁が厚いこと、④器面全面に施文され、多くは縦方向に施文される、という4項目であった。当時押型文土器の編年は、関東の撚糸文土器に後続する無文土器、沈線文土器の時期に伴出する例から、文様の組み合わせを中心として、格子目文・山形文→格子目文・山形文・楕円文→山形文・楕円文という流れで捉えており〔芹沢長介1954〕、立野の一群は2段階目に位置付けられた〔松島透1957〕。しかし、当時これほど多くの文様組成を持つ土器群の類例がないため深い検討はなされなかった。神宮寺・大川遺跡から立野遺跡で見られたネガティブな楕円文、市松文が出土し、文様組成等からこれらの土器群は1つのまとまりとして考えられるようになった。現在のところその分布は、林頭遺跡と栃原岩陰遺跡を結ぶラインから北へは広がらず、県下では中南信地方がかなり密である。

型式内容については、口縁部が大きく外反し、胴部があまりはらず乳房状の尖底を持ち、器厚は7mm～10mmで、文様はネガティブな楕円文、山形文、格子目文、楕円文があり、山形文の凸面での幅が狭く凹面での幅が広いことが特徴である。文様は器面全面に施され、その方向は縦位で、市松文は主に口頸部まで縦位密接以下横位密接施文される〔神村1986〕。神宮寺・大川式、立野式の関係については、「きわめて親近性があり、漸移的である」〔戸沢充則1978〕といった見解に見られる様に、やはり1つの大きなまとまりとして見ることが可能であろう。しかし、各々の関連性について具体的な指摘はあまりない。神宮寺式、大川式、立野式を比較すると、器形は神宮寺式がやや口縁部のひらきが弱く、大川式、立野式が強い。器壁は神宮寺式が最も薄い。口唇部は、大川式が最も厚く、立野式はそれよりも薄く、神宮寺式はさらに薄い〔註1〕。器面に見られる原体の凹部が一番深いのが大川式で、立野式、神宮寺式はそれよりも浅い。文様構成では神宮寺式、大川式では、口縁部横位以下縦位に密接施文という原則がほぼ守られているのに対して、立野式は格子目文、山形文(楕円文)が口縁部から底部にかけて縦位密接施文され、市松文とネガティブな楕円文のみ口縁部から胴上部まで縦位密接施文で以下は横位密接施文される傾向がある。頸部あたりで縦位施文が止まるものもあるが、胴中部まで下るものもあるなど口縁部を文様帯として独立させる傾向が弱い。また、大川式の様に、頸部に刺突等を施す例は皆無に等しい。しかし、一番大きな違いは、立野式では山形文が単独で1個体の土器に縦位密接施文されるのに対して、大川・神宮寺式は他と併用され付加的に使われることであろう。一方、立野式と大川・神宮寺式の間連続性(共通性)をあげると、格子目文(ネガティブな楕円文を含む)と市松文、楕円文、山形文を持ち、文様構成からみて口縁部から頸部あたりまで縦位密接以下横位密接施文をとるものがあることであろう。

八窪遺跡での土器の量の多さや、住居址を営み一定時間生活の場を持っていることから、立野式は在地的な土器として理解していかなければならない。立野式期の住居址が検出されたことは、押型文土器文化の流れを捉えるうえでも重要な意味を持っている。

エ 文様構成の変遷

図69は、岡谷・塩尻地区で出土した押型文土器の復元図と、既知の遺跡の出土例を並べたものである。現在押型文土器の編年観には、神宮寺・大川式系押型文土器を、中部地方以東の押型文土器と系統の異なるものとして二系統とする考えと、西の近畿から型式変化をとげながら東進してきたという一系統的な考え方

〔註1〕 大川式と神宮寺式の区分については、岡本が「神宮寺式は薄手で精選した胎土を用いて硬質である。幅の狭い舟形沈紋を多用し、口辺部の横方向の施紋に接して胴部の縦方向の施紋を行う。口唇部はやや外削ぎか円味を呈しており、口唇の刻み目が口辺部にかかる。大川式はやや厚手で、神宮寺式に比べ焼成もやや悪い。変形格子目文を多用し、口唇部は平縁となり回転施文がみられる。口辺部の横方向施文と胴部の縦方向施文との間に、刺突紋や縄圧痕を施紋する例がみられる。」とまとめている〔岡本1982〕。

の二者がある(註1)。文様変遷についてもすべての文様が初めから全部出そろっているという考えと、文様は系統的発生をおこなうという考えの2通りがある。すべての文様があるのは立野式であり、これは八窪遺跡の第1群第1類土器にもあてはまる。文様の系統発生についてその研究にふれる余裕はないが、原体の割り付けと文様の形状から見ると、やはり押型文の登場からごく短期間にすべての文様が発生したと考えられないだろうか。型式変遷の中で一番多く顔を出すのは山形文であるから、この山形文の文様変遷の系譜を捉えることが重要になると思われる。そこで、図69で山形文の系譜を追ってみたい。神宮寺・大川式に見られる山形文は、やや太めで沢遺跡よりは長い原体を使用する。

山形文のみで器面に飾るものが少ない点は既に指摘したが、器面全体に縦位密接施文される立野式と比較すると型式的な隔りがある。今、会田の指摘するように密接構成がより早く出現するという〔会田1971〕前提にたち、山形文の変遷を中心に考えてみたい。

6は縦位密接構成、7は縦位帯状構成をとる。これに近いのが福沢遺跡から出土した12で、器壁が8mmと厚く口唇部にも施文される。6・7の場合口唇部は施文されないもの、刻みを入れるもの、施文するものの3つある。12は器形の外反度がゆるく、6・7よりは時間的に若干下ると思われるが、器壁の厚さ、縦位密接構成をとる点で近い関係にある。次に現われるのが13~15と20~22で、比較的大形の原体で口縁部横位以下縦位密接構成をとり、縦位に施文された後に重複して横位に施文される。また、内側にも施文されるものが現われてくる。21・22は縦位の施文に無文部があり帯状化へのきざしが見える。これらの文様構成と同じなのが1・2であるが、文様組成に大きなへだたりがある。これから16~19・23への移行は簡略化され、かつ装飾的なものとなっていくこととして捉えられよう。17~19の様に口縁部と頸部に横位に帯状施文される土器の中からはだいに横位施文への移行がはじまり、25~27の土器が生まれてくる。25などは、横位に施文される部分が胴部上半まで拡大され、次第に縦位施文される部分が減少してくる。樋沢式から細久保式への移行は横位施文の拡大と縦位施文の減少という流れで捉えられ、26・27は横位施文への始まりをつけるものと考えられる。特に27はやや肥大する口唇部、原体の短い山形文で横位帯状施文されるものの樋沢式にきわめて近い要素を持っている。また頸部に原体端の刺突が施されたり沈線が施文され始め、それらは帯状施文される両脇や口唇部、押型文施文部上にまで拡大されるようになる(28~32)。さらには頸

(註1) 押型文土器を二系統に分けて考えたのは佐藤達夫である。佐藤は沢遺跡の報告の中で帯状施文されるものが押型文土器の前半、全面施文傾向をもつものが後半という考えに基づいて沢・平坂式→細久保・卯ノ木式→菅平東組・樋沢上層式と編年し、神宮寺・大川式については、沢・平坂式と同時期で系統が異なると考えた。なお、沢・平坂式に後続する樋沢下層・普門寺式の全面施文傾向は大川式の影響であるとした〔佐藤1967〕。これを継承発展させたのが岡本東三であるが、神宮寺・大川式を樋沢下層・普門寺式に併行させ、「樋沢下層の影響によって、口辺部を横方向に、胴部を縦方向に全面施文する神宮寺・大川式が出現してくる」と考えた点では佐藤と異なる。しかし、佐藤の考えた系統の差を認めた上で原体への陰刻方法の違い、すなわち沢・樋沢下層式は横刻原体多用型であるのに対し、神宮寺・大川式は縦刻原体多用型であると理解した〔岡本1982〕。これに対して一系統と考える立場からは立野式と樋沢式のどちらが古いのかという点、押型文土器に先行する型式との関連や伴出石器の問題等について神村透、片岡肇が中心になって論じている。神村は立野遺跡の報告の中で、第5層から立野式、第4層から帯状施文の土器が出土したことを記している〔松島1957〕。長野県下で層位関係が認められた例として栃原岩陰遺跡、林頭遺跡、福沢遺跡等が挙げられる。ただし、栃原岩陰遺跡の場合は詳細な検討がなされる。一方、片岡は独自に原体を復元し、論を展開している〔片岡1978〕ので、その原体に対する評価の確定を待たねば編年等について評価しきれない。また、戸沢充則は押型文土器の変遷を近畿から中部地方への伝播という流れの中で捉え、立野式→樋沢式という編年観を示している。しかし、両者の変遷を「文様の要素や様相を大きく変化させる」としながらも、帯状施文の発生については詳しく触れていない〔戸沢1978〕。このように、二系統的に考える立場は文様変遷と型式変化に、また一系統的に考える場合は層位と土器群の動きに視点をおいているという傾向が見られる。

図66掲載土器出土遺跡

- 1 = 大阪府神並遺跡(ネガティブ楕円文) 2 = 奈良県大川遺跡(ネガティブ楕円文) 3 = 長野県赤坂遺跡(ネガティブ楕円文)
 4 = 同(楕円文) 5 = 八窪遺跡(市松文) 6・7 = 同(山形文) 8 = 同(市松文・楕円文) 9 = 同(格子目文・市松文) 10 = 同(格子目文)
 11 = 同(楕円文) 12 = 長野県福沢遺跡(山形文) 13~15 = 栃木県普門寺遺跡(山形文) 16・17 = 岐阜県沢遺跡(山形文) 18・19 = 長野県樋沢遺跡(山形文)
 20~23 = 八窪遺跡(山形文) 24 = 長野県下り林遺跡(楕円文) 25 = 同細久保遺跡(山形文) 26 = 同樋沢遺跡(山形文・楕円文)
 27 = 八窪遺跡(山形文) 28 = 長野県細久保遺跡(楕円文) 29 = 同(山形文) 30・32 = 八窪遺跡(山形文) 31 = 同(楕円文)
 33 = 長野県細久保遺跡(山形文) 34 = 同(楕円文) 35 = 八窪遺跡(楕円文) 36 = 長野県細久保遺跡(山形文) 37・38 = 同大洞遺跡(楕円文)

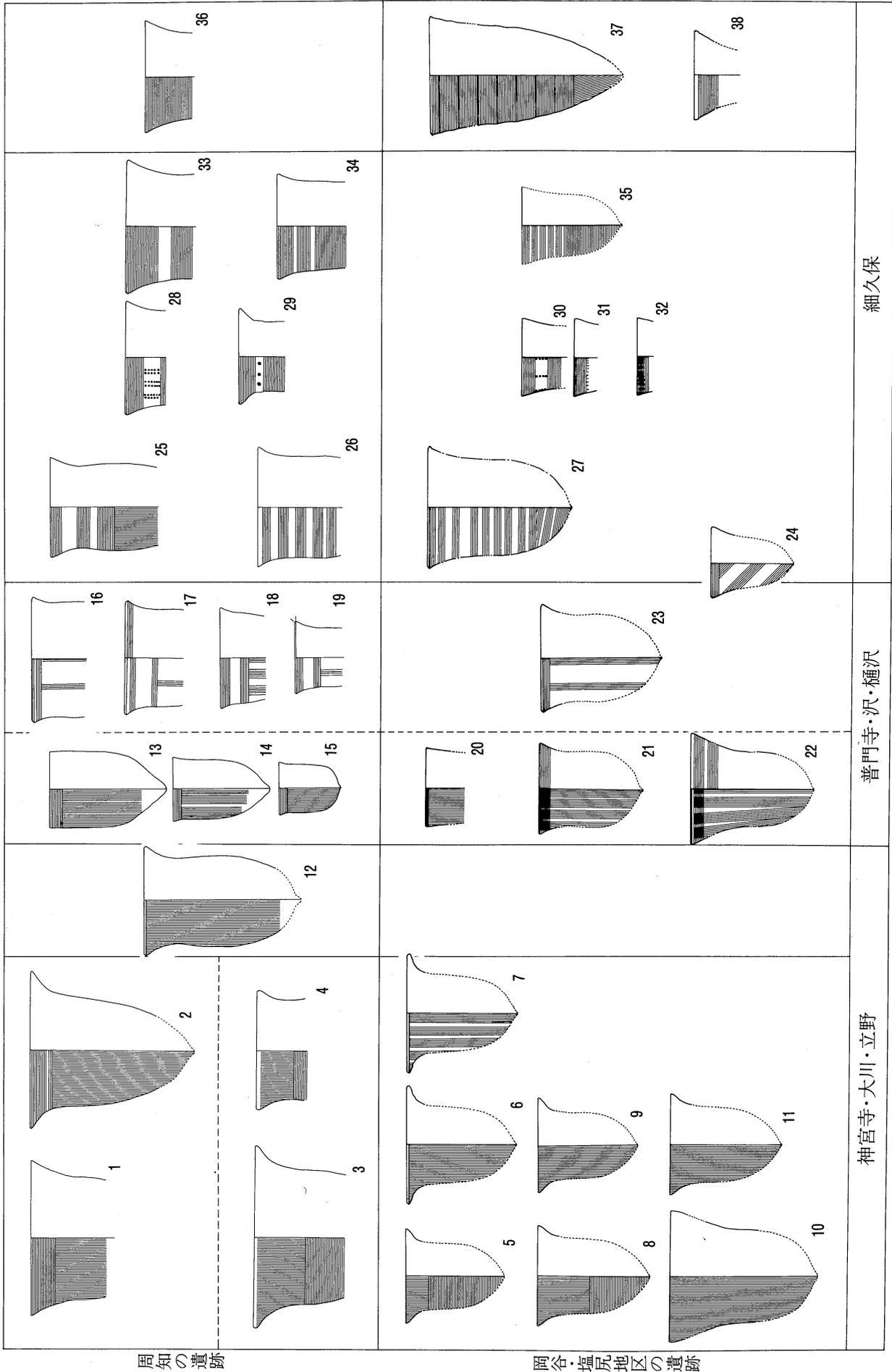


図69 縄文時代早期前半の土器分類図

部等にも大きな無文部は残さなくなり、文様自体も山形文が少なく楕円文が優勢になり35の様に横位密接施文に近い帯状施文を経て36～38の様に横位密接施文に移行する。立野式から細久保式終末に至る山形文の変遷は複雑であるが大きくは器面へ施文される文様が縦から横へ変化するととらえられないだろうか。未検証部分を残すが、仮説として提示したい。

(2) 縄文時代早期後半～末葉の土器群について

本書所収の諸遺跡のうち、縄文時代早期後半から同末葉にかけての遺物を出土しているのは青木沢遺跡、八窪遺跡、栗木沢遺跡、竜神遺跡、竜神平遺跡の5遺跡である。出土土器としては、早期後半期の貝殻条痕文系土器群とそれに後続する土器群の存在が確認されており、それら各遺跡より得られた資料相互の関係について、他の隣接諸遺跡での成果をふまえて、若干のまとめを行いたい。

ア 各遺跡の状況

まず、本報告書所収の上記5遺跡の土器様相について、時期比定を行いながら簡単に触れておく。

青木沢遺跡：早期後半、貝殻条痕文系鶴ガ島台式土器の出土があった。出土点数が微量なため詳細は不明である。なお、塩尻市教育委員会が調査した隣接地点からは、鶴ガ島台式土器のほか茅山下層式土器や絡条体圧痕文系土器が出土し、報告されている〔小林康男他1985〕。

八窪遺跡：上述した5遺跡の中で最もまとまった量の該期土器群が出土した。出土総数は430点余りを数える。鶴ガ島台式土器をはじめとする貝殻条痕文系土器や絡条体圧痕文系土器の出土が認められた。それらの中で、絡条体圧痕文系土器の異なる二者(A種、B種)が出土地点を異にしていたことは、両者のあいだに時間的先後関係を認める上で注目される。

栗木沢遺跡：早期後半に位置づけられる土器としては、貝殻条痕文系野島式土器と同茅山下層式の新しい段階の土器とが出土している。その他、早期末葉の土器として絡条体圧痕文系土器と上の山式類似の土器とがそれぞれ出土している。後者の上の山式類似土器については、上の山式土器そのものとは断定しえないものの口唇部の作りや隆帯文の特徴などからここでは「上の山式類似土器」とし、同土器に併行する時間的位置づけを与えておきたい。

竜神遺跡：少量ではあるが早期後半、鶴ガ島台式～茅山下層式土器とともに、同末葉に比定される絡条体圧痕文系の土器が見られる。また、参考資料ながら同遺跡付近からは絡条体圧痕文系土器の好資料が得られている。

竜神平遺跡：早期後半の茅山下層式、同上層式土器、さらに早期末葉の土器として絡条体圧痕文系土器と上の山式段階比定の土器などが出土している。それらの中には器形を復元しうるものもいくつか含まれており、当該期にあってはきわめて良好な資料である。

次に同時期の土器を出土している周辺の遺跡の状況について若干触れておきたい。

まず、中央道長野線建設に伴い岡谷市内で調査された遺跡の事例を挙げることができる。下り林遺跡、膳棚B遺跡、中島A遺跡より早期後半～末葉の土器が出土しており、とりわけ、膳棚B遺跡からは絡条体圧痕文系土器の良好な資料が東海系の土器とともに検出されそれらの事例をもとに、絡条体圧痕文系土器の大まかな変遷過程についても言及している〔百瀬忠幸1987〕。そのほか、岡谷市梨久保遺跡〔会田進他1986〕、茅野市高風呂遺跡〔守矢昌文他1986〕よりそれぞれ、絡条体圧痕文系土器群のまとまった出土が報告されている。両遺跡ともに同系土器群の編年的位置づけに係わる段階設定を試みている。塩尻地区では栗木沢遺跡に近い堂の前遺跡と福沢遺跡より、早期後半～末葉の土器群が出土している〔小林康男・百瀬忠幸他1985〕。

イ 各期の土器について

上記のような諸遺跡の状況をふまえ、本報告書所収の前出5遺跡出土の該期土器群相互の関係について、土器の様相ならびに当地域における諸遺跡でのあり方を中心として以下考えてみる。土器群の変化にみられる画期という点から早期後半と早期末葉とに分けて記述する。

① 早期後半の土器 (図70・71)

該期の土器は貝殻条痕文系土器群によって特徴づけられる。同土器群は従来より一般に子母口式、野島式、鶺鴒島台式、茅山下層式、茅山上層式の5型式に細分され、子母口式から茅山上層式への変遷が知られている。但し、子母口式についてはその土器型式としての存否を含めた時間的位置づけ、とりわけ、前後型式との系統性が問題とされてきていることは周知のとおりである。このことから、ここでは野島式以降の土器についてのみ扱うこととする。

野島式期：この段階の資料はきわめて乏しく、八窪遺跡と栗木沢遺跡から数点の破片が出土しているにすぎない。こうした傾向は栗木沢遺跡に近接する堂の前遺跡においても認められ、下り林遺跡において10点程の資料が得られているのを最高に、塩嶺山塊だけでなく全県的に共通する特徴であるように思われる。野島式段階における当地の人々の活動がきわめて希薄であったことが伺われる。土器様相については、比較的丁寧なつくりのものが多くという点が指摘できるが、本段階内部での細かな変化は捉えられない。

鶺鴒島台式期：青木沢遺跡と八窪遺跡より出土したほか、周辺遺跡としては、下り林遺跡と堂の前遺跡が主な例として挙げられる。これらの中で比較的良好な資料を提供しているのは、八窪遺跡と堂の前遺跡である。堂の前遺跡例は種々のバラエティーをもっており、中でも第Ⅲ群第4類土器の一部などは、当地域においては注目される資料といえる。現在のところ、詳細な変遷過程を後付けることは困難であるが、器形、文様、モチーフなどからすれば、おおむね関東地方を中心として捉えられている本土器群の変化と軌を一にしていると考えてよさそうである。堂の前遺跡例は古い段階のものから新しい段階のものまで含み、八窪遺跡例は新しい段階の所産であろう。また、両遺跡ともに幾何学状区画文の崩解と区画内充填文の粗雑化という方向性として捉えられる茅山下層式への変化を端的に示す資料(八窪第3類A種、堂の前第Ⅲ群第2類土器B-a種の一部と同D種)を含んでいる。同様な例は下り林遺跡出土土器の中にも散見される(下り林早期後半第2類D種)。

茅山下層式期：文様、モチーフの展開から2つの段階に区分できる。

古段階—この段階の土器は、いわば鶺鴒島台式土器の崩解期のものとして理解しうる。上述の方向性はより端的なものとなり(八窪第3類土器B種)、なお一層の進行をみせる(同C種)。また、この段階を特徴づけるものとして、「太くて浅い凹線様の沈線」により文様が構成される土器(八窪第3類土器E種)がある。凹線様の沈線は鶺鴒島台式の終末期に「なぞり」手法の萌芽として現われているが、その段階の資料には恵まれていない。文様としては直線あるいは蛇行するモチーフが描かれ、中には沈線上部や沈線間に斜方向からの、あるいは「C」字状の刺突文を加えた土器もある。以上のように、モチーフとしては前代からの継続的な変化を見て取れるが、新しい要素として地文に縄文を多用するようになる(図70)。さらに、縄文施文のみの土器も存在しそうである。この段階の土器群は総じて胎土中に混入される繊維の量が多く、器面調整の粗いものが多い傾向が指摘される。

新段階—この段階は、「米粒状ないしそれに類する連続刺突文により、山形状を基本とする文様が構成される」土器(八窪第4類土器)により代表される。好資料として栗木沢遺跡出土土器(35)が挙げられる。口縁部文様として重層する山形状の連続刺突文を浅いなぞり間の頂稜部に施し、胴部にも2条の連続刺突文をめぐらせる。前段階において凹線化した沈線文であったものが完全な「なぞり」となる。密接したなぞり間には細い頂稜部が形成され、モチーフもかなり定型化する。こうした文様、モチーフの変化とともに、野島・鶺鴒島台式期からの特徴であった「段」のくびれも弱く形骸化をたどるようになる。古段階から新段階

への変化はスムーズで、両者の過渡的要素を示す資料として、竜神平遺跡出土土器がある。32は頸部を縄文で埋める特異な土器であり、前代の縄文施文を多用する傾向の名残りとどめている。また、口唇部形態やそこに加えられた刺突風のキザミについてみれば、すでに八窪遺跡出土土器の中に祖型をみることができる(図71)。本段階においても沈線施文の土器が存在すると思われるが、はっきりしない。古段階で述べた八窪遺跡第3類土器C種がこの段階に含まれてくる可能性もあろう。

茅山上層式期：この段階における在地的な土器群の詳細は明確でない。おそらく貝殻条痕文を主体とする土器や縄文施文の土器によって構成されるものと考えられる(註1)。竜神平遺跡出土の資料中に見られる文様風の貝殻条痕をとどめた土器や縄文施文の深鉢形土器などは本段階に含まれるものであろう。概して胎土中に混入される繊維の量の多いことが特徴的である。外来系の土器としては、「連続爪形文により波状ないし横位の文様が施される」土器(八窪第5類土器)、すなわち、東海系の粕畑式土器の分布が認められる。

② 早期末葉の土器 (図72)

塩嶺山塊を中心とした今回の対象区域において、主体的に捉えられるのは絡条体圧痕文系土器である。絡条体圧痕文系土器の大まかな変遷課程については、既に岡谷市膳棚B遺跡出土資料を中心として述べてあるが(註2)、ここではその成果をもとに、さらに今回報告される諸遺跡出土の資料を加えてより明確な変遷過程の予察を試みたい。変遷過程を追うための段階区分としては東海系土器の編年区分を充て、各遺跡における共伴、共存といった土器の在り方より、各段階の絡条体圧痕文系土器を抽出し、I期～IV期に区分した。

I期(上の山式段階)

絡条体圧痕文系土器の成立期と考えられる。上の山式ないしそれに類する土器は栗木沢遺跡や竜神平遺跡などにあり、とりわけ、竜神平遺跡より出土した土器は、時期比定に不安を残すものの、残存状態がよくまた、いくつかのバラエティーをもつ点で貴重な資料といえる。これらの中で古い要素をとどめるものは栗木沢遺跡出土の土器(5)であろう。胎土中への繊維の混入が多く、器面調整に貝殻条痕を多用する点など前代からの影響を色濃く残している。竜神平遺跡出土の土器群(9)はこれにやや後出するものであろう。

さてこの段階に伴う絡条体圧痕文系土器であるが、先に示した栗木沢遺跡出土の上の山式類似の土器に共伴する同系土器は同遺跡の資料では明らかでない。同遺跡からは2点の絡条体圧痕文土器が出土しているものの、出土地点が上の山式類似土器のそれとは異なることやモチーフの特徴などが絡条体圧痕文系土器の変遷の中では新しい要素として捉えられる〔百瀬1987〕ことから、両者は共伴しないと判断しておきたい。

しかしながら、八窪遺跡出土の資料の一部(第6類A種)にその可能性を指摘することができる。栗木沢遺跡出土の上の山式類似土器にきわめて近似する特徴を備えた土器(2)の存在や絡条体圧痕による加飾が非装飾的であり、絡条体圧痕文系土器の中では古相を呈すと考えられている〔守矢1986〕ことがその理由として挙げられる。また、竜神平遺跡出土例は、早期末葉の土器群の主体がほぼ上の山式段階に限られることから、これの新しい段階に併行する一群と考えられる。胎土、調整等に八窪遺跡第6類A種と共通性もちつつも、文様の多段化、多様化傾向をみせる。

以上のように、この段階の絡条体圧痕文系土器としては、成立期の様相をもつものとして八窪遺跡出土

(註1) ただし、東筑摩郡朝日村熊久保遺跡第27号土壙(昭和60年度調査分)より刺突文が施された良好な資料がまとまって出土している。現在報告書作成にむけて整理中である。

(註2) 絡条体圧痕文系土器A種(器面に条痕文をとどめ胎土に多量の繊維を含むもので、「イモムシ」状の絡条体圧痕文が横位モチーフを中心に描かれるもの)から同B種(横方向、山形、「X」字状のモチーフを構成し、器面に条痕文をともなわないもの)への変化を捉え、さらにそれに後続するものとして梨久保遺跡出土土器(梨久保早期末第I期の土器)を充てている〔百瀬忠幸1987〕。

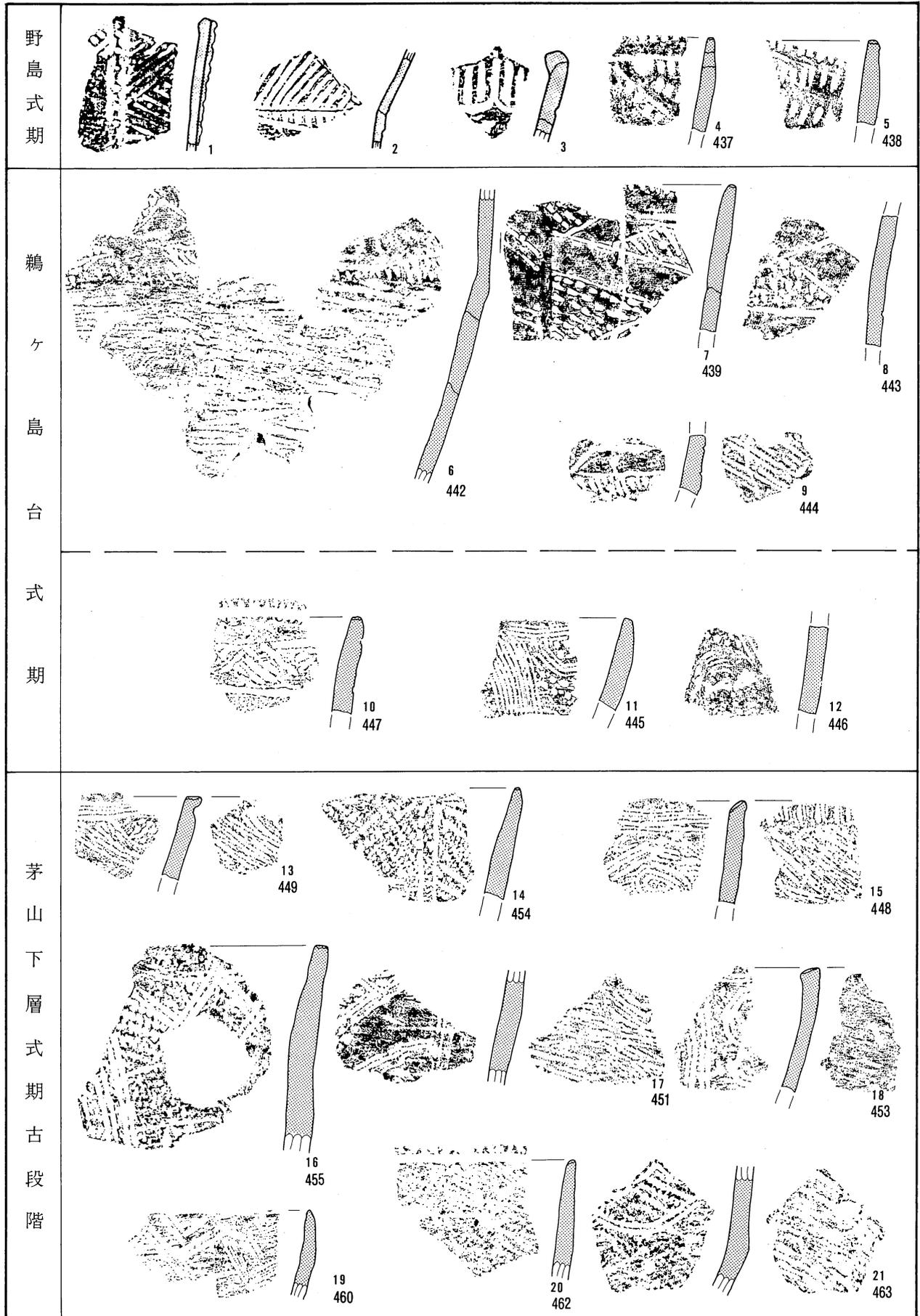


図70 縄文時代早期後半の土器1 (1~3=下り林 4~21=八窪)

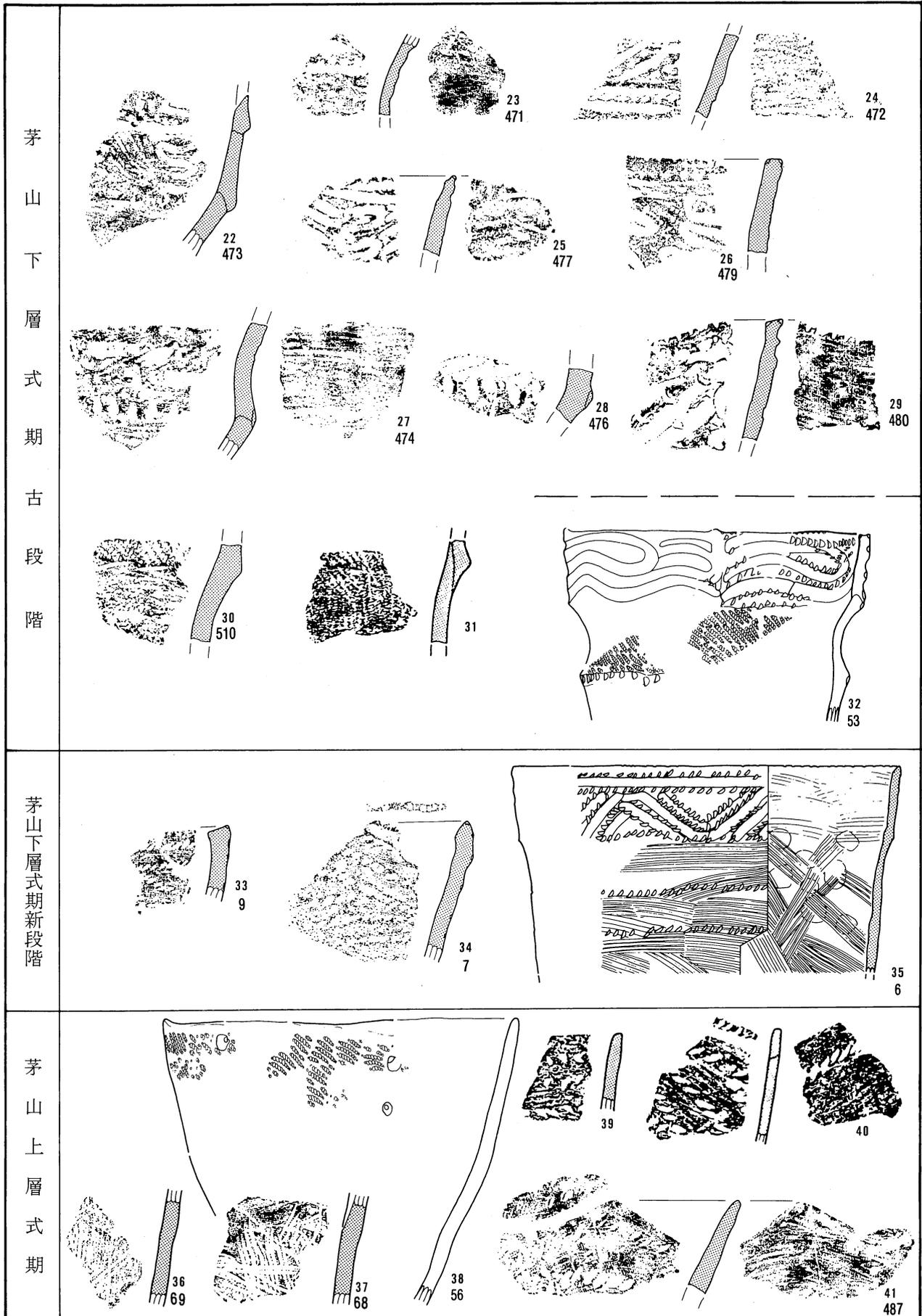


図71 縄文時代早期後半の土器2 (22~30・41=八窪 31・39・40=下り林)
 (32・36~38=竜神平 33~35=栗木沢)

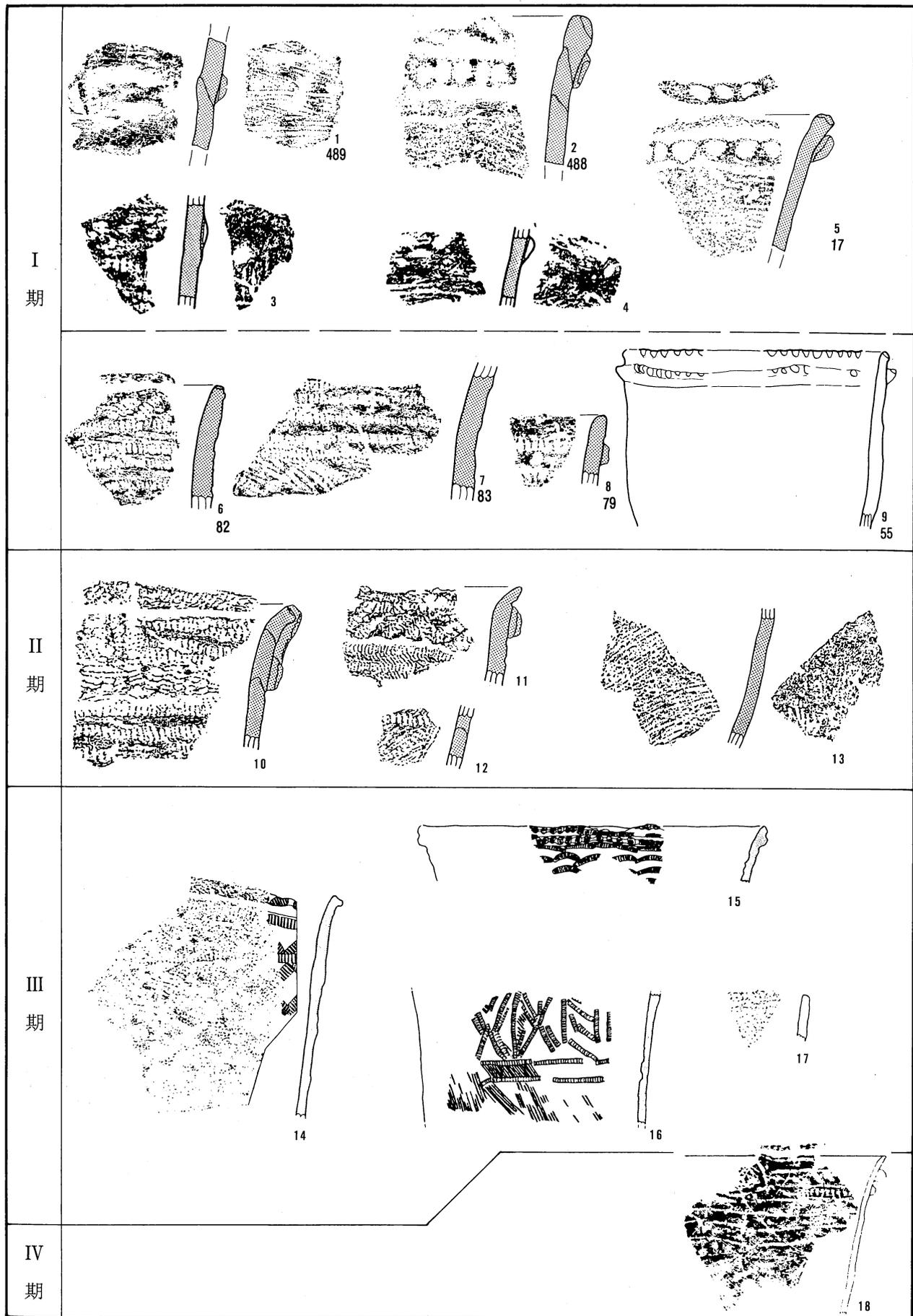


図 72 縄文時代早期末葉の土器 (1・2=八窪 3・4=下り林 5=栗木沢 6~9=竜神平)
10~13=竜神周辺 14~17=膳棚B 18=梨久保

資料の一部が、そしてそれに後出するものとして竜神平遺跡出土資料がそれぞれ捉えられる。他の資料としては八窪遺跡例同様古相をもつ下り林遺跡出土土器や中島A遺跡出土土器などがある。また、それら絡条体圧痕文系土器には条痕文土器や縄文施文の土器が伴うと考えられる。なお、絡条体圧痕文系土器の初源については、早期後半期の茅山下層式～茅山上層式の古い段階にまで遡らせる見解〔笹沢浩1975、守矢1986〕も示されているが、いずれも説得力を欠いている。よってその上限については、栗木沢・八窪両遺跡出土土器の在り方から、上の山式段階のあたりに置くのが妥当のように思われる(註1)。

II期(入海I式段階)

入海I式と絡条体圧痕文系土器の共伴が確認される事例は提示しえない。絡条体圧痕文系土器の変遷過程にみられる、加飾のある土器における条痕文の衰退化〔百瀬1987〕と装飾性の増加〔守矢1986〕という二面性から、その段階に位置づけられそうな資料は竜神遺跡周辺より得られた土器(10~13)がある。胎土にI期にみられた白色粒子や繊維を多く含むなどの特徴を残しながらも、より強い加飾性がみられる。八窪遺跡での分類に従えば、第6類土器A種も同B種との中間的な様相をもつ一群として捉えられる。また、絡条体圧痕文の施文効果を高めるためか、口縁端部が折り返し状に肥厚、外傾しており、次段階へ引き続く新たな要素も付け加えられる。他遺跡例としては堂の前遺跡や高風呂遺跡出土土器の中に類似する資料を見出すことができる。前段階同様条痕文土器や縄文施文の土器が伴出すると考えられるが、前者についてはこの段階より貝殻条痕から絡条体条痕への転化が進んだことが竜神遺跡周辺出土資料より伺われる。

III期(入海II式～石山式段階)

この段階は、膳棚B遺跡出土資料(第6類B種)によって代表される。東海系の入海II式～石山式土器との伴出関係が明らかとなっており、本段階への位置づけが可能である。装飾化の進行、とりわけ「鱗」状、「X」字状など文様、モチーフの多様化が一層顕著に認められる。文様ある土器の器面にはナデ調整が加えられ、条痕文はみられない。地文として絡条体による撚糸文が用いられるものが現われるとともに、撚糸施文の土器が縄文施文の土器に替わって出現してくるようである。この撚糸施文の多用は石山式の段階に取り入れられ、次期へ継続する要素であろう。

IV期(石山式～天神山式段階)

本段階は絡条体圧痕文系土器が新たな展開をみせる時期として捉えられる。具体的な資料としては、梨久保遺跡23号住居址出土土器(梨久保早期末～前期初頭第I期の土器)がある。地文への撚糸文使用が確立し、文様、モチーフについては隆帯文を除きやや簡略化されるようになる。また、新たに前期への継続性を示す縄文施文土器も伴出するようである。

これ以降、絡条体圧痕文系土器は前期初頭の土器群の展開とともにその終焉を迎えたことが、梨久保遺跡での成果〔小沢由香里1986〕から考えられる。

以上、早期後半～末葉の土器群の変遷を追ってみた。その中で、早期後半期の土器については茅山下層式から同上層式にかけての変化を、さらに早期末葉の土器については東海系土器の編年を基軸とした絡条体圧痕文系土器の変遷を、ある程度明らかにできたと思われる。とりわけ、後者の絡条体圧痕文系土器の初源をある程度押えられたことと、その成立に関して上の山式土器の強い影響を受けたであろうことを推測させる資料を提示しえたことは一定の成果としたい。

しかしながら、それは土器の変化する流れを追うにとどまり、各段階における土器の型式学的な立場や系統(地域)性、さらには土器様相に反映した時代性といった面については、何ら踏み込んだものではない。

(註1) 塩尻市堂の前遺跡とそれに隣接する福沢遺跡での遺物出土のあり方からも、絡条体圧痕文系土器は「茅山上層式土器以降に位置づけられ」ている〔小林・百瀬他1985〕。

資料的にも一小地域を扱ったにすぎず、それをどの程度普遍化できるかは不安の残るところである。時期区分しえなかった資料も多々あり、資料の増加とともに検討、訂正され実りのあるものになればと考える。

(3) 石 鏃

石鏃は縄文時代を通じて最も一般的な狩猟具であり、そのあり方から、各時期の狩猟形態の特徴を引き出す手がかりを得たり、遺跡の性格を推察するデータを提供することができよう。

本報告書に掲載された遺跡を単純に比較してみると、中期の集落址である上木戸遺跡での出土量が少ないのに対し、大規模な集落を形成しなかった(時間幅はあるが)八窪・竜神平遺跡で、未製品を含め多くの石鏃が出土している状況を知ることができる。その最大の要因は八窪・竜神平遺跡が長期にわたって断続的に活動の場となっていたことにある。しかし、それのみで片付けてしまうことはできない。時期の違いによる石鏃の使用量の差、あるいは、製作・保管・使用の場の違いなど遺跡の性格の差を予想することも可能であろう。

ここでは、八窪遺跡を材料として前述した問題点にせまるための基本的な操作を試みるものである。

ア 石鏃の形態変化

石鏃を分析するにあたっての最大の障害は、個々の石鏃を土器型式の細別時期に照合させることが困難な点にあった。ここでは、まず大まかではあるが、八窪遺跡出土の石鏃に時期を与える作業を行っていく。石鏃に時期を与える方法は、形態の変化を中心に法量や組成を加味して分類した。その資料は県内の既報告資料及び本報告書掲載の資料を使用した。おのずと限界も見え、おおざっぱな指摘しかできないことをお断りしておく。また形態分類については、各遺跡の報告では対象物への刺さり方(先端角と側片の形態)を重視したのに対し、ここでは時期的な特徴を示すと思われる他の要素も加えて検討した。

① 早期前半の石鏃

この時期の石鏃については、その特徴的な形態もあって古くから注目され検討が加えられてきた。ここでは樋沢遺跡の分析(斎藤幸恵1987)をベースとして、押型文土器の少なかった竜神平遺跡にはほとんどなく、八窪遺跡に存在するいわゆる鍬形鏃、小形(正三角形)鏃について検討し、樋沢報告を追認する形をとる。鍬形鏃の特徴の一つである逆刺し部に着目すると、矢柄に対して直角の幅広な逆刺し部をもつものが多い。早期後半にはこの逆し部の先端が丸みをもつものに変化するほか、抉りの浅いタイプについては、鏃身の長いものに変化してしまう傾向を見ることができる。長軸が1.4cm以下の小形(正三角形)鏃について見るならば、前期以降になると、抉りの深いものや先端角の大きいものが増加し、確実に形態の差が現れてくる。また、正三角形を呈するものについても、量的に見て早期前半に多いことは明白である(図75)。このほかにも早期前半に伴う石鏃は多いと考えられるが、形態のみでは限定が不可能であった。

② 早期後半～中期前葉の石鏃

早期後半から前期前半を画期として石鏃の形態は変化する。すなわち、恒川遺跡の状況(桜井弘人1986)を見ると石鏃の新たな形態変化は早期後半にはじまるらしい。しかし、中信地域でその時期に比定できる資料が少ないため、ここでは中期前葉までを一括して扱う。

この時期の特徴は、早期前半に比べて長軸の長いものが次第に増えること、そして形態においてもさまざまな工夫を凝らしている点にある。これらの特徴を阿久・千鹿頭社・高風呂・十二ノ后・舅屋敷遺跡の例から見ていくこととする。まず、長軸の長いものについては、側辺が外湾し、流線形を呈するものは少なく、直線ないしは内湾するものが主流を占めている。次に図73からこの時期に特徴的な形態のものをひろって見よう。E～Gは、逆刺し部を開脚させその先端を鋭くしている。A・Bはさらに鏃先端部も鋭く仕上げしており、刺突、逆刺しともに効果を高める工夫がなされている。Dは五角形に近く、やはり先端を鋭くし逆

	A	B	C	D	代表例	竜神平	八窪
早期					樋沢 伊久間原宮の原		
前期					千鹿頭社 高風呂 有明山社		
中期					船霊社 大石 大グッショ 増野新切 居沢尾根		
後・晩期					小垣外 辻垣外 中島A 御社宮司		

(1)

	E	F	G	H	代表例	竜神平	八窪
早期					石割 恒川堂の前		
前期					高風呂 阿久 十二ノ后		
中期					頭殿沢 荒神山 居沢尾根		
後・晩期					石行		

(2)

	I	J	K	L	代表例	竜神平	八窪
早期					樋沢 恒川		
前期					千鹿頭社 舅屋敷 十二ノ后 阿久		
中期					船霊社 頭殿沢 荒神山 大石 居沢尾根		
後・晩期					御社宮司		

(3)

- 左は対象とした石鏃の各形態の消長を示しており、そのデータは長野県内の既報告のものによる。
 - 中央は各々の形態を出土した代表的な遺跡名である。
 - 右は竜神平・八窪遺跡で出土している例である。
- 1～2点
 - 3～5点
 - 6～10点
 - 11点以上の出土数を示している。

図73 石鏃の形態別消長

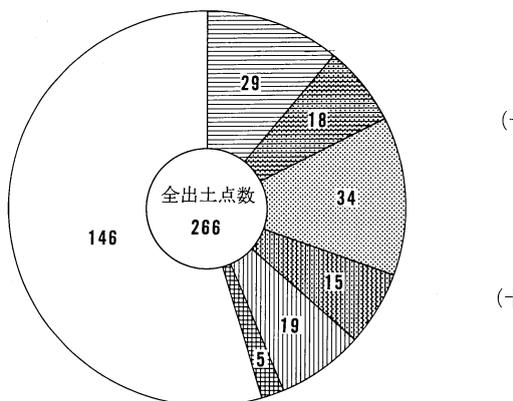


図74 八窪遺跡出土石鏃の時期別割合

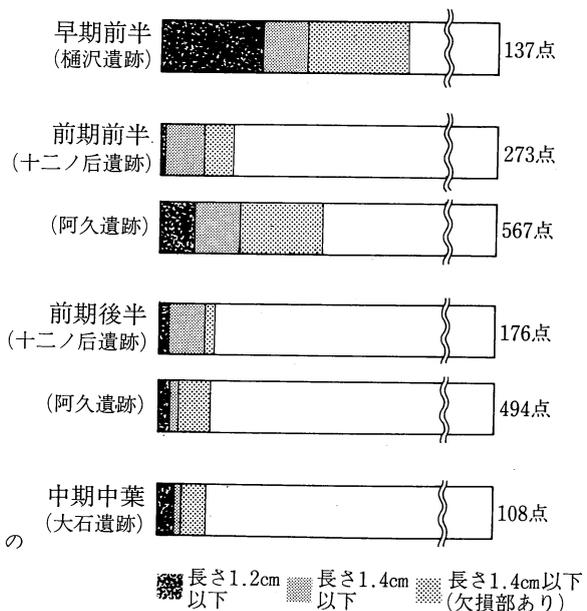


図75 小形石鏃の消長

刺しの効果も狙った形態となっている。A・BはHの側辺を流線形にしており先端の鋭い点で共通するが、逆刺し部は鋭さを失ったものも存在する。C・Dは幅広いブーメラン形になるもので、先端部の鈍くなったものが多い。E～Gはこの時期に多くなるものの他の時期にも認められ、限定度は低い。Hは前期に多いと考えられる。A・Bでは抉りの浅いAが早期に、深いBは前期に多く、中期になるとさらに長軸の長いものへと変化する。C・Dは最も幅広になる時期が前期であり、中期には長軸が長いものへ変化を見せる。

③ 中期中葉～後期の石鏃

中期中葉から後葉にかけては、住居址数に対して石鏃の量が少ない時期にあたる。また、後期については県内で細別時期の限定できる資料が少ない。この時期には、長さが幅の1.4倍以上となるものが増加する。また、側辺の形状では前期までに多かった内湾あるいは直線的なものに対して、外湾するものが目立つようになる。抉り部の特徴としては、中期の中葉頃まで深いものが残存するが、しだいに浅いものへ変化する傾向を見せる。逆刺し部で問題となるのは、側辺の外湾する長身の石鏃のうち、形状が流線形となることによって、柄を着ければ逆刺し機能がなくなるものが出てくることである(Kの一部)。これは、命中後の脱落防止より飛翔力と殺傷力の向上を優先させたことを意味しよう。もちろん逆刺しの存在するものもある。

④ 晩期の石鏃

後期からしだいに有茎鏃が増加する傾向が一般的に認められる。八窪遺跡においては、有茎鏃のうち154のように側辺部に肩を有するものが晩期に属すると考えられる。

イ 八窪遺跡における石鏃のあり方 (図76)

① 早期前半

この時期に限定できる石鏃は確実なもので29点があり、実際にはその2～3倍には達していたと考えられる。今回の調査範囲の中で唯一竪穴住居址を検出した時期であり、この地点に長期にわたる滞在があったと考えられる。分布状況はおおむね土器のそれに重なっている。この分布範囲には未製品や剥片類の分布も重なり、石鏃の製作が行われていた可能性を示している。

② 早期後半

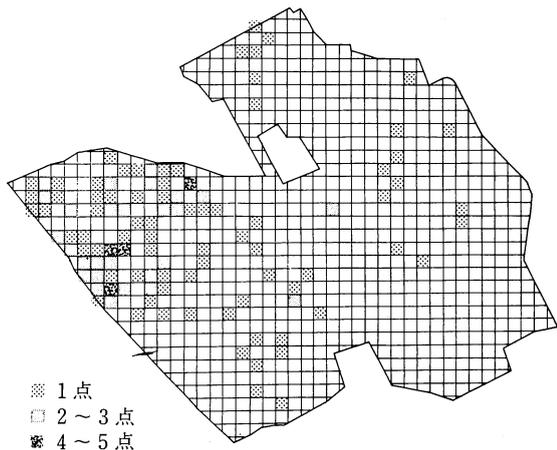
この時期には土器片が幾つかのブロックに分かれて点在する(図29)ほか、壙底に小ピットを持ついわゆる陥穴が存在し、短期間の逗留地や猟場になっていたらしい。陥穴猟は基本的には石鏃を使用しなくてもよい猟法と考えられるし、条痕文系土器に伴う可能性の高い石鏃は9点で時期を広げて早期後半から中期前葉まで含めても、その分布状況は土器と近似し、陥穴を中心とする猟場との関連を積極的には見ることができない。

③ 前期後半～中期前葉

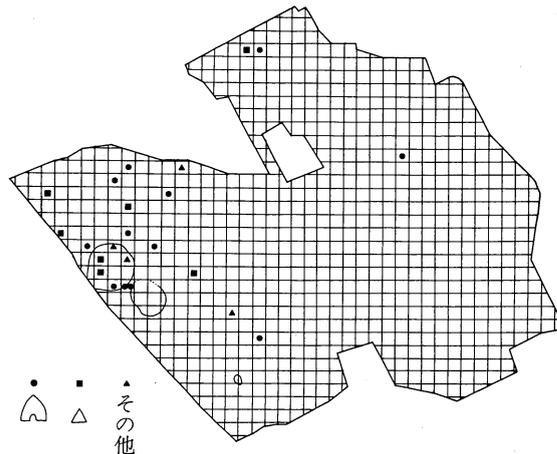
形態的には早期後半との区別の難しいものが多く、問題点を含んでの評価であることを断っておく。この時期には大形土器片を伴う土壙が存在するなど、早期後半に比べて滞在期間は長かったと推察され、石鏃にも多くのバリエーションが認められる。この状況を竜神平遺跡と比較して見よう。両遺跡はほぼ同時期の土器を出土しながら、八窪遺跡では前期的な色彩が強く各種の形態のものを含み、竜神平では前期的なものよりも中期前葉的な色彩が強くなっている。すなわち竜神平遺跡では、E～Hの類が比較的少なく、これに代わって長軸が幅の1.4倍以上で側辺が外湾し、抉りの深くなるもの(I～L)が増加する傾向が見られ、中期前葉から中葉(住居址の存在する時期)に石鏃の量が多くなることが予想される。前期的な特徴を持つ石鏃に関しては、土器の量の少ない八窪遺跡が土器の量の多い竜神平遺跡を凌駕している。

④ 中期～晩期

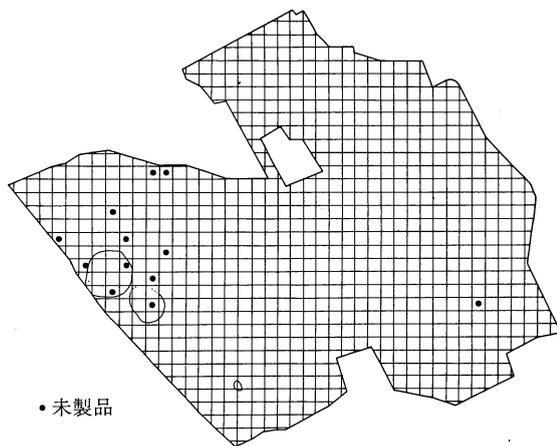
図73のAのタイプの分布をみると、調査区東側の後期土器集中区に石鏃が非常に少ないほかはこれまでの



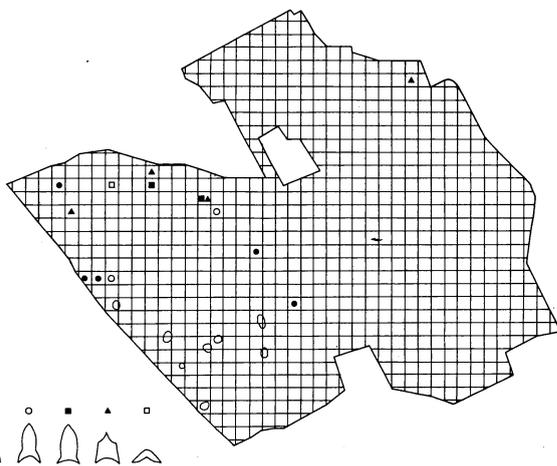
(1)全石鏃分布図



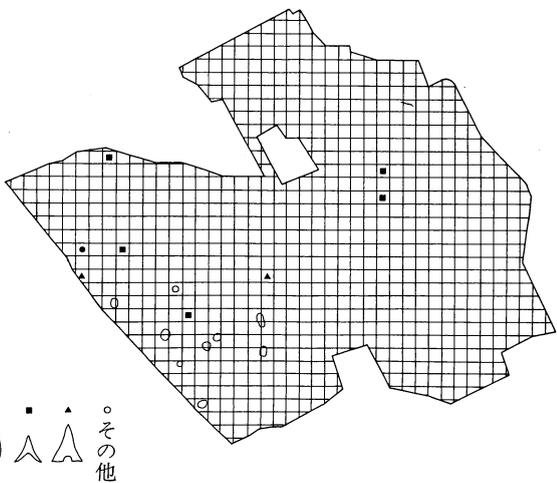
(2)早期前半の石鏃分布図



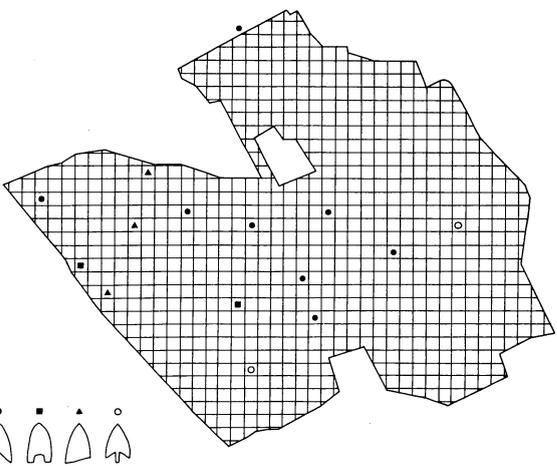
(3)石鏃未製品分布図



(4)早期後半~前期の石鏃分布図



(5)前期後半~中期前葉の石鏃分布図



(6)中期~晩期の石鏃分布図

図76 石鏃の時期別分布状況図

時期と異なり、尾根筋にそって点在する傾向が見られる。

各々の時期におけるこの土地(八窪遺跡)の利用状況と石鏃の対応関係についてごく簡単な描写を行ってきた。今後、さらに詳細なデータを積み重ね、縄文時代の狩猟形態の変化の一端に迫り、また、狩猟形態を通して見た各遺跡、各遺構、各地点の役割を探っていききたい。

6 小 結

八窪遺跡は縄文時代早期前半から平安時代まで断続的に人々の生活痕跡が残されている。時期毎の遺跡の性格を考えて小結としたい。

縄文時代早期前半、押型文土器が用いられた時期には2軒の住居を中心に生活が営まれた。ところで押型文土器を出土した住居址を注目したのは藤沢宗平である(藤沢1967)。藤沢は栃原岩陰遺跡、九合洞窟遺跡の例から押型文土器を使用した人達はその地域環境にしたがって洞穴ないし岩陰を生活の場として利用することがあり、洞穴、岩陰がない地域では自然石で囲った炉址と推定されるものや焼土のみを残すものが炉址ではないかと考えた。また、萱野遺跡発見の小竪穴を普門寺遺跡、黄島貝塚の例とともに仮眠のための遺構とみ、小形の棲家は配石の周辺にあったのではないかと推測した。押型文期の生活址については、「可動的な天幕」「簡単な仕掛け小屋」(八幡一郎・上野佳也1962)、「近畿地方ではおそらく、早期を通じて石積み炉を中心とした生活」(岡田茂弘1965)、「野天的の小屋位のものが普通ではなかったと想像される」(後藤守一1956)といった見解が提出されてきた。しかし、1970年代以降の発掘調査により竪穴住居址の存在が指摘され、しかもその例は確実に増加している(表2)。

八窪遺跡の2軒の住居址は立野式の時期に属する。隣接することや土器の文様組成の若干の違いから時間差をもつ可能性があるが、前後関係は明確でない。住居址の形態は向陽台遺跡の3軒の住居址と林頭遺跡の2軒の住居址に近い要素を持っている。また、八窪遺跡と向陽台遺跡とは距離的にも近く、この2遺跡から検出された竪穴住居址の検討は押型文土器自体の変遷や生活形態、家族形態を考えるうえで重要と思われる。遺構の内外から出土した押型文土器は、立野式から高山寺式まで中部高地で見られる型式をほぼ網羅しており、多様な石器組成からみても、長時間にわたって生活の拠点となったことが考えられる。

次に縄文時代早期後半～同末葉にかけて生活の痕跡が残される。

続いて土器についてみると、野島式期にはわずかに出土したにすぎなかったが、続く鶺鴒島台式期～茅山下層式期になると多数出土するようになる。当地における人々の活動は鶺鴒島台式期に至り活発化したものと考えられる。同期より茅山下層式期への土器の変化は先述したように比較的スムーズで、こうした傾向は塩嶺山塊一帯に認められる。

植物質食料加工具の特殊磨石の一部や「陥穴」的な土壇の一部がこの時期に属する可能性が大きいことなどから、食料獲得方法が多様化したことが推測されるが、気候の温暖化に対応した現象だったかもしれない。茅山上層式期には再び人々の営みを追うことが難しくなり、早期末葉段階において当地の主体的な土器群と理解される絡条体圧痕文系土器が若干出土するだけとなる。

早期後半～末葉にかけて遺跡を総体的にみれば、帰属すると考えられる遺構が「陥穴」とみられる土壇に限られることから、狩猟の場として占有され、機能していたことが想像される。また、磨石類が多出していることは、より多岐にわたる生産活動の存在も考えられ、植物質食料獲得・加工の場でもあったと理解される。また、土器の出土はこの場所で食料の調理がなされたことを示しており、単に食料獲得行為にとどまらず日常生活、の場として占拠されたことが考えられる。それが移動を伴う季節的なものであったのか、あるいは短期間の狩猟キャンプ的なものであったのかは判断できないが、本遺跡のみで生活のサイ

クルが完結していたことは考え難く、周辺諸遺跡を含めた遺跡群としての把握が必要であることは間違いない。

前期に入ると中葉と末葉に属するひとまとまりの遺物が得られ、末葉には墓の可能性のある土壌も1基発見された。中期は初頭から中葉にかけて間断なく遺物が残されるが遺構は未発見である。塩嶺山塊から筑摩山地西麓にかけては前期～中期の遺跡が集中する地域で、拠点集落もいくつか知られている。本遺跡は中核集落にはなり得なかったと考えられるが、断続的に地域の生活サイクルの一端を荷ったことは確かである。中期後半から後期前葉にかけては、遺物をわずかに得たに留まる。

後期中葉、八窪遺跡は再び生活の拠点となる。該期に属する可能性がある遺構は石囲炉のみであるが、遺物のブロック2箇所が発見された。後期中葉の遺構は、敷石住居址や配石以外県内ではあまり発見例がない。黒色土中に掘り込まれる遺構が多く検出の困難なのが理由の一つかと思うが、本遺跡も遺構が見つかりにくかった。石囲炉や埋甕は屋内施設の一部である可能性があり、特に炉は前期以降特別なタイプ以外は屋内施設として定着していて、本遺跡のそれも屋内施設にふさわしい形態や規模をもっている。この石囲炉を中心とした住居址が存在した可能性は棄てきれない。遺物のブロックは廃棄された遺物の集積と理解される。石囲炉付近から斜面下方に広がる西側小尾根上の1号ブロックには、分析の結果明らかにされた土器各種の大半が含まれており(図77)、時間幅をもつことも確実である。廃屋廃棄を含め集落全体の廃棄物の一部と理解してよいだろう。一方、2号ブロックは東側尾根の平坦面に形成されるが、遺構とは結びつかず孤立状態にある。土器の種類はA種、K～M種が主体で、バリエーションは貧弱である。特に後出の様相をもつC～F種が微量に留まるのは注意すべきだろう。居住域に隣接せず継続的でない廃棄の場

遺 跡	遺 構	長径×短径×深さcm	平面形	断面形	施 設	伴 出 遺 物
新 水 B	3 号 住	400×400×7	隅丸方形	壁 急	付近に炉址有	山形文・楕円文
"	5 号 住	380×320×30	"	壁斜め	各コーナーに柱穴1ないし2	楕円文・無文
大原第1	4号縦穴	340×220×()	楕円形	?		楕円文・楕形鏝
"	6号縦穴	340×220×()	"	?		押型文
金 塚	4 号 住	510×()×20	隅丸方形	擂鉢状		山形文・楕円文・燃糸文・高山寺式・田戸下層式
"	5 号 住	430×380×15	"	"	周囲に柱穴7・東南隅に焼土	山形文・燃糸文・田戸下層式
北 田	30号住	()×()×()	円 形	?	床面に窪み多数	格子目文・ネガティブ楕円文・山形文・楕円文
向 陽 台	1 号 住	630×630×()	"	擂鉢状		無文・沢式
"	3 号 住	900×900×()	"	"	柱穴不規則に配列	
"	10号住	630×630×()	"	"		
鍋 久 保	1 号 住	400×300×50	楕円形	"	敷石(?)	山形文・楕円文・無文・斜縄文・田戸下層式・特殊磨石
林 頭	1 号 住	250×250×()	円 形	"	地床炉	押型文・砥石
"	3 号 住	200×200×()	不整円形	"	"	
樋 沢	1 号 住	260×220×10	楕円形	壁斜め	柱穴5	無文・山形文
三 ツ 木	7 号 住	250×()×30	不整長楕円形	舟底形	柱穴6	押型文・石皿・砥石・磨石
"	8 号 住	320×()×20	長楕円形	?	柱穴6 周辺に石組炉	押型文・燃糸文・石皿・石斧
向 山	3 号 住	360×360×30	隅丸方形	壁斜め	柱穴・礫多数	表裏縄文・格子目文
八 窪	2 号 住	590×450×25	長楕円形	擂鉢状	焼土	市松文・格子目文・山形文・楕円文・ネガティブ楕円文・無文・燃糸文・縄文地文
"	3 号 住	700×700×40	円 形	"		"

表2 県内発見押型文土器出土住居址

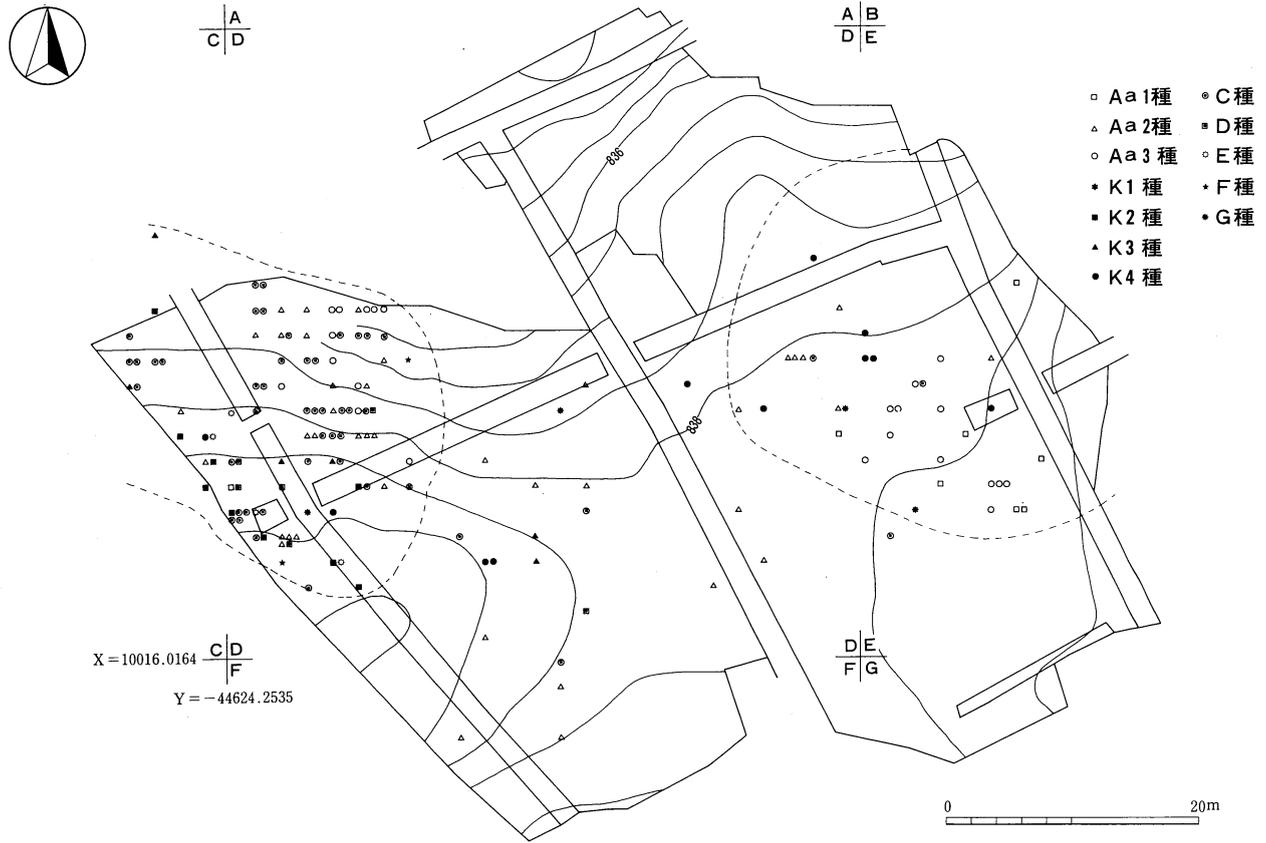


図77 縄文時代後期中葉土器分類別分布図 (1:600)

と考えておく。ブロック間の接合例が少数認められるので、両ブロックが関係を持つことも指摘できよう。

後期中葉には西側小尾根斜面に集落域が形成され、廃屋を含む隣接地と東側尾根平坦面に遺物が廃棄された。集落の末端を発掘したと思われるが、それは加曾利B2式前～中葉に限って営まれた。少量ながら出土した前後の時期の遺物は、その時期の集落が近隣に存在したか、この地が集落以外に利用されることがあったことを示すものだろう。県内においては後期の集落は、堀之内式以前に始まり加曾利B2式をもって廃絶されるタイプか、堀之内式期～後期後半(時には晩期前半)の間継続的に営まれるタイプのいずれかが多い。本遺跡はどちらにも入らない珍しい例であるが、おそらくは前者の一変型ではなかったろうか。また時間幅の小さい資料であったため、土器のセット関係を的確に捉えることができた。加曾利B2式期の長野県内の基準資料に用いてよいだろう。

後期後葉、晩期後葉にも若干の土器が残されるが散漫でまとまりがない。

古墳時代前期に再びここが利用されるようになる。焼土ブロックや埋設された可能性のある土器等が残されていた。周辺では前後の時期、小規模で祭祀的性格の強い山麓の遺跡として、竜神平、御堂垣外が知られる。本遺跡の資料は必ずしも祭祀的とはいえないけれども共通した遺跡のあり方が想定される。

平安時代の後半、短期間ながら集落が営まれているが、このような集落のあり方は県内でも多い。山麓部に立地する遺跡のあり方は同時期における盆地中心部の遺跡の動向と対比しながら、検討されつつある。

参考文献

会田 進 1971 「押型文土器編年の再検討ー特に施文法・文様構成を中心としてー」 『信濃』23-3
 会田 進他 1986 『梨久保遺跡』 岡谷市教委
 会田 進 1987 「押型文土器群をめぐる最近の研究」 『樋沢押型文遺跡調査研究報告書』 岡谷市教委

- 赤木 清 1937 「押型紋に於ける磨消手法について」 『ひだびと』 5-1
- 阿部朝衛 1979 「ピエス・エスキーユ」 『聖山遺跡』 東北大学文学部考古学研究会
- 市沢英利・三上徹也 1987 「大洞遺跡」 『中央道長野線報告書1-岡谷市内-』
- 市沢英利他 1987 「膳棚B遺跡」 『中央道長野線報告書1-岡谷市内-』
- 上野佳也 1967 「押型文文化の研究」 『考古学雑誌』 53-13
- 浦 宏 1939 「紀伊国高山寺貝塚発掘報告」 『考古学』 10-7
- 大竹憲昭 1985 「ピエス・エスキーユ」 『利島村大石山遺跡-範囲確認調査報告書III-』 東京都利島村教委
- 大塚達朗 1983 「縄文時代後期加曾利B式土器の研究(I)」 『考古学研究室研究紀要』 第2号 東京大学文学部考古学研究室
- 大野政雄・佐藤達夫 1967 「岐阜県沢遺跡調査予報」 『考古学雑誌』 53-2
- 岡田茂弘 1965 「縄文文化の発展と地域性7近畿」 『日本の考古学II』 河出書房
- 岡田正彦 1986 『北田遺跡見学会資料』 飯田市教委・北田遺跡発掘調査団
- 岡本東三 1982 「神宮寺・大川式押型紋土器について-その回転施紋具を中心に-」
- 岡本東三・片岡肇他 1982 「樋沢遺跡研究会の記録」 『概報・樋沢遺跡』 岡谷市教委
- 岡本東三 1987 「押型文土器の技法と起源をめぐって」 『樋沢押型文遺跡調査研究報告書』 岡谷市教委
- 小沢由香里 1986 「縄文時代早期末~前期初頭土器の分類と検討」 『梨久保遺跡』 岡谷市教委
- 梶原 洋 1982 「石匙の使用痕分析」 『考古学雑誌』 68-2
- 片岡 肇 1972 「神宮寺式土器の再検討」 『考古学ジャーナル』 72 ニューサイエンス社
- 片岡 肇 1978 「神宮寺式系押型文土器の様相」 『小林知生教授退職記念考古学論文集』
- 片岡 肇 1980 「樋沢式土器の再検討-長野・岐阜を中心として」 『信濃』 32-4
- 神奈川考古同人会 1983 「シンポジウム 縄文時代早期末・前期初頭の諸問題」 『神奈川考古』 第17号
- 可児通宏 1969 「押型文土器の変遷過程」 『考古学雑誌』 55-2
- 神村 透 1983 「林頭遺跡」 『長野県史』 考古資料編(3)主要遺跡(中・南信)
- 神村 透 1983 「二本木遺跡・稲荷沢遺跡」 『長野県史』 考古資料編(3)主要遺跡(中・南信)
- 神村 透 1986 「信濃の押型文土器とその文化-縄文文化の確立期を語る」 『歴史手帳』 14-2 名著出版
- 小池幸夫他 1977 『大原第1遺跡』 箕輪町教委
- 小杉 康 1987 「樋沢遺跡 押型文土器群の研究」 『樋沢押型文遺跡調査研究報告書』 岡谷市教委
- 後藤守一 1956 「衣・食・住」 『日本考古学講座』 3 縄文文化 河出書房
- 小林康男 1978 「縄文時代の磨石」 『中部高地の考古学』 長野県考古学会
- 小林康男 1985 「塩尻市 向陽台遺跡」 『長野県埋蔵文化財ニュース』 No.15
- 小林康男・百瀬忠幸他 1985 『堂の前・福沢・青木沢遺跡』 塩尻市教委
- 近藤尚義他 1987 「下り林遺跡」 『中央道長野線報告書1-岡谷市内-』
- 斎藤幸恵 1987 「押型文系土器文化の石器群とその性格」 『樋沢押型文遺跡調査研究報告書』 岡谷市教委
- 酒詰仲男 1958 『大川遺跡』 奈良文化財調査報告2
- 笹沢 浩 1975 「男女倉遺跡C地点」 『男女倉』 和田村教委
- 縄文文化研究会 1984 「押型文土器について」 『縄文文化研究会広島大会資料』
- 鈴木正博他 1980 『太田区史 資料編 考古II』 太田区
- 鈴木正博・鈴木加津子他 1981 『取手と先史文化』 上・下 取手市教委
- 芹沢長介 1954 「関東中部地方に於ける無土器文化の終末と縄文文化の発生に関する予察」 『駿台史学』 4
- 園田芳雄 1949 「普門寺観音山包含地遺跡調査概報」 『両毛古代文化』
- 戸沢充則 1978 「押型文土器群編年研究素描」 『中部高地の考古学』 長野県考古学会
- 友野良一 1983 「向山遺跡」 『長野県史』 考古資料編(3)主要遺跡(中南信)
- 中島 宏 1987 「中部地方における押型文土器編年の再検討」 『埼玉の考古学』
- 橋本 正 1969 「回転押型文土器の問題」 『大鏡』 4
- 林 茂樹 1962 「横山遺跡の斜縄文土器と押型文土器」 『信濃』 14-3
- 林 茂樹 1983 「三ッ木遺跡」 『長野県史』 考古資料編(3)主要遺跡(中南信)
- 福島邦男 1981 『新水-長野県北佐久郡望月町新水A・B遺跡緊急発掘調査報告書』 望月町教委
- 藤沢宗平 1965 「萱野遺跡-押型文土器文化の生活遺構について-」 『伊那路』 9-10
- 藤沢宗平 1967 「押型文土器と住居址」 『古代』 49-50
- 松沢亜生 1957 「細久保遺跡の押型文土器」 『石器時代』 4
- 松永幸男 1984 「押型文土器にみられる様相の変化について」 『古文化談叢』 第13集
- 宮崎朝雄 1987 「関東地方における縄文早期終末の土器群について」 『埼玉の考古学』 柳田敏司先生還暦記念論文集刊行委員会
- 百瀬忠幸 1987 「縄文時代早期末葉の土器-絡条体圧痕文系土器をめぐって-」 『中央道長野線報告書1-岡谷市内-』
- 百瀬長秀 1987 「中島A遺跡」 『中央道長野線報告書1-岡谷市内-』
- 守矢昌文他 1986 『高風呂遺跡』 茅野市教委
- 八木光則 1976 「いわゆる『特殊磨石』について」 『信濃』 28-4
- 八幡一郎・上野佳也 1962 「長野県菅平東組の早期縄文文化について」 『考古学雑誌』 48-2
- 山下勝年他 1980 『先刈貝塚』 南知多町教委

第4節 ^{おおほら}大原遺跡 (EOH)

1 遺跡の概観

遺跡は柿沢集落の東方、塩尻市大字塩尻町字永井坂1437番地一帯に所在する。塩尻峠の北に源を發し西流する四沢川によって峠の麓に形成された西に緩く傾斜する古扇状地性台地の中央部一帯に展開している。標高は820m～840mである。

本遺跡の発見は古く、昭和12年刊行の『塩尻町誌』(三沢勝衛・大森利球治1937)にはすでに縄文時代中期の遺跡として、出土遺物のスケッチと共にその名がみられる。また、武田信玄ゆかりの古戦場として、さらには旧中山道の通過地として、「永井坂」の名でよく知られているのもこの地である。

昭和58年、県営圃場整備事業にともなって塩尻市教育委員会が遺跡の北西部約550m²を発掘調査し、数片の土器とともに性格不明の溝状遺構及び集石址を検出している(塩尻市教委1984)。

同じ台地の北側側縁には柿沢東、北山、御堂垣外の各遺跡や禰ノ神古墳群が分布する。このうち、柿沢東遺跡は塩尻市教育委員会の調査によって縄文時代中期後半の集落であることが判明し(塩尻市教委1984)、御堂垣外遺跡からは当埋蔵文化財センターの調査で縄文時代中期後半及び後期前葉の住居址が発見されている(本書第6節)。

2 調査の概要

中央道長野線は遺跡中央を南北に横断し、また、この地にパーキングエリアが設けられることもあって、調査対象面積は推定される遺跡範囲のおよそ2分の1の25800m²にのぼる。調査前のこの地は一面畑地であった。北調査区の西側は昭和30年代に水田として造成されたが、水利に恵まれず、現在は畑に変わっている。

発掘調査は昭和59年5月上旬から11月末まで行い、調査研究員は主として4名が当たった。調査にあたっては、地点が2箇所に分かれていることから、便宜的に北調査区、南調査区と呼ぶことにした。調査の初期は、調査区が広い範囲に及ぶこと、遺物の分布がまばらであることなどからまずトレンチ調査を実施

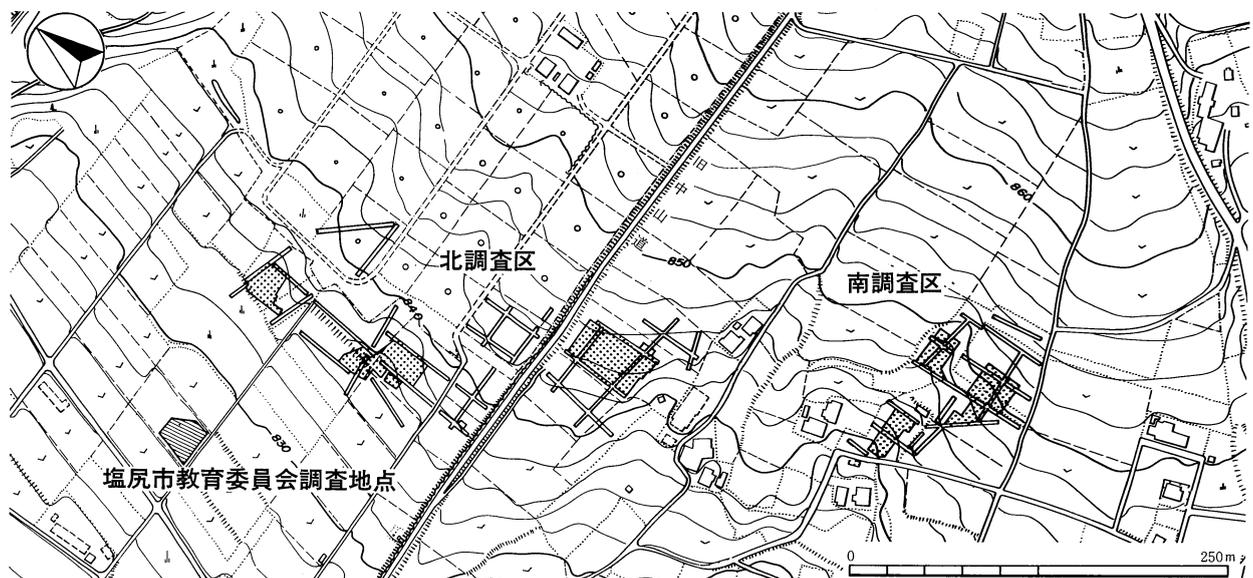


図1 地形及び発掘範囲図 (S = 1:5000)

し、調査区全体の土層や遺構、遺物の分布状況の把握に努めた。トレンチは地形の傾斜方向及びそれと直交する方向に設定した。そして、その結果をもとに、面的調査の範囲を遺構が検出されるか、遺物が良好な状態で出土した地点、すなわち、北調査区で3箇所、南調査区で2箇所にしぼった。作業は、北調査区の一部で表土剥ぎに重機を用いた以外すべて手作業によった。

大地区設定やトレンチ及び遺構の位置測量は日本道路公団の工所用杭STA78+80(X=10677.2674、Y=-45068.8006)を基準にし、光波測距儀を用いて行った。標高は調査区付近の工所用杭を基準にし、遺構の測量は簡易遣り方によった。

整理作業は12月初めに着手し、翌年3月までに発掘所見の調整、図面の整理及び遺物の水洗、注記を終了した。その後、昭和61年度に整理作業を再開し本報告に至る。

3 調査の経過

昭和59年度			
4月25日	北調査区に大地区を設定。	9月6日	北調査区I地区に重機を入れて耕土、盛土の排土作業を行う(～7日)。
5月7日	トレンチを設定し発掘調査開始。	9月11日	残件のある範囲を残して南調査区の調査を終了。北調査区に戻り、B・I地区の面的調査開始。
5月8日	01トレンチにて縄文時代前期、中期の遺物包含層確認。	10月5日	北調査区の調査終了。
6月5日	黒曜石剥片、土師器、須恵器、中・近世陶器片の出土がみられたK～N地区にグリッドを設定し、面的調査を開始。	11月9日	残件のあった南調査区R地区にトレンチを設定し調査再開。
6月19日	K～N地区でローム層中の調査を行うが遺物出土なし。	11月13日	面的調査開始。遺物の出土少ない。
7月2日	土壌の見つかったI地区で面的調査を開始。	11月29日	ローム上面まで掘り下げて調査終了。
7月9日	L地区で塚の慰霊祭を行い、測量杭を打つ。	12月～	整理作業開始。調査所見の調整、図面の整理、遺物の水洗、注記を年度内に終了する。
7月11日	塚の地形測量を行う(～12日)。	昭和61年度	
7月16日	塚の発掘開始(～26日)。	4月～	整理作業再開。遺物台帳作成、遺物実測を行う。
7月23日	塚の調査に並行して南調査区の調査を開始。	昭和62年度	
7月31日	30トレンチにて土器を伴う焼土を検出し、面的調査に切り替える。	4月～	図版作成及び原稿執筆。

4 調査の結果

(1) 層序と地形形成 (図2)

北調査区07トレンチの土層観察によれば層序は以下の通りである。

I層：現耕作土及び水田造成時の盛土。畑における耕作土はかなりロームを含んでいる。水田下の盛土はロームが主体で、標高の高い側を削り低い部分に盛ったもの。

II層：灰褐色砂質土。

III層：黒褐色土。

IV層：暗赤褐色土。

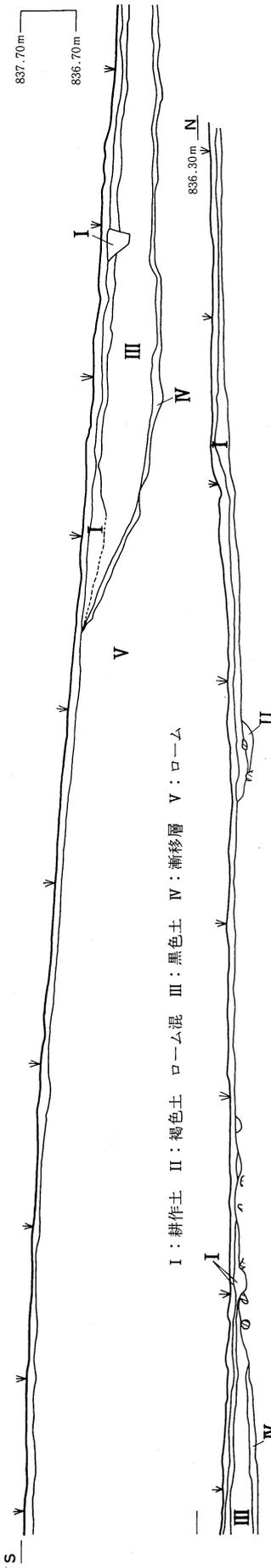
V層：黒色土。礫をまったく含まない黒ボク。

VI層：ローム漸移層。

VII層：ローム。扇状地礫層の上に堆積した波田ローム。

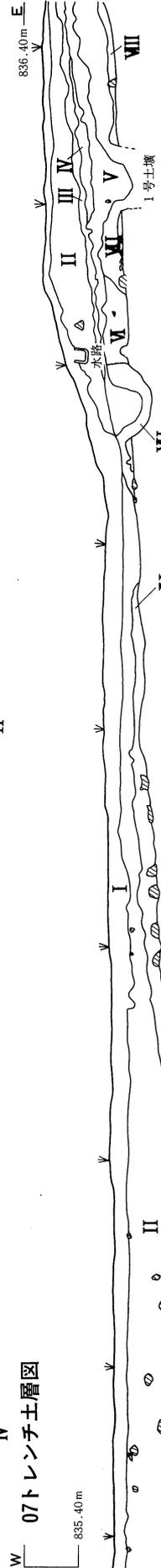
ただし、一般には耕作土の下は即VII層ロームであり、7層に及ぶ堆積状況が観察されるのは谷状にくぼんだ部分に限られる。この谷状地形は傾斜方向に延びており、北調査区で2箇所、南調査区で1箇所が確認されているが、埋没する過程では水の作用が大きく関係したらしく、砂や礫を含んだ層も見られる。かつては今よりも起伏に富んだ地形であったと思われる。

09トレンチ土層図



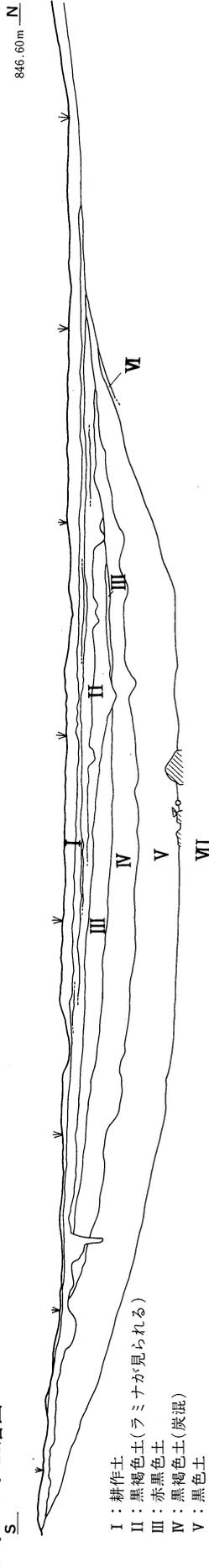
I : 耕作土 II : 褐色土 ローム混 III : 黒色土 IV : 漸移層 V : ローム

07トレンチ土層図



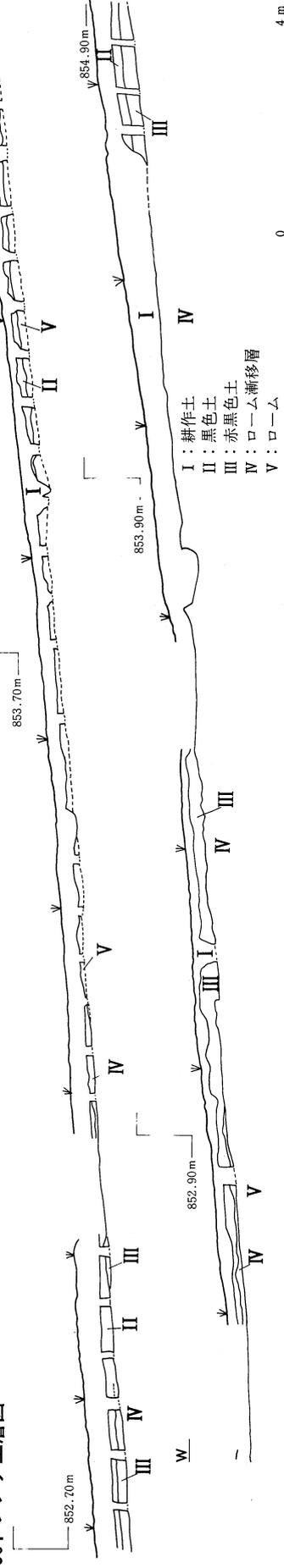
I : 耕作土 II : 盛土 III : 灰褐色砂質土 IV : 黒褐色土 V : 暗赤褐色土
VI : 黄褐色砂質土(礫混) VII : 黒色土 VIII : 漸移層(礫混) IX : 二次堆積ローム

33トレンチ土層図



I : 耕作土
II : 黒褐色土(ラミナが見られる)
III : 赤黒色土
IV : 黒褐色土(炭混)
V : 黒色土
VI : 漸移層
VII : ローム

30トレンチ土層図



I : 耕作土
II : 黒色土
III : 赤黒色土
IV : ローム漸移層
V : ローム

図2 土層図 (1:120)

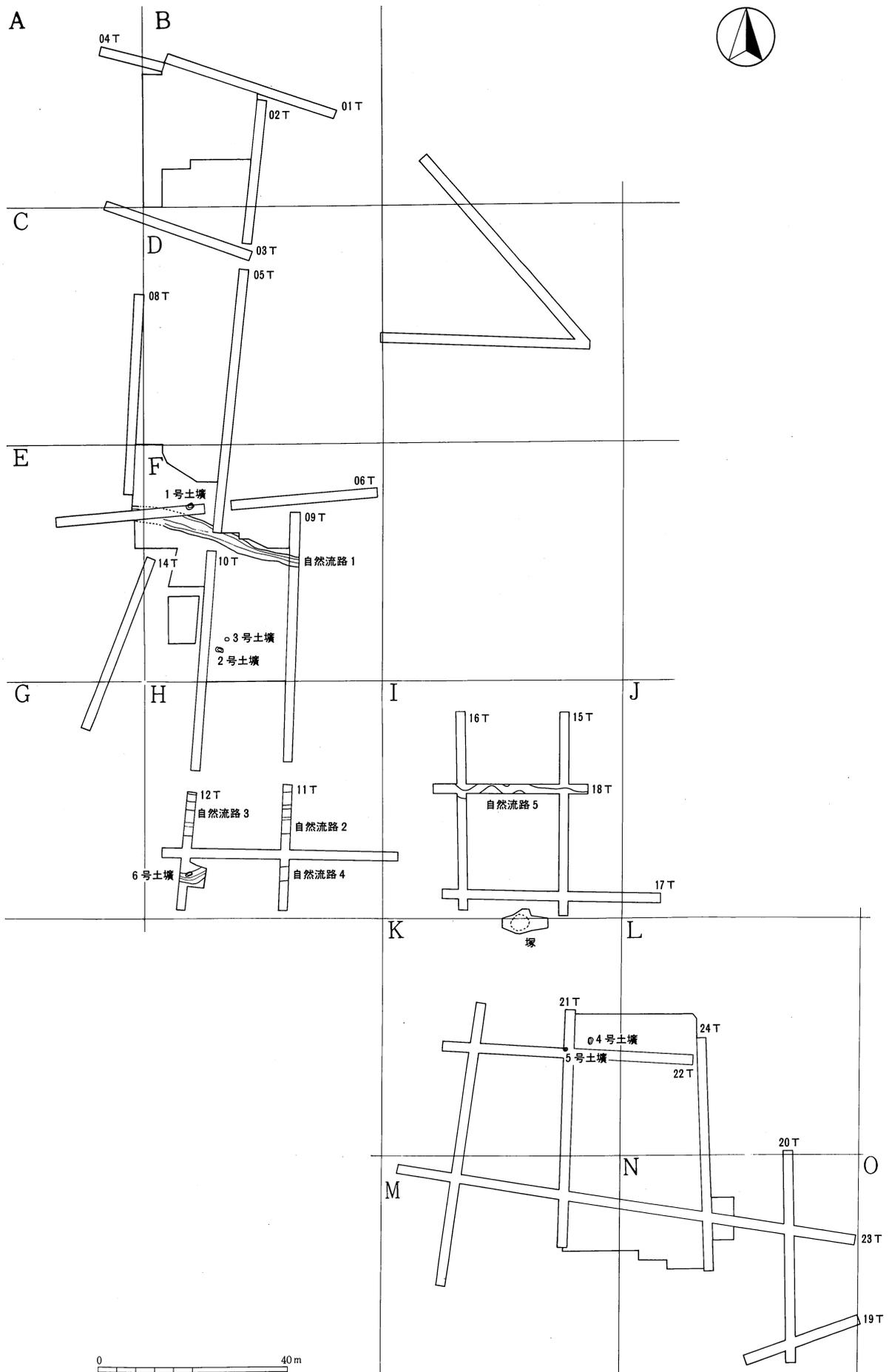
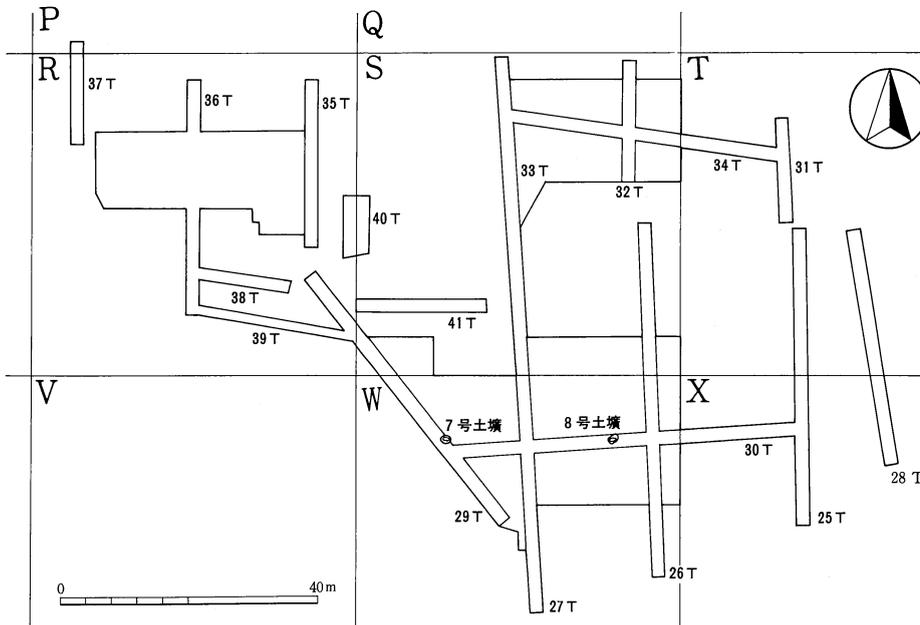


図3 北調査区トレンチ配置及び遺構分布図 (1:1200)

(2) 遺構と遺物の概観 (図3・4)

検出された遺構は少なく、縄文時代の土壙8基がそのすべてである。北調査区で6基、南調査区で2基となっているが、周辺出土土器をみると北調査区は前期諸磯a式が、南調査区は後期称名寺式、堀之内式



が主体を占めており、その属す時期はおのずと限定されよう。

縄文時代以外の遺物では、弥生時代、奈良・平安時代のものはわずかで、むしろ中世陶器の方が量が多い。また、近世以降の遺構として塚があるが、調査の結果内部施設は存在しなかった。

図4 南調査区トレンチ配置及び遺構分布図 (1:1200)

(3) 縄文時代の遺構と遺物

ア 土壙 (図5、PL23)

北調査区では6基が検出されている。このうち1・2・4号土壙は、検出面のプランが楕円形で底は長方形、深さは1m前後、垂直な壁と平坦で堅い底をもつなどの共通性が認められ、一般に陥穴とみなされているものに類似する。これらは互いに距離をおいて、また、長軸を等高線に合わせて設けられている。(1・2号土壙は谷状地形の斜面に位置しているため、谷の走る東西方向に長軸をもつ)。このほか、規模は小さいながら形がよく似た6号土壙、プランは円形だが底に小ピットをもつ5号土壙も同様な性格と考えられる。3号土壙のみは斜めに掘られていて特異であり、性格が異なるであろう。これら土壙の属する時期については、1号土壙の埋土2層より1点、さらにその周辺からはかなりまとまった量の前期諸磯a式土器が出土しているので、前期と考えておきたい。

南調査区では7・8号の2基が、耕作土下ローム上面に検出された。位置は遺物の出土が多かった谷状地形の南側平坦地にあたる。円形あるいは楕円形のプランで深さは40cmと浅く、どちらも底は堅い。7号は検出面に焼土が分布し、埋土中に炭粒が多く混じる。後期初頭の土器片が出土している。

イ 遺構外出土遺物 (図6～9、PL24)

北調査区では先にも述べたように量的にまとまっているのは前期諸磯a式土器であり、ほかには中期後半及び後期前葉の土器が散見される程度である。1～15は1号土壙周辺のIV層より出土した土器である。半截竹管を用いて肋骨文を描く1～11は諸磯a式に比定されるが、口唇部に刺突が加えられる(1・2)、並行沈線が直線的であるなどa式でも古い段階の要素が強いといえる。12～13は斜縄文あるいは羽状縄文が施された土器で、胎土、焼きともに前記したのものによく似ることから、それに伴うとみてよい。15はシュロ状文を施した非常に薄手の土器で、胎土も在地のものとは異なる。北白川下層II式に比定されよう。土製耳飾り(16)は調査区北端のB地区IV層出土。推定直径6.8cmと大形品で、上端には中央に押えを加えた丸

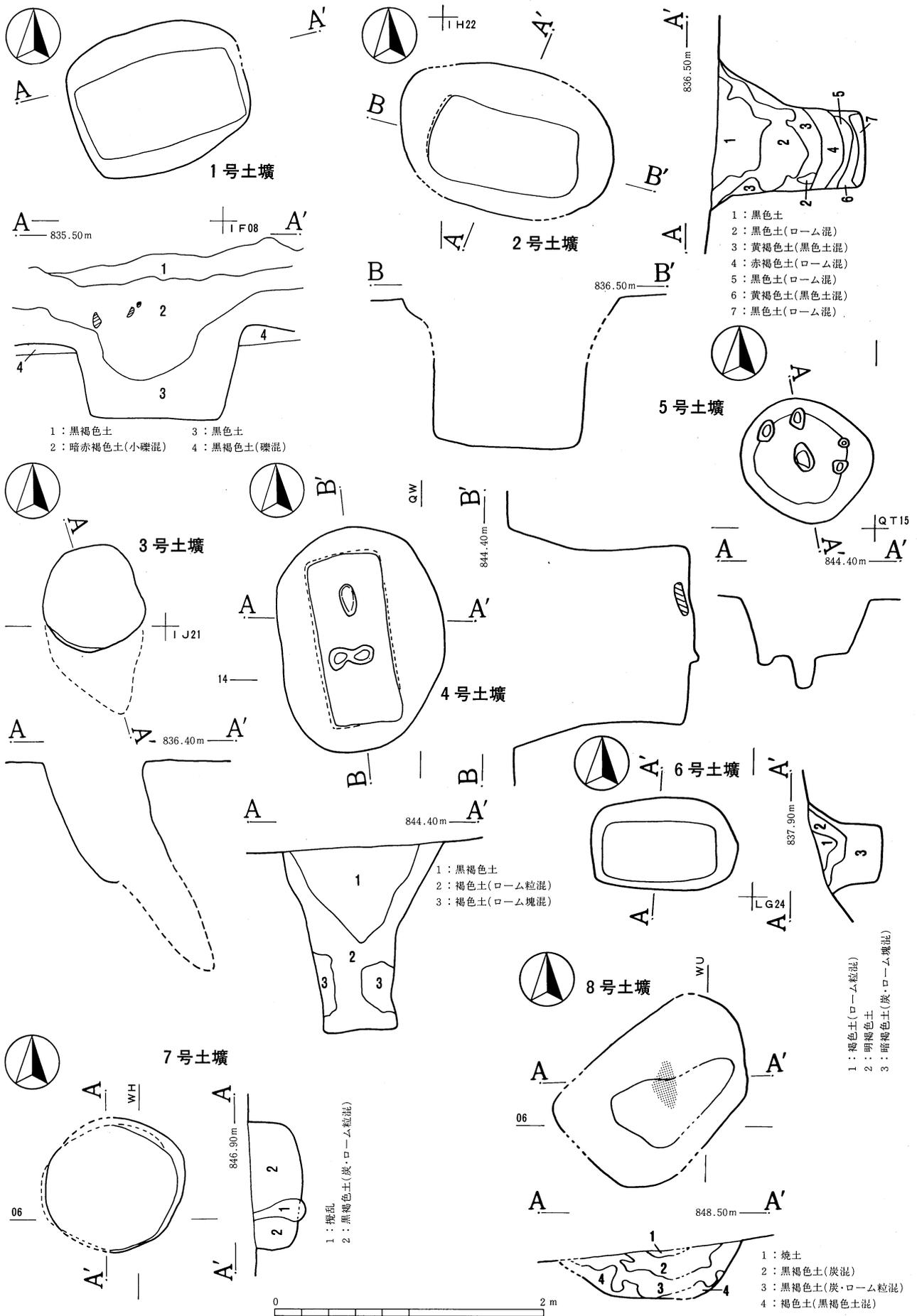


図5 土壤実測図

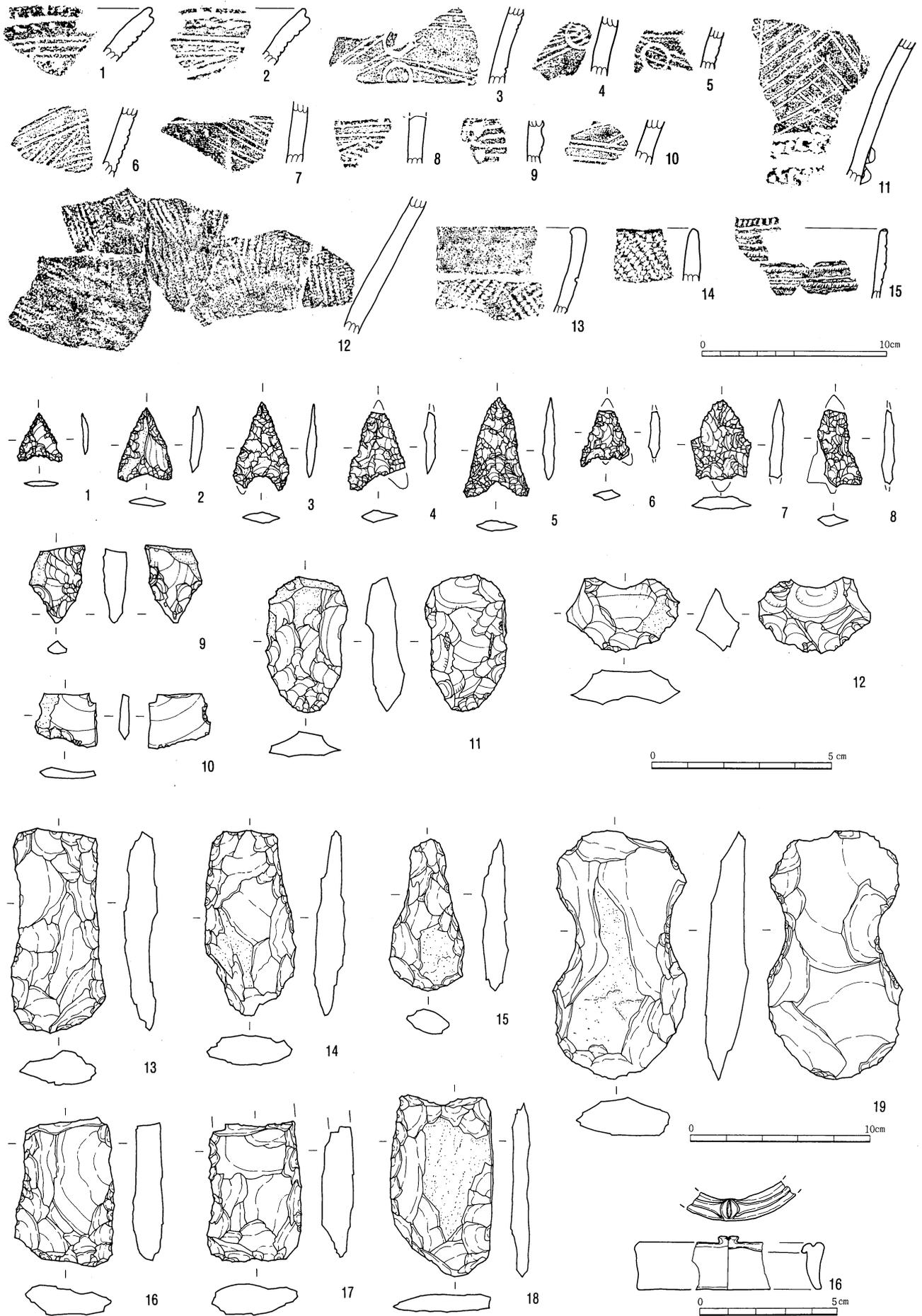


図6 北調査区遺構外出土遺物実測図及び拓影 (16=1:2)

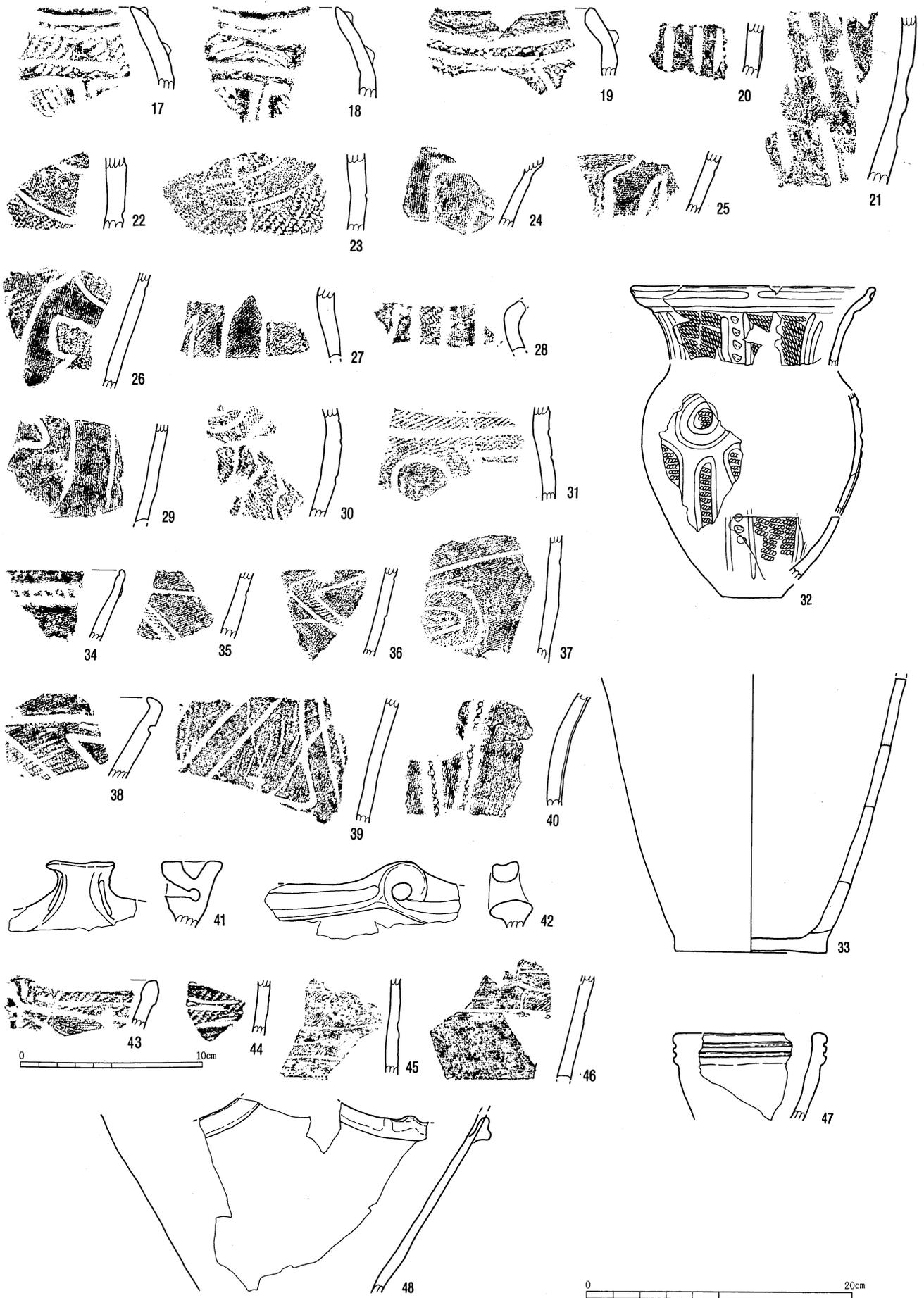


図7 南調査区遺構外出土遺物実測図及び拓影1

い突起を2ないし4個つけ、これを三叉文でつなぐ。全体に黒色をしている。一部に赤い顔料が残り、赤色塗彩されていたことを窺わせる。

石器は石鏃(1~8)、石錐(9)、スクレイパー(11)、小剥離痕のある剥片(10・12)のほか打製石斧(13~19)がある。完形または完形に近いもののみ図示した。

南調査区では土器の出土量は比較的多くてテンバコ10を数え、また、大形破片が目立つ。そのほとんどは、S・T地区を東西に走る谷状地形に堆積したIV層中から出土したものである。主体をなすのは後期初頭



図8 南調査区遺構外出土遺物実測図2

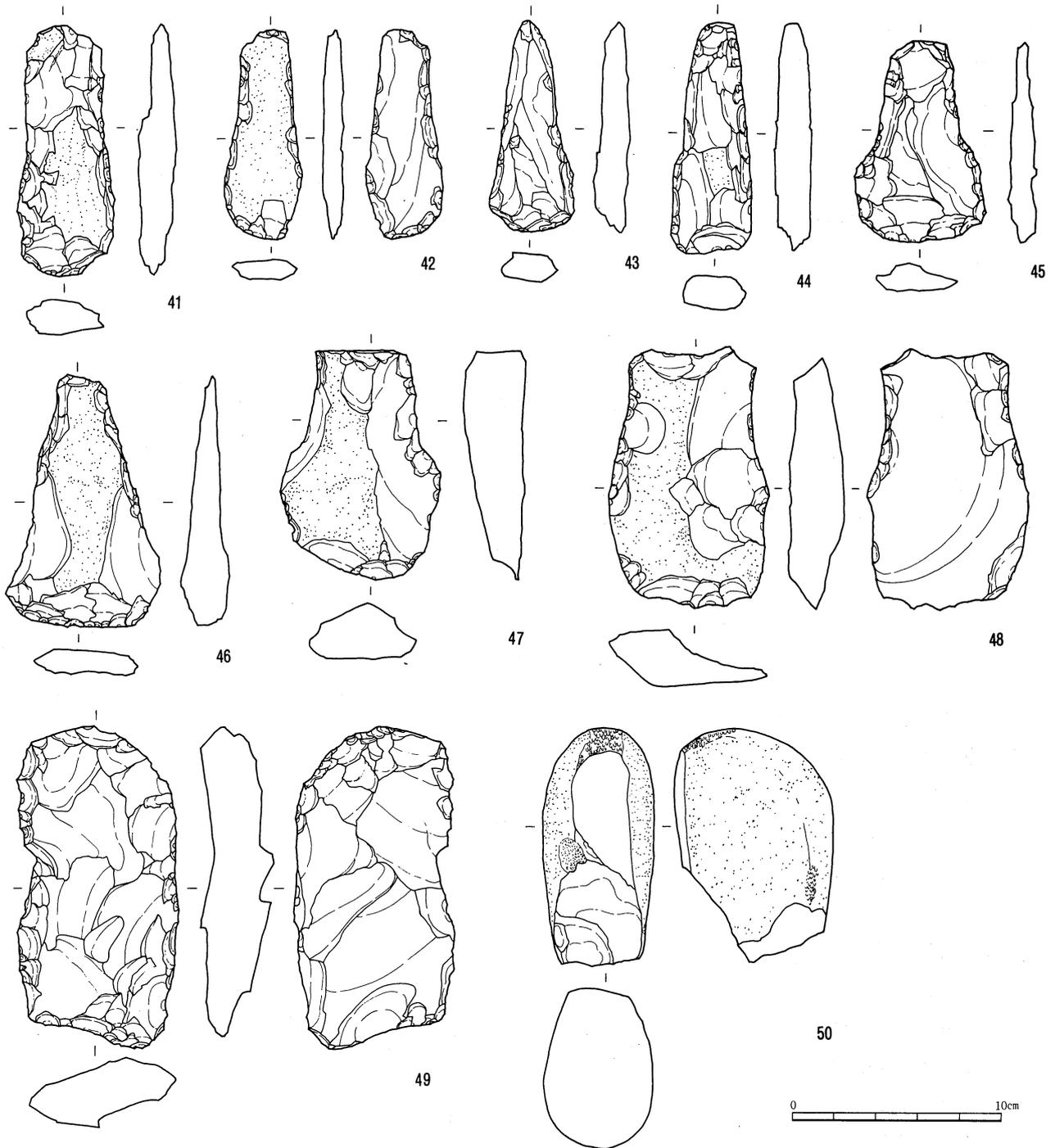


図9 南調査区遺構外出土遺物実測図3

から前葉にかけての土器であり、共伴すると思われる無文土器も含めれば南調査区出土土器の4分の3をこえる。22~29は頸部で強くくびれ、口縁部にむかって直線的に開く深鉢で、沈線で区画された縄文帯が曲線的な文様を描き、称名寺式に比定される。40・41もこの期の土器の口縁部であろう。30~38は縄文帯が直線的に描かれ、堀之内式に比定される。30は器形が復元できた唯一の例で、胴部が丸く膨らんで頸部がしまり、やや外反気味に口縁部の開く小形の深鉢。わずかに肥厚させた口縁部の外側には浅い沈線を巡らし、間に列点を施した2条の沈線をその下から胴下部まで垂らして体部を縦に4区分し、縄文帯が円や直線文様を描いて埋めている。このほか中期後半(17~22)および晩期(48)の土器片が少量ながら見られる。17・18は口縁部の内湾する器形で、口縁部と頸部に横走する隆線を巡らせ、胴部は同じ隆線を垂らして無節の

縄文を施文する。19はこれとほとんど同じ器形、文様の土器であるが、胴部の区画に沈線を用い、単節縄文を転がす。48は大きな波状口縁をなす深鉢ないしは浅鉢で、器面がよく磨かれている。43～47は胎土、文様ともに在地の土器とは異なる。

石器は石鏃(20～30)、石匙(31)、スクレイパー(32～35)、ピエス・エスキーユ(36)、小剥離痕のある剥片(37～40)、打製石斧(41～49)、磨石(50)が出土した。図示したのは完形または完形に近いもののみである。石鏃のうち26は挟り部を研磨している。30は縁片に突起をもつ縄文時代後期に多いとされるタイプである。このほか、破損品を含めて打製石斧の出土量が多い。

(4) 中世以降の遺構と遺物

ア 塚 (図10)

北調査区に位置し、遺跡を東西に横切る旧中山道の通称永井坂を登ってくると左手の土手上にある。付近にあった馬頭観世音碑などと共にすでに移設されていたが、かつては頂上に植えられた木の根元に石碑が据えられていたものである(註1)。塚の現高は約1mを測る。

調査では塚を4等分し、まず対角する4分の1ずつを掘って盛土の状態を調べ、最終的には全ての盛土を取り除いた。その結果、人為的に盛土の行われたことは認められたものの、内部に施設は存在しないことがわかった。また南側の裾に当たる部分より陶器小片2点が出土した以外遺物の出土はない。

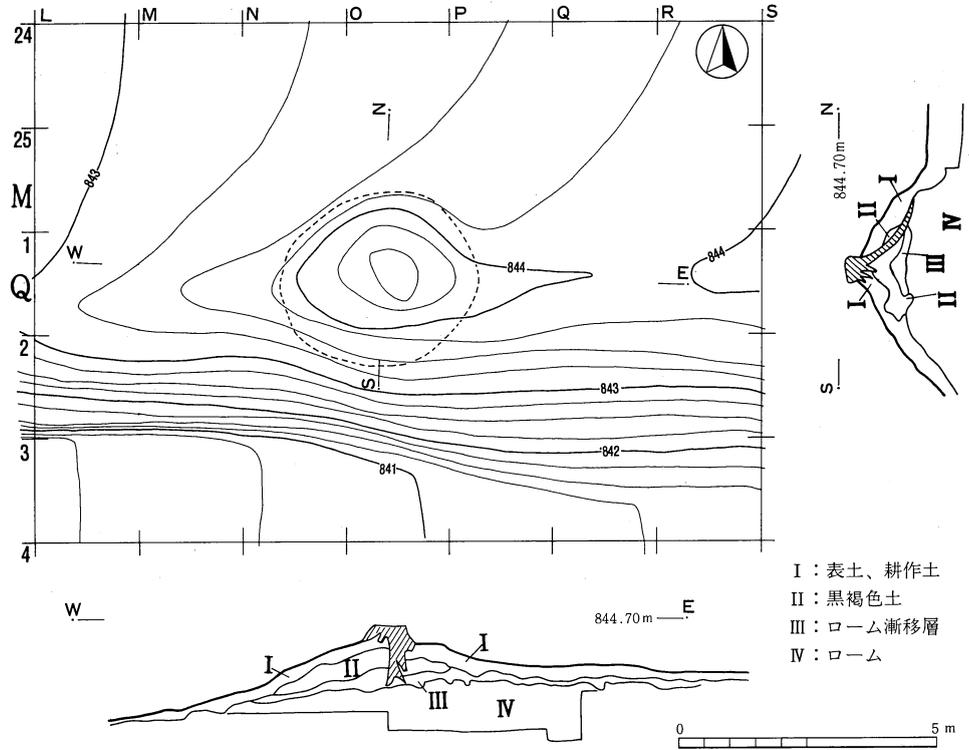


図10 塚実測図 (1:150)

イ 遺構外出土遺物 (図11)

中・近世の焼物は小破片が多数発見されている。そのほとんどは耕作土中からの出土で、分布も散漫である。したがってここでは、地点別ではなく、一括してとりあげて説明する。また、焼物の時期は16世紀から19世紀までの長期にわたるが、ここでは主として16・17世紀のものをあつかう(註2)。焼物の種類をみると、図示したものは68を除いて瀬戸・美濃系陶器であるが、図示しなかった18世紀以降では伊万里系の染付、唐津系の陶器が加わる。

49～51は灰釉丸皿である。49は内面底部は釉がぬぐいとられる。52は灰釉折縁皿、53・54は灰釉折縁菊皿である。53・54は内面体部に丸鑿によって削ぎが菊花状につけられ、53は内削ぎ高台、54は内禿げに、つけ

(註1) 石碑には「西宮太神宮二十五度供養 宝曆八戊寅年正月吉日施主塩尻上宿 小口源次郎」と刻まれており、1758年に建てられたものと考えられる。

(註2) 18世紀以降の焼物については、すでに仲野泰裕氏によってふれられている〔仲野1985〕。

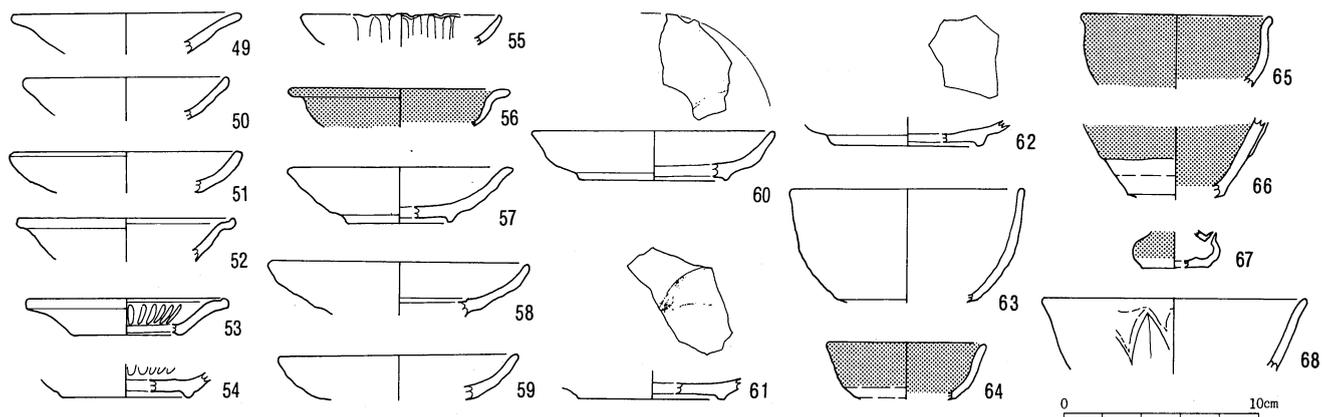


図11 遺構外出土中世陶器実測図

高台で、高台裏には輪トチンの跡が残る。55は灰釉菊皿である。口縁をへら状工具で刻み、内外面ともにへら状工具によって花卉が削りだされる。これらは、いずれも瀬戸・美濃系大窯期の所産と考えられ、16世紀代と思われる。

56は鉄釉の皿で、口縁が大きく外反しており、輪禿皿の可能性が強い。57～59は志野丸皿である。57は口縁が外反し、厚く長石釉がかけられ、底部外面には円錐ピンの跡が残る。58・59は薄く長石釉がかけられ、58は内面に段をもつ。60～62は志野織部の皿である。いずれも内面の口縁ちかくに1条、底部ちかくに1条ないし2条鉄釉で圏線をかき、底部内面には同様に鉄釉で蘭竹が描かれる。これらは連房期前半の所産で、17世紀代と考えられる。

63は灰釉丸碗。高台脇をへらケズリによって広くつくる。釉は外面高台部分をのぞき全体にかけられる。大窯期の所産と思われる。

64は鉄釉の丸碗で、外面下半をのぞき、釉がかけられる。体部下半にはへらケズリ痕が明瞭に残り、高台脇は広く削りだされる。67は鉄釉の水滴。短い注ぎ口をもつ。外面下半には釉がかけられず、底部外面には糸切痕が残る。64・67ともに連房期前半と思われる。

68は龍泉窯系の青磁の蓮弁文碗。外面の蓮弁文は削りだしである。

18世紀以降の焼物としては、瀬戸・美濃系の拳骨茶碗、鎧手茶碗、腰鍔茶碗、御深井碗、型打皿、京焼写しの丸碗、伊万里系の染付皿、唐津系の象嵌大皿等が出土している。時期的な集中はみられない。

5 小 結

調査前には縄文時代中期の集落址と予想されていた本遺跡であるが、調査の結果発見されたのは土壌のみであり、しかもそのうち北調査区に見つかった5基は形態から動物を捕獲するための陥穴と考えられることから、少なくとも縄文時代にはこの地は居住の場というより狩猟採集の場であったと想像される。集落の営まれなかった理由としては、第1に水の便の悪いことがあげられる。近年水田が造成されたものの稲作が実際に行われたのはわずか数年で、まもなく畑作に変換せざるを得なかったのも水利が思うようにならなかったためであったと聞く。こうした高燥な扇状地扇中央部の調査は中原遺跡でも行われたが、やはり住居址など人の住んだ痕跡は発見されず、隣接する山の神遺跡から陥穴が見つかっていて、共通するところが多い(本書第13・14節)。北調査区出土の中・近世陶器は、遺構にもなっていない。傍らを通過する旧中山道との関わりを考える必要がある。

参考文献

- 塩尻市教育委員会 1984 『糖塚古墳 柿沢東遺跡 大原遺跡 中島遺跡』
 仲野泰裕 1985 「長野県出土の近世陶磁」『愛知県陶磁資料館研究紀要』4

第5節 ^{きたやま}北山遺跡 (E K Y)

1 遺跡の概観

遺跡は柿沢集落の北東、塩尻市大字柿沢町109番地一帯に位置する。塩嶺山地の塩尻峠付近に源を発し、西流して田川に合流する四沢川は、峠の麓に広大な扇状地を形成し、現在はその北縁を流下する。遺跡はその左岸、すなわち、扇状地北縁の西向き緩斜面に立地する。標高約810m。四沢川との標高差は約8mを測る。本遺跡の北方には四沢川をはさんで縄文時代中期及び後期の住居址が検出された御堂垣外遺跡(本書第6節)が、西方には同中期の住居址多数が発見された柿沢東遺跡(塩尻市教委1984)が展開している。

2 調査の概要と経過

今回調査の対象となった区域は遺跡の東端であり、その面積は520㎡。調査前は水田として利用されていた。発掘調査は昭和58年11月7日から28日にかけて行われ、調査研究員は3名が当たった。初めに層序とトレンチ調査を実施したが、II層下部から土器が出土したものの量が少なく摩耗も著しいため遺物包含層とは認められず、また、遺構も存在しないと判断されたので、面的な調査は行わずに調査を終了した。なお、測量基準杭には日本道路公団の工所用杭 STA83+40(X=11079.5173、Y=-45369.7764)を使用した。

3 調査の結果

(1) 層序と地形形成 (図2)

基本的層序は、I層：耕作土、II層：粘質黒褐色土、III層：礫混じり粘質灰褐色土である。近隣の柿沢東遺跡や大原遺跡でみられたローム層は本遺跡ではみられず、基盤となっているのは扇状地堆積物である。また、水田造成のために削られて、旧表土と思われるII層は部分的にしか残っていない。遺物の多くはこのII層から出土し、III層からはまったく出土しなかった。



図1 地形及び発掘範囲図 (1:1500)

(2) 出土遺物 (図3)

出土した遺物の量は少ないが、中では弥生時代の土器が最も多い。3は条痕文を施した大形の甕で、口縁部は大きく外反し、口唇部に圧痕が加えられる。同一個体とみられる破片も多い。2は壺で、棒状工具を用いた太い沈線で文様が描かれる。3は弥生文化波及期、2は中期初頭庄ノ畑式期頃の所産とみられる。これについて多いのは縄文時代後期堀之内式の土器で、鉢(1)などがある。石器は石鏃、石匙があり、黒曜石剥片も20点余り出土している。このほか、I層出土遺物には古墳時代の土師器台付甕(4)、奈良・平安時代の須恵器杯(5)、近世の陶器片、寛永通宝や文久永宝などの古銭もみられる。

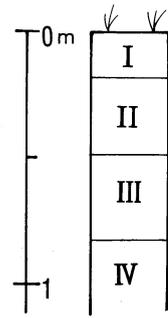


図2 土層模式柱状図

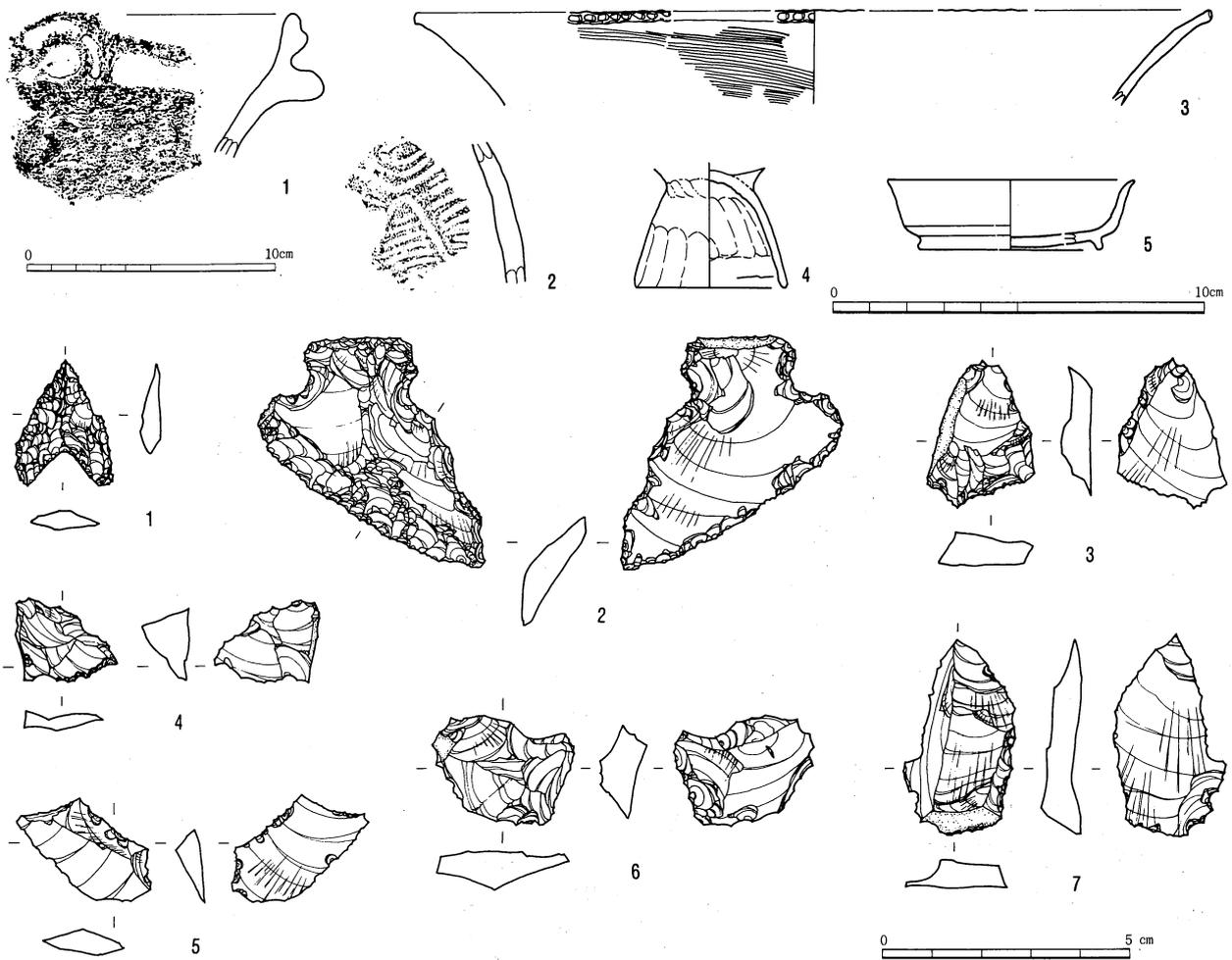


図3 出土遺物実測図及び拓影

4 小 結

今回の調査では遺構は検出されず、遺物の出土も少なかった。その中で、弥生文化波及期から中期初頭にかけての土器は比較的量が多い。この期の遺物は、中央道長野線に関連する調査を見ただけでも岡谷市西林A、下り林、中島A、塩尻市青木沢東、ヨケの各遺跡から見つかっており、山麓地の立地という共通性が認められて興味深い。縄文時代後期の遺物は、住居址の検出されている隣の御堂垣外遺跡と本遺跡のつながりを示すものであろう。

第6節 ^{みどうがいと}御堂垣外遺跡 (EMG)

1 遺跡の概観

塩尻市大字柿沢町407番地に所在する。塩嶺山地山麓部に展開する複合扇状地は、田川に注ぐ小河川によって開析されて台地状を呈する。遺跡は、こうした台地の南側斜面に立地し、裾を西流する四沢川との比高差は3 m～5 mを測る。斜面上方は、通過する国道20号線によって原地形は大きく変わっている。おそらく、急角度で台地上へ続いていたであろう。また、西及び東側は急斜面で四沢川に落ち込む。北東へは緩斜面がテラス状に広がっているが、そこからは遺物等は採集されない。したがって、遺跡の範囲は今回の調査範囲からあまり広がらないと推定される。

付近は畑地として利用されていた。

本遺跡からは南東に150mの距離をおいて北山遺跡が、南300mほどに縄文時代中期後半の集落が発見された柿沢東遺跡が望まれる。

2 調査の概要

調査は昭和58年10月下旬から12月中旬にかけて行い、対象面積は860㎡。調査研究員は主として3名があ

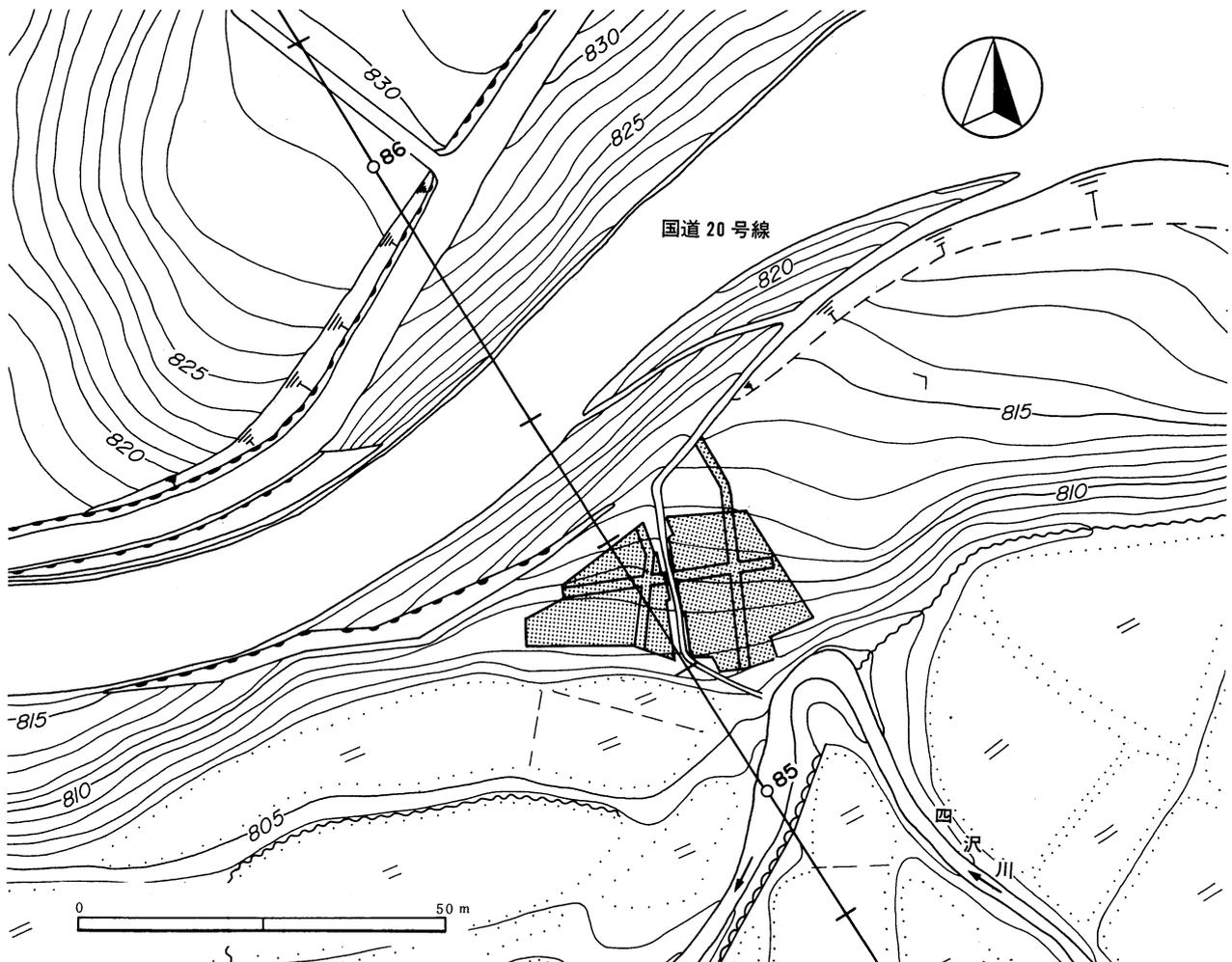


図1 地形及び発掘範囲図 (1:1000)

たり、この間、地元の方々に発掘調査への協力をいただいた。

発掘調査は3本のトレンチを等高線と平行、直交する方向に設定することから開始した。その結果、03トレンチの東側では河原石のまとまりが見られ、02トレンチからは完形土器を伴う土壌が検出されたので、調査区全面を対象に面的調査を実施することにした。なお、耕土剥ぎ及び遺構の掘り下げ等の発掘作業はすべて手作業で行った。

測量は、日本道路公団工事用抗 STA85+40 (X=11209.8068、Y=-45458.6374) を基点に座標北を求めて基準線とし、これに基づいて50m×50mの大地区を設定した。大地区は更に2m×2mのグリッドに区画し、遺物の取り上げ、諸記録に利用した。遺構の実測はすべて遣り方測量で行い、発掘範囲の位置測量には光波測距儀を用いた。標高は基点杭(811.130m)を基準とした。

整理は昭和58年12月下旬から断続的に行い、昭和62年1月から本格的なまとめに入り、本報告に至った。この間、昭和59年2月15・16日には神奈川県教育委員会文化財保護課主任主事山本暉久氏を指導者に招聘して『塩尻市御堂垣外遺跡敷石住居址をめぐる』と題した研究会を行い、遺跡や遺構の理解につとめた。

3 調査の経過

昭和58年度

- 10月26日 資材を搬入し、テントを設営する。
- 10月28日 01・02トレンチを設定して発掘を開始。
02トレンチIII層から縄文時代後期の完形鉢形土器が逆位で出土。1号土壌とする。
- 10月31日 03トレンチを設定。III層上面から人為的と思われる集石が見つかり、全体をIII層上面まで下げることにする。
- 11月8日 グリッドを設定し、III層の調査に入る。
- 11月14日 集石は住居址の一部であることが判明。
- 11月22日 03トレンチ西側に埋甕が発見され、中期後半の住居址の存在を予想する。
- 12月2日 3号住居址の南に1号住居址、2号住居址及び4号住居址検出。
- 12月6日 3号住居址は3軒の重複と判断し、3・5・6号とする。
- 12月9日 1・5号住居址敷石下のピットを調査。

12月16日 発掘調査終了。

2月15・16日 『塩尻市御堂垣外遺跡敷石住居址をめぐる』と題して研究会を行う。

昭和60年度

4月～ 遺物実測、図版作成等本格的なまとめに入る。

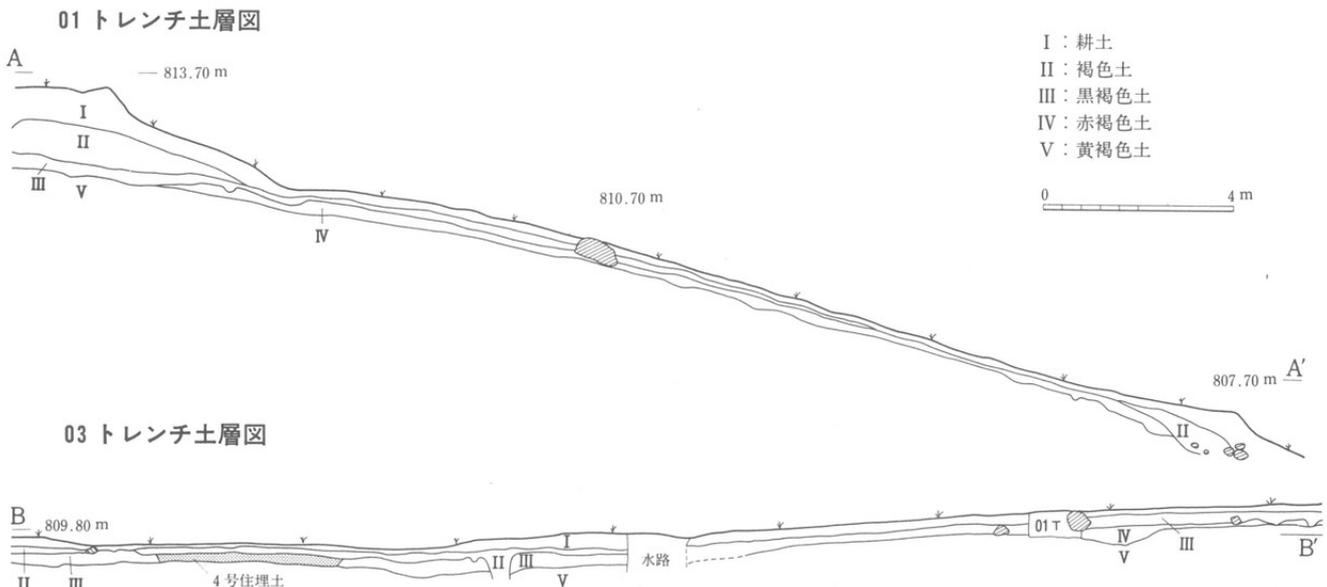


図2 土層図 (1:120)

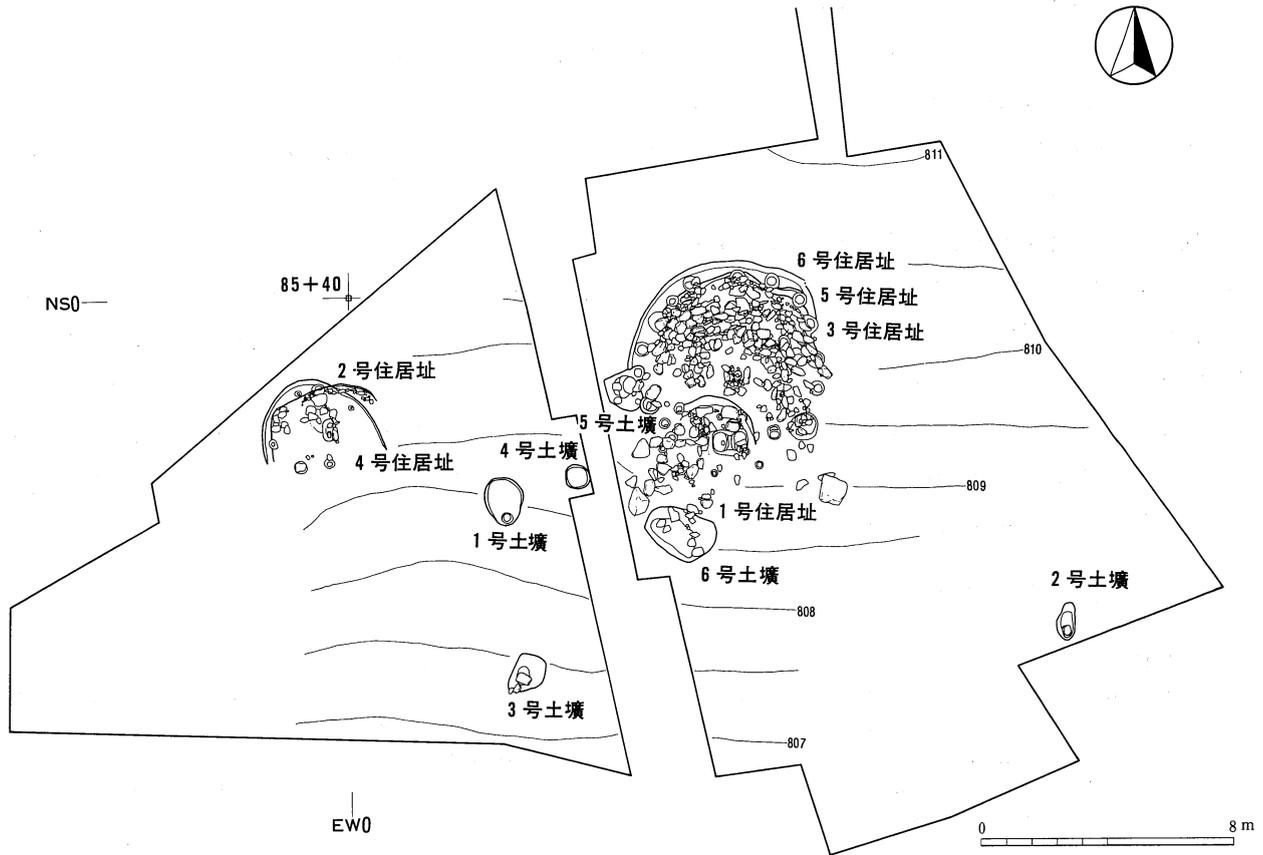


図3 遺構分布図 (1:240)

4 調査の結果

(1) 層序 (図2)

トレンチ断面での土層観察結果は図2の通りである。これを基に基本層序を次のI～V層ととらえた。

I層：現耕作土及び盛土。

II層：粒子の細かい褐色土。中央水路西側一帯に分布し、灰釉陶器、土師器片を包含する。

III層：人頭大から子指頭大の礫を多く含む黒褐色土。南東隅を除く全体に分布する。縄文時代中・後・晩期の遺物を包含する。

IV層：人頭大から子指頭大の礫を含む赤褐色土。III層と類似し、一括できる可能性がある。中央水路南東側一帯に分布し、縄文時代後期の土器片をわずかに包含する。

V層：卵大の礫を多量に含む二次堆積のローム。基盤と考えた層で、上面が遺構検出面である。

こうした層序は、背後の斜面から供給された土が、土壌生成作用を受けることによって形成されたものであろうが、層序がうすいことから流出も多かったと考えられる。

(2) 遺構と遺物の概観 (図3)

南面する斜面から縄文時代中期後半の住居址1、後期前半の敷石住居址4、時期不詳の住居址1が発見された。これら住居址は西と東に2つのまとまりをもって分布し、西側では2軒、東側では4軒がそれぞれ切り合っている。東側の4軒の切り合いのうち3軒は敷石住居址相互の切り合いである。このほか縄文時代後期の甕被葬墓1、古墳時代前期の土壙1、時期不詳の土壙4がある。

遺物は縄文時代中期後半から平安時代にわたるが、その出土量は多くない。この中で主体を占めるのは

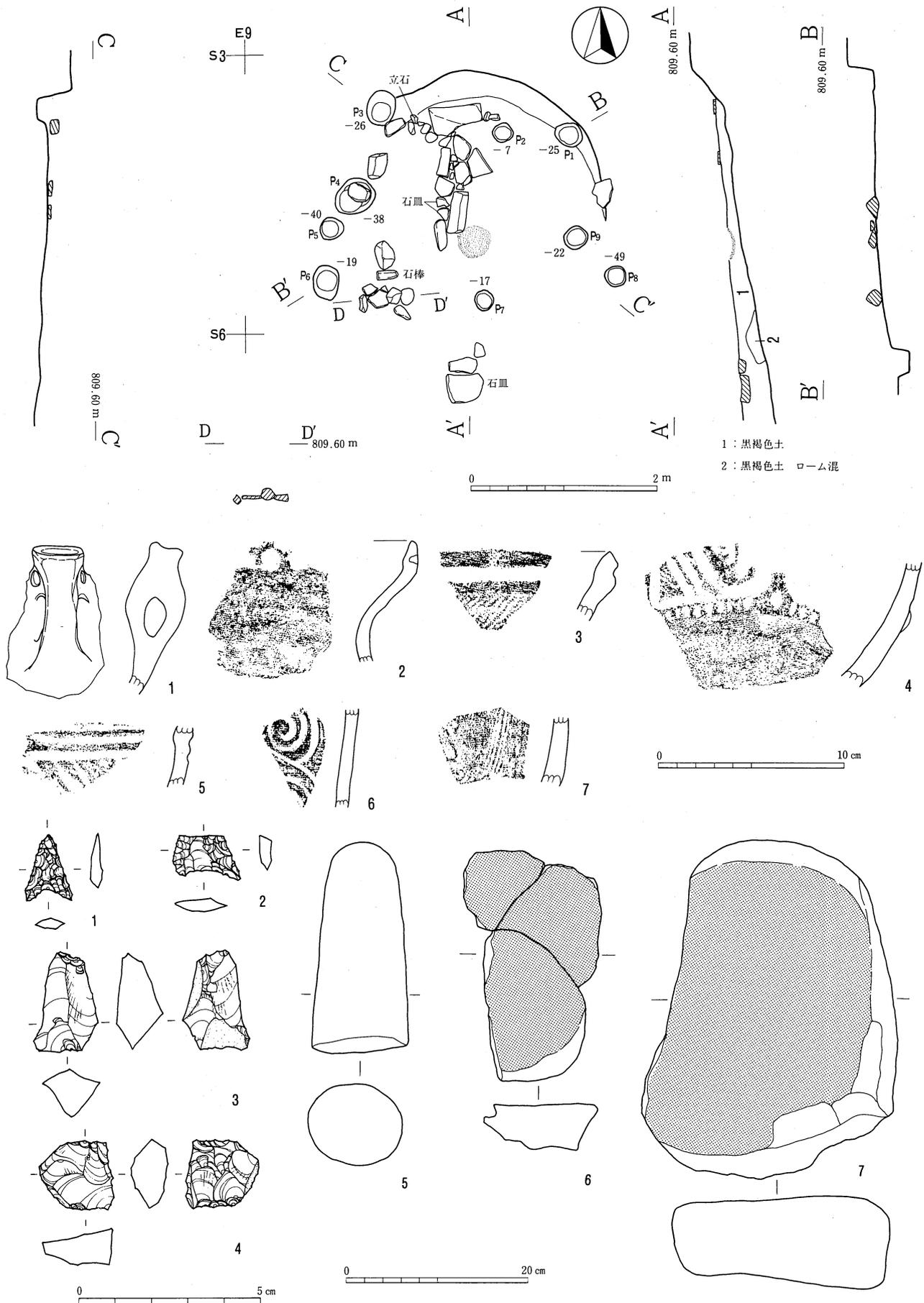


図4 1号住居址実測図及び出土遺物実測図・拓影 (5~7=1:6)

縄文時代後期堀之内式土器である。

(3) 縄文時代の遺構と遺物

ア 住居址

① 1号住居址 (図4、PL26・29)

検出：3号住居址床面を検出するためのサブトレンチV層上面で新しい落ち込みが見つかり、拡張して調査したところ敷石を認めたので、1号住居址とした。3・5号住居址は本址埋土上に入口部敷石を設けていることから本址より新しく、掘り形面で検出された大形ピットは本址に先行する6号住居址に付属するものである。**規模・形状：**円形プランと推定され、その規模は3.6m×3.0m。柄鏡形になるかどうかは不明。主軸方向はN。**埋土：**Ⅲ層由来の黒褐色土。**床面・壁：**床面は掘り形の上に黒褐色土を10cm～30cm盛って構築しており、土間部分と敷石部分とに分けられる。土間部分は軟弱で敲き締められた様子はみられない。敷石は3箇所、すなわち、炉から北壁にかけてと、炉の南及び炉の南西に施される。最も広いのは炉の奥で、150cm×35cmの範囲に主として鉄平石を敷きつめている。この中には割れた石皿が再利用されている。炉の南では石皿を含め3個の安山岩が用いられ、これは位置からして入口部施設と考えられる。**炉：**住居中央に設けられる。地床炉で火床の範囲は径35cm、厚さ4cm。**柱穴：**9本のピットを検出したが、配置からみて主柱穴はP₁・P₃・P₆・P₈であろう。**その他の施設：**奥壁西寄りに長さ16cm、太さ12cm×6cmの角柱状の石が立てられていた。いわゆる立石である。これとは別に、炉の南西の敷石北側床面に石棒が横に倒れて出土した。**遺物出土状況：**床面及び埋土中より少量ながら土器、石器が出土した。土器は総数40点程を数え、堀之内Ⅰ式に比定される(1～7)。石器は石鏃2(1・2)、ピエス・エスキーユ2(3・4)、石皿2(6・7)、石棒1(5)がある。石棒は安山岩製で研磨されている。**時期：**堀之内Ⅰ式期。

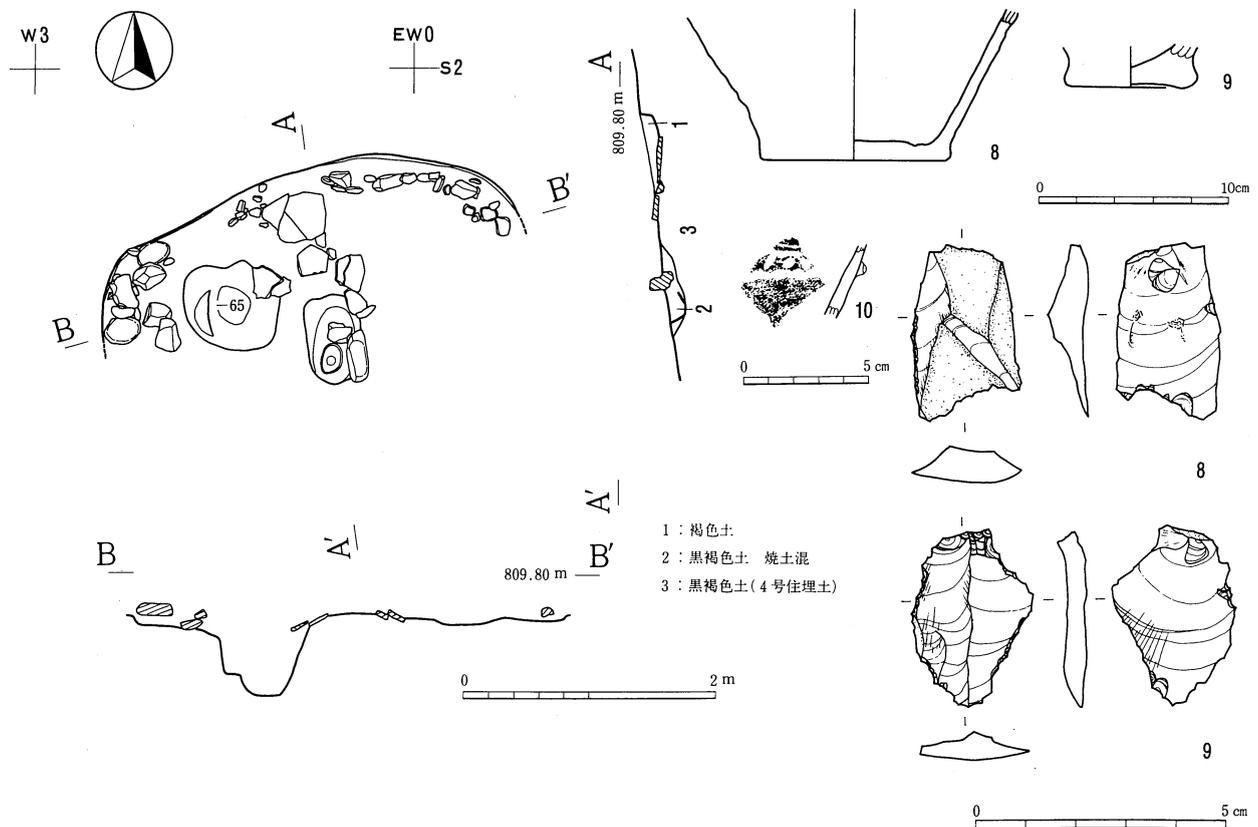


図5 2号住居址実測図及び出土遺物実測図・拓影

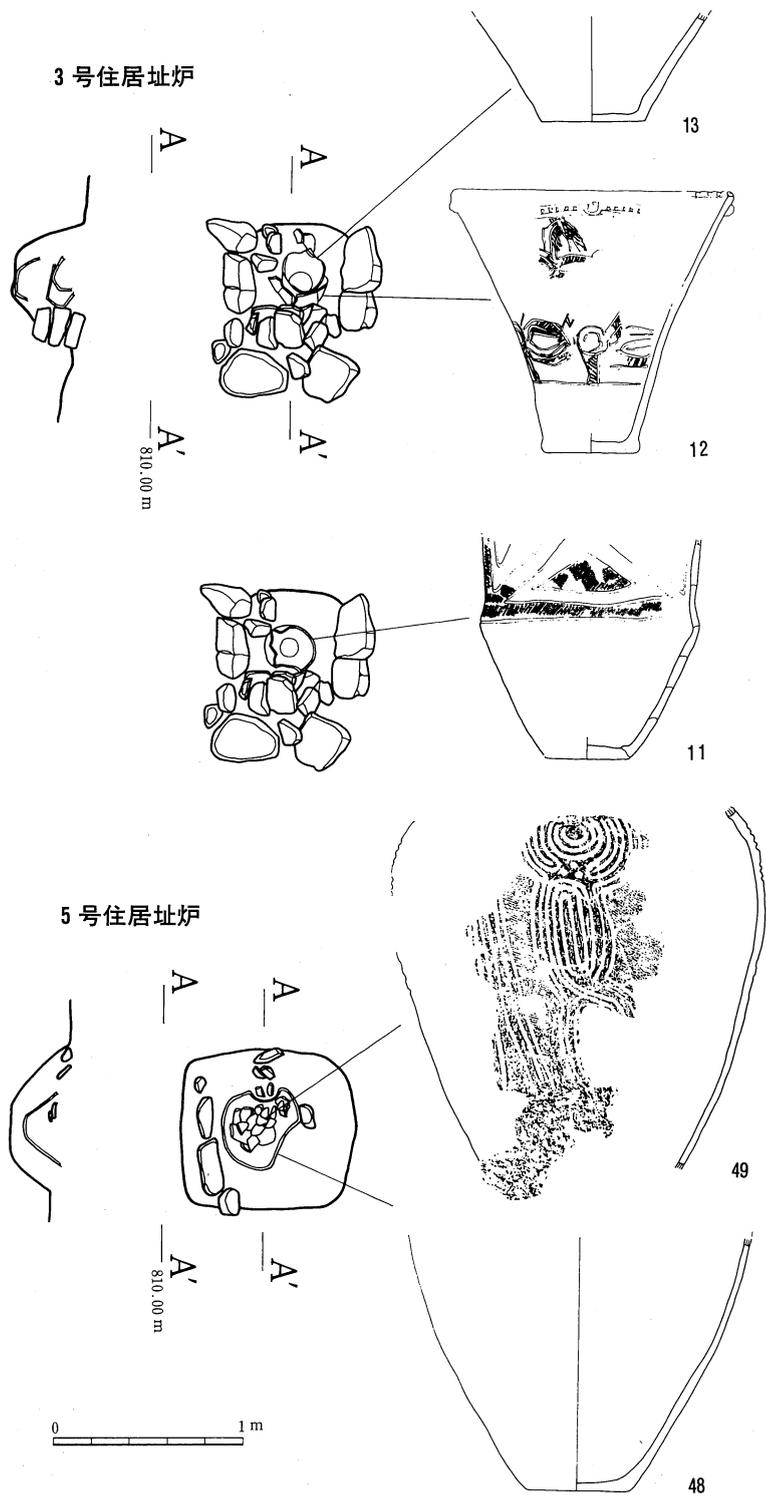


図7 3・5号住居址炉実測図

の量は少ない。それらは炉の周辺及びピット内に集中する傾向がみられる。**遺物**：土器には炉体に転用された8の他、小形土器の底部(9)等がある。このうち文様が施文されるのは検出面出土の10だけである。石器は小剥離痕のある剥片が2点(8・9)出土している。**時期**：縄文時代後期堀之内式期。

③ 3号住居址 (図6～9、PL27-29)

検出：03トレンチ調査中にIII層上面で数個の大きな河原石が見つかり、周囲を調査したところ弧状に並ぶことが明らかになった。そこで、石を残しながらIV層上面まで掘り下げると、石はさらに北側に続くば

② 2号住居址 (図5、PL26)

検出：03トレンチ調査時にIII層中から平石(後に4号住居址埋甕の蓋石と判明)が検出され、遺構に伴うものと思われたので、周囲を掘り下げた結果敷石が見つかり、これをもって2号住居址とした。検出面はIII層上面。本址は4号住居址と重複し、本址の方が新しい。**規模・形状**：斜面に立地することから南半分が失われて全容は不明である。残存する北半分から方形プランと推定され、東西3.5mを測る。主軸方向はN20°W。**埋土**：褐色土。**床面・壁**：床は土間部分と敷石部分とからなる。土間部分は軟弱で、敲き締められてはいない。敷石は炉の北側にのみ施され、約50cmの幅に鉄平石を並べているが最も奥にはひときわ大きな平石が用いられている。壁の高さは北で10cmを測る。また、東側は径10cm～30cm大の河原石が壁に沿ってめぐり、北西隅には径30cm大の石の集中がみられる。周縁石であろう。**炉**：底に土器を埋設した石囲炉が住居中央に設けられる。ただし、南と西の炉縁石は残存しない。また、焼土は土器の周囲から炉縁石の下にかけて分布し、土器内には炭が残る。**柱穴**：検出されない。**その他の施設**：炉の西に大きき80cm×60cm、深さ40cmの楕円形ピットがある。このピットの東側には敷石の一部と思われる鉄平石が斜めに落ち込んでいる。**遺物出土状況**：遺物の

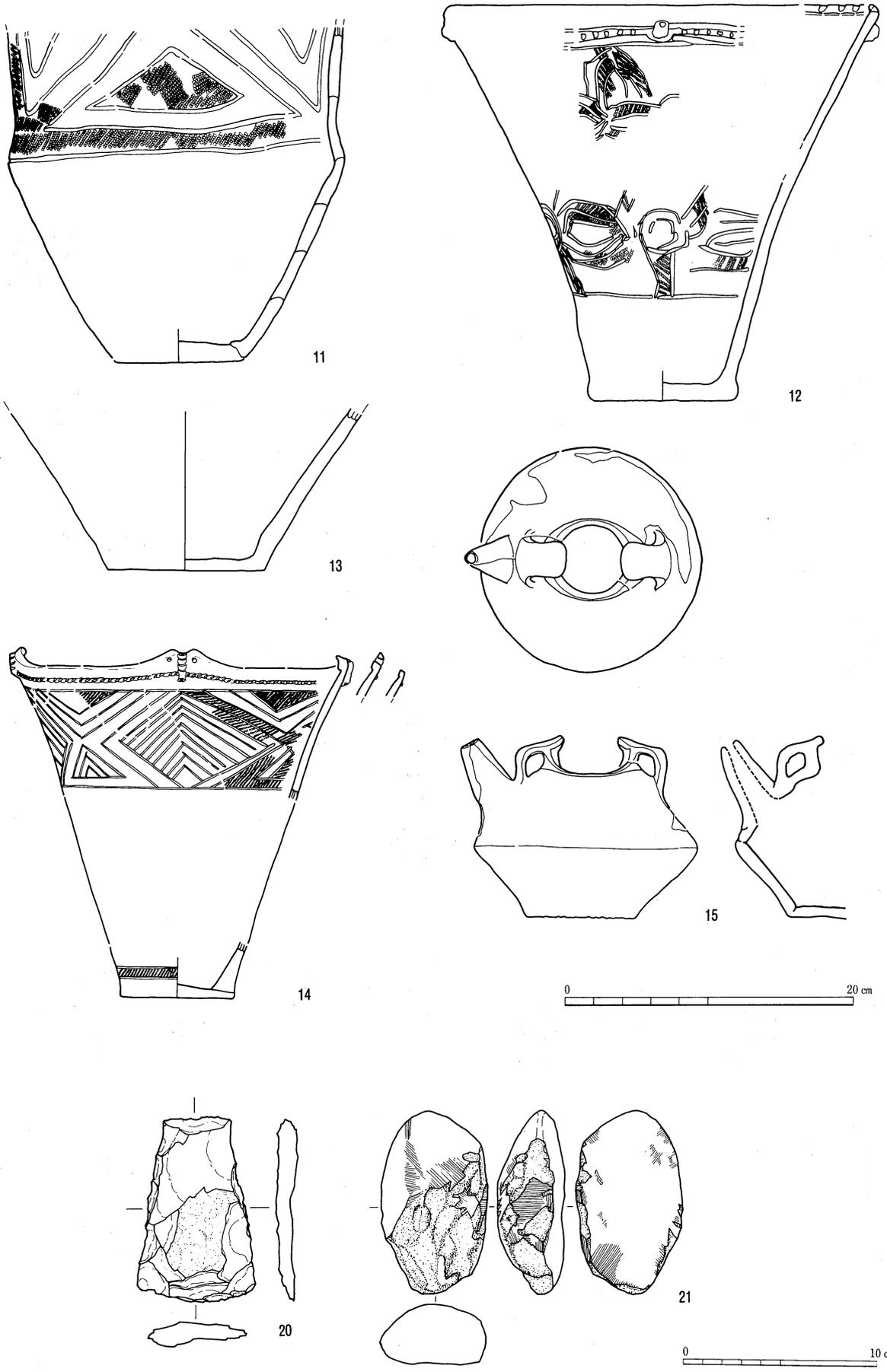


図8 3号住居址出土遺物実測図

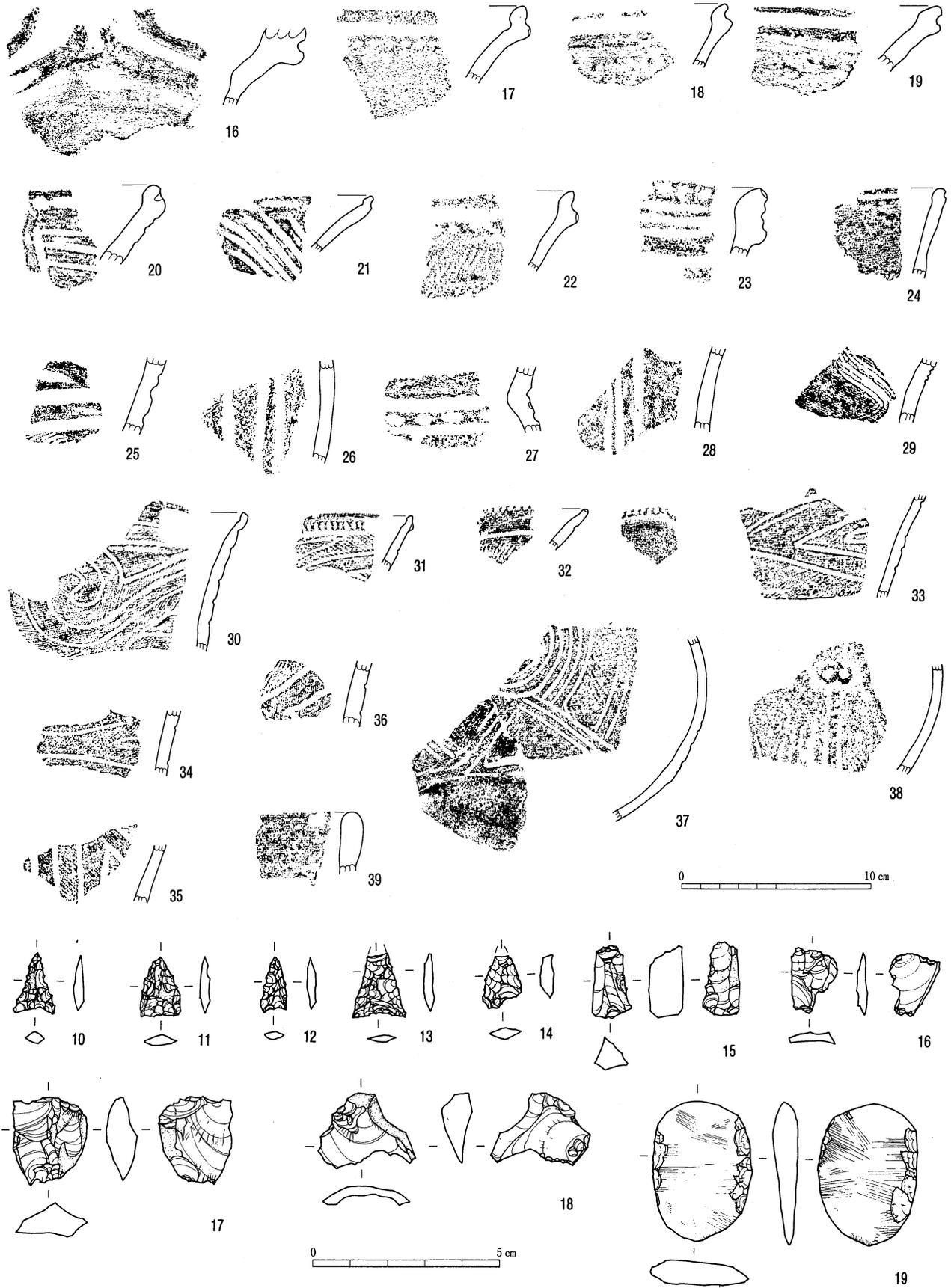


图9 3号住居址出土遺物実測図・拓影

かりでなく南にも一列に並んでいて人為的構造物と思われたので住居址と認定した。本址は1・5号住居址と重複して構築され、本址が最も新しい。**規模・形状**：石の分布する範囲は北側に弧をなす半円形で、南北4.8m、東西6.5mを測る。主軸方向はN。**埋土**：黒褐色土。**床面・壁**：敷石は北壁沿いと炉の南側とに施される。前者では径が10cm～40cmの礫が敷き並べられ、後者では途中間があくものの炉から南へ向かって一列に大きな平石がすえられ、その南端が住居の入り口と推定される。なお、本址の床面は5号住居址のそれと同一面である。一方、掘り形は検出できなかったが、北側と東・西側の一部では、長さ40cm～50cmの礫を横にして置く、積み重ねる、斜めに立て掛けるなどしており、これが壁に相当すると考えられた。敷石面からの高さは北側で60cmを測る。これを「礫堤」と呼ぶことにした。礫堤の内に分布する規則性をもたない礫群は床面に接している。礫堤が崩れ込んだものか、住居廃絶時に投棄されたものか、判断に迷うところであるが、後者と考えている。**炉**：「コ」の字形に石を配し、火床に土器(11)を埋設した石囲炉が住居中央に設けられる。炉石が火熱を受けて赤変したり割れているのに対して焼土はみられない。炉内には2個の土器が入れ子状に重なり、倒れていた。**柱穴**：P₁～P₆が本址に伴うピットである。北側では礫堤の外に、南側では石列の内に配される。**遺物出土状況**：埋土中より集石に混じって土器片、石器が散漫に出土し、南側より北側の方が出土量が多い。唯一の完形品は注口土器(15)であり、炉の南東の集石中より出土した。**遺物**：土器は300点余り出土しているが、大半は無文の小破片で、器面の荒れたものが目立つ。炉体に転用された土器(11)は口縁を欠く深鉢で、胴上半を沈線で三角形に区画し縄文を充填する。14は胴上半を菱形に区画する。これらは(30～38)とともに堀之内I式に比定され、本址出土遺物の主体をなす。16～29はこれより古い様相が見られ、同I式に比定される。無文の鉢(39)はI式又はII式に伴うであろう。石器は石鏃5(10～14)、ピエス・エスキュー3(15～17)、小剥離痕のある剥片1(18)、打製石斧1(20)がある。19と21は研磨されていて人工遺物であることは確かであるが、用途などは不明。

④ 4号住居址 (図10)

検出：2号住居址の敷石下、V層上面で検出された。2号住居址よりやや西に寄って営まれる。**埋土**：黒褐色土。**規模・形状**：径3.8m×3.5mの円形プラン。主軸方向はN20°Eを示す。**床面・壁**：床は平坦で軟らかい。壁の最も高いのは北側で、35cmを測る。**炉**：中央北寄りに設けられる。石囲炉であるが、炉石は抜き取られて1個しか残っていない。炉内に焼土は認められない。**柱穴**：検出された5基のうち、P₄を除いた4基が支柱穴と思われる。**その他の施設**：P₁・P₂の間に埋甕が設けられる。埋甕には底部を残す大形の深鉢が用いられ、一辺30cm、厚さ7cm程の偏平な石を蓋としてのせている。掘り形は埋設される土器の大きさに合わせて掘られ、ほとんどすき間がない。土器内には黒褐色土、褐色土が充満し、土器の欠損部より流入したものと観察された。**遺物出土状況**：床面、炉内より土器が出土している。しかし、量は少ない。**遺物**：埋設された40は胴部の大柄渦巻文を特徴とし、中期後半唐草文系土器III段階に比定される。41はこれに併行する加曽利E式である。石器は出土していない。**時期**：縄文時代中期後半。

⑤ 5号住居址 (図11～12、PL27～29)

検出：3号住居址の礫堤下に敷石が検出され、また炉も重複していることが確かめられたので、これを3号住居址に先行する住居址と認定し、5号住居址とした。本址は6号住居址を切り、南端で1号住居址の上ののる。**規模・形状**：残存する敷石及び周縁石からおよそ東西6.0m、南北5.4mの六角形プランと推定される。主軸方向はN。**埋土**：暗褐色土。**床面・壁**：北壁沿い、炉と北壁の間、炉の南の3箇所敷石が行われる。北壁沿いは鉄平石を幅20cm～50cmに带状に敷き、最も北には25cm×55cmとひときわ大きい石を用いている。西側では雑然とした状態で囲み、さらにその外に壁がある。壁は北側にのみ残存し、高さは20cm。**炉**：中央南寄りに設けられる。3号住居址の炉石を除去して検出したもので、それより北西にずれる。90cm×80cmの方形の掘り形をもち、柱状の石を炉縁石として埋めている。もっとも、残存したのは西と北

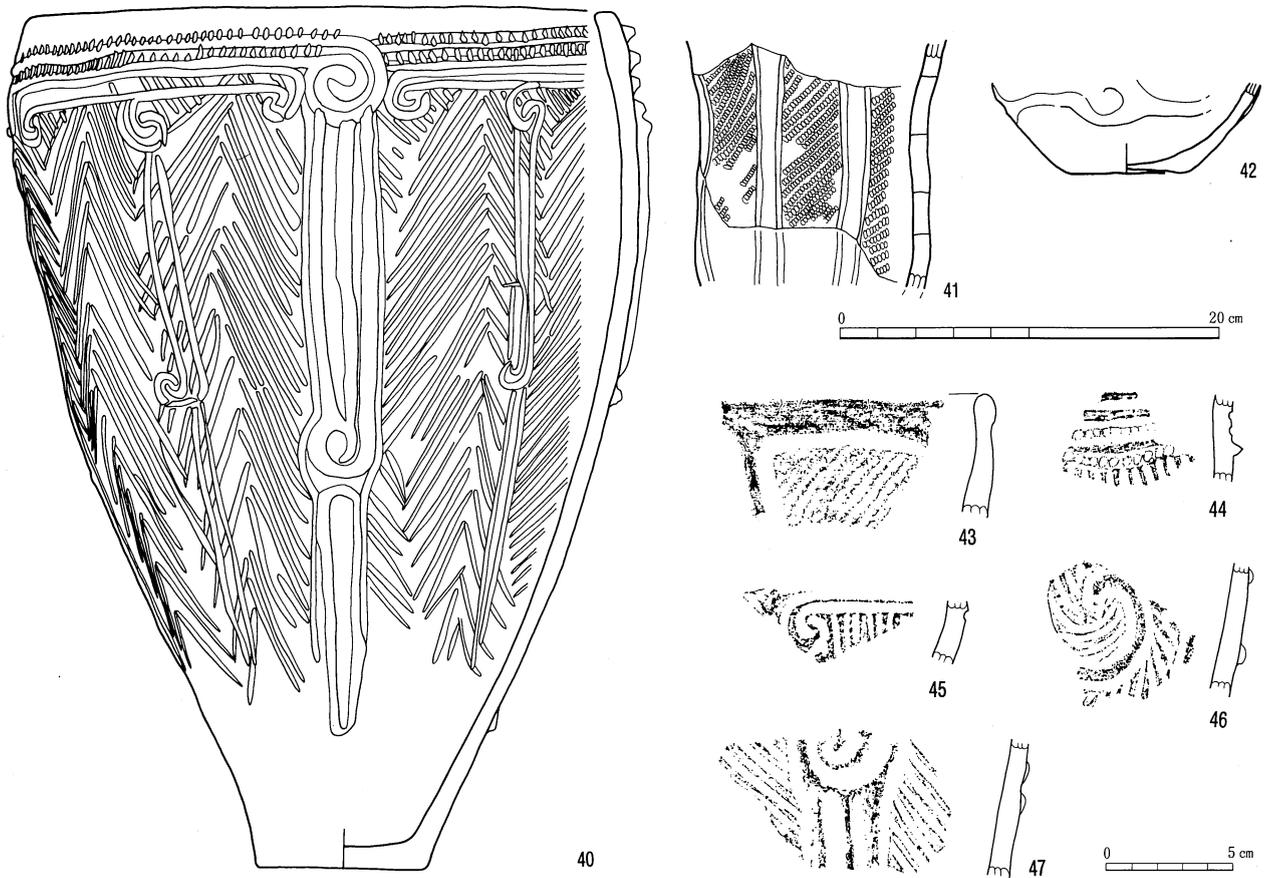
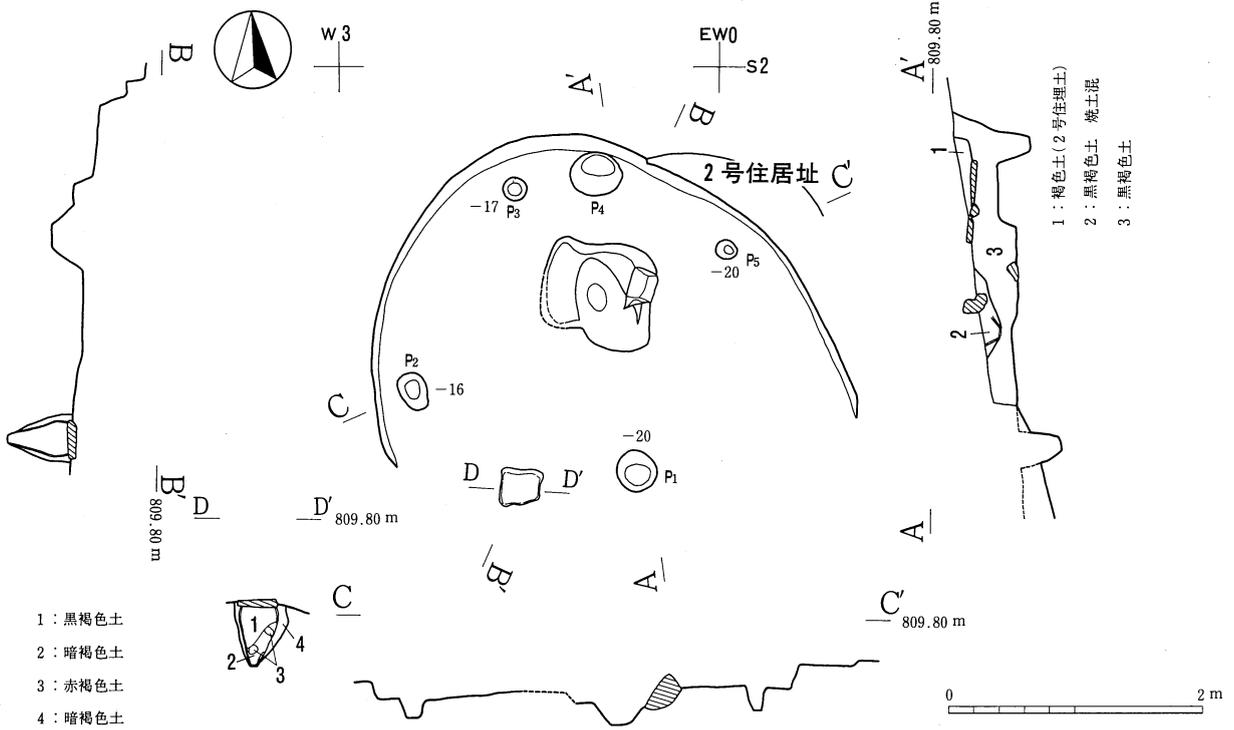


図10 4号住居址実測図及び出土遺物実測図・拓影

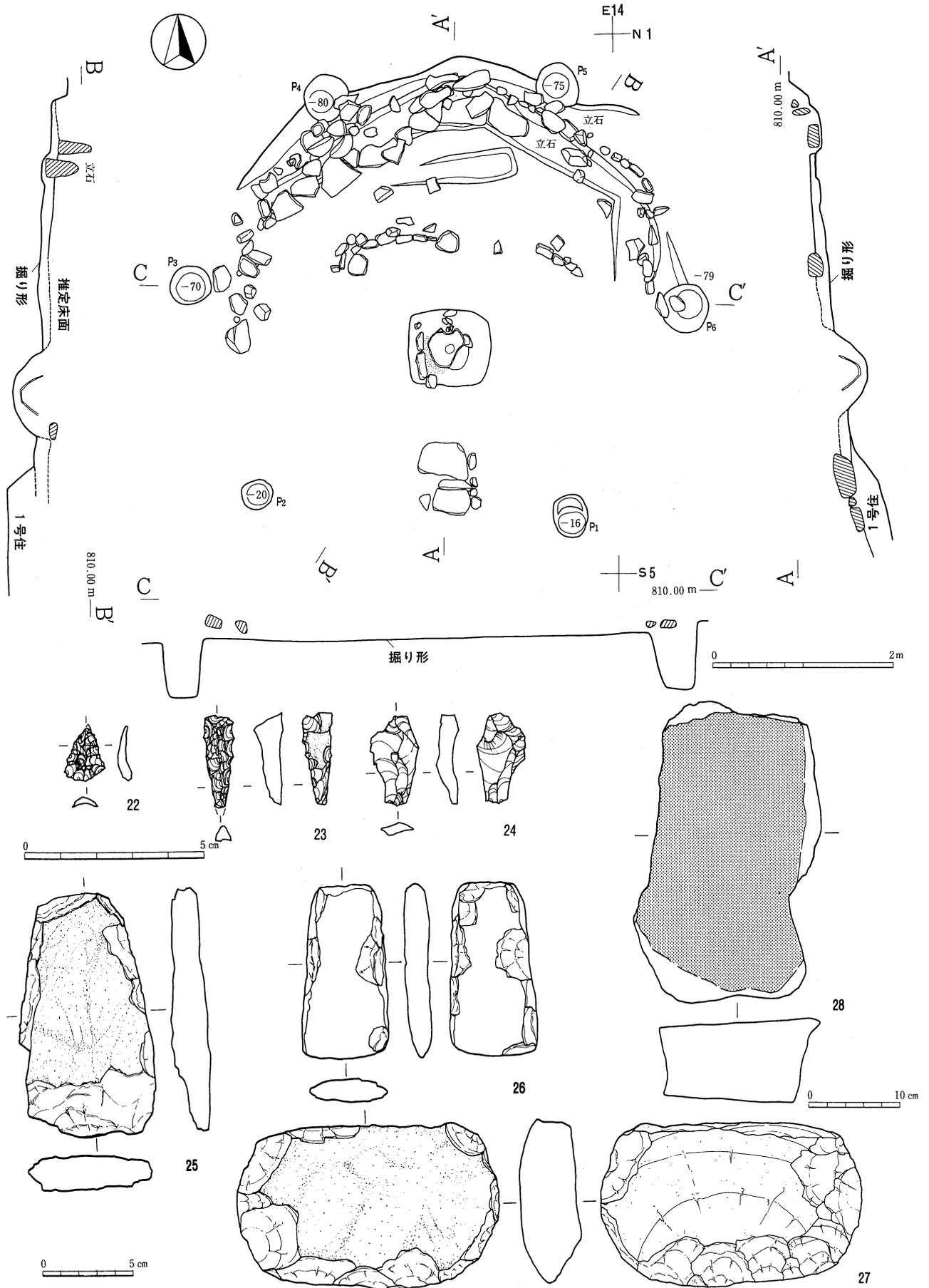


図11 5号住居址実測図及び出土遺物実測図 (28=1:6)

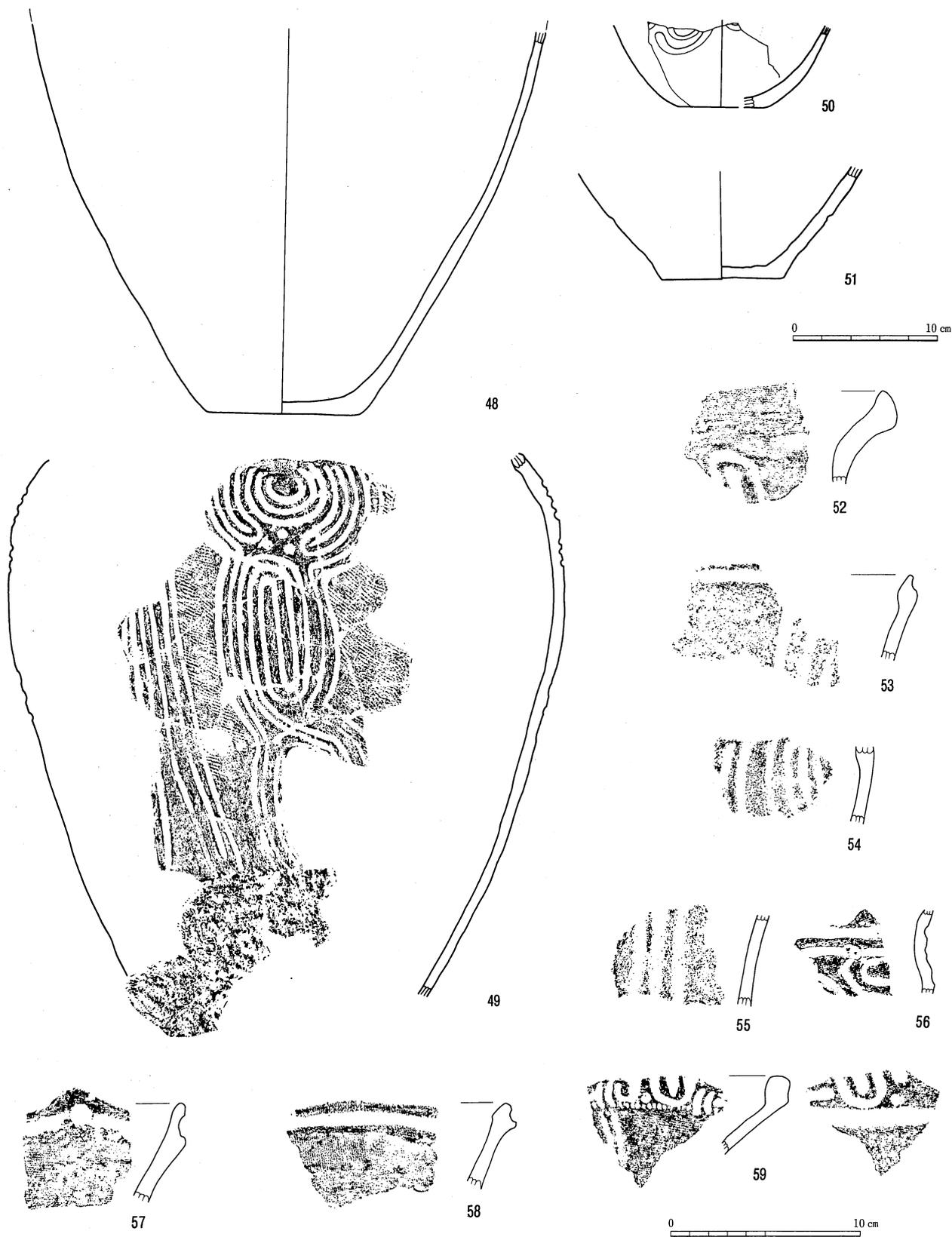


図12 5号住居址出土遺物実測図及び拓影

の2個だけで、他は抜き取られている。焼土はわずかに認められたのみである。**柱穴**： $P_1 \sim P_6$ が主柱穴と思われる。このうち $P_1 \cdot P_2$ は3号住居址と重複する。また、 $P_1 \sim P_3$ は壁にかかって穿たれる。**その他の施設**：北壁沿いの敷石下に幅30cm～50cm、深さ5cmの溝が検出された。この溝は柱穴間に角をもち、全体

として六角形をなす。何のために設けられたのかは不明である。**遺物出土状況**：3号住居址礫堤下及びその北側出土遺物と炉内出土遺物を本址に帰属するものとする。**遺物**：土器は70点余り出土した。48は炉体に転用された土器で49はその内から出土した。意識的に敷きつめたものかもしれない。48は無文粗製の深鉢、49は3条1単位の沈線で文様を描き縄文を充填する。50は内・外面ともていねいに磨かれる。堀之内I式に比定される。石器は石鏃(22)、石錐(23)、ピエス・エスキーユ(24)、打製石斧(25)、磨製石斧(26)、石皿

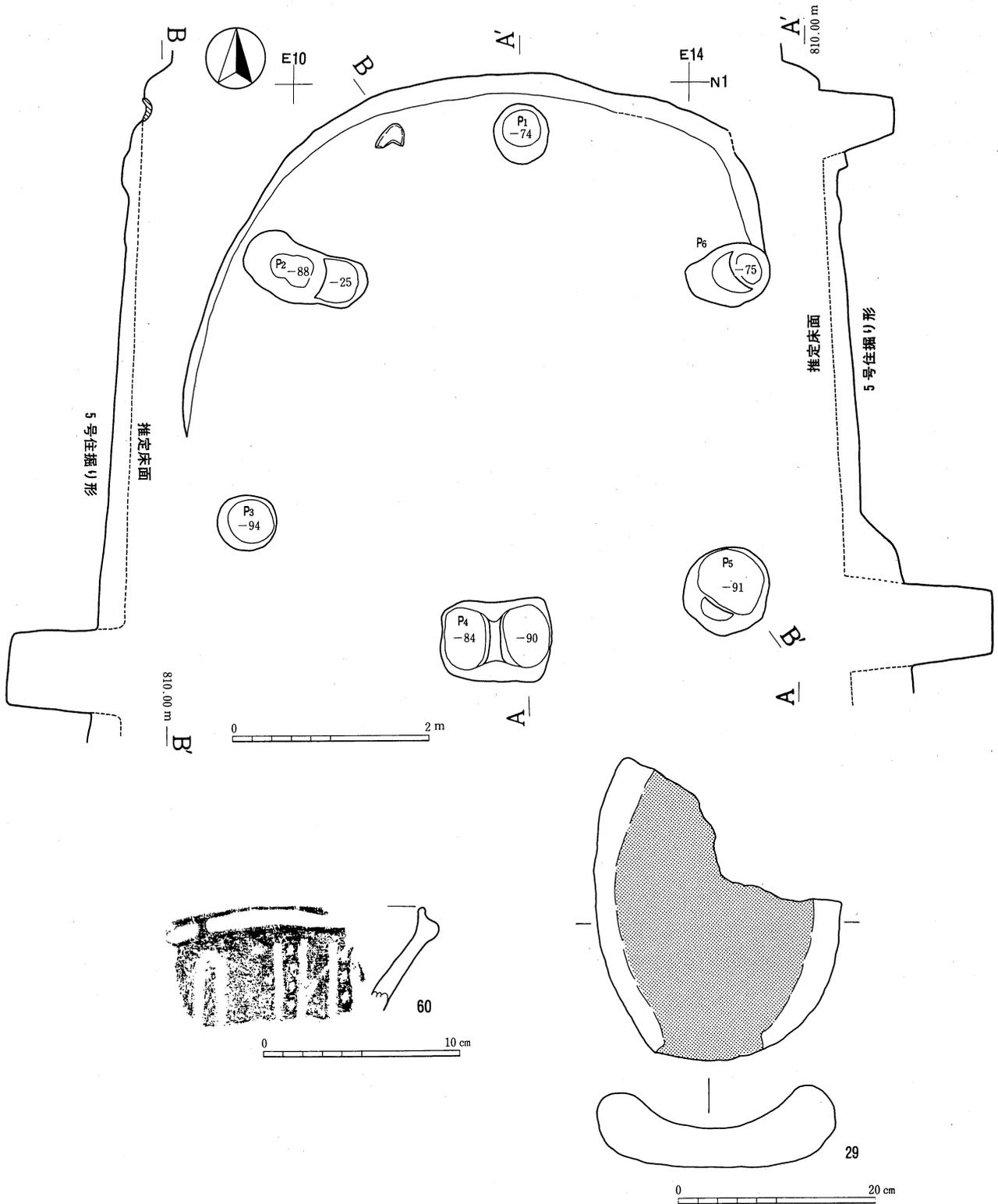


図13 6号住居址実測図及び出土遺物実測図 (29=1:6)

(28)が各1点出土した。27は両刃につくられており、横刃形石器の類であろう。**時期**：後期堀之内I式期。

⑥ 6号住居址 (図13)

検出：5号住居址精査中にその北側でV層を掘り込む炭を含んだ暗褐色土の落ち込みが見つかり、5号住居址の掘り込みより40cm程北にずれること、5号住居址床面より一段高い位置に床をつくることから別の遺構と考え、6号住居址とした(註1)。したがって、本址は3・5号住居址に切られ、重複する4軒中最も古い。**規模・形状**：南北6.2m、東西6.0mの円形プランと推定される。**埋土**：炭を含む暗褐色土。**床面・壁**：床は北壁下にわずか残るのみで、大半は5号住居址によって失われる。壁は北側が残り、高さ40cm。**炉**：残存しない。**柱穴**：P₁～P₆を主柱穴と考える。いずれも規模の大きい掘り形をもち、P₂・P₅・P₆は建て替えの可能性がある。P₄は1号住居址掘り形の底に検出したもので、2基のピットが接している。**遺物出土状況**：P₄よりごく少量の土器片が、また、北壁下の床面上に石皿が出土した。**遺物**：60は堀之内I式に比定される。石皿(29)は欠損品である。**時期**：時期決定の材料となる遺物の出土はわずかであるが、堀之内I式期と考える。

イ 土 壙 (図14、P L28)

縄文時代の所産とみられる土壙は5基検出された。

1号土壙は、完形の鉢が逆位で出土したことから、甕被葬墓と考えられる。プランは、V層上面で確認し、楕円形を呈する。埋土はIII層に由来する黒褐色土。鉢(61)は壙底より約10cm浮いていて土壙の南端から出土した。鉢内の土は黒色土で、口縁付近では小石が入り比較的堅かったが、底部近くでは小石が入らずぼろぼろしていて軟らかい。鉢は口縁が大きく外反して胴部が強く屈曲し、文様は口縁部と頸部に施され、口縁部には沈線で弧や直線を描き、頸部には刻みを加えた隆線を垂下させ、菱形の区画を縄文で埋める。胴下半は無文で磨かれている。堀之内I式に比定される。

また、2・3号土壙では礫が底面より浮いて南端から出土している。

番号	平面形	規模(長径×短×深さ)cm	検出層位	埋 土	備 考
1	楕円形	152×123×30	V層上面	黒褐色土	南端に完形鉢形土器が逆位で出土。
2	〃	122×58×35	〃	〃	南端の底面より10cm上から平石出土。
3	〃	122×98×30	〃	〃	南端に45cm×30cm×28cmの大きな石がある。
4	円形	75×75×14	〃	〃	
5	不整円形	142×(110)×30	〃	黒色土	6号住居址に切られ、西端現水路のため不明。

表1 縄文時代土壙一覧表

ウ 遺構外出土遺物 (図15・16、P L29・30)

遺構外から出土した遺物は、大半がIII層中の出土で3・5号住居址一帯及び3号土壙周辺に集中的に分布する。

62～64は中期後半、65～75は堀之内I式、76～77は同II式である。78は口縁の一部を欠くがほぼ完形の小形土器である。無文の79と80は堀之内I式に伴うものであろう。81～88は晩期の土器で、氷I式に比定できよう。

石器では、石鏃(30)、石錐(31)、ピエス・エスキーユ(32・33)、小剥離痕のある剥片(34～37)、打製石斧(38～40)、横刃形石器(41・42)、磨製石斧(43～46)、石皿(47)がある。

(註1) 岡谷市梨久保遺跡31・40号住居址では敷石と掘り込みの間に土間構造を採用しており、本址も5号住居址に付属する施設である可能性をもつ(会田 進他1986)。

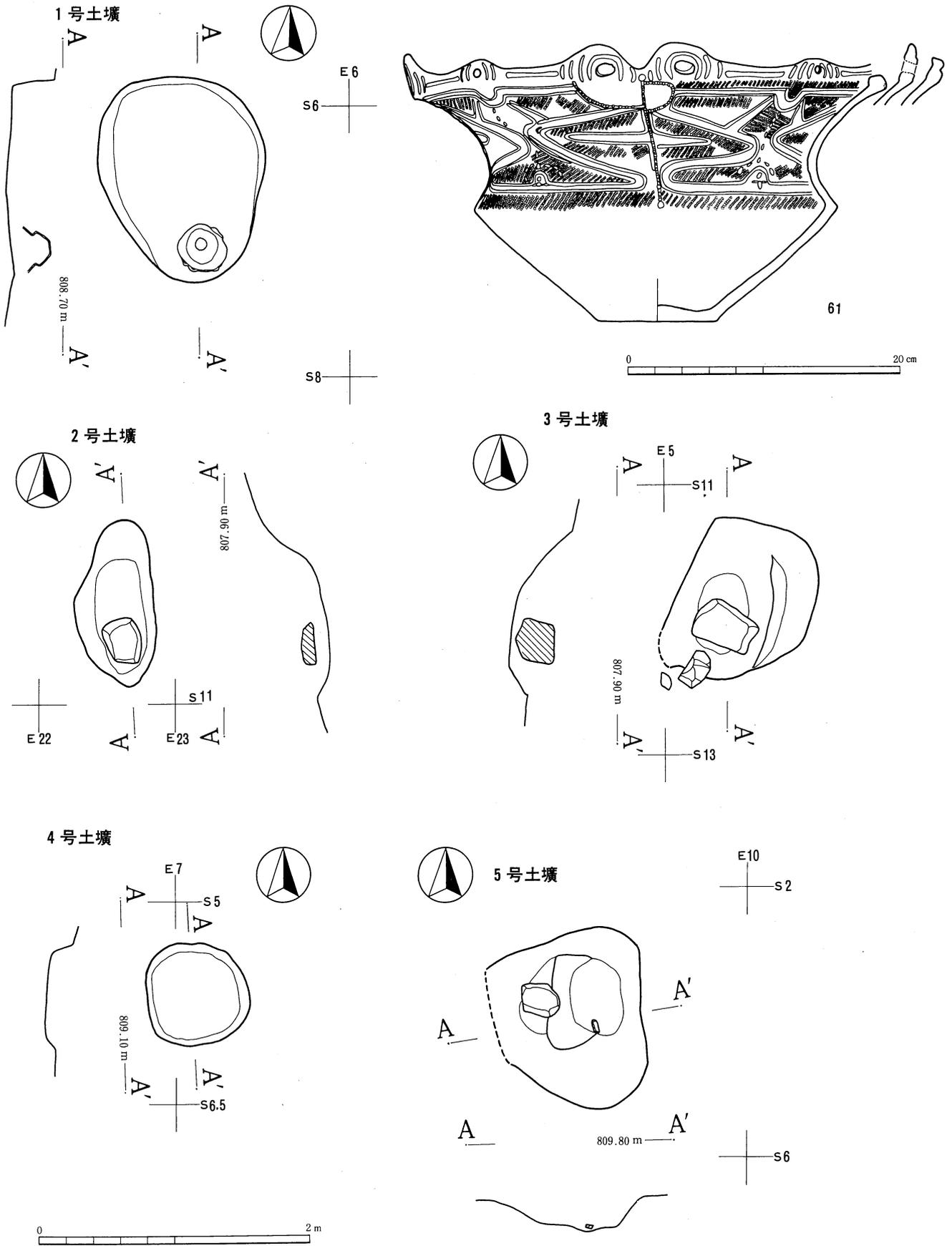


図14 1号～5号土壌実測図及び出土遺物実測図

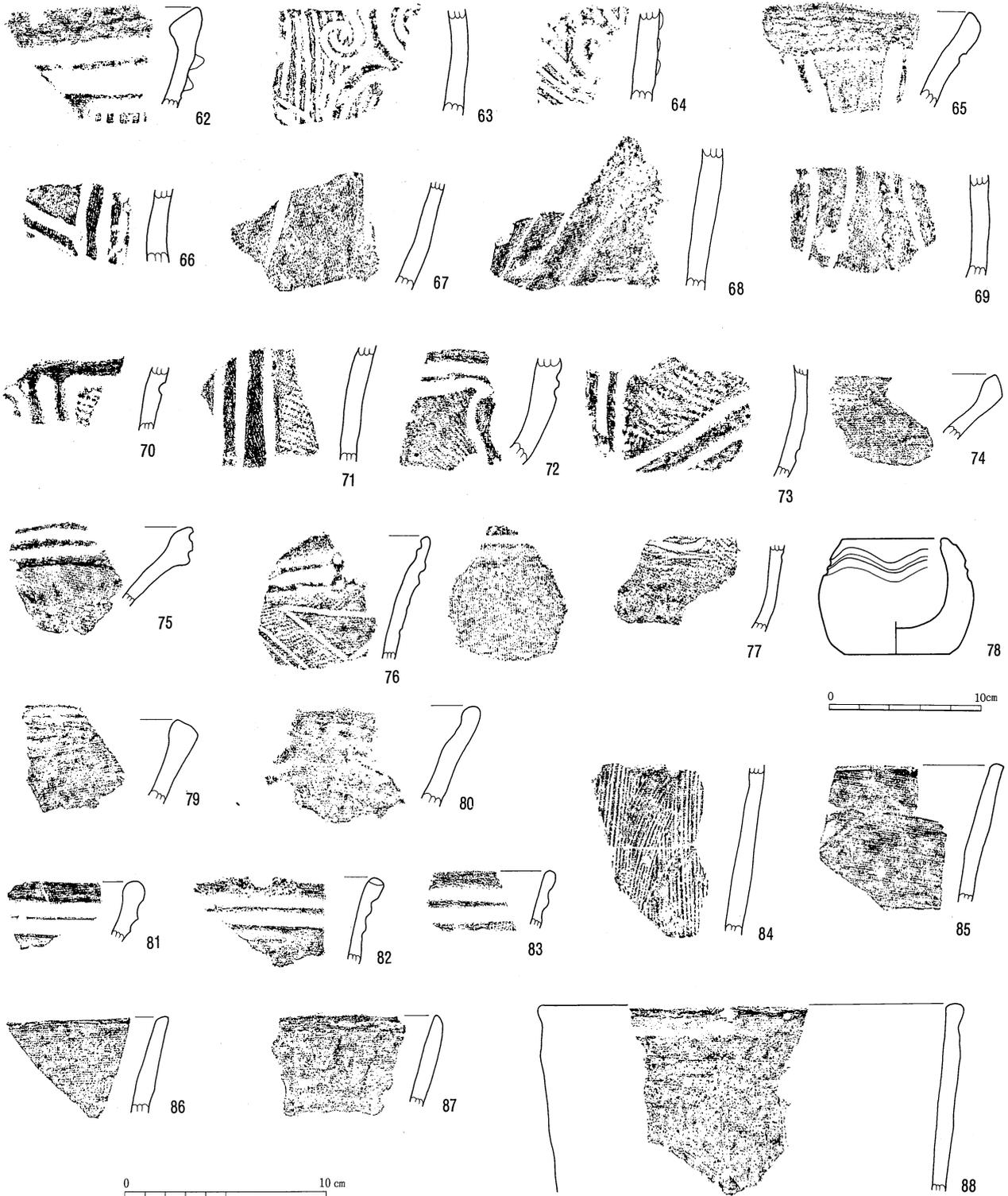


図15 遺構外出土縄文時代遺物実測図・拓影1

(4) 弥生時代以降の遺構と遺物

ア 6号土壙 (図17、P L30)

1号住居址南側の黒褐色土を掘り下げ中、完形の埴が2個体並んで出土した。V層上面まで下げた結果、楕円形プランの落ち込みが確認され、6号土壙とした。

規模は2.4m×1.5m、深さ70cmを測る。埋土は暗褐色土で、II層に由来すると思われる。埋土中には人

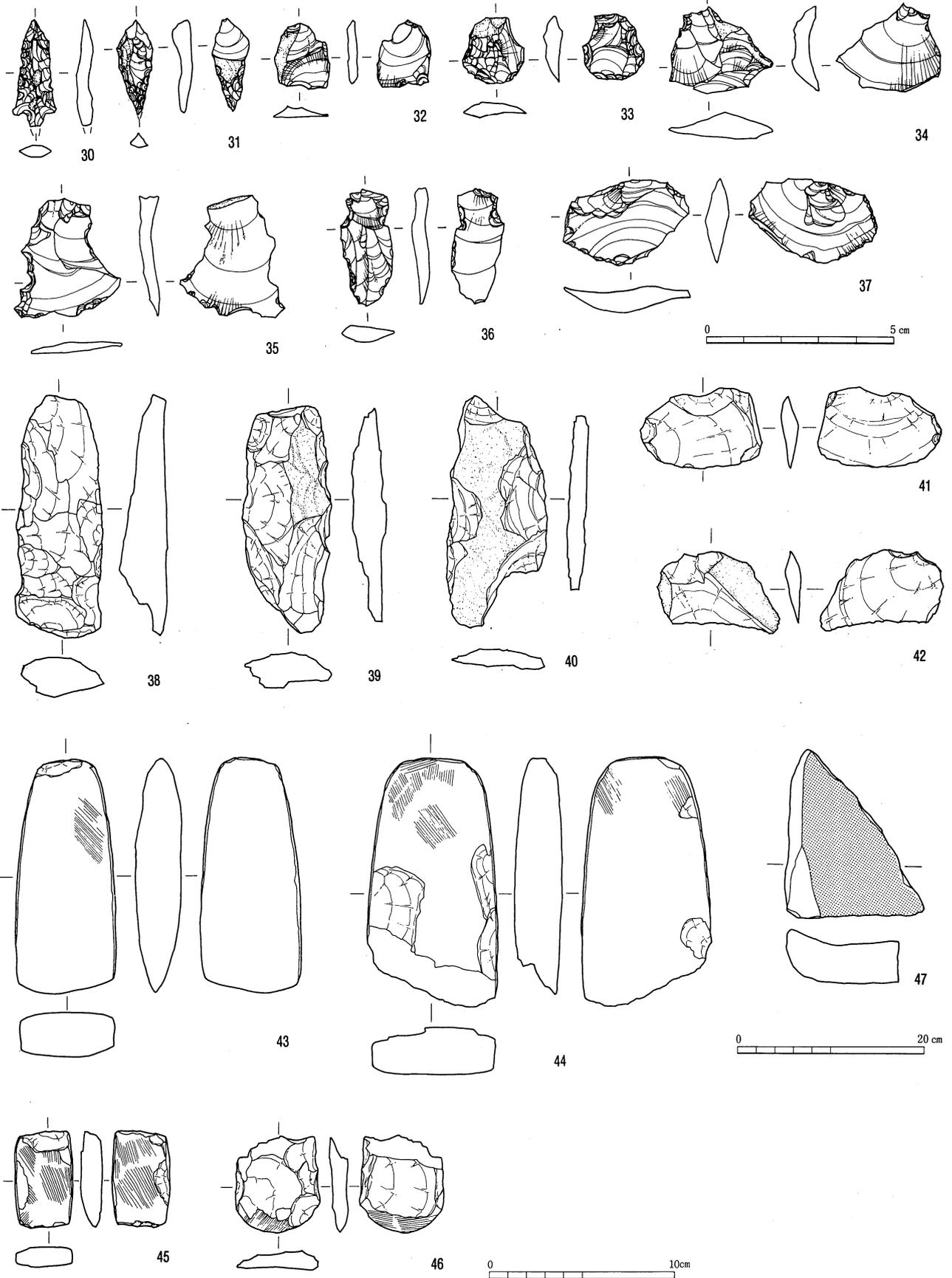


図16 遺構外出土縄文時代遺物実測図2 (47=1:6)

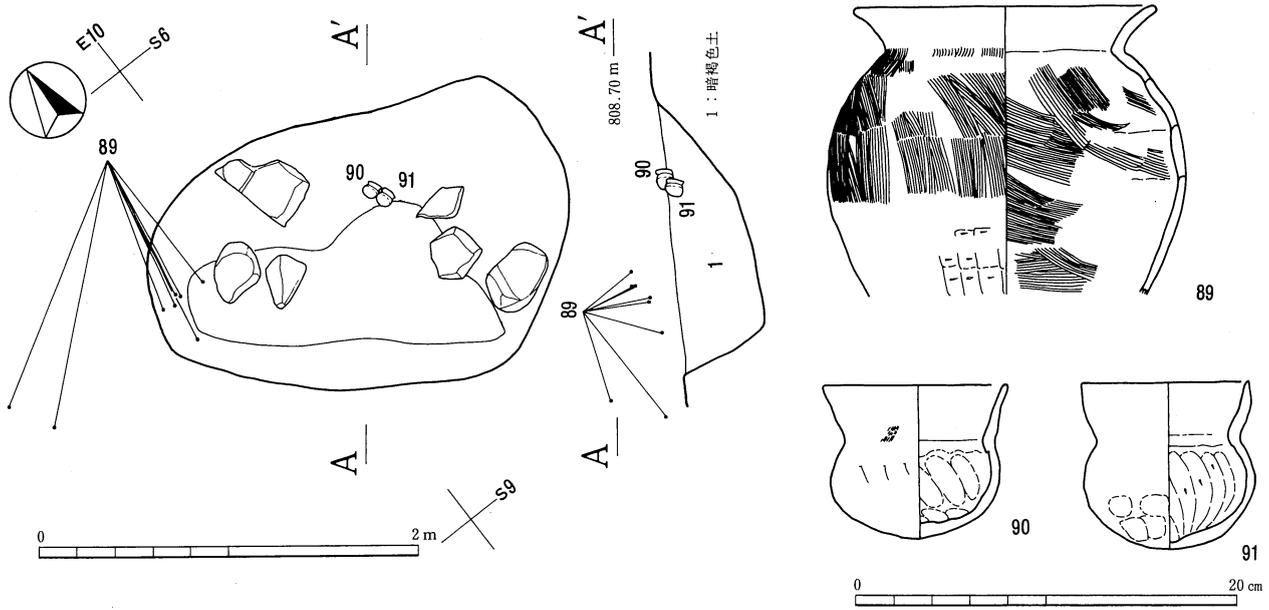


図17 6号土壙実測図及び出土遺物実測図

頭大の河原石が6個、壙底より10cm~20cm浮いて出土している。2個の坩のほか、検出面から甕が出土している。

甕(89)は、口縁が「く」の字状に外反し、胴は球形を呈す。口縁部は内外面ともヨコナデされ、胴下半はヘラケズリ痕を残し、胴部上半及び内面はハケ調整が施される。坩(90-91)は共に頸部があまり締まらない。口縁部は内外面ともヨコナデされ、胴部外面はヘラケズリの後ナデ調整、内面はヘラケズリされる。90の底部内面は成形時のシボリ痕が残る。古墳時代前期に比定される。

イ 遺構外出土遺物

図示しなかったが、I・II層から弥生土器片、土師器片、須恵器片、灰釉陶器片が少量出土している。

5 成果と課題

(1) 敷石住居址の検討

本遺跡からは4軒の敷石住居址が検出された。その内の3軒は重複しており、1号住→5号住→3号住の順に新しい。2号住のみは西に12m程離れている。先にも触れたが、地形環境からみて、北東側に若干広がる可能性を残すものの、住居址の分布する範囲は今回の調査範囲から大きく拡大することはないと思われる。したがって、縄文時代後期前葉の御堂垣外遺跡は1~2軒の住居が継続して営まれた小集落であったといえる。ここでは、これら4軒の敷石住居址についてその構造を検討し、変遷を明らかにしようとするものである。

ア 構造について

① 規模と形状

4軒はそれぞれ主体部の形状が異なり、1号住=円形、2号住=方形、3号住=半円形、5号住=六角形である。入口と想定される南側に張り出し部はなく、南向き急斜面に立地することから流失している可能性もあるが、この期の敷石住居址に多い柄鏡形プランは採用されない。住居の規模をその床面積で比べてみると、1号住(7.5㎡)と2号住(9.2㎡)は小形、3号住(15.8㎡)と5号住(17.0㎡)は大形で大きさが似ている。

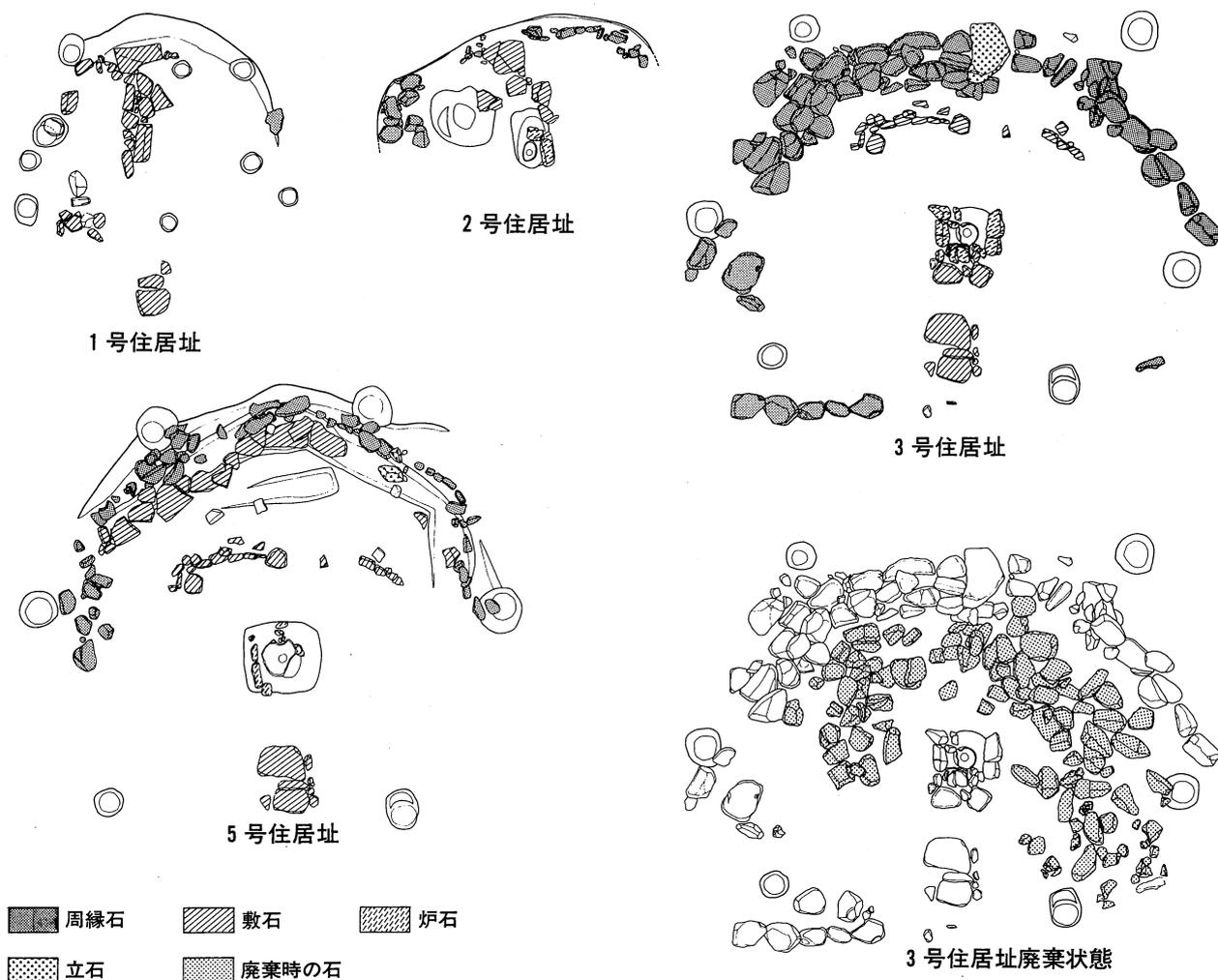


図18 1・2・3・5号住居址周縁石・立石・敷石等配石状況図

② 敷石 (図18)

床面に石が敷かれるばかりでなく、その周辺、すなわち壁に沿っても石が配されていて、これを「周縁石」と呼ぶことにした。床面の敷石は全面に施されることはなく、奥の壁ぎわ、炉を中心にその奥と手前、そして入口部に限られる。いかえれば、住居の主軸線上にのみ敷石される。用いられる石材は奥壁ぎわでは鉄平石が一般的で、主軸線上にのみひととき大きな石がすえられる。一方、炉の奥と手前には偏平な河原石が用いられ、奥壁ぎわとは違いを見せている。石の敷かれない部分は土間となるが、概して軟弱であり、敲击締められた様子はみられない。周縁石は、1号住でははっきりしないが、列状に並べる場合と集石状に積んだり立てかける場合があり、2・5号住では両方が採用されている。3号住の周縁石は特に規模が大きく「礫堤」と呼んだ。周縁石の中には明らかに意識して立てたと思われる石があって、1・3号住は1個、5号住では2個が概ね主軸線上にみられる。どれも柱状の自然石が使われている。奥壁下床面に敷かれた特に大きな平石とセットと考えられ、縄文時代中期後半に盛行した立石の名残をとどめるものかも知れない。

③ 炉

住居中央に設けられ、地床炉である1号住をのぞいては土器を埋設した方形石囲炉である。明瞭に焼土が認められたのは1号住のみであったが、その他の場合も炉縁石や埋設土器に被熱の痕跡が顕著で、盛んな火の使用が窺われる。

④ 柱 穴 (図19)

2号住を除く各住居址で検出された(図19)。重複しているため帰属する住居の決定に不安は残るが、それぞれ4~6本の柱穴が周縁石の外側に穿たれる。これは、周縁石が住居の外ではなく内に設けられていたことを示している。

⑤ その他の施設

5号住では、敷石下に周溝状の溝が柱穴間に角をもつ六角形に掘られている。

イ 住居の変遷について

I期：1・2号住居址

2号住は他と重複しないため、時間的に位置づける決定的な材料をもたない。プランの形状、柱穴の有無、炉の形態など異なる点も多いが、主体部の規模や敷石の状況に共通する部分もあり、1号住に先行するかまたは同時に存在したと考えられ、I期に含めることとした。この期の特徴としては、主体部の規模が小さいこと、敷石が奥壁下及び炉の奥と手前に施されること、周縁石の中に意識的に立てられるものが1個あることなどがあげられる。なお1・2号住にみられる多少の相違点が時間差に起因するものか、個別差かは不明である。

II期：5号住居址

主体部は六角形になり、その規模はI期のほぼ2倍といっきに大形化する。敷石の施される箇所は変わらないが、敷石下にはプランと同じ六角形に巡る溝が掘られている。周縁石に列石状、集石状の両方見られること、またその中に立てられた石があること、内に土器を埋設した方形石囲炉をもつことなどI期と変わらない点も多い。いうなれば、1号住と2号住のもつ属性が統合されたのがこの期に当たる。

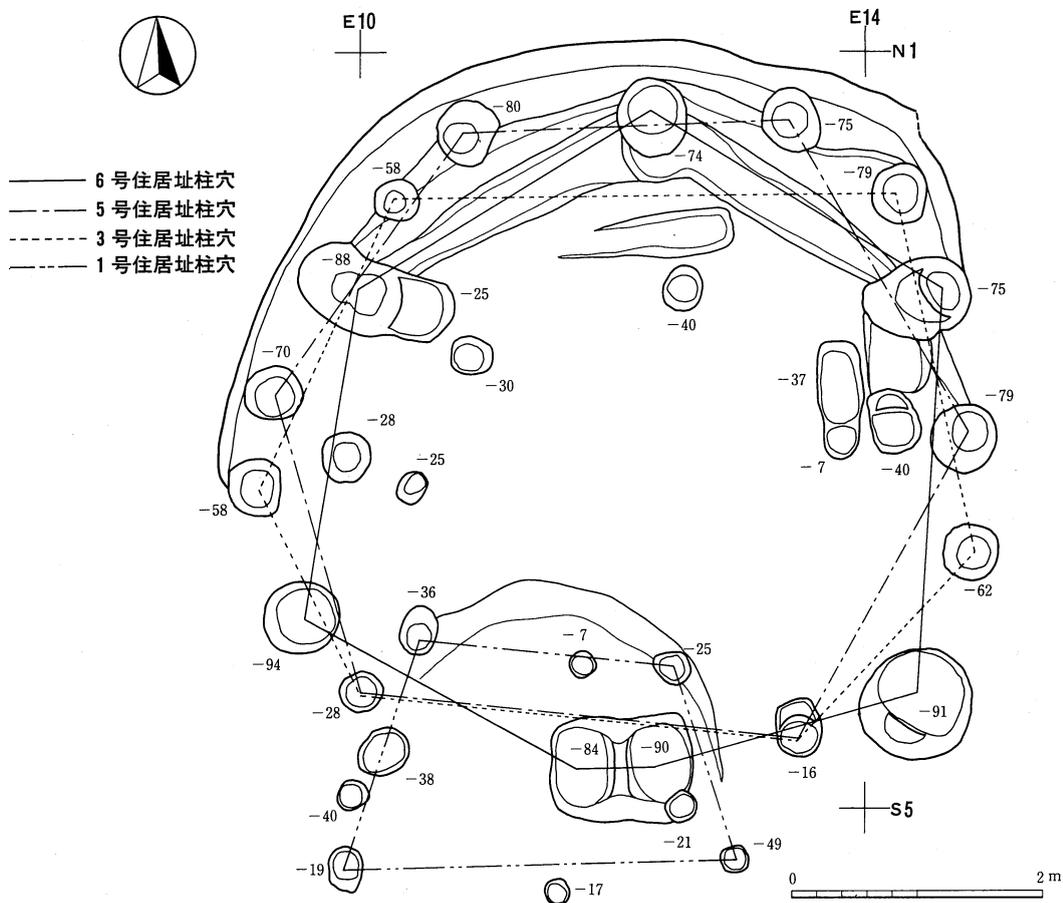


図19 1・3・5・6号住居址柱穴配置図

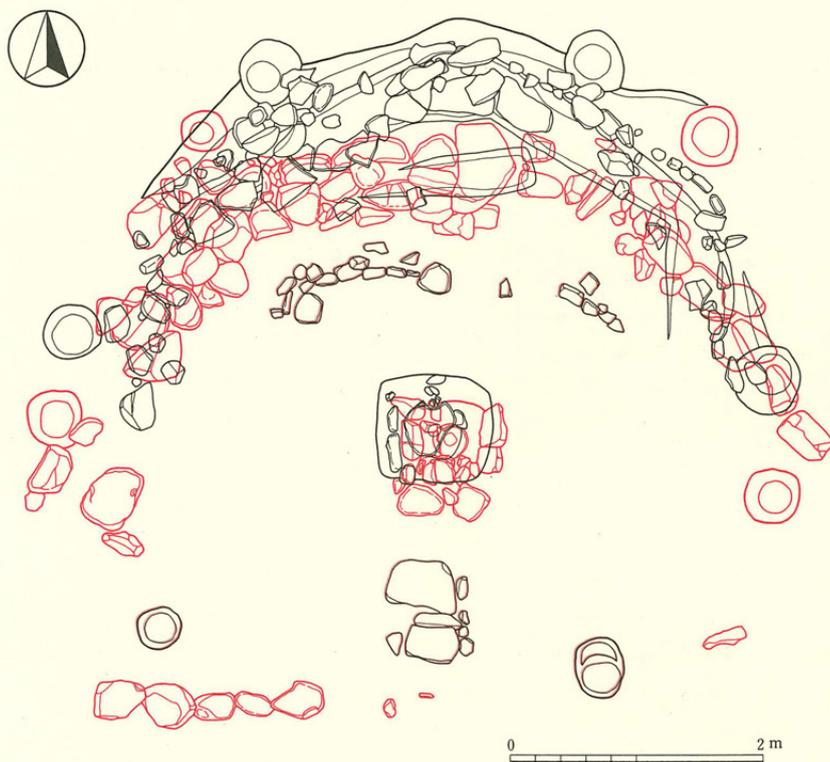


図20 3・5号住居址重複状況図

当たって旧住居のものをそのまま使ったと考えられる(図20)。つまり、この2軒は一旦埋没するという過程を経ずして建て直されたと考えられるのである。そして、建て替えの動機は、2軒の構造上の変化を見れば、単なる新築ではなく、新たな構造をもった住居の必要性という点にあったのではないだろうか。また、3号住に廃屋儀礼に伴うとみられる集石が存在したことは、こうした建て替えが3号住で終息したことを物語っていると考えられないだろうか。

(2) 長野県内発見の縄文後期前葉の住居址

長野県内で発見されている縄文時代後期前葉堀之内式期の住居址は、昭和60年現在で50例が知られているに過ぎない。本項ではそれらを概観し、御堂垣外遺跡検出例の位置付けを試みようと思う。

一覧表を作成するに当たっての基準及び留意点は以下のとおりである。

プラン……………柄鏡形か否かを第1の観点とし、柄鏡形を「○」、そうでないものを「×」、判断に迷うものを「?」とした。主体部のプランは、掘り込みが確認されている場合はその形状を、掘り込みがないもしくは未確認の場合は敷石の外周形を示した。

主体部規模…掘り形の規模を基本とし、敷石外周の場合は()をつけた。

周縁石……………住居の外縁にあって内と外を画している石の並びを周縁石として敷石と区別し、その有無を示した。また、有る場合は、その形状を礫堤状、石列状、

III期：3号住居址

主体部は半円形となるが、規模はII期とほぼ同じで変化がない。敷石は奥壁下、炉の手前にみられ、炉の奥にはみられない。大きく変わるのは周縁石で、幅や高さが格段に大きくなるばかりでなく、用いられる石も大形化する。構築に要するエネルギーは比較にならないほど3号住の方が大きい。炉の位置、形態に変化はない。

ところで、5号住と3号住は、炉が切り合うなど確かに新旧2軒の住居址であるが、炉の奥と手前の敷石や南側の柱穴は複数なく、建て替えに

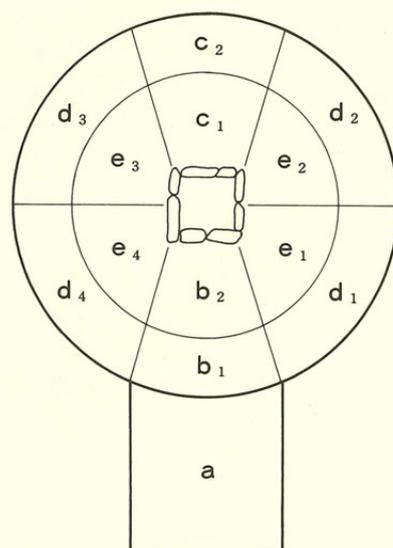


図21 住居址空間の分割模式図

立石状、集石状、その他に分類した。

敷石………床面を区分し、敷石の施される部分を示した(図21)。なお、b・c・d・eではその位置を数字で示した。

炉………方形石囲炉、方形石囲埋甕炉、埋甕炉、石囲炉、地床炉に分けた。

立石………周縁石とは明かに異なっている場合のみ「○」で示した。

遺物………土器は完形・半完形品のみの数を示し、石器は生産用具と非生産用具とに分けて「生」と「儀」で表した。

現在知られている50例の敷石住居址についてみてみよう。

プランで最も一般的といえるのはやはり柄鏡形で、全体の56%と非柄鏡形の12%をはるかに超えている。主体部のプランは、28例(56%)が円形で、基本的な形は円といえる。また、その規模は大きい例で径5m~6m、小さい例では径2.5m~3mと幅があるが、平均的には径3.5m~4mである。

周縁石をもつ例は27(54%)と約半数を占め、もたない例の2倍である。周縁石の形状は石列状、立石状が多い。ところで、主体部掘り形と周縁石の間はほとんど空間のないのが普通であるが、梨久保遺跡31号住、上横道遺跡7号住のように幅60cm程も土間状になっている例もある。

床面に敷石を行う場合、全面に敷いた例は伊勢宮遺跡1号住、梨久保遺跡40号住の2例があるのみで、他はすべて部分敷石である。部分敷石とした中には、全面敷石だったが石を抜き取られて結果的に部分敷石になったものも当然含まれていようが、それにしても大多数は部分敷石とみてよい。では、どこに石を敷くかという問題であるが、柄鏡の柄に当たる部分(a)、入口部(b1・b2)、炉の奥(c1・c2)、外縁部(d1~d4)、炉の周辺部(e1~e4)に敷かれることが多いものの、中で特に多いというところはない。

炉は方形石囲炉と方形石囲埋甕炉が合わせて30例(60%)を数え、最も多い。

周縁石に混じって立石の見られる例は4例(8%)と少なく、こうした例はあまり一般的ではないらしい。

遺物が多量に出土した例は少なく、炉体土器を除けば完形土器の出土はほとんど稀といってよい。石器では生産用具の出土例が非生産用具のそれを上回っている。

このような平均的敷石住居址と比較したとき、御堂垣外遺跡の4軒の敷石住居址の特徴は、各住居址に立石が行われていること、3号住に礫堤が築かれていることの2点であり、さらに付け加えるならば柄鏡形プランを採用しない点であろう。これらを除いては堀之内式期における一般的な敷石住居址といえる。

6 小 結

本遺跡は傾斜が急で狭いテラス状の地形に立地しており、調査前には遺構の発見は予想されなかった。しかし、調査の結果は縄文時代中・後期、そして古墳時代の遺構、遺物が検出され、人々がここを舞台に生活を営んだことが確認された。

この地が最も活況を呈したのは縄文時代後期堀之内式期であったろう。地形からみてさらに遺構の発見される可能性は薄く、したがって限られた狭い範囲に少ない遺構が営まれた小規模集落とみてまちがいない。住居址の数から1~2家族であろうか、ほとんど間断なく住居を築いてここに住んだらしい。それは、2軒の並存→1軒に統合→より強固に建て替え→廃絶という流れに復元することができた。甕被葬墓もおそらくこれに係わるものであろう。

出典文献一覧表

伊勢宮遺跡	山ノ内町教委 1981 『伊勢宮』
明専寺 "	牟礼村教委 1980 『明専寺・茶白山遺跡』

- 荒海渡 〃 梓川村教委 1978 『長野県南安曇郡梓川村荒海渡遺跡発掘調査報告書』
 葦原 〃 小松 虔 1966 「長野県東筑摩郡波田村葦原遺跡第一・第二次調査概要」『信濃』18-4
 平出 〃 平出遺跡調査会 1955 『平出』
 戸場 〃 井深 智・白沢幸男 1982 「戸場遺跡」『南木曾町誌(資料編)』
 雁石 〃 真田町教委 1975 『雁石・藤沢』
 茂沢・南石堂 〃 軽井沢町教委 1968 『軽井沢町茂沢南石堂遺跡』
 茂沢・南石堂 〃 軽井沢町教委 1983 『軽井沢町茂沢南石堂遺跡—総集編』
 加増 〃 八幡一郎 1953 『北大井村加増敷石住居址発掘調査報告書』(1974 小諸市誌・考古編所収)
 久保田 〃 小諸市教委 1984 『久保田』
 宮平 〃 御代田町教委 1985 『宮平遺跡』
 古屋敷C 〃 東部町教委 1986 『不動坂遺跡群II、古屋敷遺跡群II』
 宮の本 〃 佐久町教委 1979 『宮の本』
 百駄刈 〃 長野県教委 1972 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—伊那市西春近』
 梨久保 〃 岡谷市教委 1986 『梨久保遺跡』
 十二ノ后 〃 長野県教委 1976 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—諏訪市その4』
 穴場 〃 高見俊樹 1983 「穴場遺跡」『長野県考古学会誌』No.42・43
 茅野和田 〃 茅野市教委 1970 『茅野和田』
 上横道 〃 平出一治 1976 「上横道遺跡第2次緊急発掘調査概報」『信濃考古』No.38
 徳久利 〃 宮坂英才 1965 「富原徳久利遺跡」『井戸尻』中央公論美術出版

引用・参考文献

- 会田 進 1986 『梨久保遺跡』 岡谷市教育委員会
 金井安子 1983 「縄文時代における廃屋の様相」『長野県考古学会誌』47
 小杉 康 1986 「配石遺構に関する問題」『利島村大石山遺跡』 利島村教育委員会
 山本暉久 1982 「敷石住居」『縄文文化の研究』8 雄山閣

第7節 栗木沢遺跡 (EKZ)

1 遺跡の概観

塩尻市長畝930番地、塩尻斎場の東北東約500m付近に所在する。高ボッチ山系の西麓が松本盆地東縁に接するこの辺り一帯は、厚さ約30m程の片丘礫層が赤木山礫層及び小坂田・波田ロームを載せ、盆地に向け約10度の傾斜をもって扇状地状に広がり、それが流れの急な小河川に開析され多くの小支谷を形成する。塩尻市長畝地籍で中央道長野線にかかる遺跡はこれらの支谷や尾根上に展開するもので、南から栗木沢、ヨケ、樋口、高山城跡の各遺跡が並ぶ。

栗木沢は西方向に開析された浅谷で、谷底は河成堆積による礫で平坦化する。沢は上流で分岐し、南北二つの支谷を形成する。遺跡はその二つの谷に挟まれた尾根の末端付近及び北支谷の谷頭付近にまたがっており、標高760m～780mの範囲にある。本遺跡はもともと石鏃や打製石斧の採集地として尾根の先端部周辺のみが登録されていたが、中央道長野線建設に伴う事前の分布調査で遺物が採集された北支谷が新たに加えられた。尾根の麓の一部が山林となっていた以外は畑地及び水田として利用されていた。遺跡からは南北の尾根に遮られて松本盆地南端部の一角しか臨めない。

2 調査の概要

調査の対象となった範囲は遺跡の東端にあたり、尾根の南と北に分れることから便宜上南区、北区とした。その面積は3710㎡である。調査は昭和59年5月2日から7月11日まで行われ、3名の調査研究員が当たった。まず、層序及び遺物包含層を把握するため、南区、北区ともトレンチあるいはテストピットを設定し調査した。その結果、いずれも尾根寄りの南向き斜面において包含層が認められ、面的調査を行うこととした。その面積は南区で500㎡余り、北区で400㎡である。発掘調査はすべて手作業で行い、遺構出土遺物は全点出土位置を記録して取り上げ、遺構外出土遺物はグリッド(2m×2m)単位に取り上げた。

測量は、遺構については遣り方測量を用いた。測量基準点は日本道路公団の工事用杭STA93+60を用い、同杭の座標値から座標北を算出して基準線を設定した。測量基準点の座標値は、(X=11920.4511、Y=-45866.5355)である。レベル原点はSTA93+00を使用し、その標高値は775.024mである。

整理作業は、昭和60年1月より61年4月まで断続的に行われ、本報告に至っている。

3 調査の経過

昭和59年度

- 5月4日 南区にグリッド設定。
- 5月9日 南区発掘調査開始。
- 5月15日 層序を確認し、トレンチ調査終了。II層及びIII層上面に遺物が認められ面的な発掘に移行する。
- 5月21日 住居址2軒尾根際に検出。周辺を拡張する。
- 5月24日 範囲確認のため、調査区東側の水田にトレンチを入れたが、包含層は認められない。
- 5月25日 北区でもトレンチを設定し、調査を開始。
- 5月30日 北区の水田地帯は耕土下即基盤のため面的調査の必要なしと判断。調査範囲を北部にしぼる。
- 6月12日 南区で焼土を伴う集石検出。
- 7月6日 北区でも住居址1軒検出。
- 7月10日 発掘範囲の測量をし、すべて調査を終了。

- 1月5日 図面整理、遺物復元、遺物実測開始。3月上旬まで断続的に行う。

昭和60年度

- 1月5日 遺物実測、図面整理再開。
- 2月1日 報告書刊行に向けての図版及び写真図版作成。原稿執筆を開始。

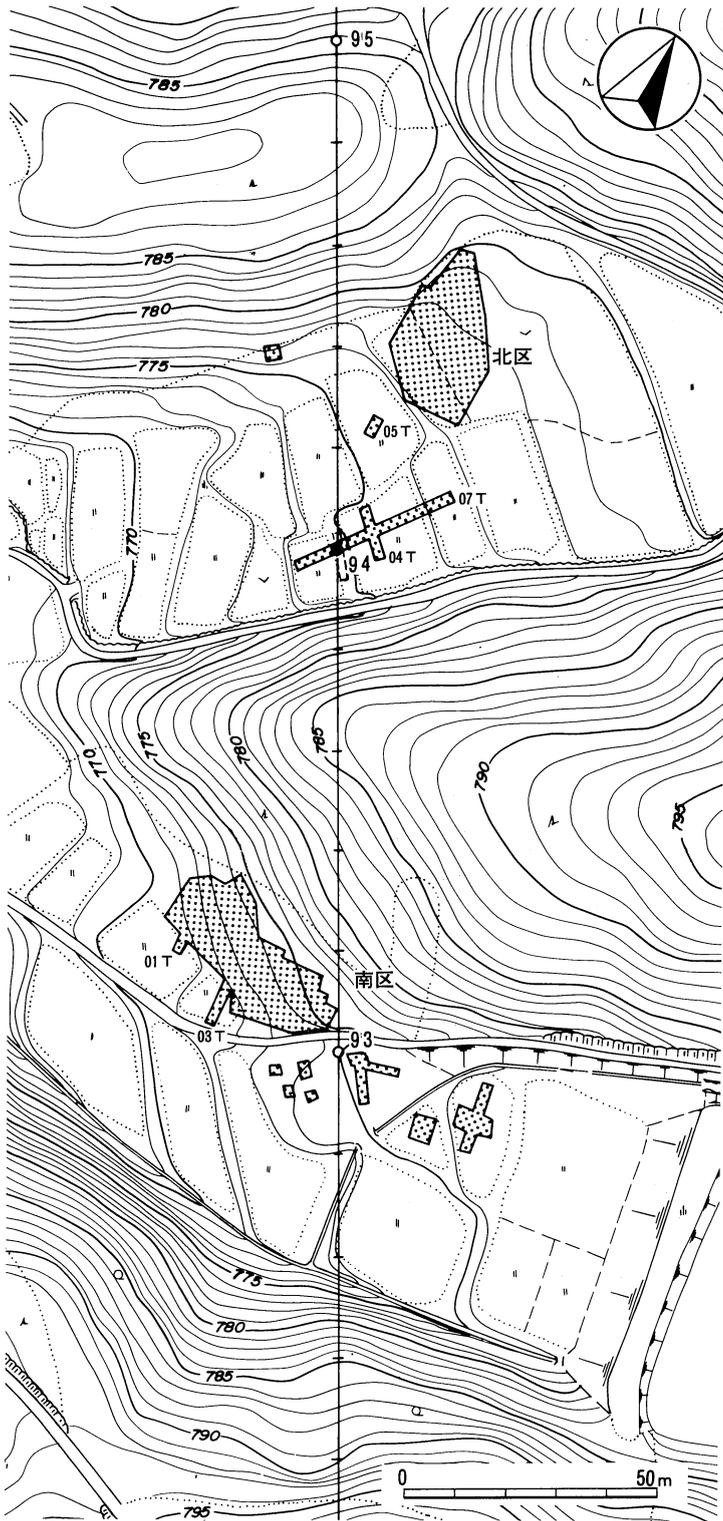


図1 地形及び発掘範囲図 (1:1500)

4 調査の結果

(1) 層序と地形形成 (図1・2)

南区

南調査区における基本的な層序は以下のとおりである。

I 層：シルト質黒褐色土(表土)。

IIa層：黒褐色土。わずかに溶脱が認められ、また近世遺物が出土することから、近世に耕作された可能性がある。

IIb層：黒色土。分布はごく狭い範囲に限られる。

IIIa層：礫混じり暗褐色土。

IIIb層：黒褐色土。尾根近くにのみ分布する。

IV 層：礫混じり黄褐色土(二次堆積ローム)。

堆積土の供給源は北側の尾根で、南に下がるにつれて厚さを増す。しかし、道路南側では砂礫層が厚く堆積し、沢の押し出しが頻繁にあったことを物語っている。遺物は主としてIIa層より平安時代、IIa層下部より縄文時代早期の土器等が出土し、また、平安時代の遺構はIIb層上面またはIII層上面で検出した。

北区

住居址の検出された調査区北部における層序は以下のとおりである。

I 層：暗褐色土(耕作土)。調査時すでに削平されていた。

II層：やや赤味を帯びた褐色土。礫はあまり混じらない。

III層：黒色土。南区IIb層に対比。

IV層：礫混じり黒褐色土。

V層：黒褐色土。礫はあまり混じらない。

VI層：礫混じり褐色土(二次堆積ローム)。南区IV層に対比される。

北区一带は、水田造成に伴う削平が及んで、I層下にいきなりVI層が露呈する。ところが尾根の麓では、VI層が深く小谷状となるため、II層～V層が削平を免れて残存する。遺物はII層より平安時代、III・IV層より縄文時代早期、中期の土器等出土しているが、摩耗の著しいことから流れ込みと考えられる。

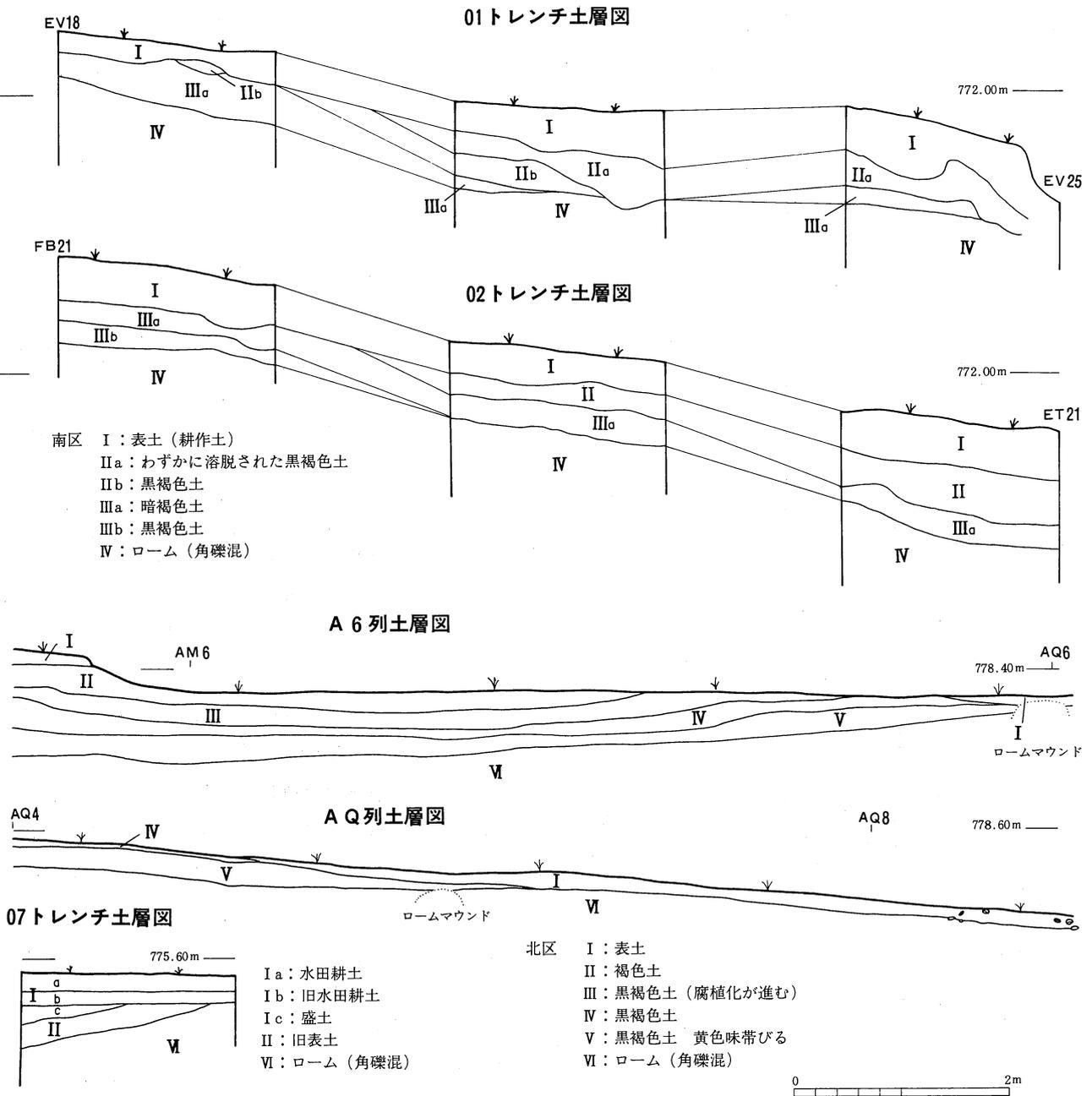


図2 土層図 (1:60)

(2) 遺構と遺物の概観 (図3・4)

今回の調査では縄文時代、平安時代、近世の遺物が出土した。しかし、遺構は時期不明のものを除いてはすべて平安時代に属し、縄文時代のものは皆無である。

縄文時代の土器には早期前半押型文、早期前半～末葉貝殻条痕文系、前期末葉諸磯C式、中期初頭梨久保式があり、このほか石器がある。平安時代の遺構としては住居址4軒と焼土を伴う集石1基があり、地区別に見ると北区の住居址1軒以外はすべて南区に位置する。このうち1号集石からはほぼ完形の緑釉陶器皿が出土している。近世以降の遺構には北区検出の溝状遺構と竪穴状遺構があり、両者は関連するものと思われる。遺物の量は少なく、幕末から明治初期のものが中心である。その他時期不明の集石が南区に検出されている。

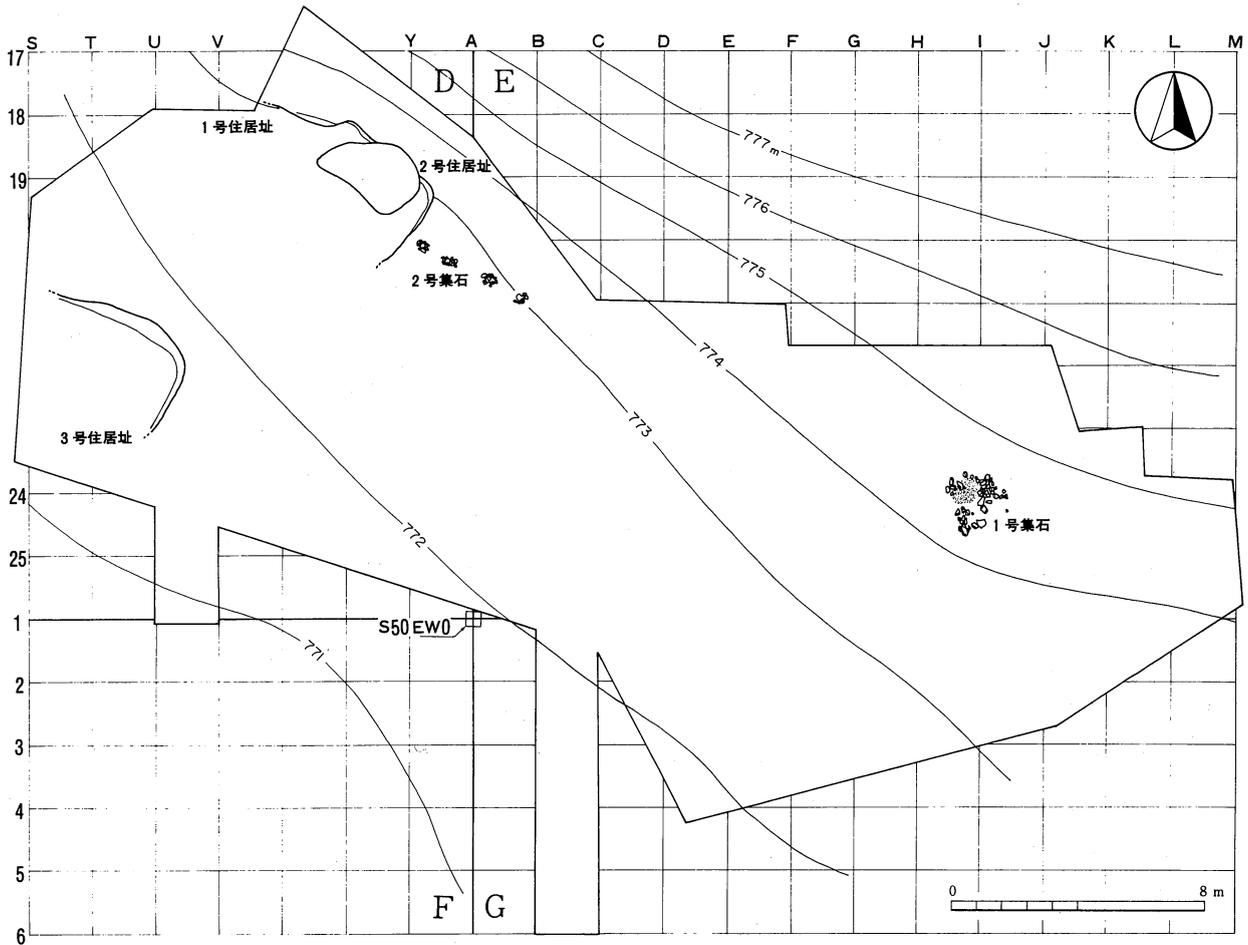


図3 南区遺構分布図 (1:240)

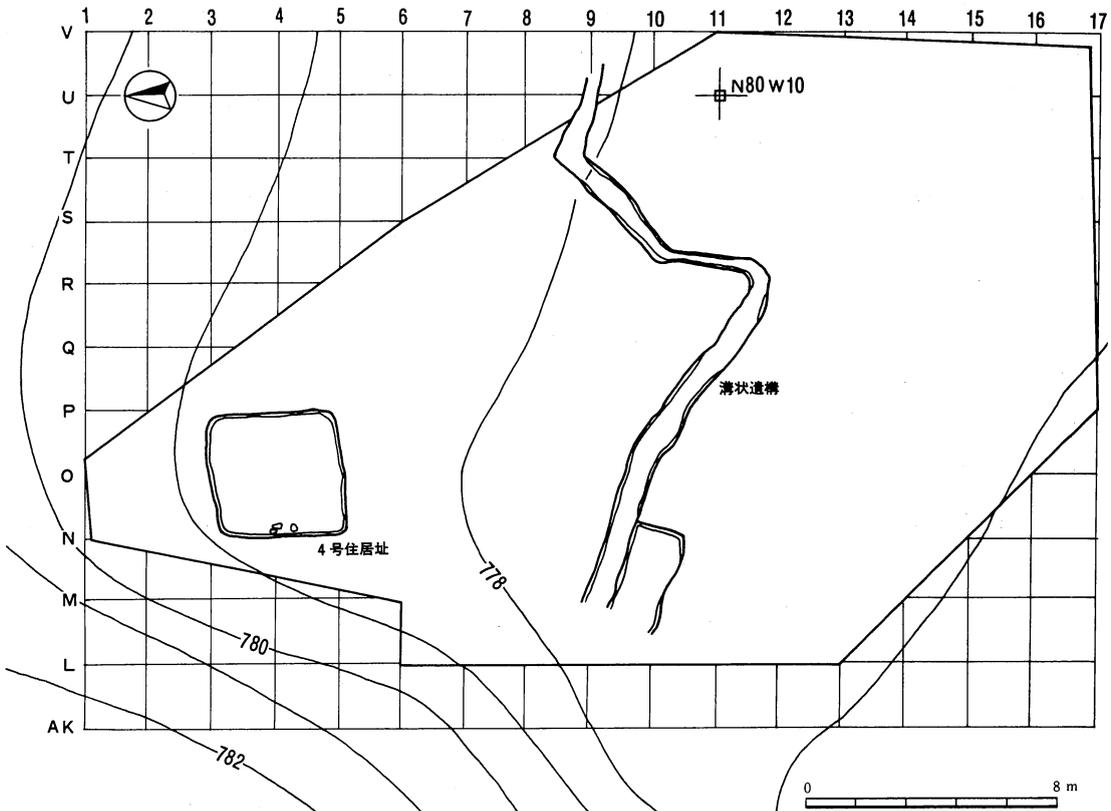


図4 北区遺構分布図 (1:240)